

び く にっ ぱら い せき
比 丘 尾 原 遺 跡

(第2次発掘調査)

平成13年度県営圃場整備事業
柏木地区に先立つ緊急発掘調査報告書



2005.3

比^び丘^く尼^に原^{はら}遺^い跡^{せき}

(第2次発掘調査)

平成13年度県営圃場整備事業柏木
地区に先立つ緊急発掘調査報告書

2005. 3

長野県原村教育委員会



第7号竖穴住居址出土抽象文土器展開写真



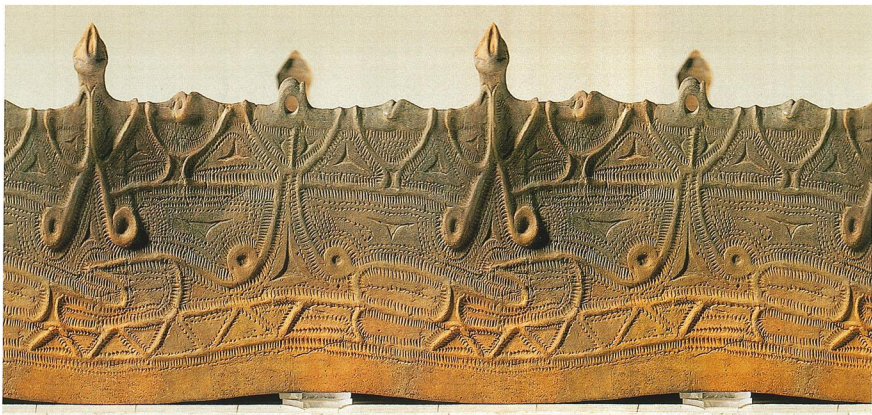
遺跡全景



上 第5号竖穴住居址出土有孔鏝付土器 下 第5号竖穴住居址出土土器集合



上 第7号竖穴住居址出土土器集合 下 第6号竖穴住居址出土土器集合



上 第1号竖穴住居址出土土器 下 第5号竖穴住居址出土土器



上 下 第7号竖穴住居址出土土器



上左 第6号竖穴住居址出土土偶 上右 第5号竖穴住居址出土乳棒状磨製石斧着柄痕
下 小竖穴37出土線刻石皿

序

このたび平成13年度に実施した比丘尼原遺跡第2次発掘調査報告書を刊行することになりました。

発掘調査は、県営圃場整備事業柏木地区に先立って、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から補助金交付を受けた原村教育委員会が実施したものであります。

比丘尼原遺跡の保護につきましては、以前から注意され保護に役立てる目的で長野県教育委員会が平成7年度に分布調査を、8年度に試掘調査を行い、縄文時代の集落址であることは判っていましたが、発掘調査では縄文時代の住居址22軒・小竪穴144基などをはじめ多くの遺物の発見があり、予想していた以上の成果がありました。これは関係各位のご協力により全容が把握できたものであります。

発見した縄文時代中期の集落址は、中央に小竪穴群が形成された極めて良好なものであります。縄文時代の集落を研究する上において貴重な資料を提示することができたものと思っております。

このたびの発掘調査にあたり、諏訪地方事務所土地改良課の方々のご配慮、長野県教育委員会のご指導、長野県埋蔵文化財センターをはじめ発掘にかかわる多くの皆様のご協力に深甚なる謝意を表する次第であります。

発掘現場では、長野県埋蔵文化財センター 調査研究員 田中正治郎氏の多大のご助力と作業員の皆様のご苦勞により、失われていく貴重な資料を記録に残すことができました。また、発掘調査報告書刊行にいたる過程で、お世話をいただいた皆様にたいし厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

原村教育委員会

教育長 津金 喜勝

例 言

- 1 本報告は、「平成13年度県営圃場整備事業柏木地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村柏木に所在する比丘尼原遺跡の第2次緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から発掘調査補助金交付を受けた原村教育委員会が、平成13年7月1日から12月5日にかけて実施した。
整理作業は平成13年12月6日から平成17年3月25日まで行った。
- 3 現場の発掘作業における記録は稲垣佳子・小林智子・小林りえ・坂本ちづる・田中正治郎、写真撮影は田中正治郎・平出一治が行った。
- 4 基準杭の設置と遺構測量の一部は株式会社写真測図研究所に委託した。
- 5 図面・写真の整理は小林りえ・坂本・津金たか子・田中・平出、遺物の整理は稲垣佳子・鎌倉光弥・久根種則・小池英男・小池美秋・小島久美子・小島政雄・小林明美・小林智子・小林りえ・小松弘・五味計佐雄・坂本ちづる・篠原治郎・清水正進・新村力・高橋儀男・田中耕平・田中初一・津金たか子・西沢寛人・福田幸宗・藤原正春・宮坂今朝寿・武藤雄六・和田孝幸・渡部静香が行った。
- 6 土器の拓影は小林りえ・坂本・津金・平林とし美が行い、土器の実測は株式会社シン技術コンサル、石器の実測は株式会社シン技術コンサル・株式会社アルカ、土器・石器の撮影は小川忠博に委託した。
- 7 執筆は田中正治郎の記録をもとに平出一治が行った
- 8 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係資料は、比丘尼原遺跡9の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、ご指導・ご助言をいただいた多くの方々に厚く御礼申し上げる次第である。

目 次

序

例言

目次

図版目次

I	発掘調査の経過	1
1	発掘調査に至る経過	1
2	調査組織	2
3	発掘調査の経過（調査日誌抄）	3
II	遺跡の位置と環境	5
III	調査方法	8
1	調査方法	8
2	基本層序	10
3	調査の概要	10
IV	遺構と遺物	14
1	縄文時代	14
(1)	竪穴住居址	14
	第1号竪穴住居址	14
	第3号竪穴住居址	24
	第5号竪穴住居址	39
	第6号竪穴住居址	54
	第7号竪穴住居址	56
	第8号竪穴住居址	63
	第9号竪穴住居址	68
	第10号竪穴住居址	75
	第11号竪穴住居址	82
	第12号竪穴住居址	84
	第13号竪穴住居址	86
	第14号竪穴住居址	90
	第15号竪穴住居址	92
	第16号竪穴住居址	94
	第17号竪穴住居址	97
	第18号竪穴住居址	98
	第19号竪穴住居址	99
	第22号竪穴住居址	104
	第23号竪穴住居址	106
	第24号竪穴住居址（小竪穴29）	108

第25号竖穴住居址 (小竖穴73)·····	110
第26号竖穴住居址 (小竖穴82)·····	112
(2)小竖穴·····	114
F-4地区·····	114
小竖穴143·····	114
D-5地区·····	114
小竖穴64·105·63·31·62·60·90·87·88·70·86·61·110·89	
E-5地区·····	121
小竖穴59·85·124·125·109·84·111·130·76·113·1·53·9·54·117·116·2·	
127·156·79·154·36·37·38·83·77	
F-5地区·····	128
小竖穴4·80·114·35·34·7·33·115·5·3	
C-6地区·····	131
小竖穴72·74	
D-6地区·····	131
小竖穴106·17·14·69·20A·20B·19·18·75·104	
E-6地区·····	134
小竖穴13·11·99·108·71·98·10·65·67·68·24·12·126·66·100·8·112·107	
F-6地区·····	139
小竖穴39·78·123·119·122·153·155·101·118·32·120·6·15·30·121·157·16·	
102	
C-7地区·····	143
小竖穴142·128·56·57	
D-7地区·····	143
小竖穴21·96·22·58·97	
E-7地区·····	144
小竖穴103·95·28·27·94·26·25·52·93	
F-7地区·····	147
小竖穴151·51·40·92·91·129	
D-8地区·····	149
小竖穴55	
F-9地区·····	149
小竖穴144	
G-11地区·····	149
小竖穴81·131	
G-12地区·····	150
小竖穴132·133	
I-15地区·····	150
小竖穴42·46·44·45	
H-15地区·····	152

小竪穴43	
H-13地区	152
小竪穴134・49・50	
I-14地区	171
小竪穴41	
1000番代	171
小竪穴1001・1002・1003・1004・1005・1006	
(3)遺構外遺物	172
ロームマウンド出土遺物	172
遺構外出土の遺物	172
2 平安時代	190
(1)竪穴住居址	190
第4号竪穴住居址	190
第20号竪穴住居址	193
(2)小竪穴	193
小竪穴47	195
小竪穴48	196
(3)遺構外遺物	196
遺構外出土の遺物	196
3 近現代	196
(1)タメ居址	196
タメ址1	196
タメ址2	196
V 発掘調査を終えて	197
VI まとめ	207
報告書抄録	

図版目次

※	
第1図 原村域の地形断面模式図（宮川—比丘尼原—八ヶ岳ライン）	1
第2図 比丘尼原遺跡と付近の遺跡	6
第3図 調査範囲図・地形図	9
第4図 遺構配置図・グリッド図	11
第5図 第1号竪穴住居址実測図	15
第6図 第1号竪穴住居址出土土器実測図	17
第7図 第1号竪穴住居址出土土器実測図	18
第8図 第1号竪穴住居址出土石器実測図	19

第9图	第1号竖穴住居址出土石器实测图	20
第10图	第1号竖穴住居址出土石器实测图	21
第11图	第1号竖穴住居址出土石器实测图	22
第12图	第1号竖穴住居址出土石器实测图	23
第13图	第3号竖穴住居址实测图	25
第14图	第3号竖穴住居址出土土器·土製品·石器实测图	27
第15图	第3号竖穴住居址出土石器实测图	28
第16图	第5号竖穴住居址实测图	29
第17图	第5号竖穴住居址出土土器实测图	31
第18图	第5号竖穴住居址出土土器实测图	32
第19图	第5号竖穴住居址出土土器实测图	33
第20图	第5号竖穴住居址出土土器实测图	34
第21图	第5号竖穴住居址出土土器·土製品·石器实测图	35
第22图	第5号竖穴住居址出土石器实测图	36
第23图	第5号竖穴住居址出土石器实测图	37
第24图	第5号竖穴住居址出土石器实测图	38
第25图	第5号竖穴住居址出土石器实测图	39
第26图	第6号竖穴住居址实测图	41
第27图	第6号竖穴住居址出土土器实测图	43
第28图	第6号竖穴住居址出土土器实测图	44
第29图	第6号竖穴住居址出土土器实测图	45
第30图	第6号竖穴住居址出土土器实测图	46
第31图	第6号竖穴住居址出土土器·土製品实测图·土器拓影	47
第32图	第6号竖穴住居址出土土製品(土偶)实测图	48
第33图	第6号竖穴住居址出土石器实测图	49
第34图	第6号竖穴住居址出土石器实测图	50
第35图	第6号竖穴住居址出土石器实测图	51
第36图	第6号竖穴住居址出土石器实测图	52
第37图	第6号竖穴住居址出土石器实测图	53
第38图	第6号竖穴住居址出土石器实测图	54
第39图	第7号竖穴住居址实测图	57
第40图	第7号竖穴住居址出土土器实测图	58
第41图	第7号竖穴住居址出土土器实测图	59
第42图	第7号竖穴住居址出土土器·石器实测图	60
第43图	第7号竖穴住居址出土石器实测图	61
第44图	第7号竖穴住居址出土石器实测图	62
第45图	第8号竖穴住居址实测图	64
第46图	第8号竖穴住居址出土土器实测图	65
第47图	第8号竖穴住居址出土石器实测图	66
第48图	第8号竖穴住居址出土石器实测图	67

第49图	第8号竖穴住居址出土石器实测图	68
第50图	第9号竖穴住居址实测图	69
第51图	第9号竖穴住居址出土土器·石器实测图	71
第52图	第9号竖穴住居址出土石器实测图	72
第53图	第9号竖穴住居址出土石器实测图	73
第54图	第10号竖穴住居址实测图	76
第55图	第10号竖穴住居址出土土器实测图	77
第56图	第10号竖穴住居址出土土器实测图	78
第57图	第10号竖穴住居址出土土器·土製品·石器实测图	79
第58图	第10号竖穴住居址出土石器实测图	80
第59图	第10号竖穴住居址出土石器实测图	81
第60图	第11号竖穴住居址实测图	82
第61图	第11号竖穴住居址出土土器拓影、石器实测图	83
第62图	第12号竖穴住居址实测图	84
第63图	第12号竖穴住居址出土土器·石器实测图	85
第64图	第13号竖穴住居址实测图	87
第65图	第13号竖穴住居址出土土器·石器实测图	88
第66图	第13号竖穴住居址出土石器实测图	89
第67图	第14号竖穴住居址实测图	90
第68图	第14号竖穴住居址出土土器拓影·石器实测图	91
第69图	第15号竖穴住居址实测图	92
第70图	第15号竖穴住居址出土土器·石器实测图、土器拓影	93
第71图	第15号竖穴住居址出土石器实测图	94
第72图	第16号竖穴住居址实测图	95
第73图	第16号竖穴住居址出土土器·石器实测图、土器拓影	96
第74图	第17号竖穴住居址实测图	97
第75图	第18号竖穴住居址实测图	98
第76图	第17·18号竖穴住居址出土土器·石器实测图、土器拓影	99
第77图	第19号竖穴住居址实测图	100
第78图	第19号竖穴住居址出土土器实测图	101
第79图	第19号竖穴住居址出土土器实测图	102
第80图	第19号竖穴住居址出土石器实测图	103
第81图	第22号竖穴住居址实测图	104
第82图	第22号竖穴住居址出土土器·石器实测图、土器拓影	105
第83图	第23号竖穴住居址实测图	107
第84图	第23号竖穴住居址出土土器拓影、石器实测图	108
第85图	第24号竖穴住居址实测图	109
第86图	第24号竖穴住居址出土土器·石器实测图、土器拓影	110
第87图	第25号竖穴住居址实测图	111
第88图	第26号竖穴住居址实测图	112

第89図	第25・26号竪穴住居址出土土器拓影、石器実測図	113
第90図	小竪穴配置図	115
第91図	小竪穴配置図	116
第92図	小竪穴実測図	
	F-4地区・小竪穴143、D-5地区・小竪穴64・105・63・31・62・60・90・87	117
第93図	小竪穴実測図	
	小竪穴88・70・86・61・110・89、E-5地区・小竪穴59・85・124・125・109・84・111	120
第94図	小竪穴実測図	
	小竪穴130・76・113・1・53・9・54・117・116・2・127・156・79・154・36	123
第95図	小竪穴実測図	
	小竪穴37・38・83・77、F-5地区・小竪穴4・80・114・35・34・7・33	127
第96図	小竪穴実測図	
	小竪穴115・5・3、C-6地区・小竪穴72・74、D-6地区・小竪穴106・17・14・69	130
第97図	小竪穴実測図	
	小竪穴20A・20B・19・18・75・104、E-6地区・小竪穴13・11	133
第98図	小竪穴実測図	
	小竪穴99・108・71・98・10・65・67・68・24・12・126・66・100	135
第99図	小竪穴実測図	
	小竪穴8・112・107、F-6地区・小竪穴39・78・123・119・122・153・155・101・118 32・120・6・15・30・121	138
第100図	小竪穴実測図	
	小竪穴157・16・102、C-7地区・小竪穴142・128・56・57、D-7地区・小竪穴21・96 22・58・97	142
第101図	小竪穴実測図	
	E-7地区・小竪穴103・95・28・27・94・26・25・52・93、F-7地区・小竪穴151・51・40	145
第102図	小竪穴実測図	
	小竪穴92・91・129、D-8地区・小竪穴55、F-9地区・小竪穴144、 G-11地区・小竪穴81・131	148
第103図	小竪穴実測図	
	G-12地区・小竪穴132・133、I-15地区・小竪穴42・46・44・45、 H-15地区・小竪穴43	151
第104図	小竪穴実測図	
	H-13地区・小竪穴134・49・50、I-14地区・小竪穴41、小竪穴1001・1002・1003・1004・ 1005・1006、ロームマウンド	153
第105図	小竪穴143・64・63出土土器・石器実測図、土器拓影	154
第106図	小竪穴31・62・60・88・87出土土器・石器実測図、土器拓影	155
第107図	小竪穴88・70・86・61・89・85・76・113・1出土土器拓影、石器実測図	156
第108図	小竪穴53・9・54・2・156・36出土土器・石器実測図、土器拓影	157
第109図	小竪穴36・37出土土器・石器実測図、土器拓影	158
第110図	小竪穴38・83・77・80出土土器・石器実測図、土器拓影	159

第111図	小竪穴114・3・33・34・35・72・74出土土器・石器実測図、土器拓影	160
第112図	小竪穴74・106・17・14出土土器・石器実測図、土器拓影	161
第113図	小竪穴69・20A・20B・18・19・75・104・13出土土器・石器実測図、土器拓影	162
第114図	小竪穴13・99・98・65・67・68出土土器・石器実測図、土器拓影	163
第115図	小竪穴24・12・66・112・78・119・120・123・6・30出土土器拓影、石器実測図	164
第116図	小竪穴16・142・128・57出土土器・石器実測図、土器拓影	165
第117図	小竪穴21・58・28・26・25・52・93・151・51出土土器・石器実測図、土器拓影	166
第118図	小竪穴51・40・91・129出土土器拓影、石器実測図	167
第119図	小竪穴55・81・131・43・1001出土土器・石器実測図、土器拓影	168
第120図	小竪穴1002・1003出土土器実測図	169
第121図	小竪穴1003・1004・1005・1006出土土器・石器実測図、土器拓影	170
第122図	ロームマウンド出土土器・石器実測図	173
第123図	遺構外出土土器拓影	174
第124図	遺構外出土土器実測図・土器拓影	175
第125図	遺構外出土土製品・石器実測図	176
第126図	遺構外出石器実測図	177
第127図	遺構外出石器実測図	178
第128図	遺構外出石器実測図	179
第129図	遺構外出石器実測図	180
第130図	遺構外出石器実測図	181
第131図	遺構外出石器実測図	182
第132図	遺構外出石器実測図	183
第133図	遺構外出石器実測図	184
第134図	遺構外出石器実測図	185
第135図	遺構外出石器実測図	186
第136図	遺構外出石器実測図	187
第137図	遺構外出石器実測図	188
第138図	遺構外出石器実測図	189
第139図	遺構外出石器実測図	190
第140図	第4号竪穴住居址・タメ址実測図	191
第141図	第20号竪穴住居址実測図	192
第142図	小竪穴47・48実測図	194
第143図	第4・20号竪穴住居址、小竪穴47・48、遺構外出土土器・石器実測図、土器拓影	195

表 目 次

表 1	比丘尼原北遺跡と付近の遺跡一覧表	7
表 2	発見遺構一覧表	13
表 3	遺構・遺物一覧表	208
	縄文時代 住居址	208
	縄文時代 小竪穴	209
	縄文時代 土 器	215
	縄文時代 土製品	230
	縄文時代 石 器	231
	縄文時代 石製品	267
	平安時代 住居址	267
	平安時代 小竪穴	267
	平安時代 土 器	268
	平安時代 鉄製品	268
	平安時代 石 器	268

I 発掘調査の経過

1 発掘調査に至る経過

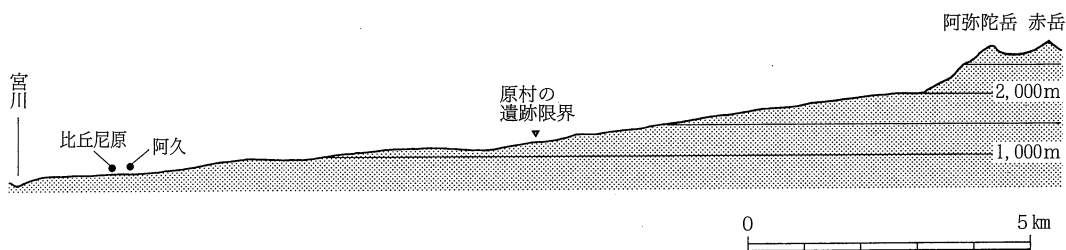
農業者の高齢化、後継者の減少は原村でも例外ではなく、労働効率の面から機械化は必要なことであり、機械化のためには耕地の整備は不可欠なことである。こうした考えのもとに圃場整備事業は行われてきた。平成5年度に着手された「県営圃場整備事業原村西部地区」は、事業名が「県営圃場整備事業柏木地区」に変わりはしたが継続している。

すでに工事が終了した県営圃場整備事業原村西部地区に先立っては、多くの遺跡を調査し記録保存した。平成13年度の工事予定地域内に、たまたま比丘尼原遺跡（原村遺跡番号9）が立地していたことから、その保護については平成12年11月8日に行なわれた「平成13年度県営圃場整備事業柏木地区にかかわる埋蔵文化財保護協議」で協議された。出席者は長野県教育委員会文化財・生涯学習課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、原村教育委員会の4者である。

本遺跡は、以前から遺跡保護について注意されてきた柏木・菖蒲沢地区内に立地する遺跡であり、長野県教育委員会は平成7年度に原村柏木・菖蒲沢地区の分布調査を実施している。その報告書で、比丘尼原遺跡について、縄文時代中期のまとまった遺物が採集されたことから、ある程度の規模をもつ集落址を予想しているが、荒れた畑地が多く踏査だけでは範囲を確認することはできなかった。また、平安時代の遺物が発見されたこともあり、複合遺跡の可能性を述べ、性格の一端を明らかにした。平成8年度には、耕作の関係と山林化した畑地を除いた範囲で試掘調査を行っているが、そこは遺跡の中心部を外れていることはあきらかであり、開発に先立っては再度の試掘調査を実施する必要性を述べている。

一連の調査で縄文時代と平安時代の複合遺跡であることが判明しつつあり、その重要性も理解できるようになってきたが、農業者からの強い要望の中で進められている事業であり、遺跡は本来現状のまま保存していくのが最も望ましいことであるが、次善の策として「記録保存やむなき」との考えに落ち着き、平成13年度に緊急発掘調査を実施し、記録保存をはかる方向で同意をみることができた。

原村教育委員会は、その後も関係機関と協議を重ね、諏訪地方事務所から緊急発掘調査の委託を、また、国庫および県費から発掘調査補助金交付を受け、平成13年7月1日から12月5日に比丘尼原遺跡第2次緊急掘調査を実施した。



第1図 原村域の地形断面模式図（宮川—比丘尼原—八ヶ岳ライン）

2 調査組織

比丘尼原遺跡第2次・比丘尼原北遺跡第2次発掘調査団名簿（平成13年度）

事務局	原村教育委員会					
教育長	大館 宏（～平成13年7月22日）					
	津金 喜勝（平成13年7月23日～）					
学校教育課長	小林 銚晃					
文化財係長	平出 一治					
文化財係	平林とし美					
調査団	団長 大館 宏（～平成13年7月22日）					
	津金 喜勝（平成13年7月23日～）					
調査担当者	田中正治郎					
調査員	平出 一治 平林とし美					
調査参加者	発掘調査	稲垣 佳子	久根 種則	小池 英男	小池 美秋	
	小島久美子	小島 政雄	小林 智子	小林 りえ	小松 弘	
	五味計佐雄	坂本ちづる	篠原 治郎	清水 正進	新村 力	
	高橋 儀男	田中 耕平	田中 初一	西沢 寛人	福田 幸宗	
	藤原 正春	宮坂今朝寿	渡部 静香			
	整理作業	稲垣 佳子	久根 種則	小池 英男	小池 美秋	
	小島久美子	小島 政雄	小林 智子	小林 りえ	小松 弘	
	五味計佐雄	坂本ちづる	篠原 治郎	清水 正進	新村 力	
	高橋 儀男	田中 耕平	田中 初一	西沢 寛人	福田 幸宗	
	藤原 正春	宮坂今朝寿	渡部 静香			

比丘尼原遺跡第2次発掘調査団名簿（平成15年度）

事務局	原村教育委員会					
教育長	津金 喜勝					
学校教育課長	佐貫 正憲					
文化財係長	平出 一治					
文化財係	平林とし美					
調査団	団長 津金 喜勝					
調査担当者	平出 一治					
調査員	田中正治郎 平林とし美 武藤 雄六					
調査参加者	整理作業	小島久美子	小林 明美	小林 智子	小林 りえ	
		坂本ちづる	津金たか子			

比丘尼原遺跡第2次発掘調査団名簿（平成16年度）

事務局	原村教育委員会	
教育長	津金 喜勝	

学校教育課長	佐貫 正憲				
文化財係長	平出 一治				
文化財係	平林とし美				
調査団 団長	津金 喜勝				
調査担当者	平出 一治				
調査員	田中正治郎	平林とし美	武藤 雄六		
調査参加者	整理作業	鎌倉 光弥	小島久美子	小林 りえ	坂本ちづる
	津金たか子	和田孝幸			

3 発掘調査の経過（調査日誌抄）

- 平成13年 7月1日 発掘準備をはじめめる。
- 2日 トレンチの掘削を重機で行い、遺構確認のためトレンチ内の精査を人力ではじめる。草刈り、機材の搬入、テント設営を行う。
- 4日 トレンチ内の精査で住居址の落ち込みを確認し、重機による表土剥ぎをはじめめる。
- 5日 人力で遺構検出作業をはじめめる。
- 30日 第1・3・4号住居址の検出写真を撮影、第1・3号住居址の精査をはじめめる。
- 31日 第5号住居址の検出状況写真撮影
- 8月1日 土偶の発見がある。小竪穴数基を確認する。
- 6日 第6・7号住居址の検出写真を撮影、第5・6号住居址の精査をはじめめる。
- 6日 第10号住居址の検出写真を撮影、第7号住居址の精査をはじめめる。長野日報・NHK土偶発見についての取材。
- 8日 第10号住居址の精査をはじめめる。毎日新聞・サラダチャンネル土偶発見についての取材。
- 9日 精査を進めていた第6号住居址から土偶が出土、8月1日発見の土偶と接合する。
- 20日 基準杭の打設をはじめめる。
- 23日 第8号住居址の検出写真を撮影、引き続き精査をはじめめる。
- 24日 小竪穴1～10の精査をはじめめる。
- 27日 小竪穴11～18の精査をはじめめる。
- 29日 第11号住居址、小竪穴19～29の精査をはじめめる。
- 30日 第13号住居址の精査、第3・5・6・10号住居址の埋土の観察・土層実測をはじめめる。
- 9月4日 第3・6・10号住居址の遺物出土状態写真撮影を行う。
- 5日 第12号住居址の検出写真を撮影。第3・6号住居址遺物出土状態の実測、引き続き遺物取り上げをはじめめる。
- 7日 第12号住居址の精査、小竪穴の遺物出土状態写真撮影、測量杭を打設し小竪穴の実測をはじめめる。
- 12日 第7号住居址の遺物出土状態写真撮影。第10号住居址遺物出土状態の実測、第3号住居址柱穴の精査をはじめめる。
- 13日 第9号住居址・小竪穴29（後に住居址と判明、報告では24号住居址）の検出写真撮

- 影。第13号住居址遺物出土状態の実測、小竪穴31の精査をはじめめる。
- 17日 第8号住居址の遺物出土状態写真、小竪穴41～44の検出写真撮影。第13号住居址柱穴、小竪穴41～44の精査をはじめめる。長野日報の取材。
- 18日 第19号住居址、小竪穴47・48の検出写真撮影。第5号住居址遺物出土状態の実測、第9号住居址、小竪穴47・48の精査をはじめめる。
- 17日 遺跡中央の小竪穴群の検出と精査。毎日新聞・朝日新聞の取材。
- 24日 現地見学会を行う。
- 26日 第14号住居址の検出写真撮影。
- 27日 第14号住居址の検出写真撮影。第14号住居址の精査をはじめめる。
- 10月2日 第21・22号住居址、小竪穴81の検出写真、第11号住居址の検出写真撮影。第21・22号住居址の精査をはじめめる。原小学校6年生見学。
- 10月4日 第15・16号住居址の精査、第7号住居址の遺物取り上げをはじめめる。
- 9日 第17号住居址の検出写真撮影を行う。
- 11日 小竪穴82の検出写真撮影、引き続き精査をはじめめる（後に住居址と判明、報告では26号住居址）。第19号住居址の精査、第1・2・13号住居址遺物出土状態の実測、小竪穴の土層観察と実測をはじめめる。原中学校1年生見学。
- 15日 第4号住居址の遺物出土状態写真撮影。第6・9・15・16号住居址の遺物取り上げをはじめめる。
- 16日 第19・29号住居址遺物出土状態の実測をはじめめる。
- 19日 小竪穴83～90の精査をはじめめる。
- 22日 第14・15号住居址の全景写真撮影。第6号住居址遺物出土状態の実測、第1・2・10号住居址の遺物取り上げをはじめめる。
- 23日 第12・17号住居址遺物出土状態の写真撮影。第6号住居址遺物出土状態の実測、第6・8号住居址の遺物取り上げをはじめめる。
- 24日 第20号住居址検出写真撮影。第5・19号住居址の遺物取り上げをはじめめる。
- 25日 小竪穴11・14の全景写真撮影。
- 26日 小竪穴5・6・7・88の全景写真撮影。第22号住居址の埋土の観察・土層実測をはじめめる。
- 29日 第22号住居址遺物出土状態写真、第7号住居址全景写真、小竪穴37・38・54検出写真撮影。第18号住居址の精査をはじめめる。
- 30日 第22号住居址遺物（炭化材）出土状態写真撮影。第23号住居址埋土観察・土層実測をはじめめる。
- 11月2日 ロームマウンド精査をはじめめる。
- 6日 ラジコンヘリによる空中写真・測量写真撮影。
- 12日 尾根周辺部にトレンチの掘削を重機で行い、遺跡範囲の確認をはじめめる。
- 13日 第16号住居址全景写真撮影。第25号住居址実測をはじめめる。
- 14日 住居炉址精査をはじめめる。
- 15日 旧石器遺跡確認のトレンチ調査を人力ではじめめる。
- 12月5日 埋甕炉の取り上げ、片付けを行い現場作業は終了する。

Ⅱ 遺跡の位置と環境

比丘尼原遺跡（原村遺跡番号 9）は、長野県諏訪郡原村柏木区北西の茅野市との境界付近に位置する。このあたりは当地方に特有な東西に細長くのびる大小様々の尾根がみられる。これらの尾根筋は西方500mほど先で、フォッサマグナの西縁である糸魚川―静岡構造線の断層崖に沿って北へ流れる宮川によって断ち切られている。

尾根上から南斜面には第2図と表1に示したように、縄文時代中期を中心とする数多い遺跡が埋蔵されている。それらの遺跡は県営圃場整備事業をはじめとする開発事業ですでに消滅したものが多いが、事前に実施した緊急発掘調査では数多い土器や石器をはじめ縄文時代と平安時代の住居址や小竪穴などを発見している。

第2図と表1に示した中から集落遺跡をあげると、縄文時代と平安時代が複合する第2図1の家裏遺跡、11の阿久遺跡（国史跡）、12の前沢遺跡、13の長峰遺跡、15の程久保遺跡、20の前尾根遺跡、22の清水遺跡、24の恩膳遺跡、25の裏尾根遺跡、42の居沢尾根遺跡、46の宿尻遺跡、49の大石遺跡、55の中尾根遺跡、56の家前尾根遺跡、101の白ヶ原南遺跡の15遺跡、縄文時代は10の柏木南遺跡、19の南平遺跡、21の上居沢尾根遺跡、50の山の神遺跡、51の姥ヶ原遺跡、53の雁頭沢遺跡、57の久保地尾根遺跡、97の塩水遺跡の8遺跡、平安時代は8の比丘尼原北遺跡、14の裏長峰遺跡、23の恩膳西遺跡、47のヲシキ遺跡、95の土井平遺跡、99の中尾根頭遺跡の6遺跡を数え、原村の中でもその密度は極めて高く、縄文時代中期と平安時代の大規模遺跡群が形成されていることは確かな地域である。

本遺跡は、八ヶ岳から流下する小早川と三ヶ村堰にはさまれた尾根上に立地するが、尾根幅は広くなく馬の背状の狭いものである。南斜面は土取りで傾斜がきつくなった所も見られたが、総体的には緩やかな地形が形成されているが、先端によるほど傾斜は強く小早川との比高差は大きくなる。北斜面は南斜面より全体に傾斜は強く、三ヶ村堰の浸蝕で切り立つ箇所もみられた。

発掘調査の対象は尾根の全域におよぶが、標高は888m前後を測り、原村のなかでは低標高に位置する遺跡の一つである。尾根上の地目は普通畑・桑畑および山林であるが、普通畑は荒れたものも多く、桑畑もやはり荒れており桑の木は大きく林の状態である。また、さつきなどの庭木や果樹もみられ掘り返しも多く、土取りで地山のロームが露呈したところもみられた。南斜面は普通畑と水田で、畑地の中にはロームを耕作土にしている所もみられた。

本遺跡名である「比丘尼原」が最初にみえるのは、大正13年に刊行された『諏訪史 第一巻』の「諏訪郡先史時代遺物発見地名表」であり、土器（厚・薄）の発見を伝えている。また、『信濃史料 第一巻上』で縄文時代中期の加曾利E式土器の発見を伝えている。

その後、比丘尼原遺跡は長野県教育委員会が昭和40年度に実施した「八ヶ岳西南麓遺跡調査 松本諏訪地区新産都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査」、昭和42年度の「中央道建設地域内埋蔵文化財緊急分布調査」、昭和46年度の「諏訪郡原村 農業振興地域等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査」、昭和54年度の「八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査」の報告書に遺跡名がみえ遺物の発見を伝えている。

以上の分布調査について『原村誌 上巻』では次のようにまとめている。長くなるが全文を紹介しておきたい。

(9)比丘尼原遺跡（柏木）

柏木区の西方に位置する遺跡で、付近には湧水がある。遺跡の発見は古く『諏訪史 第一巻』に



第2図 比丘尼原遺跡と付近の遺跡

表1 比丘尼原北遺跡と付近の遺跡一覧表

○は遺物発見 ◎は住居址発見

番号	遺跡名	旧石器	縄文					弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後							
1	家裏	○				◎	○				◎		茅野市地籍に展開 昭和59年度発掘調査	
2	大久保前									○			昭和54年消滅	
3	向尾根	○				○							昭和54年度発掘調査 消滅	
4	横道下	○				○				○			昭和54年度発掘調査 消滅	
8	比丘尼原北		○	○						◎			平成10・13・14年度発掘調査	
9	比丘尼原					◎				◎		○	平成8・13年度発掘調査 消滅	
10	柏木南	○			○	◎				○			昭和51・平成14年度発掘調査	
11	阿久		○	◎	◎	○				◎	○		国史跡 昭和50・51・52・53・平成5・7・11・12・13年度発掘調査	
12	前沢				○	◎				◎		○	昭和55・61・平成10・11年度発掘調査	
13	長峰		○			◎	○			◎		○	平成3年度発掘調査 消滅	
14	裏長峰	○	○			○				◎			平成4年度発掘調査 消滅	
15	程久保		○			◎				◎		○	平成4・5年度発掘調査 消滅	
17	白ヶ原		○	○		○				○			昭和53・平成10年度発掘調査	
18	前尾根西					○								
19	南平		○			◎					○		平成9年度発掘調査 消滅	
20	前尾根				○	◎	◎			◎		○	昭和44・52・53・59・平成9・15年度発掘調査	
21	上居沢尾根					◎	○			○		○	平成4年度発掘調査	
22	清水		○	○		◎	○			◎	○		平成8年度発掘調査 消滅	
23	恩膳西	○	○			◎	○			◎	○		昭和62・平成5・6年度発掘調査	
24	恩膳		○			◎	◎			○			昭和62年度発掘調査	
25	裏尾根		○			◎				◎			平成8・10年度発掘調査	
26	家下					○				○		○	昭和59・平成9・12・13年度発掘調査	
27	關盧沢					○				○	○		昭和62・平成9年度発掘調査	
28	宮平									○	○		村史跡	
29	向尾根					○				○		○	昭和50・54年度発掘調査	
30	南尾根				○					○				
31	中尾根									○				
42	居沢尾根	○	○	○		◎	○			◎			昭和50・51・52・56・平成6・11・12年度発掘調査	
43	中阿久					○							昭和51年度発掘調査	
44	原山					◎				○				
45	広原日向	○				○				○			昭和58年度発掘調査	
46	宿尻	○	○			◎	○			◎			平成5・6年度発掘調査 消滅	
47	ヲシキ		○	○		○				◎		○	昭和51・平成10・11年度発掘調査	
48	楡の木					◎				○				
49	大石	○	○	◎	◎					◎		○	昭和50・平成9・10・13年度発掘調査	
50	山の神					◎	◎			○			昭和54・平成13年度発掘調査	
51	姥ヶ原					○	◎						昭和63・平成元・15年度発掘調査	
52	水掛平					○	○			○	○		平成7・8年度発掘調査	
53	雁頭沢					◎				○		○	昭和54・57・63・平成4・5・9・10・13・15年度発掘調査	
54	宮ノ下		○			○				○	○	○	昭和57・58年度発掘調査	
55	中尾根				○	◎	○			◎		○	平成6年度発掘調査	
56	家前尾根					◎	◎			◎		○	平成6年度発掘調査	
57	久保地尾根					◎							昭和5・平成6・7・8・13・14年度発掘調査	
61	番飼場					○				○			昭和50年消滅	
78	弓振日向	○				◎							平成7・8年度発掘調査	
93	大石西				○	○				○			平成2年度発掘調査	
94	下原山 茂佐久保					○							茅野市地籍に展開 平成4年度発掘調査	
95	土井平									◎			平成4年度発掘調査 消滅	
97	塩水					○							平成14年度発掘調査	
98	白ヶ原西									○			平成10年度発掘調査 消滅	
99	中尾根頭					○				◎			平成10年度発掘調査	
101	白ヶ原南		○			◎	○			◎			平成10・11年度発掘調査 消滅	

土器（厚・薄）が、『信濃史料 第一巻上』では縄文時代中期の加曾利E式土器の発見を伝えている。

県教育委員会で昭和42年度に実施した中央道建設地域内埋蔵文化財緊急分布調査の報告書には「(前略) ボーリング調査の結果、60cmの深さに住居址の存在が確認された。(後略)」との記載がある。その後の踏査でも資料の発見は比較的多く、縄文時代中期の九兵衛尾根式・新道式・藤内式・曾利式土器の破片、石器では乳棒状石斧・打製石斧・石錐・石鏃、平安時代の土師器と須恵器の破片などがある。

本遺跡は著名な大遺跡である阿久・居沢尾根・大石遺跡などとはほぼ同じ等高線上に位置する遺跡であり、住居址の存在が確認するほか発見資料も比較的多く、規模の大きな遺跡と思われる。今後精査の待たれる遺跡の一つである。

急激に開発が進む平成7年度に長野県教育委員会は、遺跡保護に役立てる目的で「農場基盤整備事業に係る茅野市・原村の分布調査」を行い、本遺跡についてはその報告書で、荒れた畑地が多く踏査だけでは範囲を確認するまでには至らなかったが、縄文時代中期のまとまった遺物が採集されたことから、ある程度の規模をもつ集落址を予想し、平安時代の遺物が発見されたこともあり、縄文時代と平安時代の複合集落の可能性を示唆している。平成8年度には試掘調査を行い、耕作の関係と山林化した畑地を除いた調査で、そこは遺跡の中心部を外れていることはあきらかであり、開発に先立っては再度の試掘調査を実施する必要性を述べている。遺跡の範囲と性格について理解できるようになり今日に至っている。

Ⅲ 調査方法

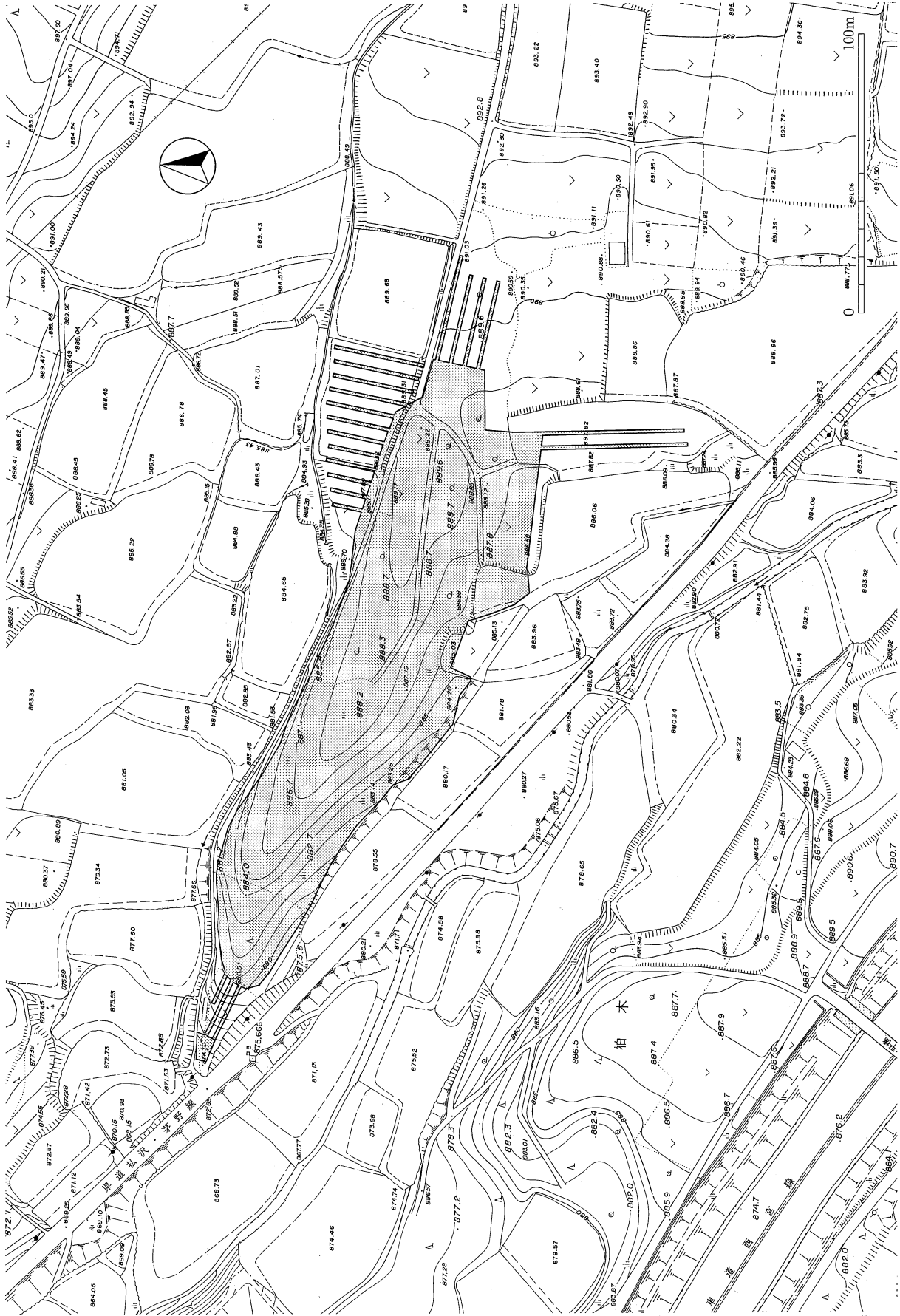
1 調査方法

発掘調査は、第3図に示した県営圃場整備事業柏木地区に係る比丘尼原遺跡の全域が対象である。しかし、遺跡の範囲は、平成8年度に長野県教育委員会が遺跡保護に役立てる目的で実施した「農場基盤整備事業に係る茅野市・原村の分布調査」の一環として行った試掘調査の報告で、開発に先立っては再度の試掘調査の必要性を述べていように、未だ不明瞭な点は多く面的調査範囲を決定できる状態ではなく、東側外縁部の範囲確認からはじめた。

尾根方向に軸を合わせたトレンチ調査を行い、範囲を明確にしたなかで面的調査範囲を決定した。調査にあたっては、長野県教育委員会が平成7年と平成8年の2ヵ年にわたって実施した分布調査の成果と、当地方における遺跡立地を考慮する中で試みたものである。

トレンチの掘削は重機で行いその巾はバケット巾である1.2mとした。引き続き人力でトレンチ内の精査を行い、遺物の有無と遺構の埋没状況の把握を行った。範囲がほぼ明確になり堅穴住居址など遺構の埋没が明らかになった時点で表土剥ぎに切り替えたが、その後も不明瞭な箇所についてはトレンチ調査と表土剥ぎを繰り返し、面的調査範囲を決定しつつ表土剥ぎは終了した。

遺構の検出は人力で行い、基本的にはソフトローム直上を遺構の検出面とした。遺物の取り上げは、重機による表土はぎ直後は地区別に、その後は国家座標第Ⅷ系に軸を合わせた10×10mのグリッドを設定し、グリッド別に行った。住居址や小堅穴に伴うものは遺構毎に取り上げているが、主だった遺物は図化し番号を付けてある。遺構の番号は住居址・小堅穴とも発見順に第1号堅穴住居址・第2号堅穴住



第3図 調査範囲図・地形図

居址、小竪穴1・小竪穴2というように算用数字を用いている。

竪穴住居址は、直交する土層観察ベルトを設定し埋土の観察と記録を行い。貼り床の施された柱穴等は、全景写真・実測作業が終了した後に床面を剥ぎ検出に努め精査を行った。なお、貼り床が施されていた柱穴等は実測図に点線で表示した。

小竪穴は、2分割し埋土の観察と記録を行った後全掘している。直交する土層観察ベルトで観察と記録を行ったものもある。

実測は、国家座標第Ⅷ系に合わせた基準杭を設置し、それに従った測量基準杭を打設して行った。遺構実測の一部と地形測量は株式会社写真測図研究所に委託した。

検出作業の折りに旧石器時代の石器を思わせるものの出土があり、縄文時代の遺構の精査終了後に人力でトレンチ調査を試みたが、ローム層中から石器を発見するまでには至らなかった。

調査面積は10,300m²である。

2 基本層序

調査対象地の土地利用状況は普通畑・桑畑・荒地・山林（以前は普通畑）・農道・水田であるが、普通畑の多くは荒地であった。馬の背状のやせ尾根でローム層までが浅い範囲は広く、耕作の畝が遺構に達している所もみられたが、総体では土層の堆積は比較的安定していた。

尾根頂部付近は流失が著しかったためか堆積は薄く、耕作土直下がローム層になる所もあるが、斜面は下方ほど堆積が厚くなり黒褐色土（耕作土）・黒色土・褐色土・ソフトローム層までの基本的な土層がみられた。なお、斜面最下方では真黒色土の発達が見られるが、この層を掘り込む住居址や小竪穴はみられなかった。

基本層序は次の通りである。

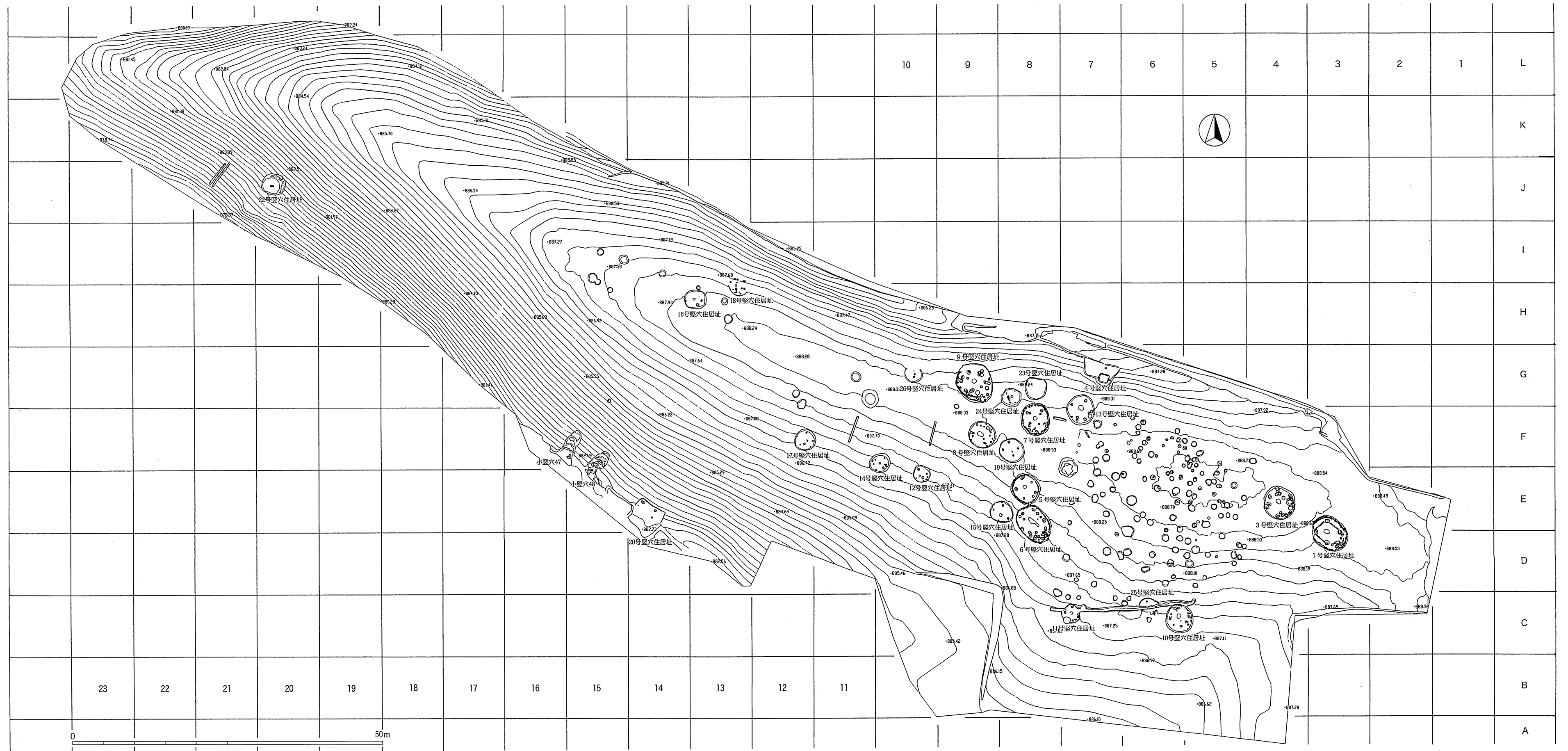
- 1層 黒褐色土 表土・畑地の耕作土。畑地により厚さに違いはみられるが、基本的には2層が耕作により淡色化したものと思われる。石灰の細粒が混じる。
- 2層 黒色土 5～20cm程であるが、尾根頂部付近は薄く斜面も下方ほど厚くなる。遺物の包含層である。
- 3層 褐色土 2層から5層への漸移層で、必ずしも明確ではないが斜面の広範囲で認められた。
- 4層 真黒色土 真黒土（漆黒）で斜面の最下方で認められた。下層には地山に含まれる大小様々な礫がみられる。遺物は包含されていない。
- 5層 黄褐色土 いわゆるソフトローム層で、認められない所もある。
- 6層 ローム層 斜面下方では礫が含まれている。

3 調査の概要

本調査で発見した遺構は、第4図の遺構配置図・グリッド図に示した通り竪穴住居址24軒、小竪穴146基、タメ址2基である。

竪穴住居址は縄文時代と平安時代に帰属するが、その内訳は縄文時代前期末葉が1軒、中期初頭から中葉が21軒で、平安時代後期が2軒である。小竪穴は縄文時代中期初頭から中葉が144基で、平安時代は2基である。タメ址2基は近現代の所産である。

縄文時代・平安時代・近現代が複合していたが、遺跡の中心は縄文時代中期初頭から中葉期で、遺構



第4図 遺構配置図・グリッド図 (1:500)

配置図で示しているように、中央に小竪穴群が形成された環状集落址である。尾根幅が狭いためかやや不規則な配置のようにも見えるが、極めて貴重な遺構群の発見である。

当地方における縄文時代中期の集落址は、住居址は重複することが普通であるかのように重複が繰り返され、古い住居址はわからなくなっているものもしばしばみられ、集落研究の上では大きな障害になることもあるが、本遺跡においては住居址の重複はなく、やはり中央の小竪穴群にも重複をなかった。したがって、これらの遺構がもたらした情報は膨大なものである。

小竪穴のなかで1000番台を付けたものは、黒色土中で一括土器・石器および礫は検出したが、遺構検出面としたソフトローム層に掘り込みが確認できなかったもので、それらに単独土器とか集石などの遺構名を用いるのではなく、黒色土中に構築された小竪穴状遺構の存在を考慮したものである。なお・遺物を取り上げ後に落ち込みを検出調査したものもある。

小竪穴のなかには伴出遺物が皆無で帰属時期の判らないものも多く、土器は出土したが小破片であるうえにその数は少なく、また、黒曜石の剥片だけが出土したものもあり、やはり時期決定ができないものも多いが、ここでは縄文時代中期と考えるなかで報告している。

出土した土器や石器のなかには遺構間接合もみられた。それらの遺物は単純に破片数の多い遺構に帰属させてある。

住居址・小竪穴とも番号を付け精査を行った結果、木の根や耕作による攪乱であることが判明したものは欠番とした。

極めて良好な資料であるが、多くの問題を解決できないままの報告書作成である。

表2 発見遺構一覧表

時代	時期	遺構名	発見数	住居址・小竪穴・タメ址番号
縄文時代	前期	住居址	1軒	第22号住居址
	中期	住居址	21軒	第1・3・5～19・22～26号住居址
	中期	小竪穴	144基	小竪穴1～19・20A・20B・21・22・24～28・30～46・49～72・74～81・83～134・142～144・151・153～157・1001～1006
平安時代	後期	住居址	2軒	第4・20号住居址
	後期	小竪穴	2基	小竪穴47・48
近・現代		タメ址	2基	タメ址1・2

IV 遺構と遺物

1 縄文時代

(1) 竪穴住居址

発見順に番号をつけたが、調査を進める過程で重複を誤認した第2号住居址と攪乱穴を誤認した第21号住居址は欠番とした。小竪穴番号を付け調査は終了していたが、炉址の発見を重視し整理作業の段階で住居址に改めた第24号住居址（小竪穴29）、第25号住居址（小竪穴73）、第26号住居址（小竪穴82）の3軒がある。この3軒の調査記録および出土遺物への注記は小竪穴のまま直してない。

住居址の帰属時期は、縄文時代の前期末葉が1軒で、中期初頭から中葉が21軒である。未だ出土土器の分析ができないでいる現状であり、時期別の報告ができないため住居址の番号順とした。

上記したように出土資料の分析ができていないこともあり、多くの資料を図示することを心がけたが帰属時期については触れなかった。

柱穴等の規模については、長軸・短軸・深さを一覧表で示した。

第1号竪穴住居址（第5～図、写真7～9・88～93・178～184）

面的調査を行った東端のD-3・E-3グリッドで検出した。ローム層にローム粒と炭化物を含む黒褐色土の落ち込みを確認したが、竪穴中央の黒色土は逆三角堆土とは異なる様相を示しており、住居址1軒の埋土とは思えない複雑なものであった。遺物の出土状態も、埋土の違いとほぼ重なり2か所に集中していた。サブトレンチによる土層観察で立ち上がりが見え観察できたため同心円状の重複を想定した。新しい内側を第1号住居址、古い外側を第2号住居址と呼称し調査を進めた。進行の過程で1軒の住居址であることが判明したため2号住居址を欠番とした。

埋土は、直交する土層ベルトで観察し、耕作による攪乱で不明瞭な所もみられたが3層に大別した。1層はローム粒と炭化物を多く含む黒褐色土、2層はローム粒とロームブロックを多く含む黒褐色土、3層はローム粒を多く含む均質な褐色土である。基本的にはレンズ状堆積であり自然埋没と考えたい。

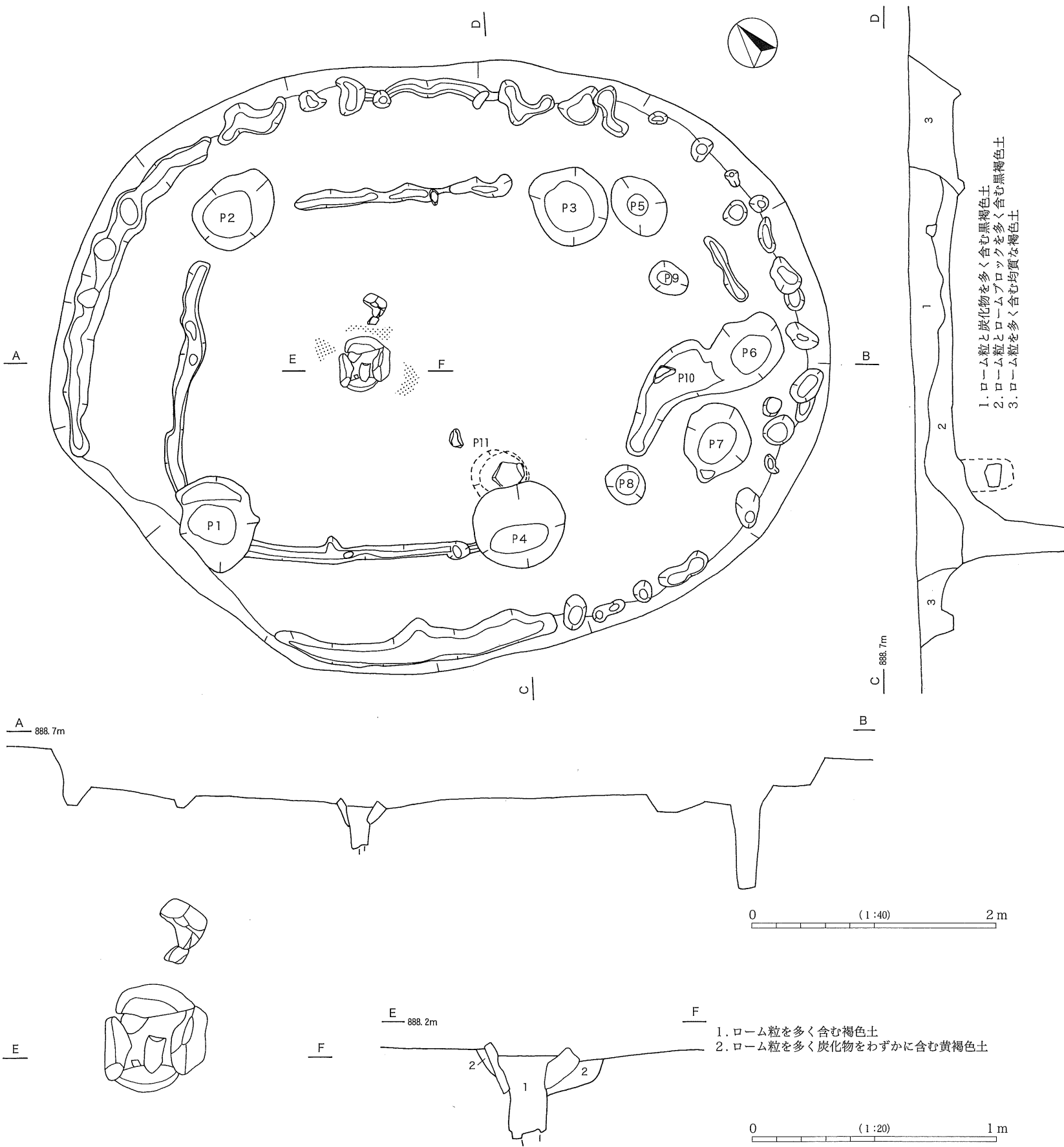
出土した遺物は、逆三角堆土に多くみられたが、黒曜石の細かな剥片の集中出土は人為的な廃棄の可能性が高いものである。なお、灰釉陶器の破片も出土したが混入である。

平面形は、長軸635cm、短軸498cmの楕円形である。西壁の一部は耕作の畝で破壊されていたため不自然となるが、当初は整った楕円形であったと思われる。

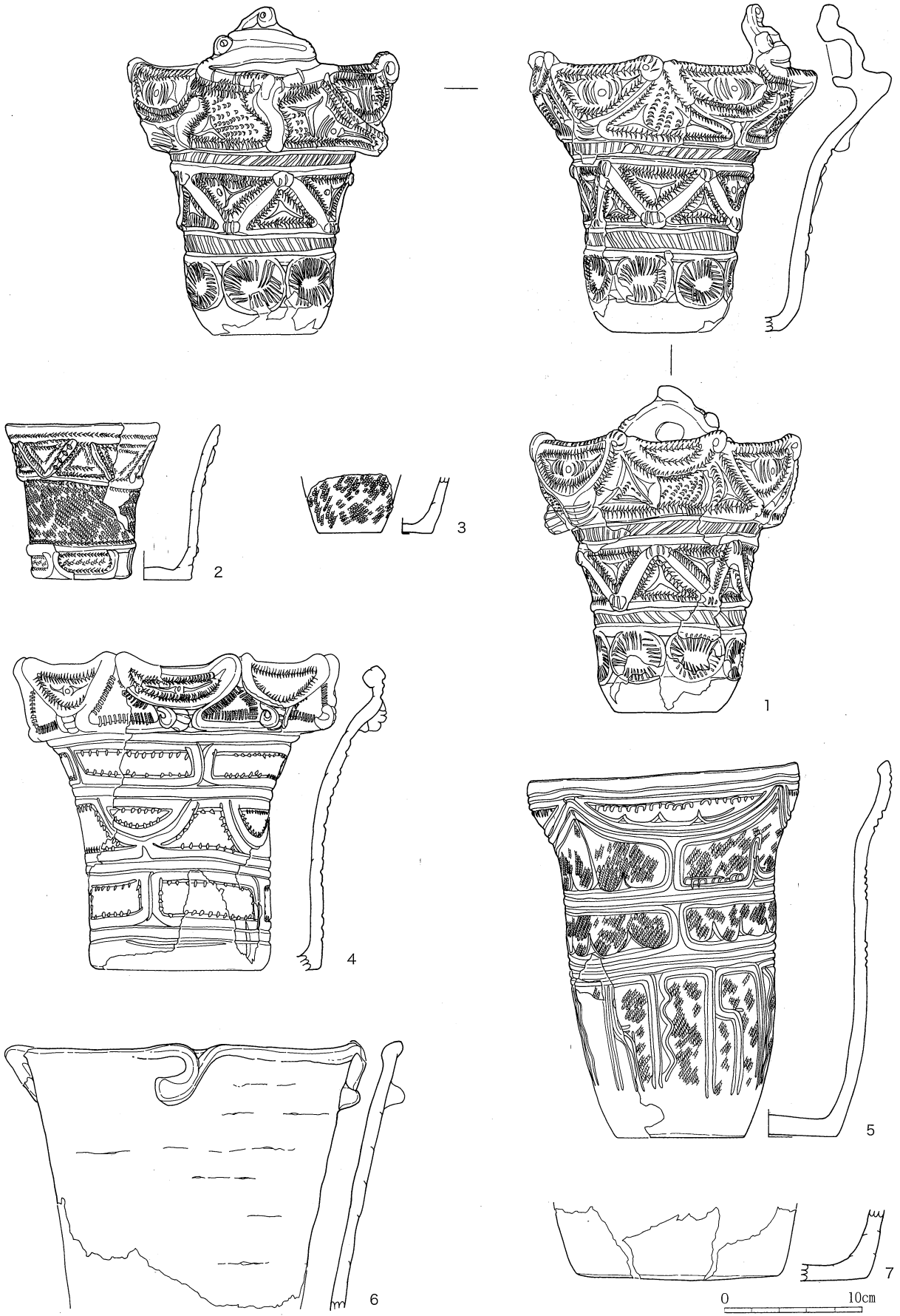
壁は、ロームで傾斜地に構築されているため高さの違いがみられ、東壁は34cm、西壁は16cm、南壁は22cm、北壁は25cmを計り、その立ち上がりは緩やかでありあまり良くない。

周溝は、壁直下に全周している。溝と小ピットを組み合わせたものであるが、東壁から南壁の直下は小ピットだけになる。

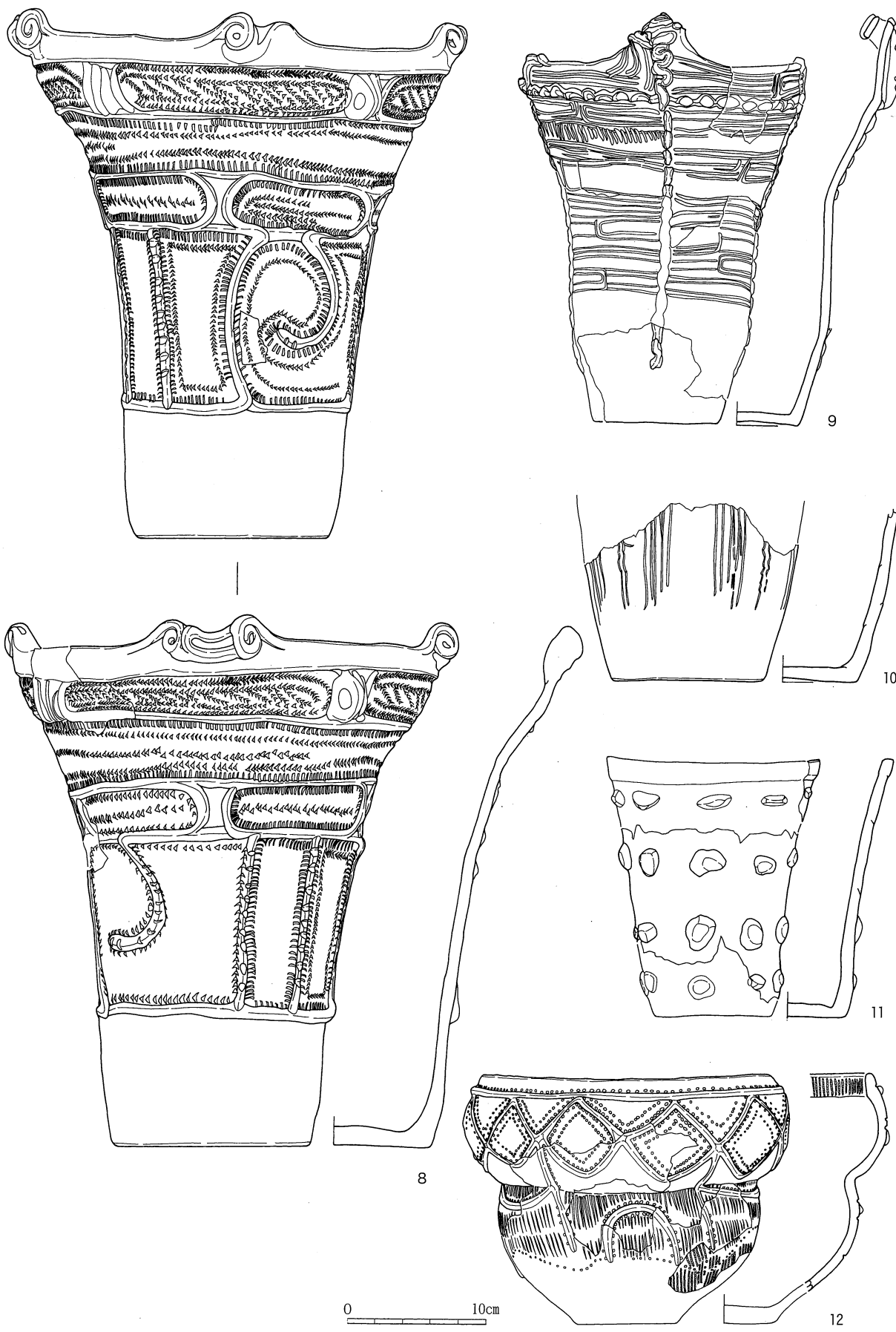
床面は、ロームで硬くほぼ平らで、P3とP2、P2とP1、P1とP4はそれぞれ周溝状の溝でむすばれ、溝より壁側がわずかに高くなるこの時期特有の形態である。なお、床面に礫がみられたが、地山のローム層に包含されるもので東に寄るほど多くなる。



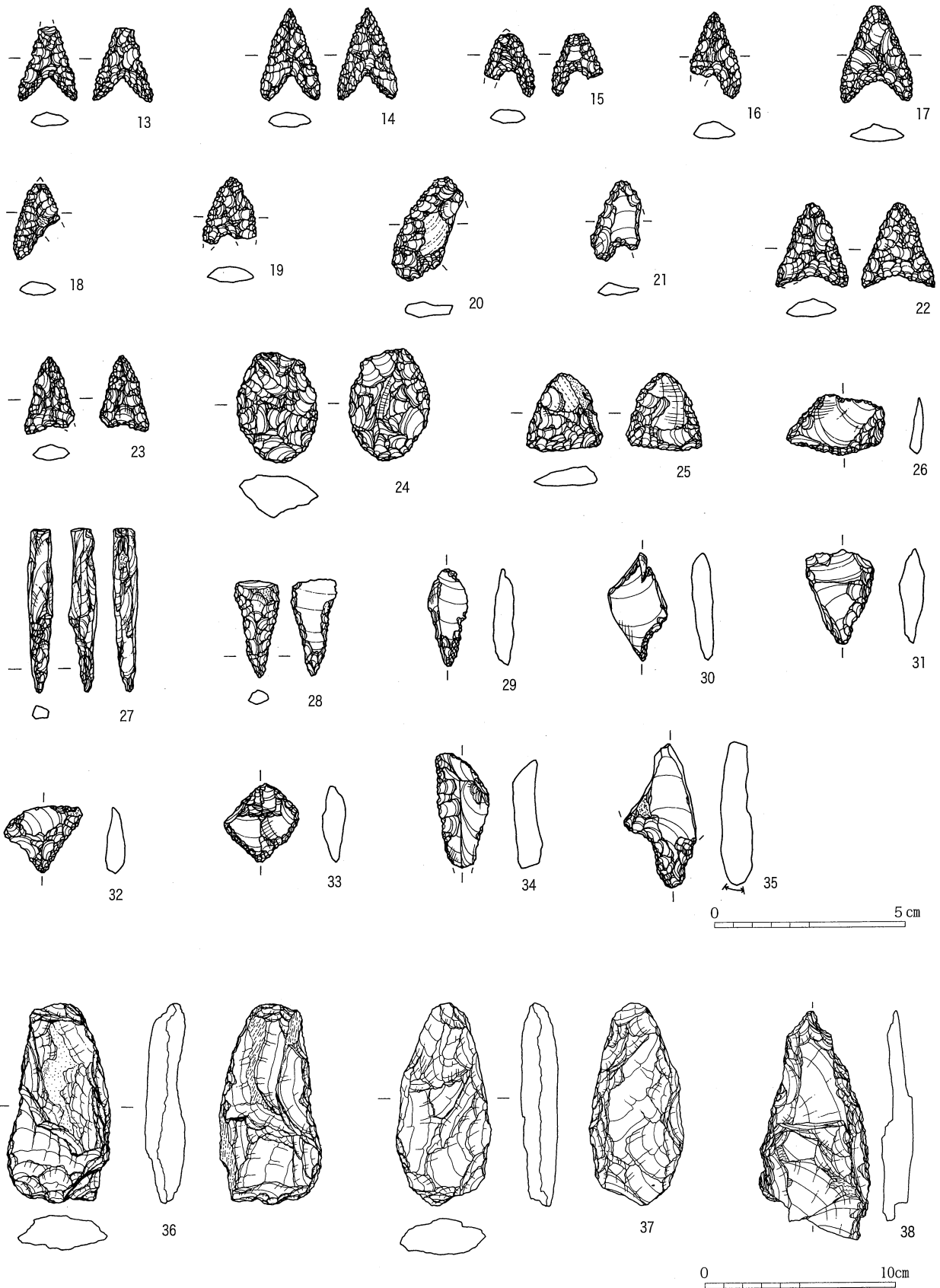
第5図 第1号竪穴住居址実測図



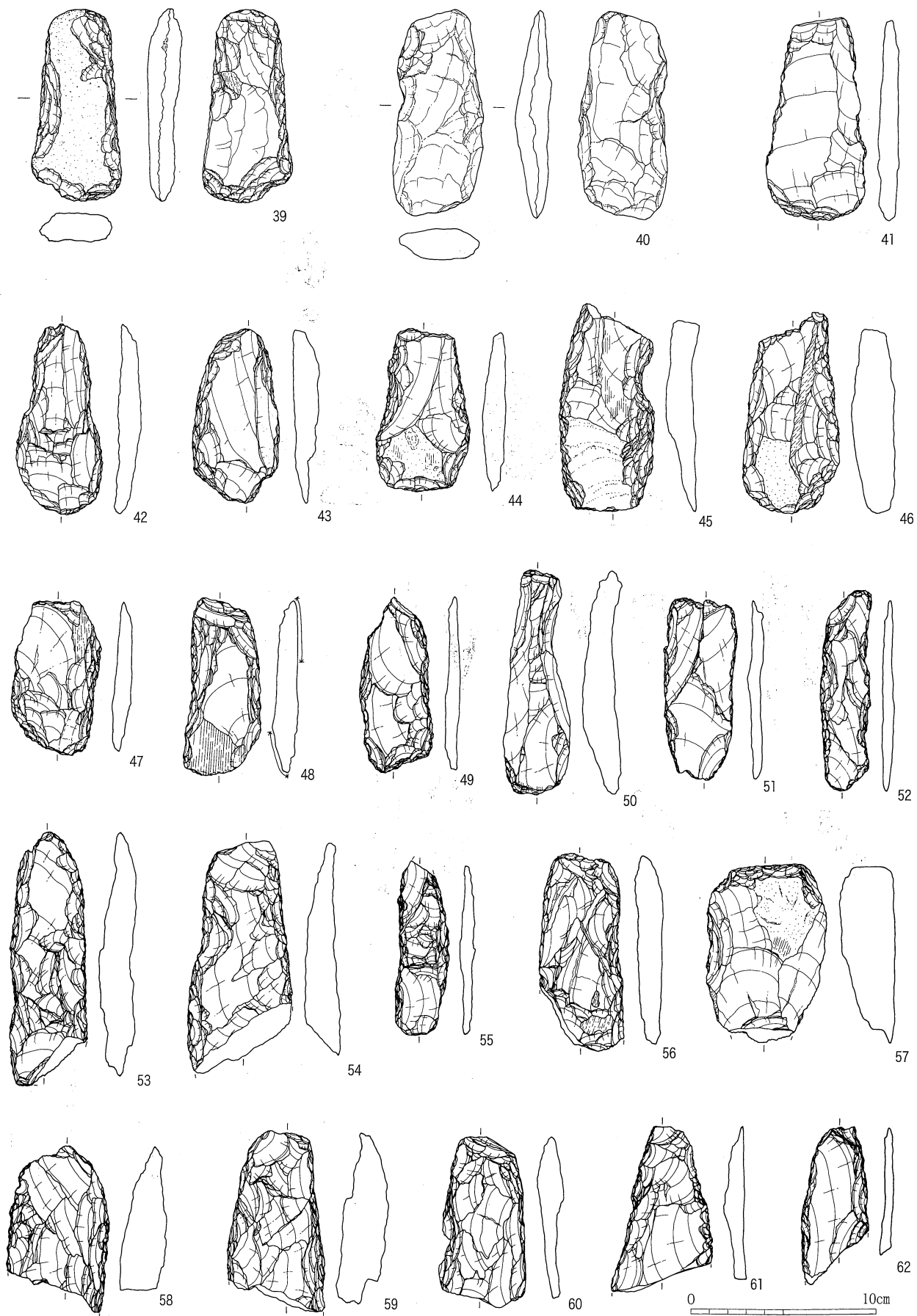
第6图 第1号竖穴住居址出土土器实测图(1:4)



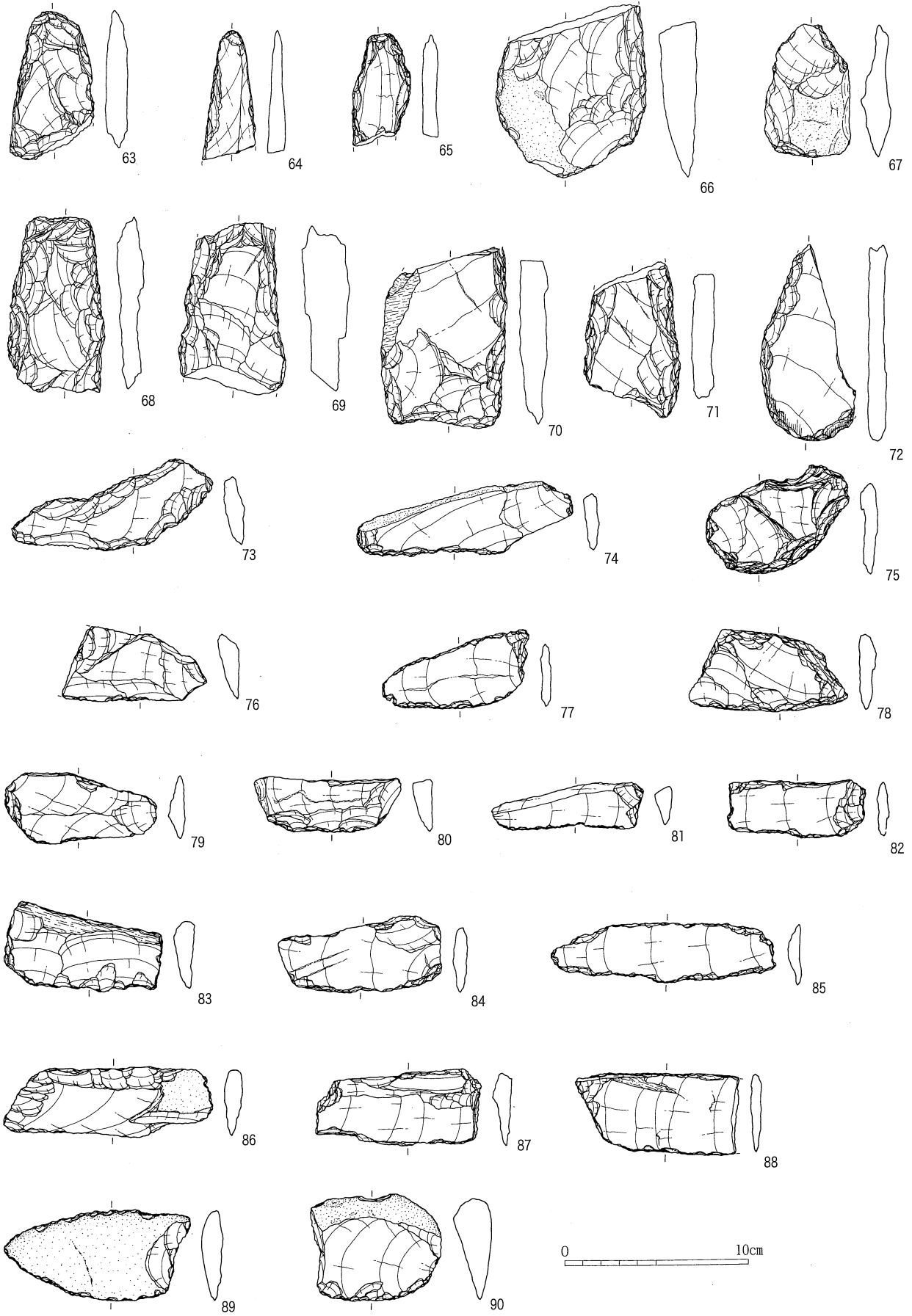
第7图 第1号竖穴住居址出土土器实测图(1:4)



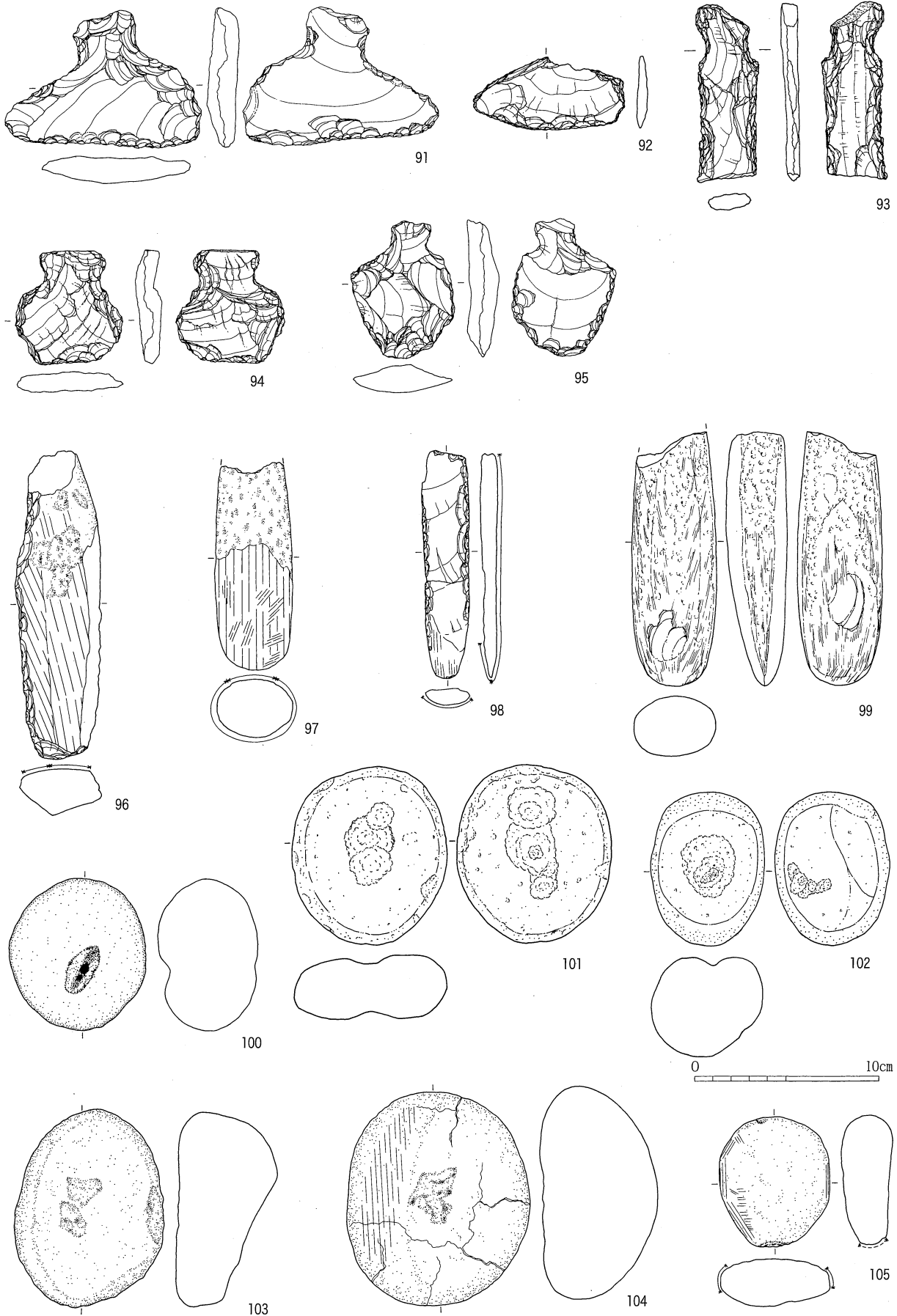
第8图 第1号竖穴住居址出土石器实测图 13~35 (2 : 3) 36~38 (1 : 3)



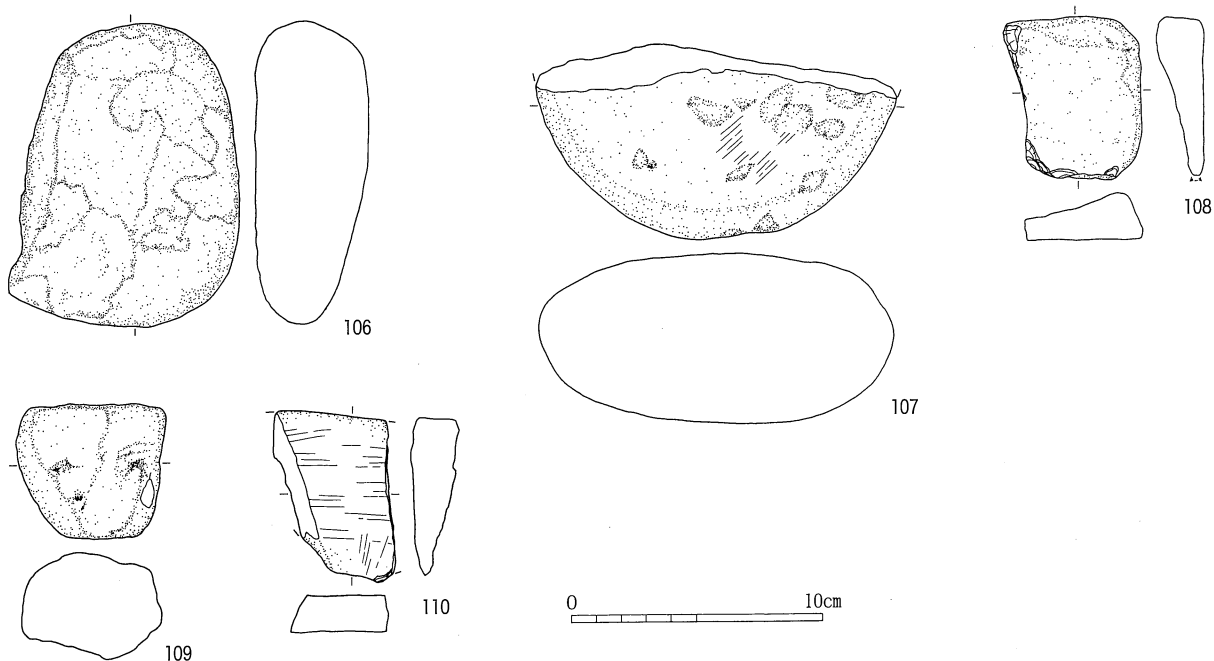
第9图 第1号竖穴住居址出土石器实测图(1:3)



第10图 第1号竖穴住居址出土石器实测图(1:3)



第11图 第1号竖穴住居址出土石器实测图 (1:3)



第12図 第1号竪穴住居址出土石器実測図（1：3）

柱穴は、P1～P4、P6、P7の6基が主柱穴で、P6とP7の間隔はほかの主柱穴間よりも狭くここが入口部であろう。P8とP9は深さに違いはみられたが、その規模と位置関係から対をなすもので、入口部施設に係るものと思われる。主柱穴P4はP11と重複していたが、P11には貼り床が施され主柱穴P4が確実に切っているもので、主柱穴P4が新しくP11が古いことになる。

炉址は、方形石囲炉と古い地床炉がある。石囲炉は4個の平板状石を方形に埋めたもので、炉内は深くなるが炭化物や焼土の出土はなく底面は焼土化していない。石囲炉の東から北に、石囲炉の構築で掘り込まれた焼土の外縁部が残存していた。この重複は石囲炉が新しく焼土が旧く、焼土はその状態から地床炉と思われるもので、本址の火処は地床炉から石囲炉に替えられた可能性が高いようである。

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11				
長軸	79	71	68	76	53	68	65	34	33	107	45				
短軸	57	54	57	66	41	50	54	30	24	19	(32)				
深さ	98	90	86	85	58	75	74	58	39	54	43				

遺物は多く土器と石器がある。

土器は、第6・7図の12点を図示した。2・3はミニチュア土器で、4は3号住居址のP1出土破片が1点接合している。12は関西方面からの搬入土器である。復原するまでに至らず図示することはできないが、土器一覧表に示したように同個体と思われる破片は多く7個体を数えるが、個体により破片数は違うが総数で231点ある。ほかに破片1,507点、把手1点、有孔鏝付土器の破片7点がある。

石器は、剥片類を含めると1,065点あり、第8～12図の98点を図示した。器種別にみると13～23・25は石鏃、24・26は不定形石器、27～35は石錐、36～72・75は打製石斧で、38は第1号住居出土破片と接合している。57は厚く打製石斧とは違う用途が考えられるものである。73・74・76～90は横刃形石器で、80はくさび状のものである。91～95は石匙で、92はつまみ部を欠損している。96・97・99は乳棒状石斧

で、96は破損後に再加工を施し打製石斧として使用しているようである。98は局部磨石斧で、折れた基部が接合している。100～107は凹石・磨石類で、104は火熱でひび割れている。108～110は敲石で、108・110はくさび状のものである。図示しなかった原石・剥片類は944点を数え、内黒曜石の剥片は668点と多く、遺物の出土状態でも触れたように人為的な廃棄の可能性を思わせるものである。

第3号竪穴住居址（第13～15図、写真10～12・94～96・138）

第1号竪穴住居址北西のE-4グリッドで検出した。ローム層にローム粒と炭化物をわずかに含む黒褐色土の落ち込みが明瞭に認められた。

埋土は、直交する土層ベルトで観察し2層に大別した。1層はローム粒と炭化物をわずかに含む均質な黒褐色土、2層はローム粒と炭化物を含む褐色土で、ローム粒の包含量で分けたレンズ状堆積であり自然埋没と考えたい。

出土した遺物は少なく、ミニチュア土器が壁際から出土したほかに特記することはない。

平面形は、長軸550cm、短軸500cmを計り、北壁に直線部分もみられるがこの時期の基本形態である円形としておきたい。

壁は、ロームで傾斜地に構築されているため高さに違いがみられ、東壁は30cm、西壁は39cm、南壁は33cm、北壁は32cmを計り、その立ち上がりは緩やかであり良くない。

周溝は、検出できなかった。

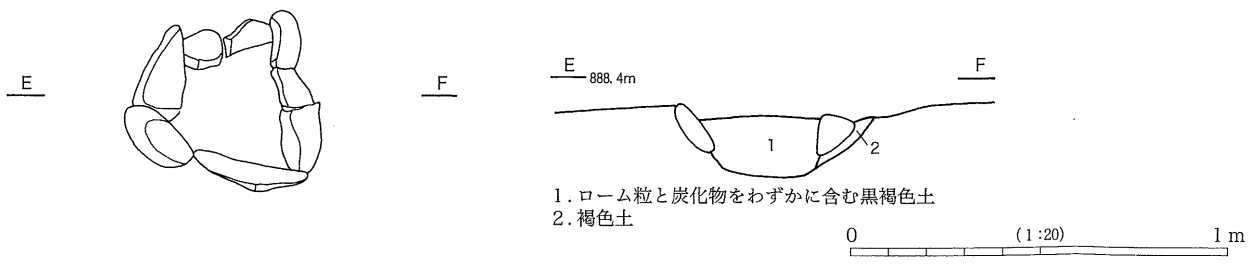
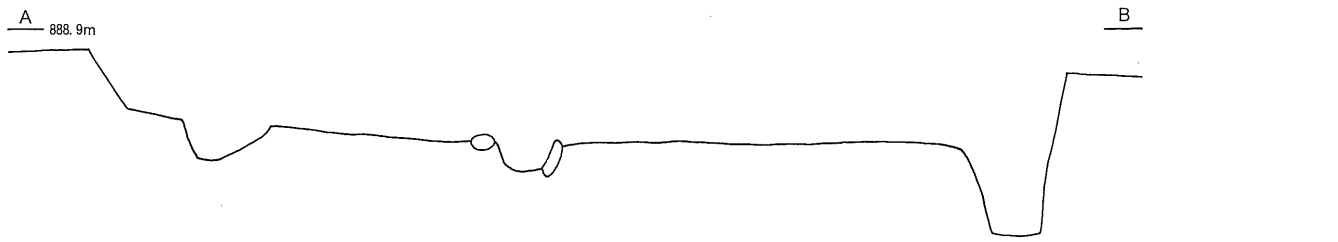
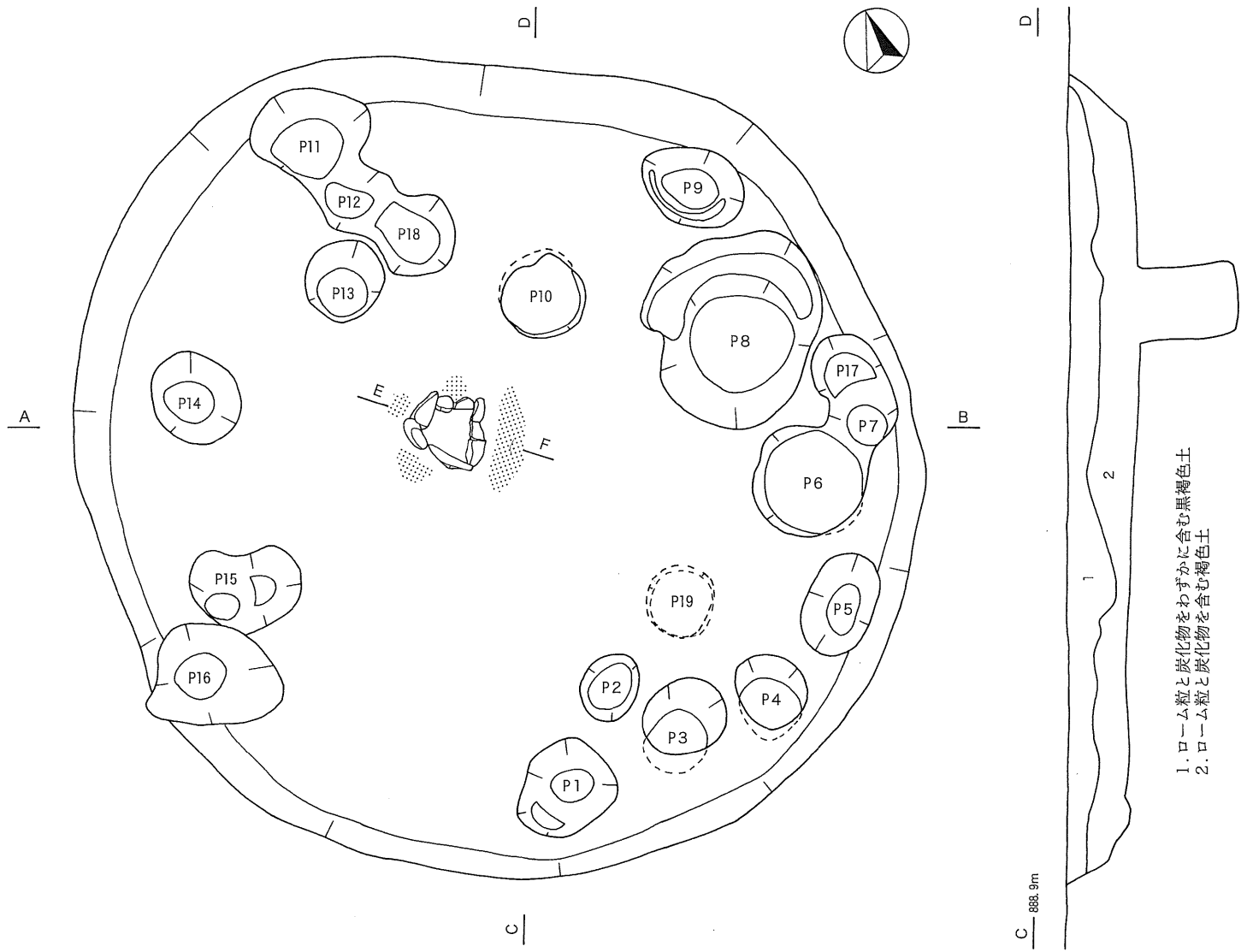
床面は、ロームで硬く壁際がやや高くなる以外はほぼ平らである。

柱穴は、数多く検出されたが埋土等から時間差を示すことはできない。しかし、全ての柱が同時に存在していたものではなく、同心円上建て直しが行われているようである。位置関係を手がかりに分けると、新しいと思われるA群は壁に接するP1、P16、P11、P9、P17、P7、P6、P5、P4、P3、P8の11基であり、P3とP4は一部袋状の貯蔵穴であり、P8は規模から貯蔵穴と考えたがほかの住居址にはみられないもので明確なことはわからない。古いB群はやや内に入るP2、P15、P14、P13、P18、P10、P19の7基である。P19に貼り床が施されていたことからB群を旧く考えた。P12の帰属は不明であるがB群に付随するものと考えておきたい。

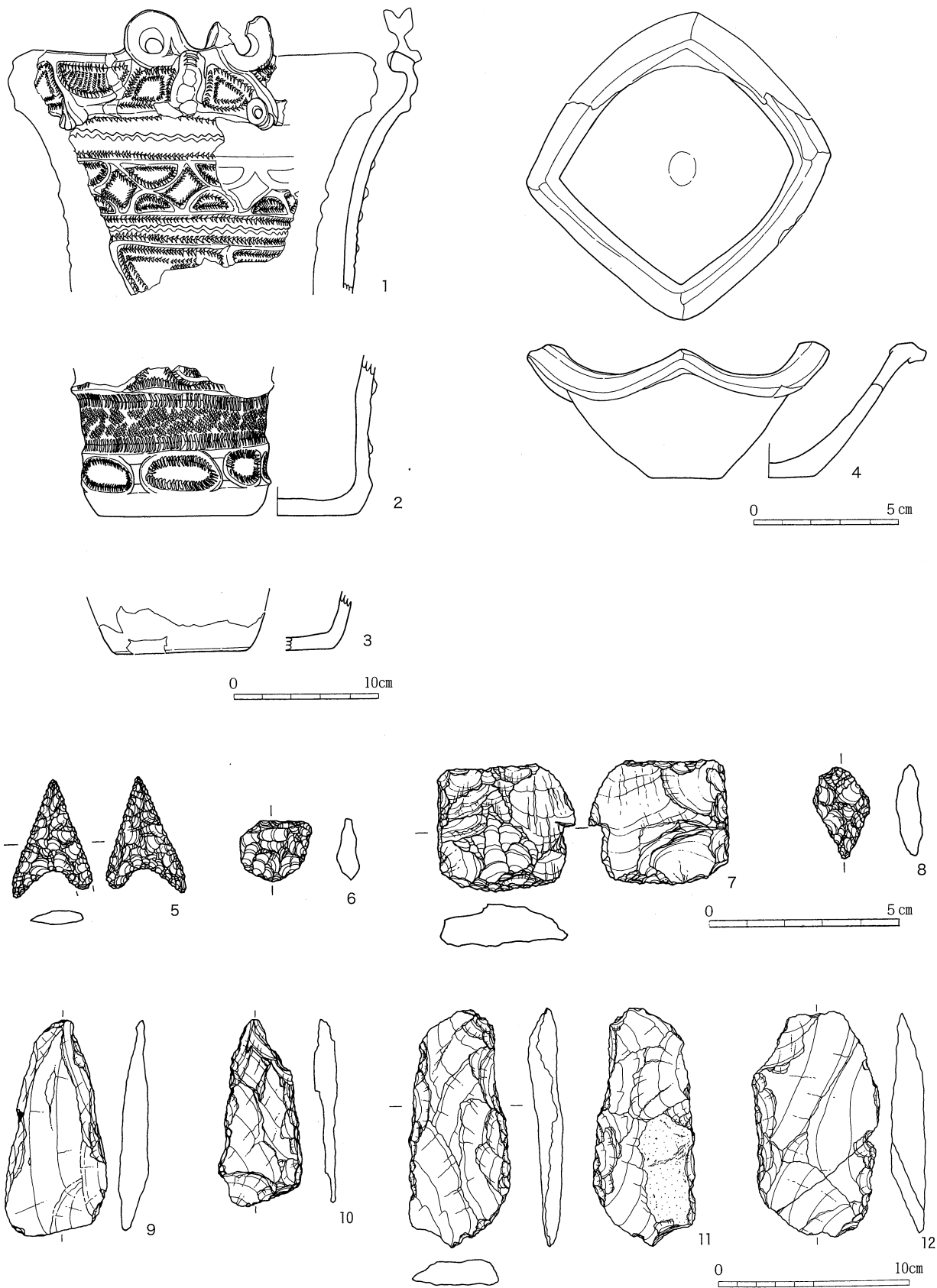
炉址は、方形石囲炉と古い地床炉がある。石囲炉は変則的な五角形ともみえるが、6個の平板状石を方形に埋めたものと考えたい。炉石の中には火熱で割れたと思われるものもみられたが、炉内に炭化物や焼土はなく底面も焼土化していない。石囲炉の東と北に、石囲炉の構築で掘り込まれた焼土の外縁部が残存している。この重複は石囲炉が新しく焼土が旧く、焼土はその状態から地床炉と思われるもので、本址の火処は地床炉から石囲炉に替えられた可能性が高いようである。

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16
長軸	64	44	53	48	66	71	43	125	67	52	76	51	53	60	69	82
短軸	54	35	45	42	41	71	40	91	49	45	57	50	48	52	45	64
深さ	54	43	44	31	60	54	50	52	74	62	57	65	53	75	62	49

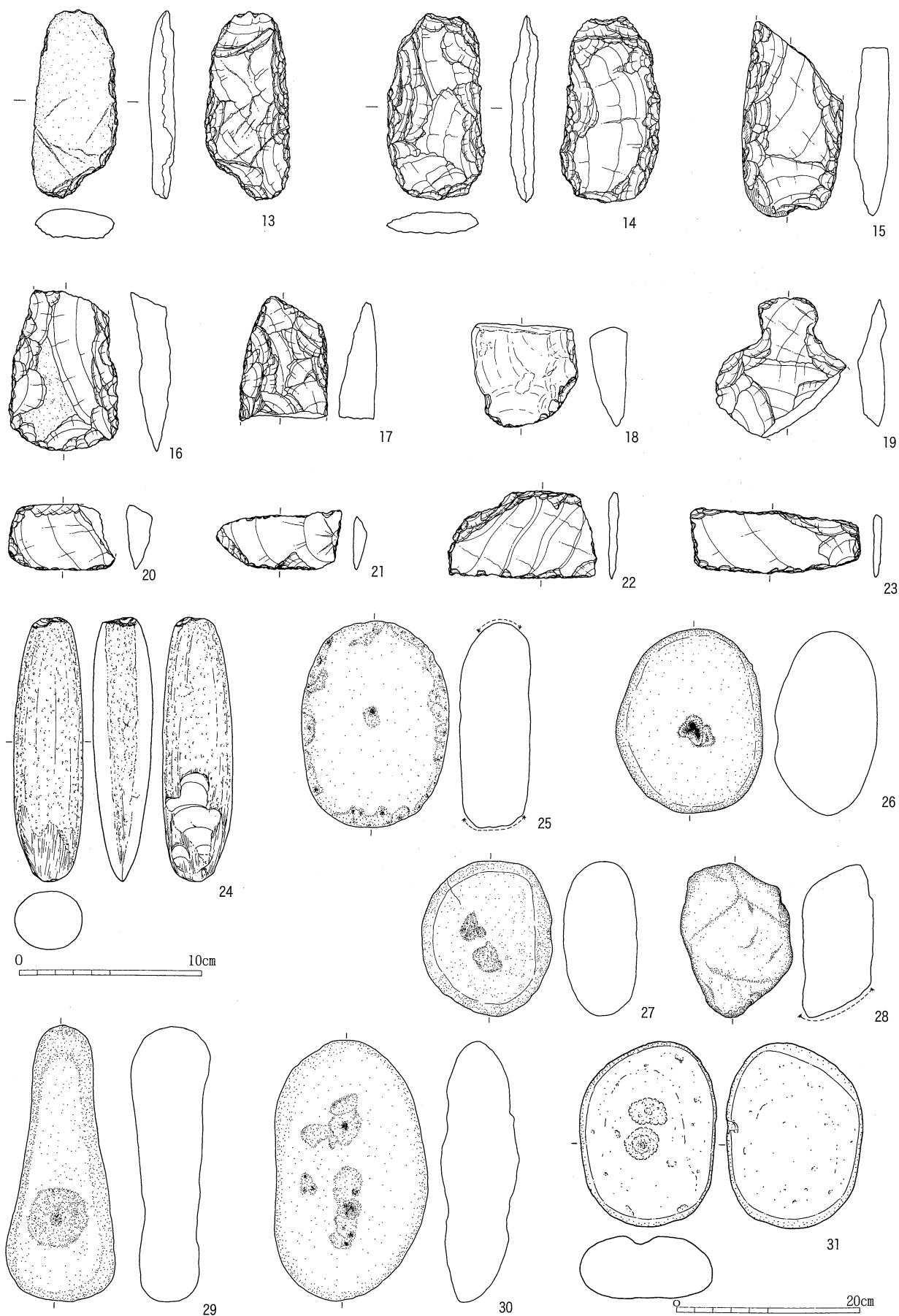
	P17	P18	P19													
長軸	42	45	45													
短軸	42	41	42													
深さ	34	65	36													



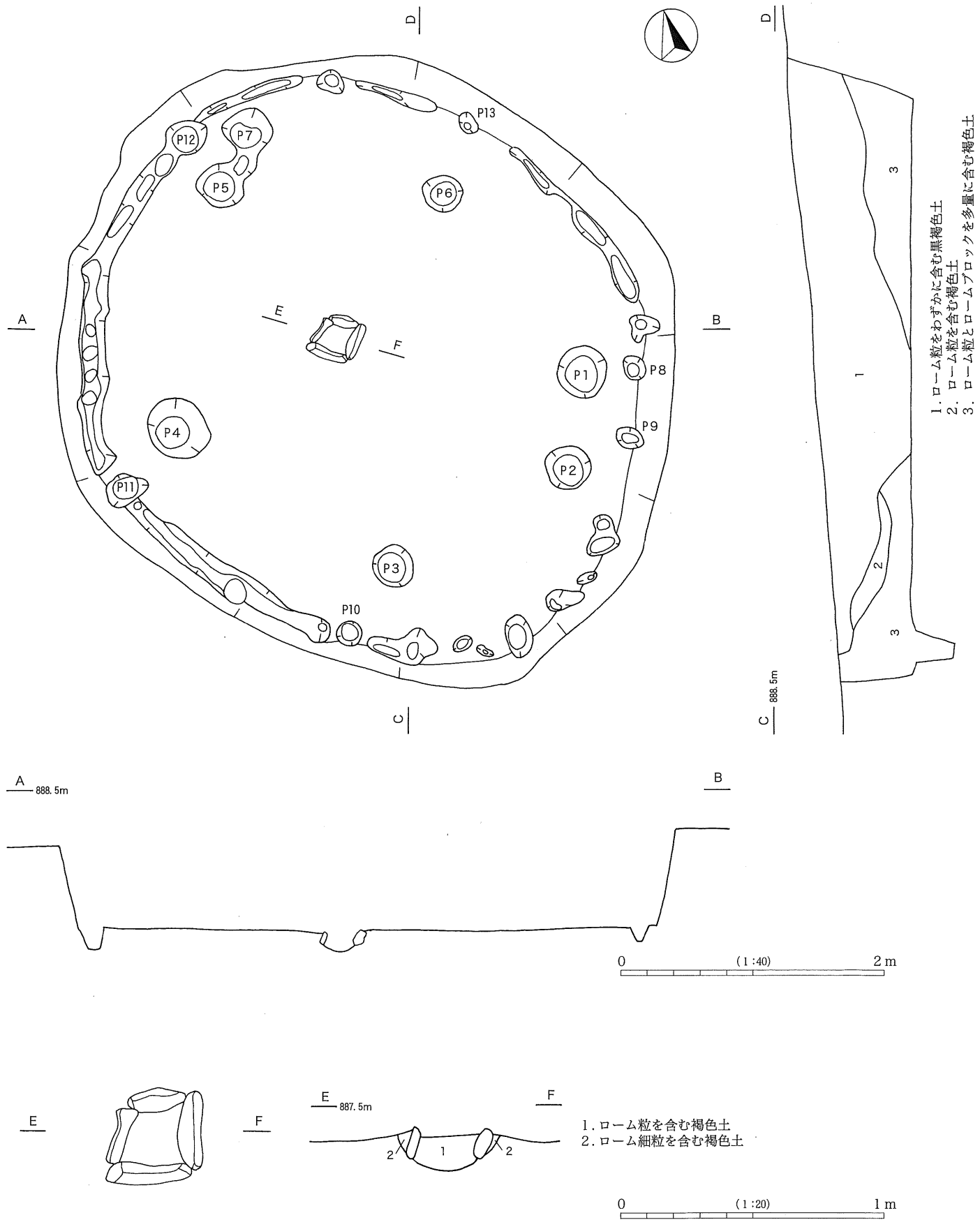
第13図 第3号竖穴住居址実測図



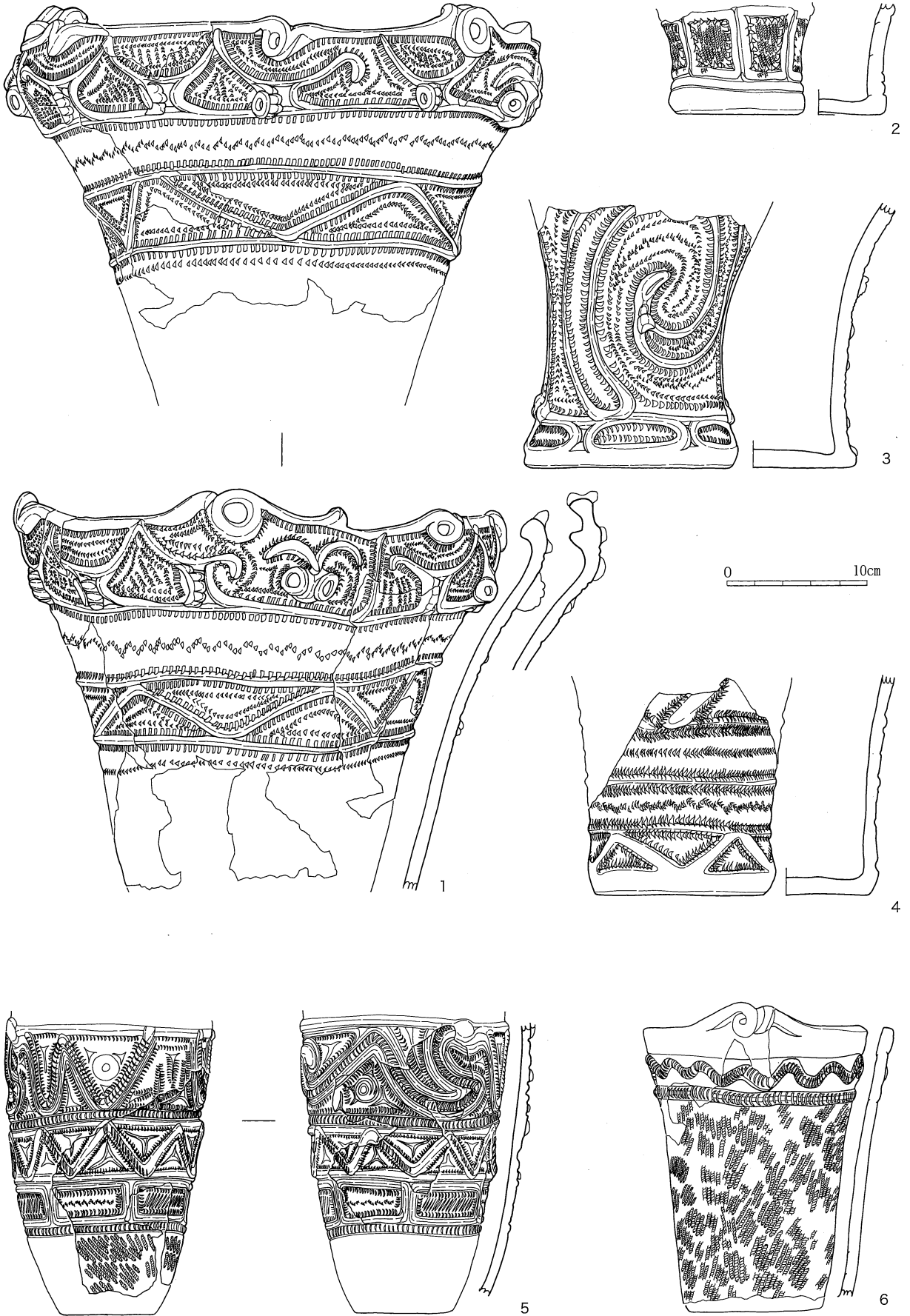
第14图 第3号竖穴住居址出土土器·石器实测图 1~3 (1:4) 4 (2:1) 5~8 (2:3) 9~12 (1:3)



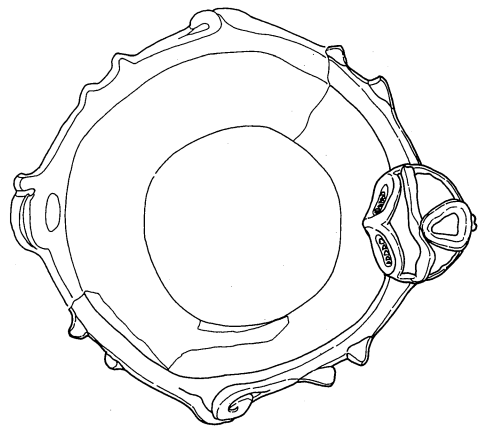
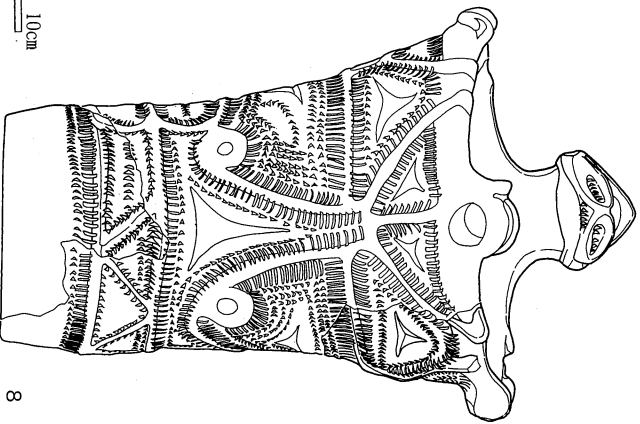
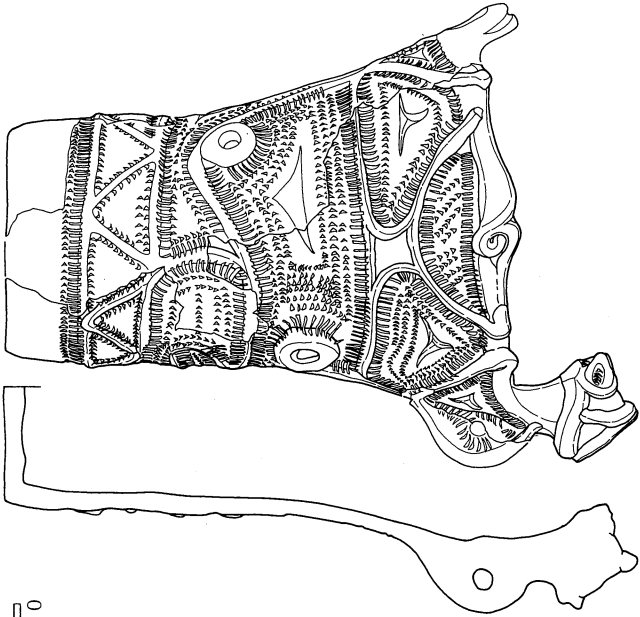
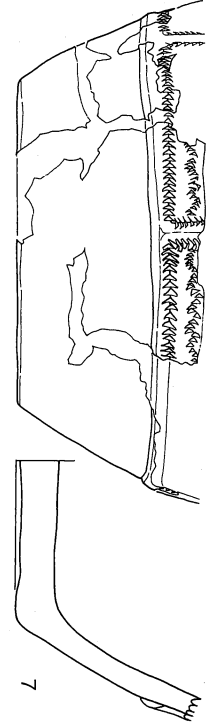
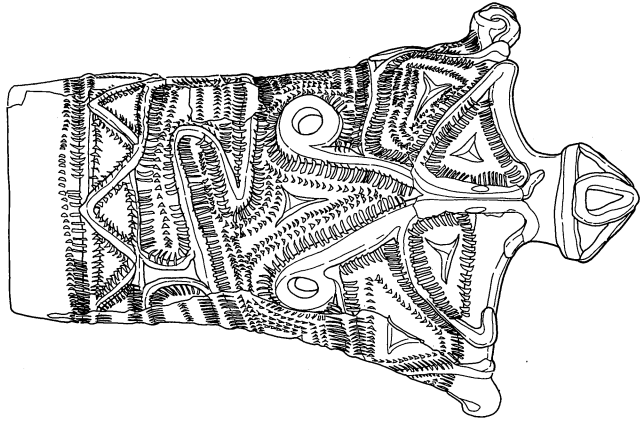
第15图 第3号竖穴住居址出土石器实测图 13~30 (1:3) 31 (1:6)



第16図 第5号竪穴住居址実測図

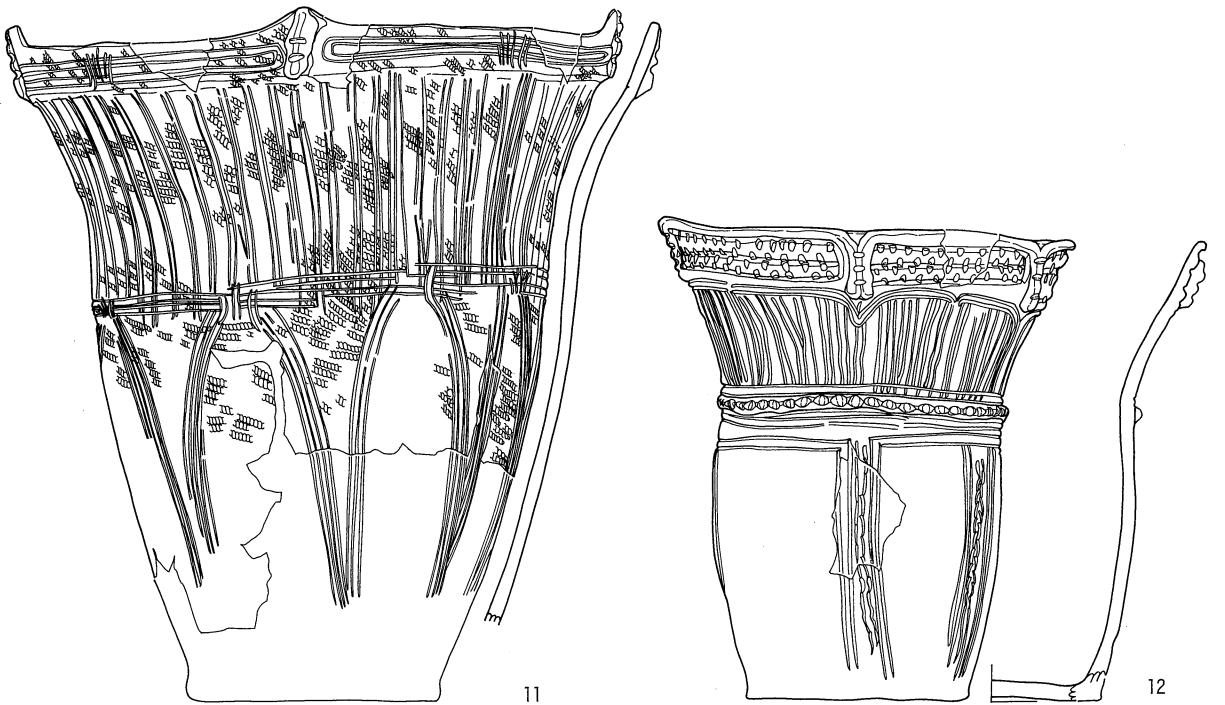
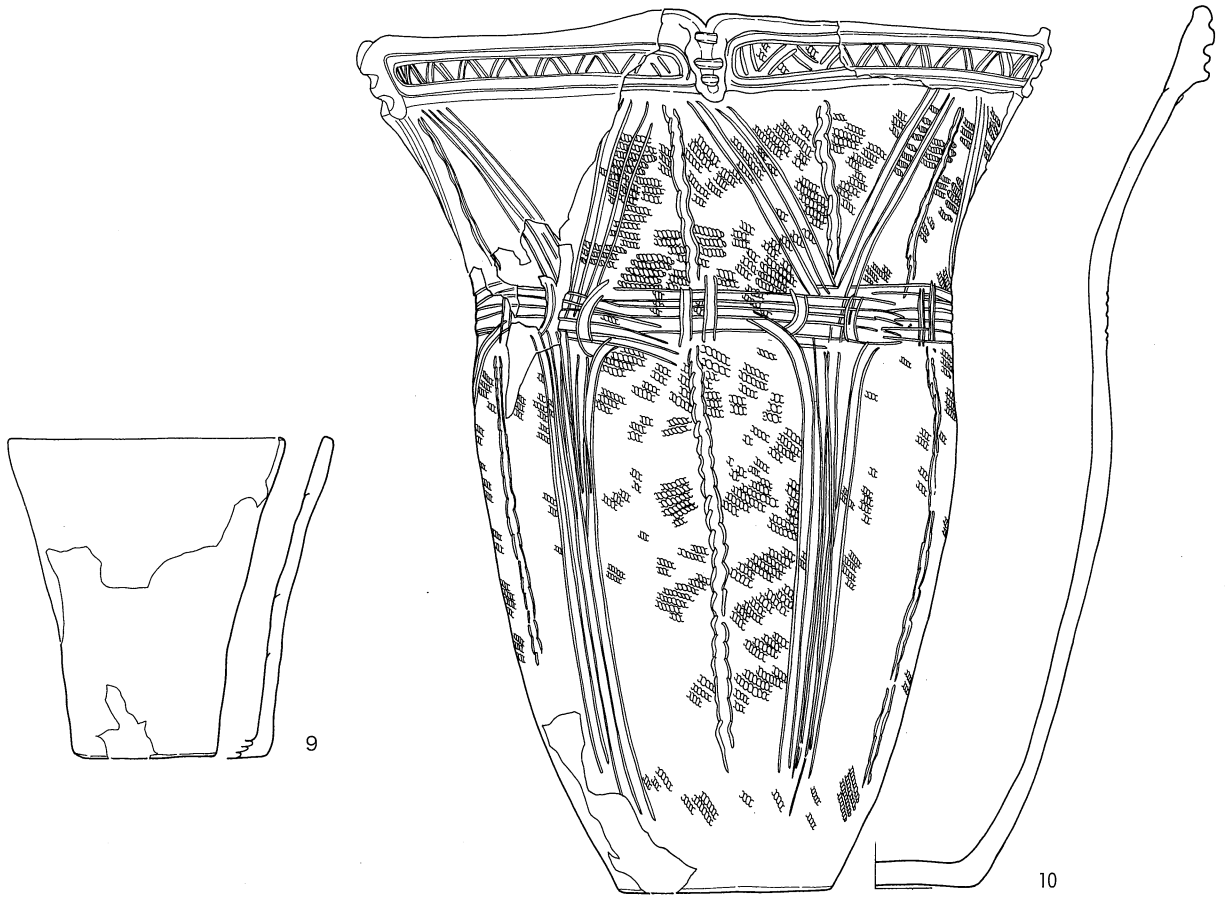


第17图 第5号竖穴住居址出土土器实测图(1:4)



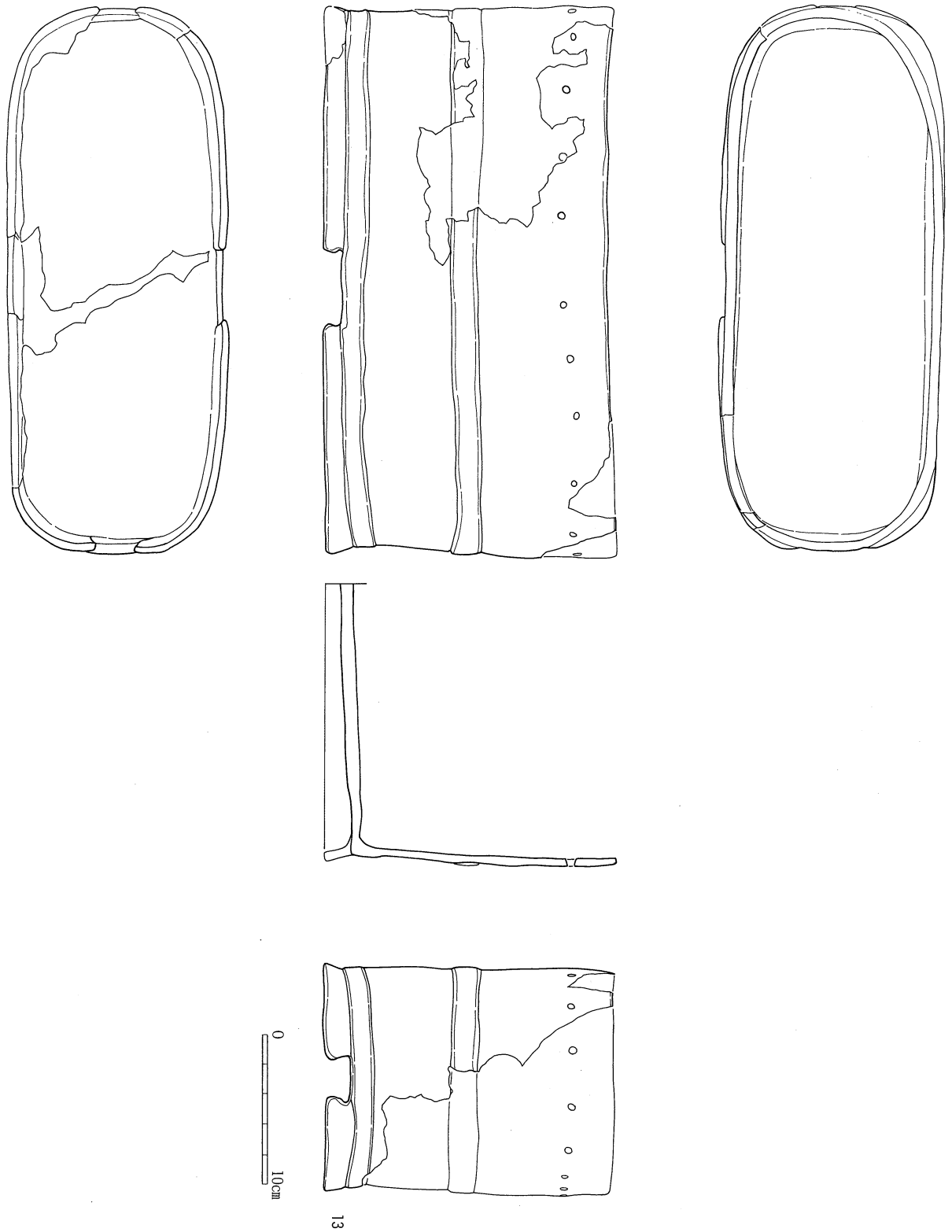
8

第18图 第5号竖穴住居址出土土器实测图(1:4)

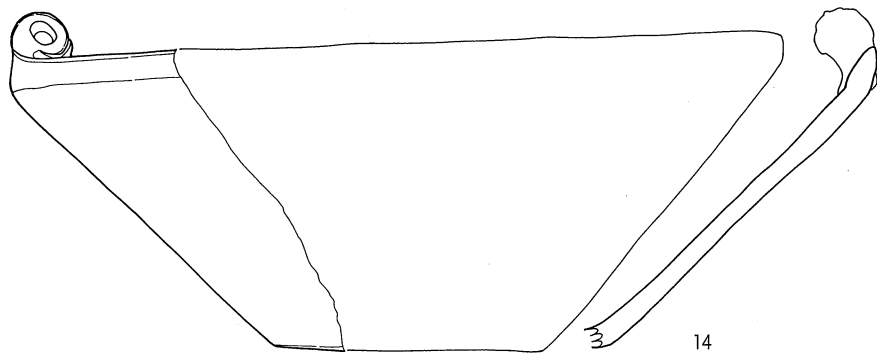


0 10cm

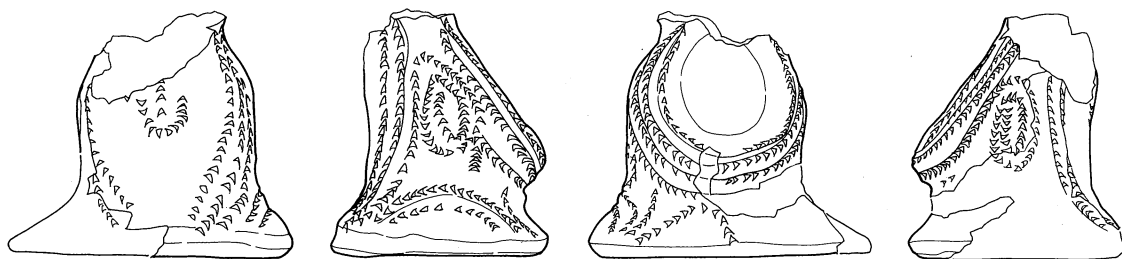
第19图 第5号竖穴住居址出土土器实测图(1:4)



第20图 第5号竖穴住居址出土土器实测图(1:4)

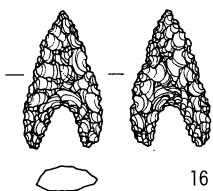
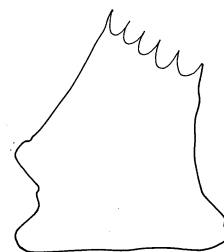


14
0 10cm

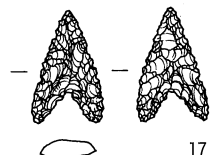


15

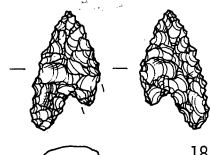
0 5cm



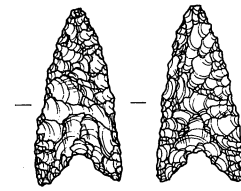
16



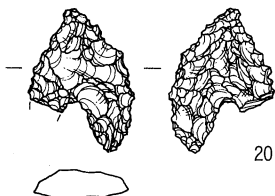
17



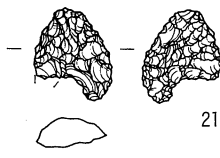
18



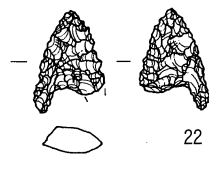
19



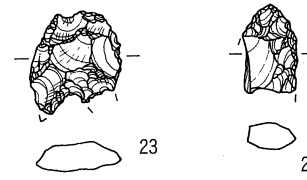
20



21

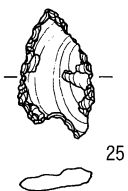


22

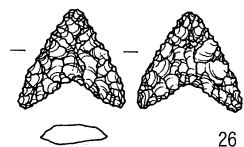


23

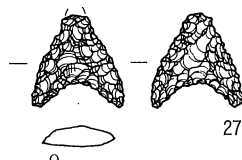
24



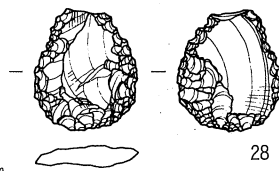
25



26



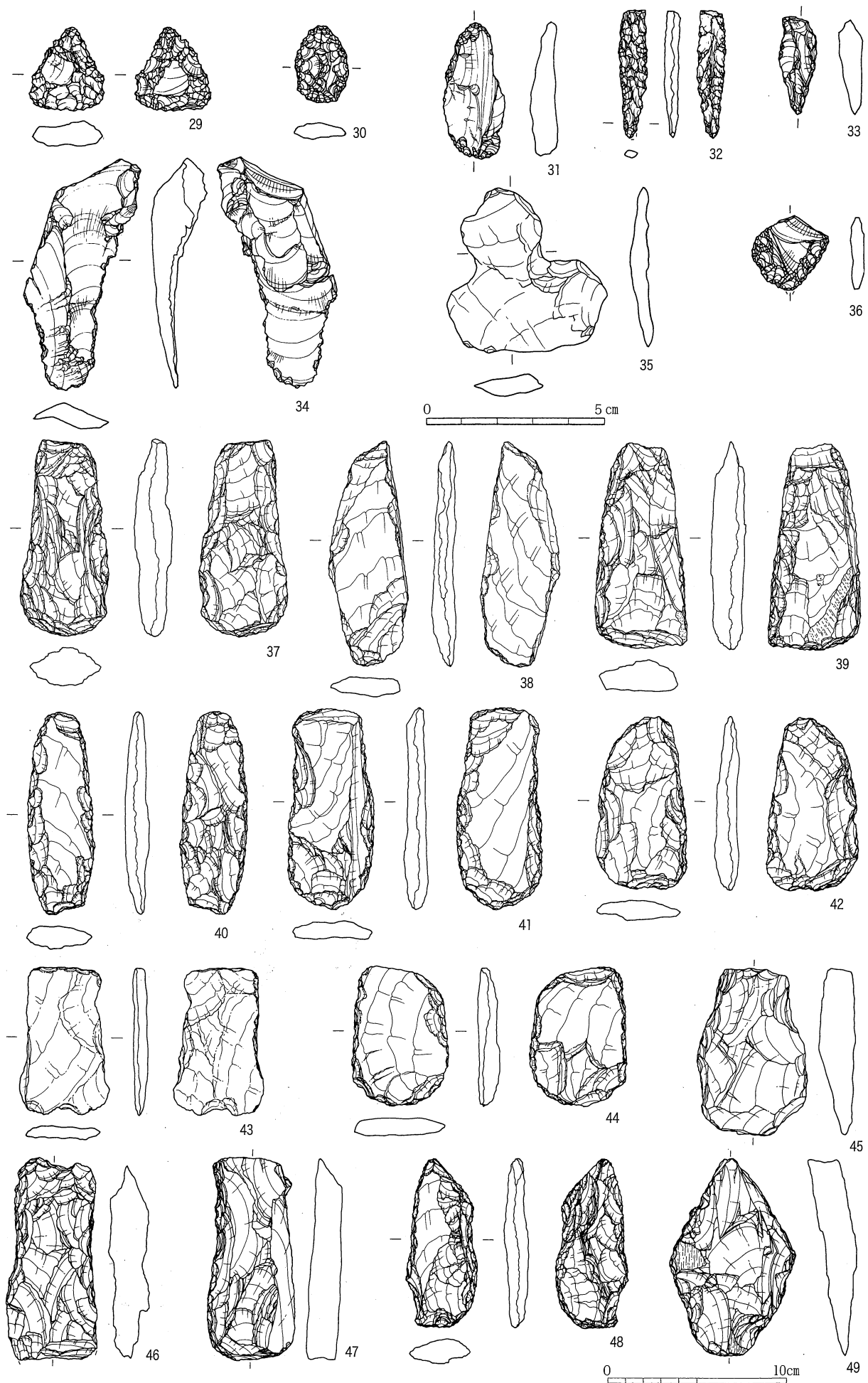
27



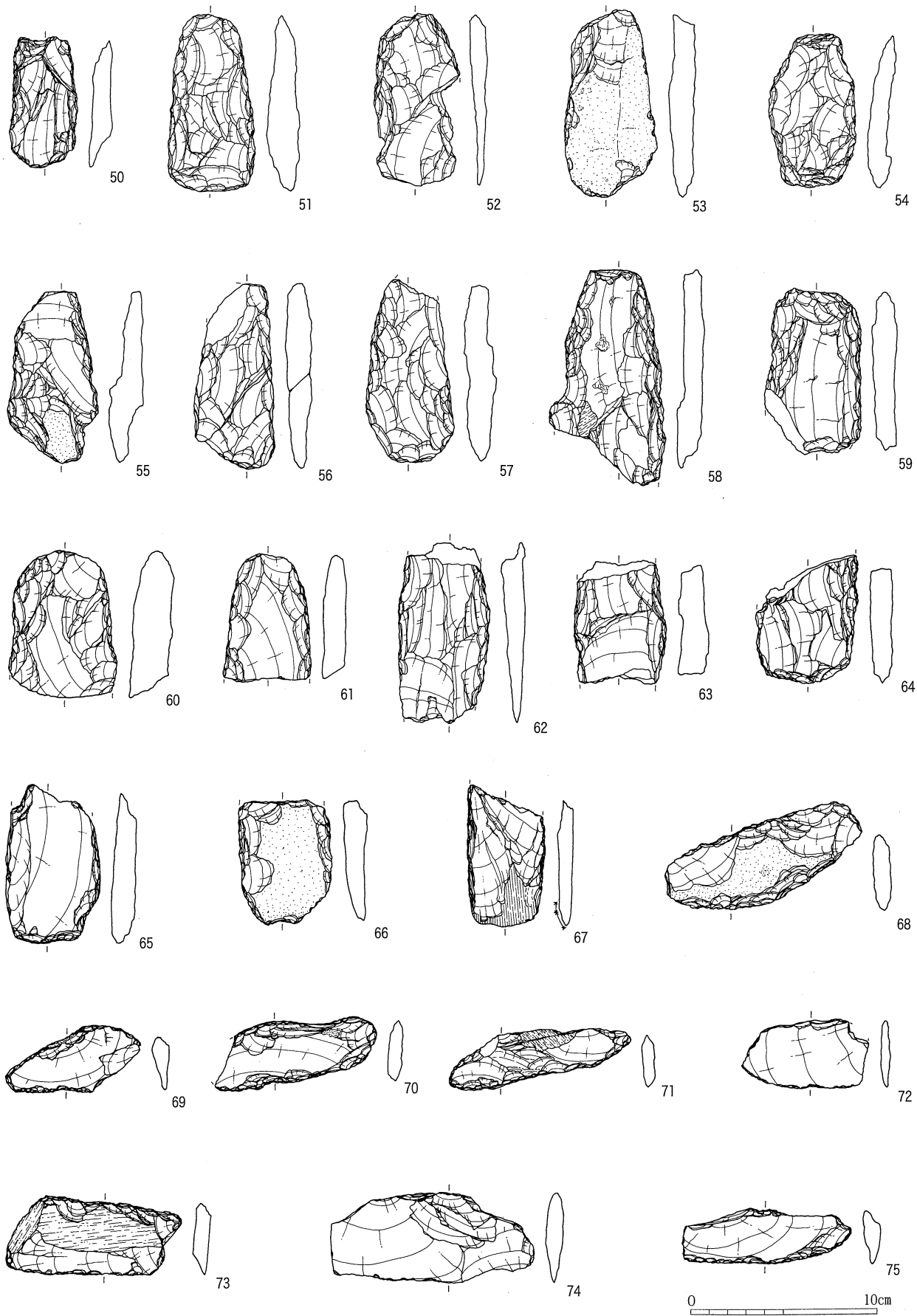
28

0 5cm

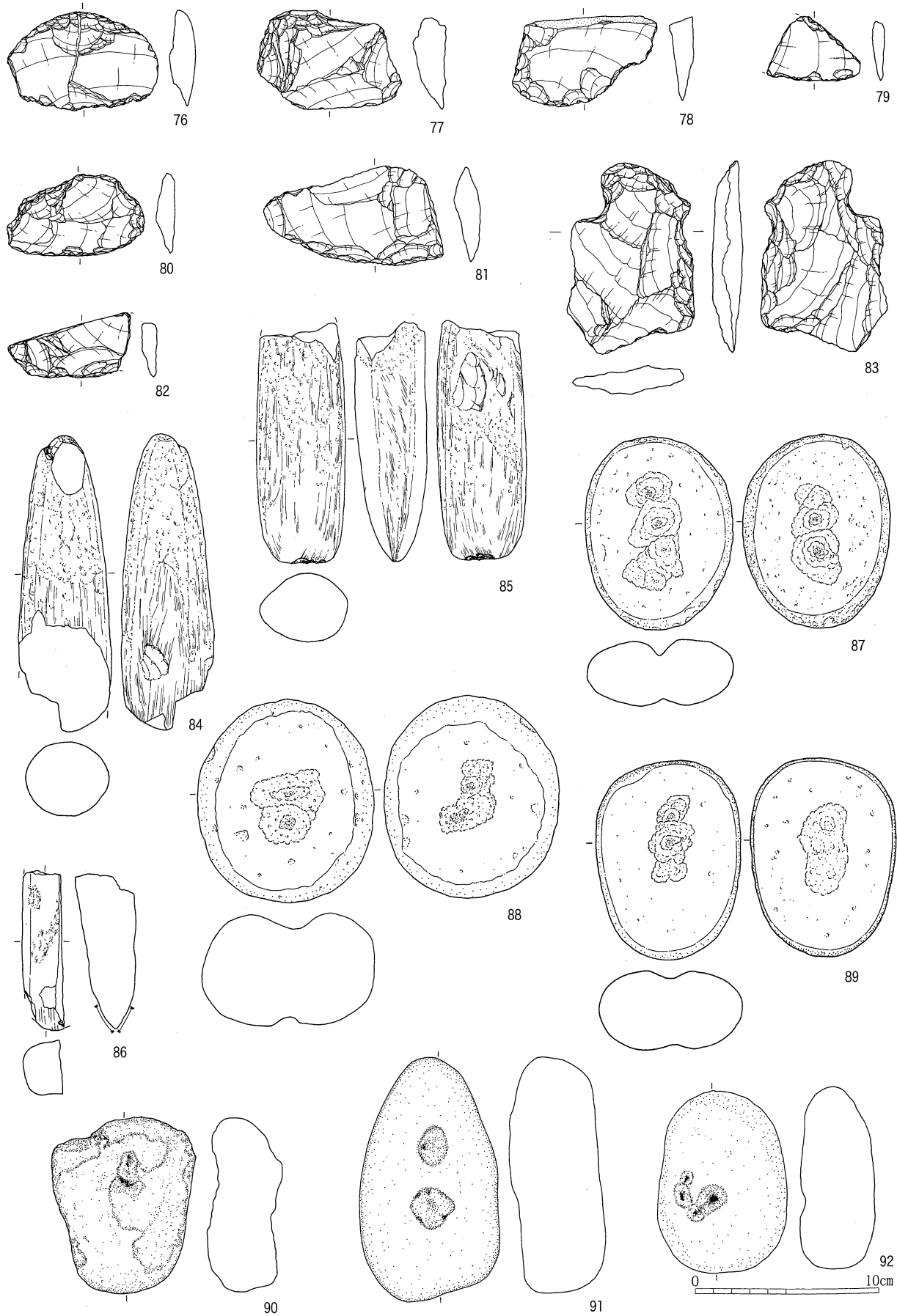
第21图 第5号竖穴住居址出土土器・土製品・石器実測図 14 (1 : 4) 15 (1 : 2) 16~28 (2 : 3)



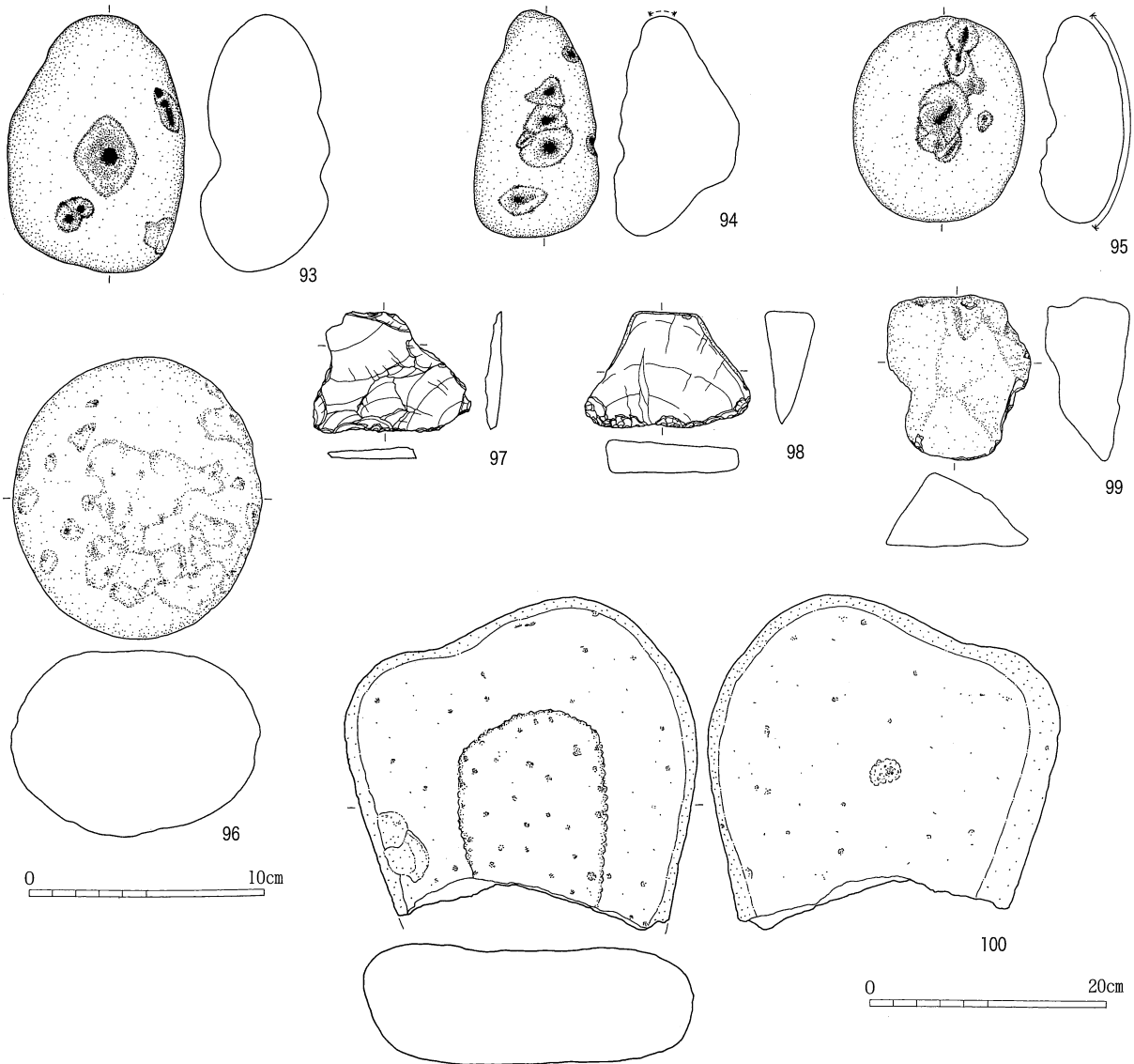
第22图 第5号竖穴住居址出土石器实测图 29~36 (2 : 3) 37~49 (1 : 3)



第23图 第5号竖穴住居址出土石器实测图(1:3)



第24图 第5号竖穴住居址出土石器实测图(1:3)



第25図 第5号竪穴住居址出土石器実測図 93~96 (1:3) 100 (1:6)

遺物は、土器と石器がある。

土器は、第14図の4点を図示した。1は破片から図示したものである。4は浅鉢のミニチュア土器、3は底部だけであるが5号住居址の破片1点が接合し、住居址は中央の小竪穴をはさみ36.4m離れている。復原するまでに至らず図示することはできないが、同個体と思われる破片が2個体あり、個体により破片数は違うが16点で、その他に破片226点がある。

石器は、剥片類を含めると326点あり、第14・15図の27点を図示した。器種別にみると5・6は石鏃、7は不定形石器、8は石錐、9~17は打製石斧、18・20はくさび状石器であるが18は敲石かもしれない。19は石匙、21~23は横刃形石器、24は乳棒状磨製石斧、25~27・29~31は凹石・磨石類、28は敲石、図示しなかった原石・剥片類は294点である。

第5号竪穴住居址 (第16~25図、写真13~15・97~104・185~193)

第3号竪穴住居址西方40mのE-8グリッドで検出したが、ここは小竪穴群の西側に位置する。検出作業当初から数多い遺物が出土し、ローム層にローム粒をわずかに含む黒褐色土の落ち込みを認め、や

や不明瞭であったが住居址と判断し精査を進めた。

埋土は、直交する土層ベルトで観察し3層に大別した。1層はローム粒をわずかに含む黒褐色土、2層はローム粒を含む褐色土、3層はローム粒とロームブロックを多量に含む褐色土である。ロームブロックの中には直径10cm程の大きなものもみられたが、壁面の崩落が観察できない状態であり、ロームブロックがどのような経過で埋土となったか明らかにすることはできないが、ここでは屋根にのせられていた可能性を考えておきたい。遺物の出土状態も大きな問題になるが、三角堆土と逆三角堆土の発達が見られるもので自然埋没と考えたい。

出土した遺物は膨大で、逆三角堆土中に散乱していたものであり廃棄・投棄が考えられる。最上位出土は検出面よりも高いものがあり、下位ほど破片は大きいうえに数も多く、ほぼ完形、低部を欠損するもの、口縁部だけのものなどその状態は様々で、女神把手付深鉢、底部が長楕円形を呈する特殊な台付有孔罎付土器、土偶などが出土している。三角堆土からの出土は少なかった。

平面形は、長軸514cm、短軸470cmを計り、直線的な壁もみられ隅丸胴張方形のようにもみえるが、この時期の基本形態である円形としておきたい。

壁は、ロームで傾斜地に構築されているため高さに違いがみられ、東壁は80cm、西壁は50cm、南壁は52cm、北壁は104cmを計る深いものであるが、その立ち上がりは極めて良好で壁土の崩落は観察できなかった。

周溝は、壁直下に全周している。溝と小ピットの組み合わせであるが、南壁の直下は小ピットだけになる。

床面は、ロームで硬くほぼ平らでしっかりしている。中央付近は2重に床が認められたが、下層に別遺構がないことから貼り床とは異なるものであり、構築時に施した調整床ないしは床面の再構築によるものと考えておきたい。

柱穴は、P1～P6の6基が支柱穴で、P8～P13は壁に密着し壁に係るいわゆる壁柱穴である。支柱穴と壁柱穴の関連は強いようでP1とP8、P2とP9、P3とP10、P4とP11、P5とP12、P6とP13が対をなし機能していたように思われる。P1とP2の間隔は他の支柱穴間よりも狭くここが入口部になるが、前記したように本址の掘り込みは極めて深いもので76cmを計るが、黒色土を取り除いた検出面からの数値であり、当時はもっと深かったことになる。しかし、出入りに必用なスロープ状の施設はみられず、梯子状の用具を使用したことは容易に考えられることであり、P8とP9はそれに係るものかもしれない。

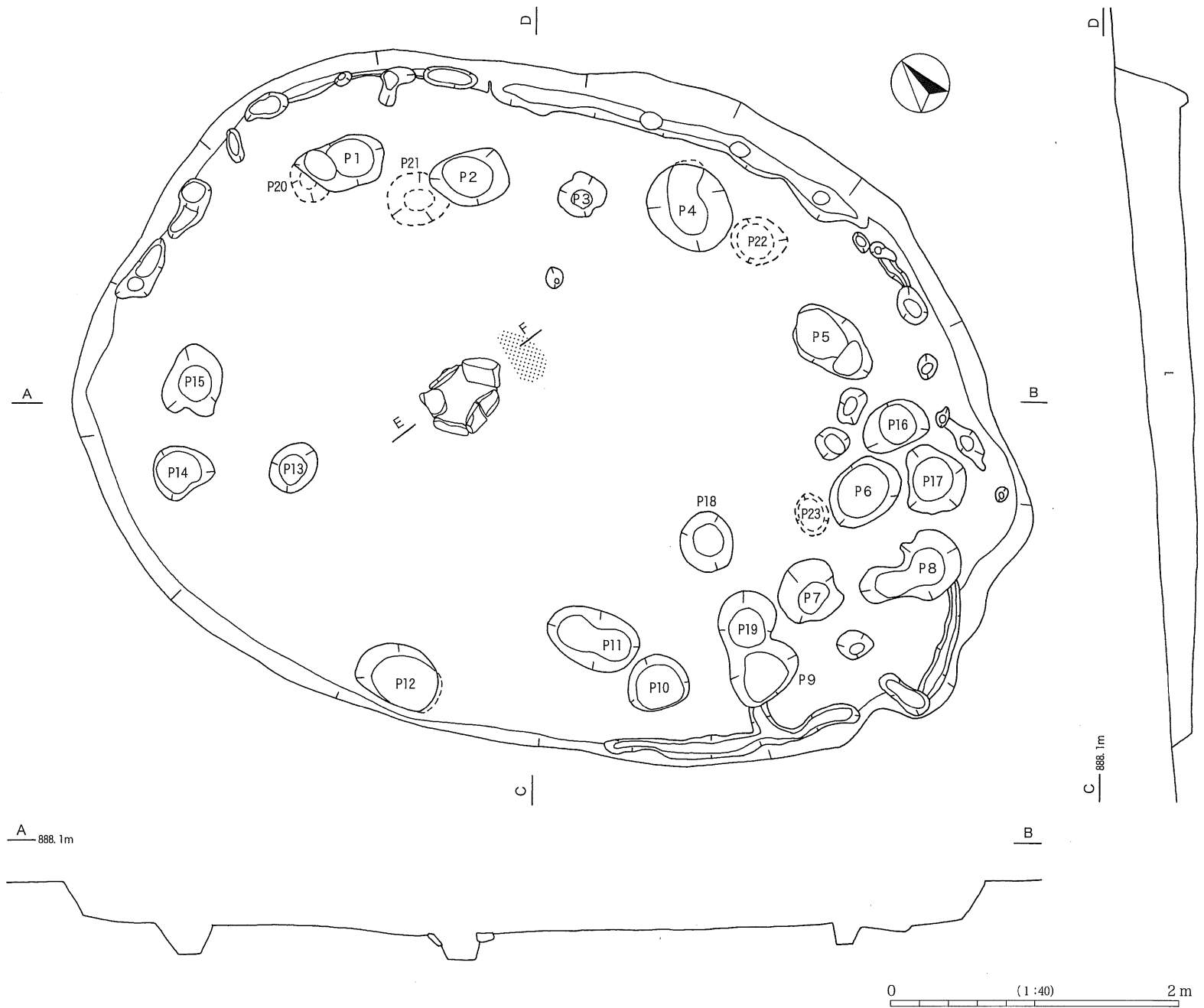
炉址は、方形石囲炉である。4個の平板状石を方形に埋めたもので、炉内は深くなるが炭化物や焼土の出土はなく底面は焼土化していない。周辺でわずかな焼土がみられただけである。

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13			
長軸	41	34	32	50	39	30	41	20	24	20	32	30	17			
短軸	35	32	28	43	34	28	32	16	17	20	23	29	12			
深さ	65	60	55	80	66	45	40	15	29	35	40	17	11			

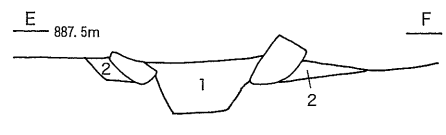
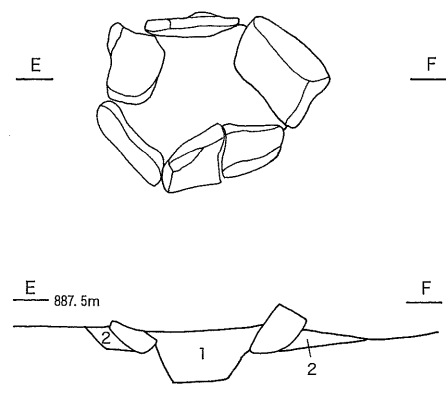
遺物は、多く土器・土製品・石器がある。

土器は、第17～21図の14点を図示した。8は女神把手が付けられた深鉢、13は曲げ物を思わせる器形の有孔罎付土器で低い台が付く、14は浅鉢である。復原するまでに至らず図示することはできないが、土器一覧表に示したように同個体と思われる破片が多く14個体を数え、個体によりその破片数は違いますが総数は213点で、その他に破片1,418点、把手1点がある。

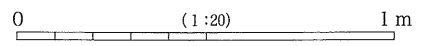
土製品は、第21図15の土偶の破損品で、下半身部である。



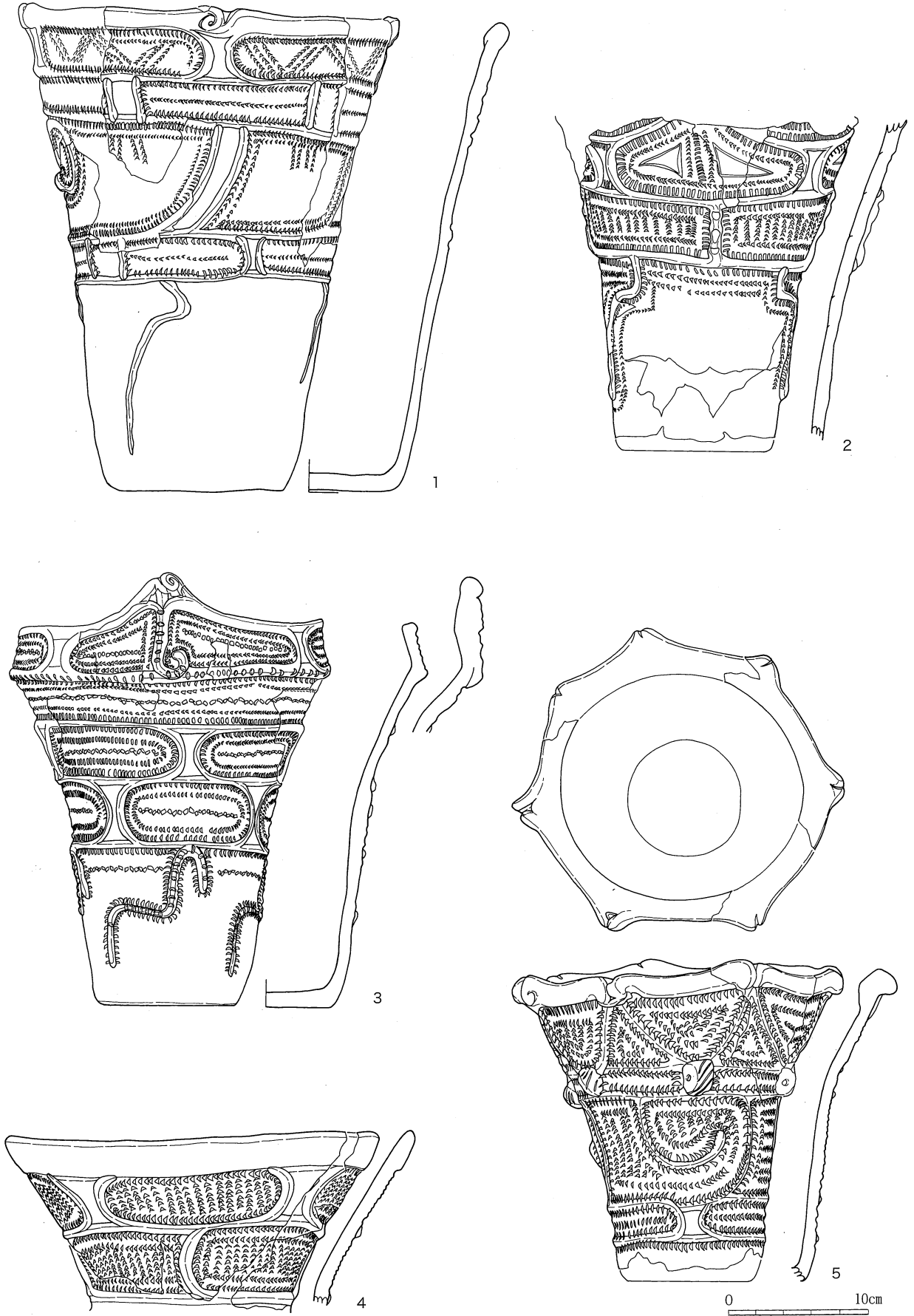
1. ローム粒をわずかに含む褐色土



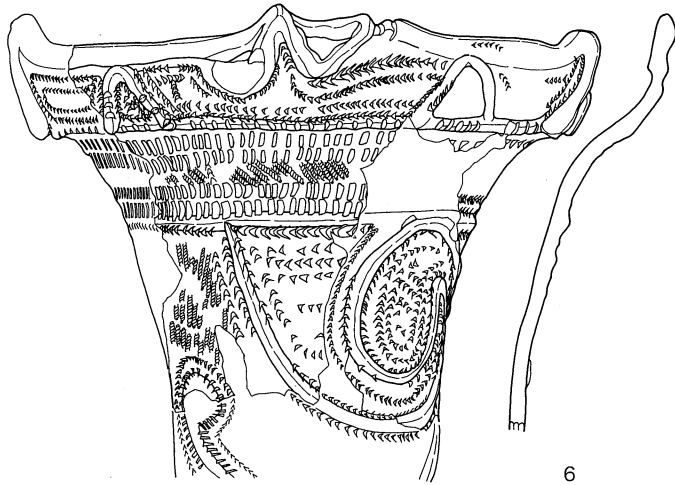
- 1. ロームブロック・焼土粒を含む黒褐色土
- 2. 焼土をわずかに含む褐色土



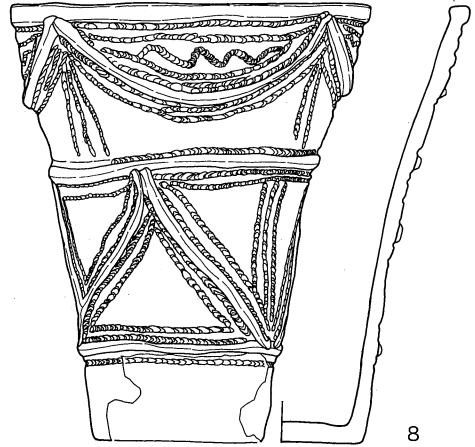
第26図 第6号竪穴住居址実測図



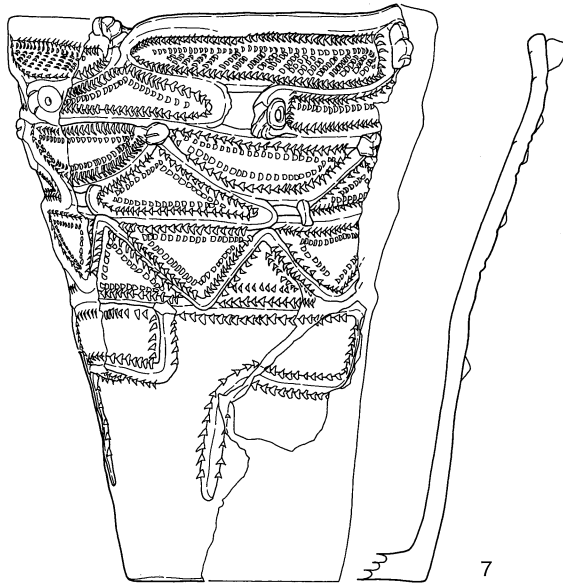
第27图 第6号竖穴住居址出土土器实测图(1:4)



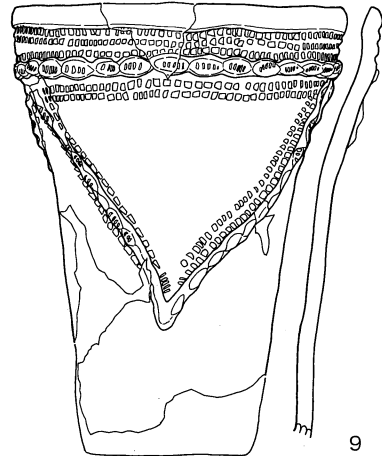
6



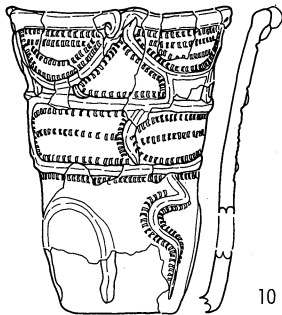
8



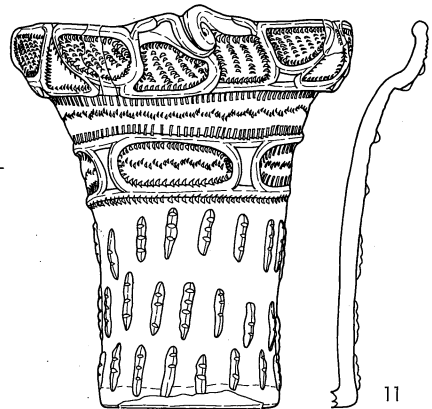
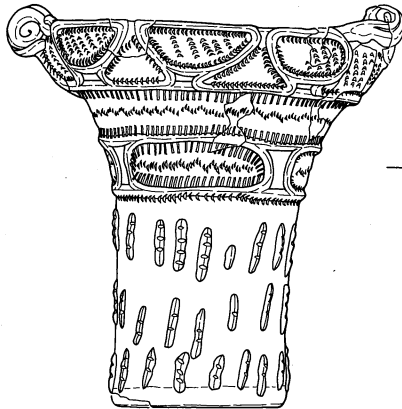
7



9



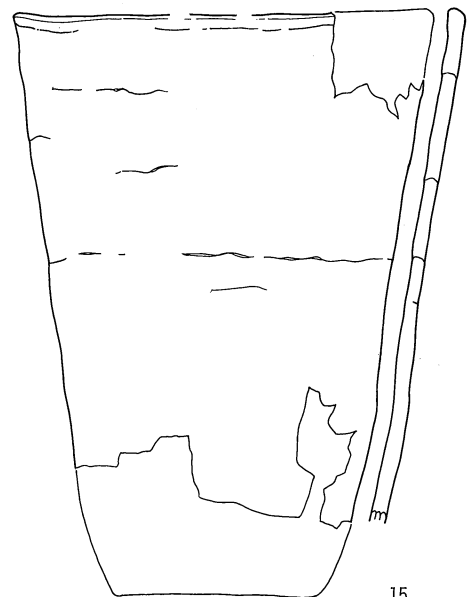
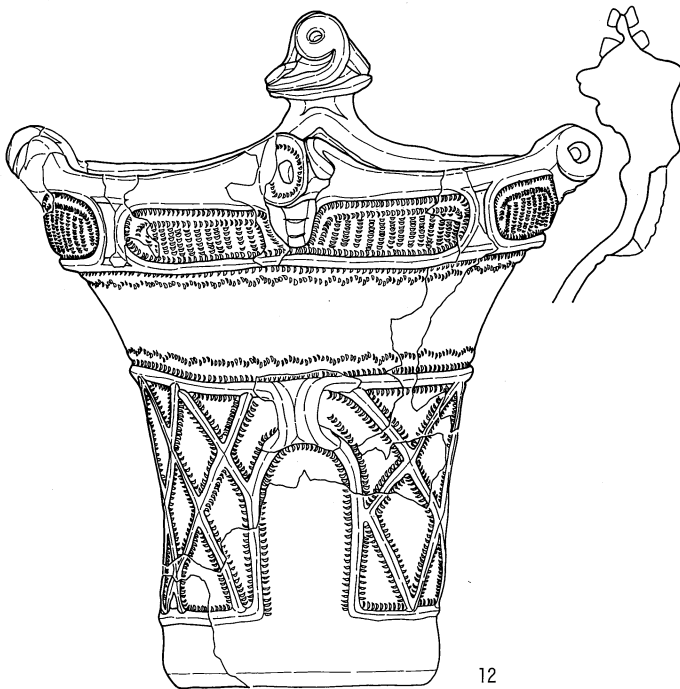
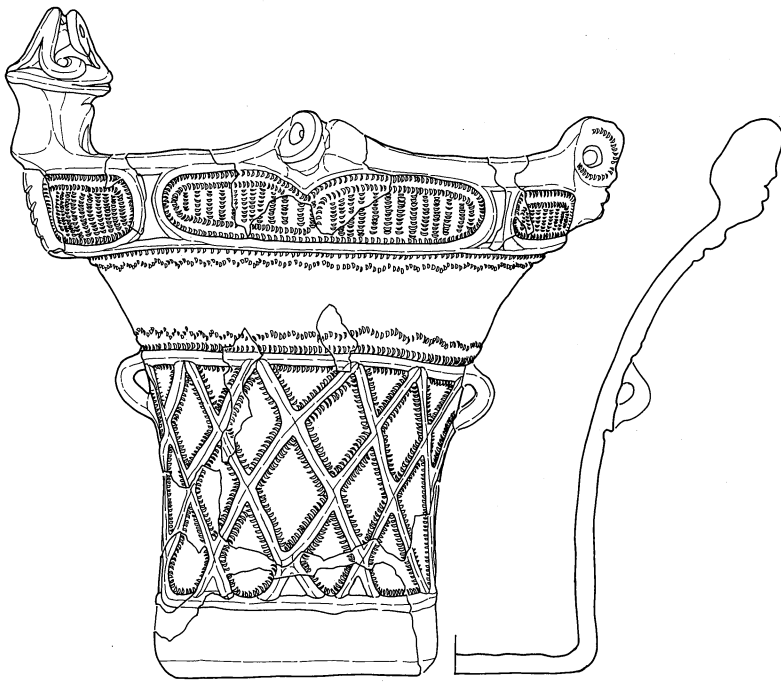
10



11

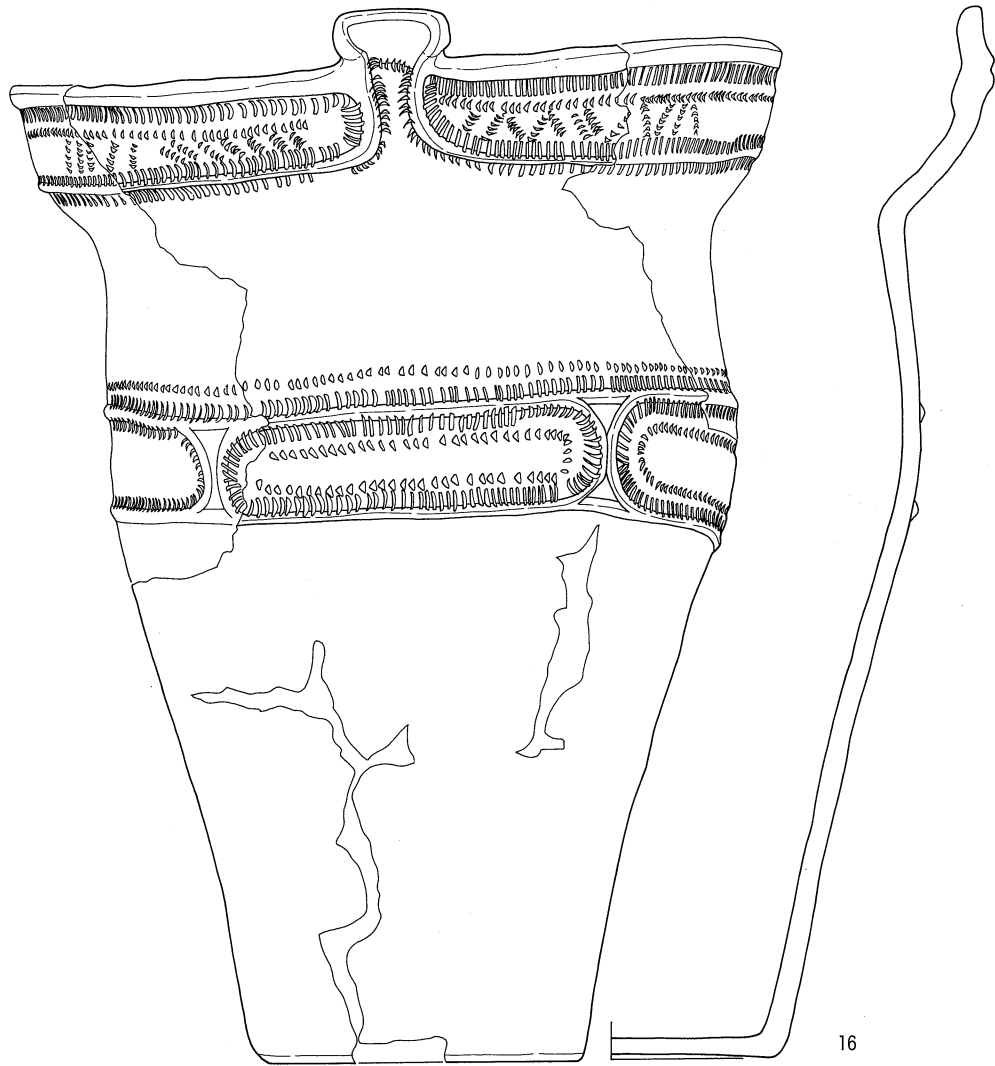
0 10cm

第28图 第6号竖穴住居址出土土器实测图(1:4)

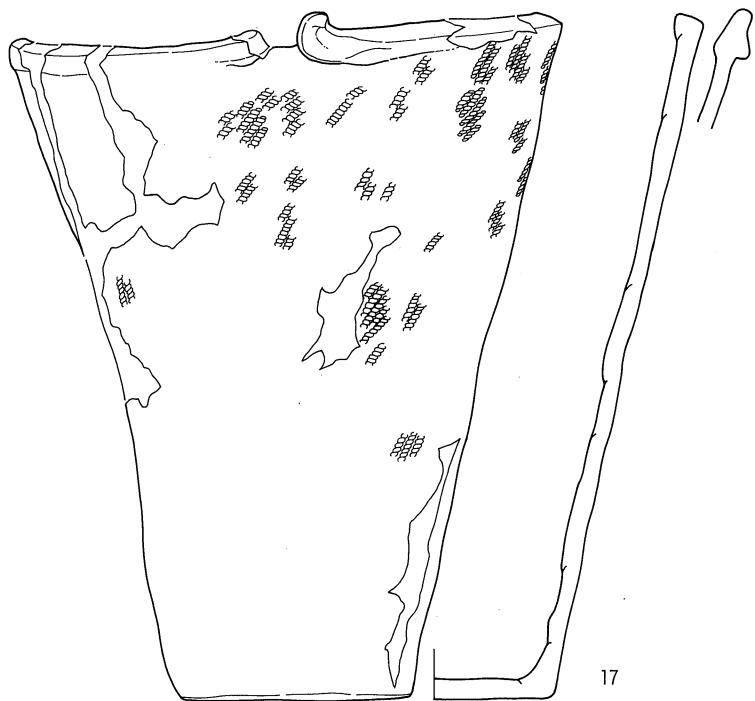


0 10cm

第29图 第6号竖穴住居址出土土器实测图(1:4)



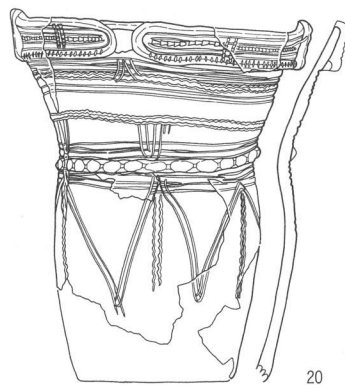
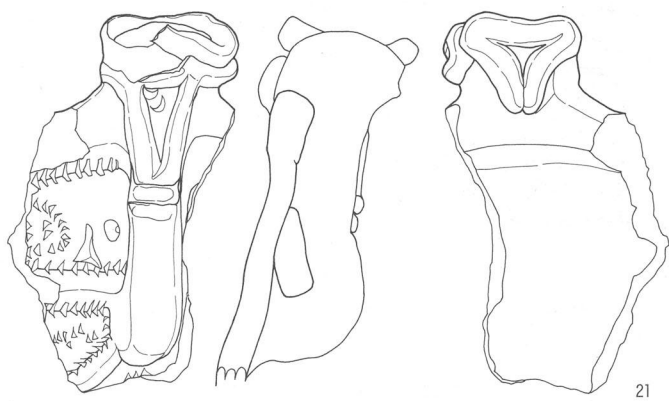
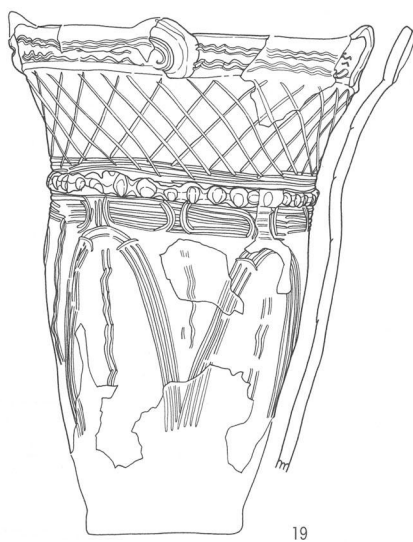
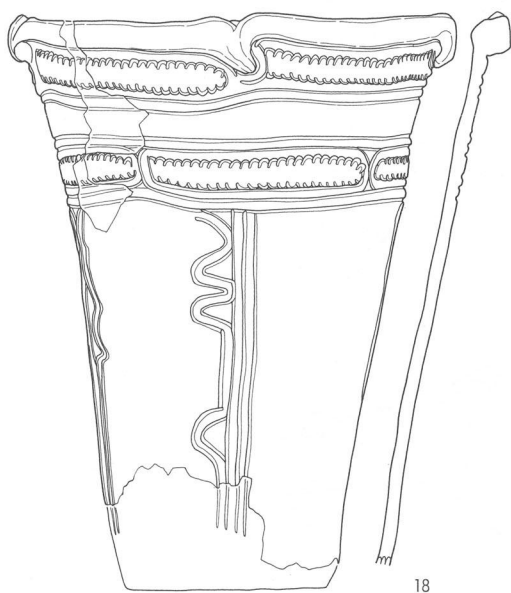
16



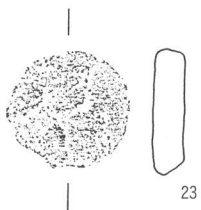
17

0 10cm

第30图 第6号竖穴住居址出土土器实测图(1:4)

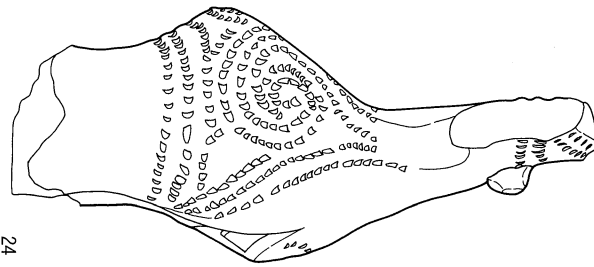
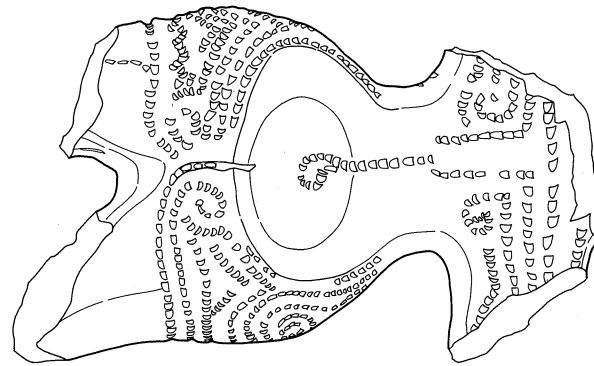
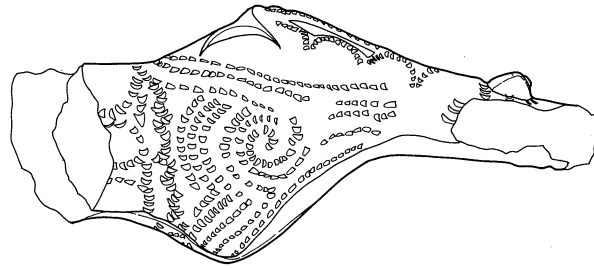
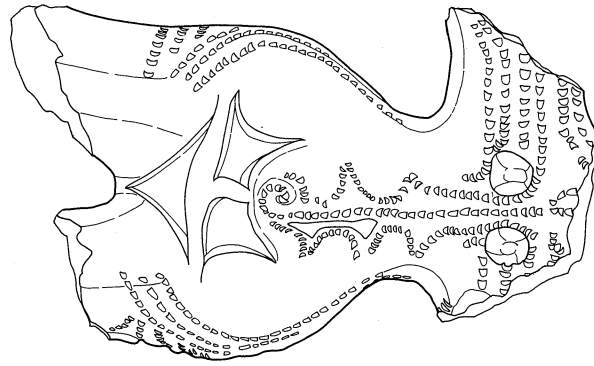


0 10cm

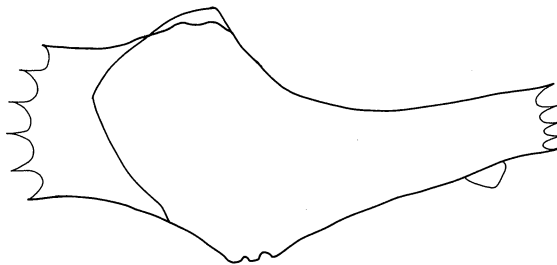
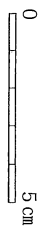


0 5cm

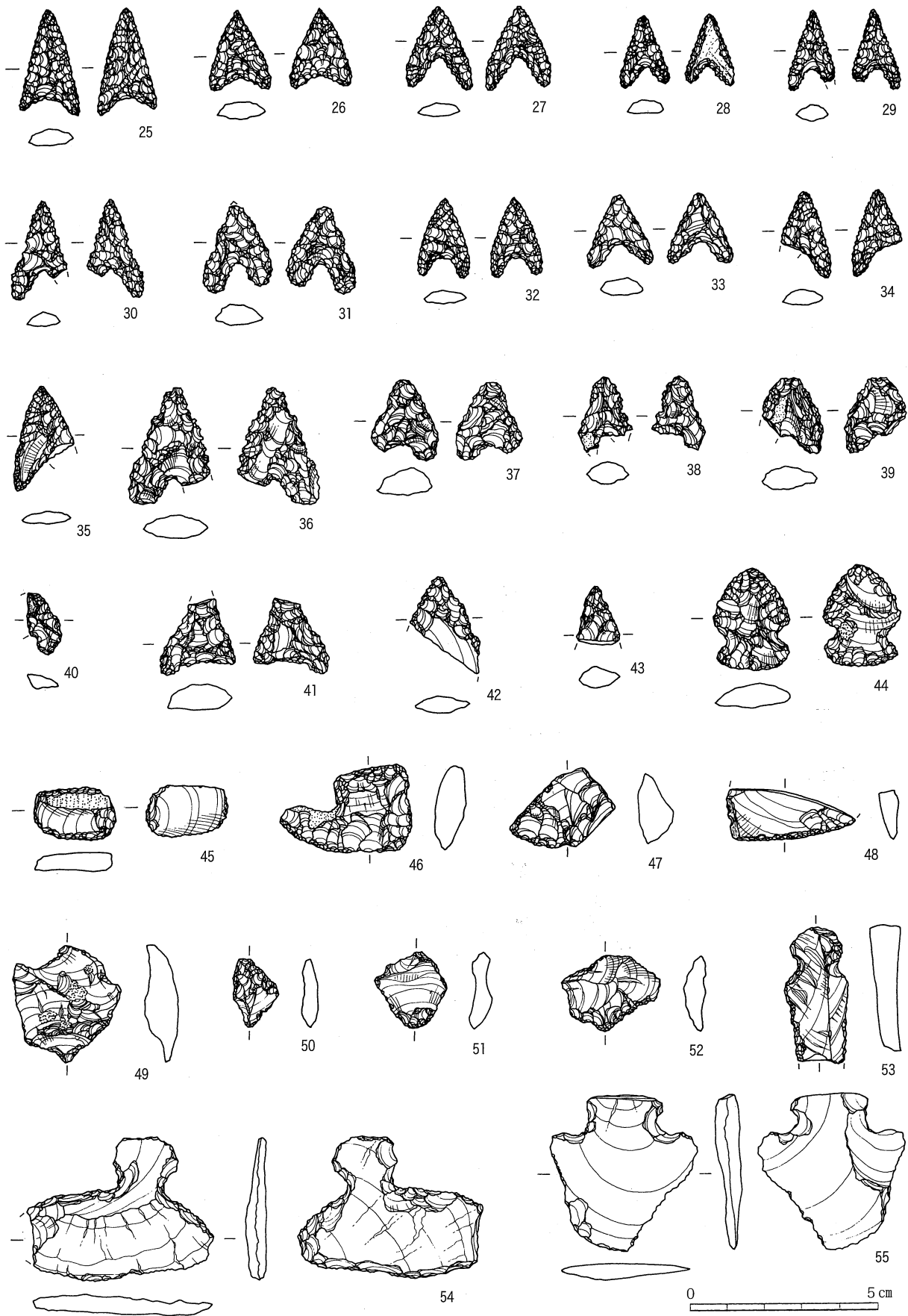
第31图 第6号竖穴住居址出土土器·土製品実測図·土器拓影 18~20 (1:4) 21~23 (1:2)



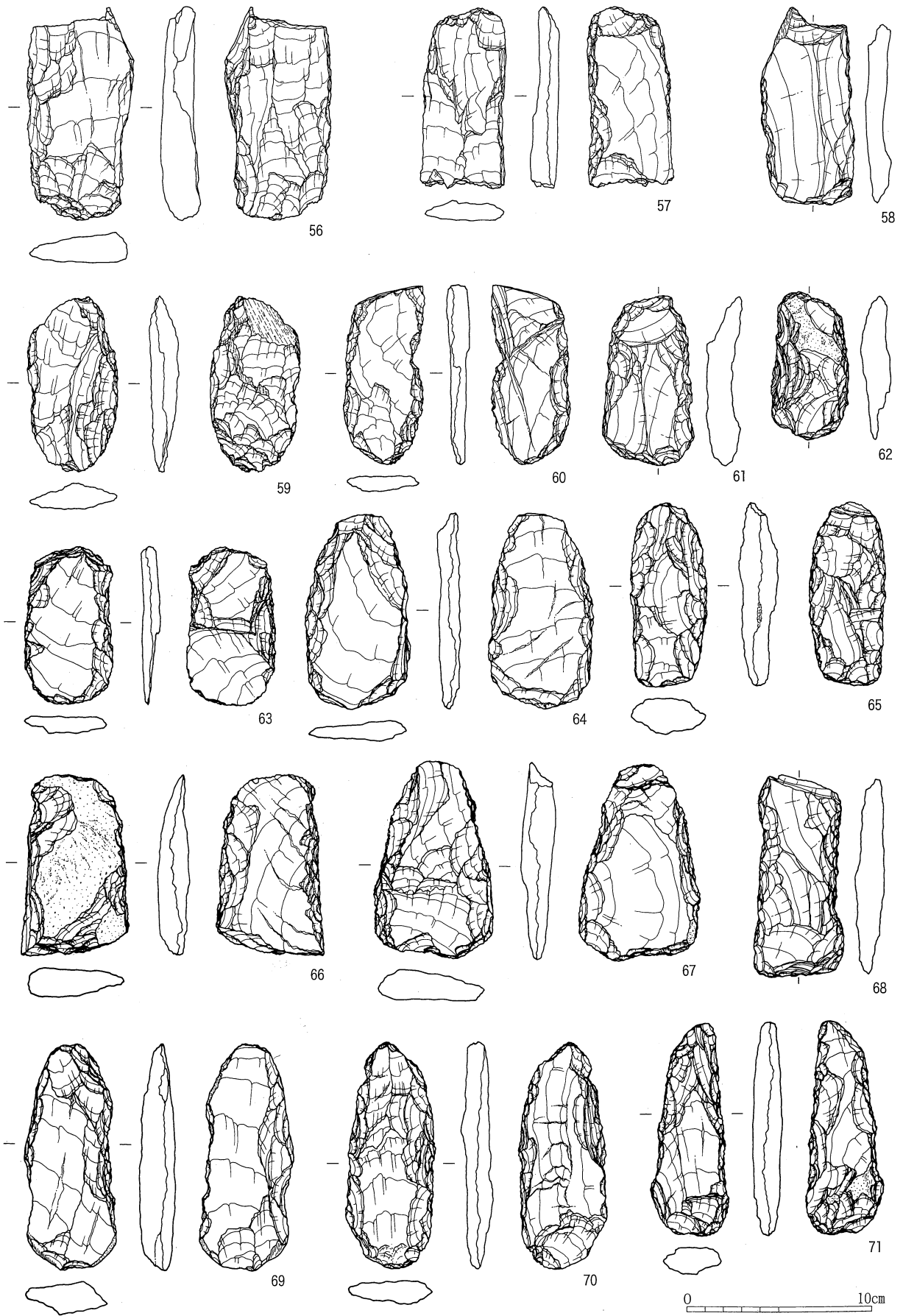
24



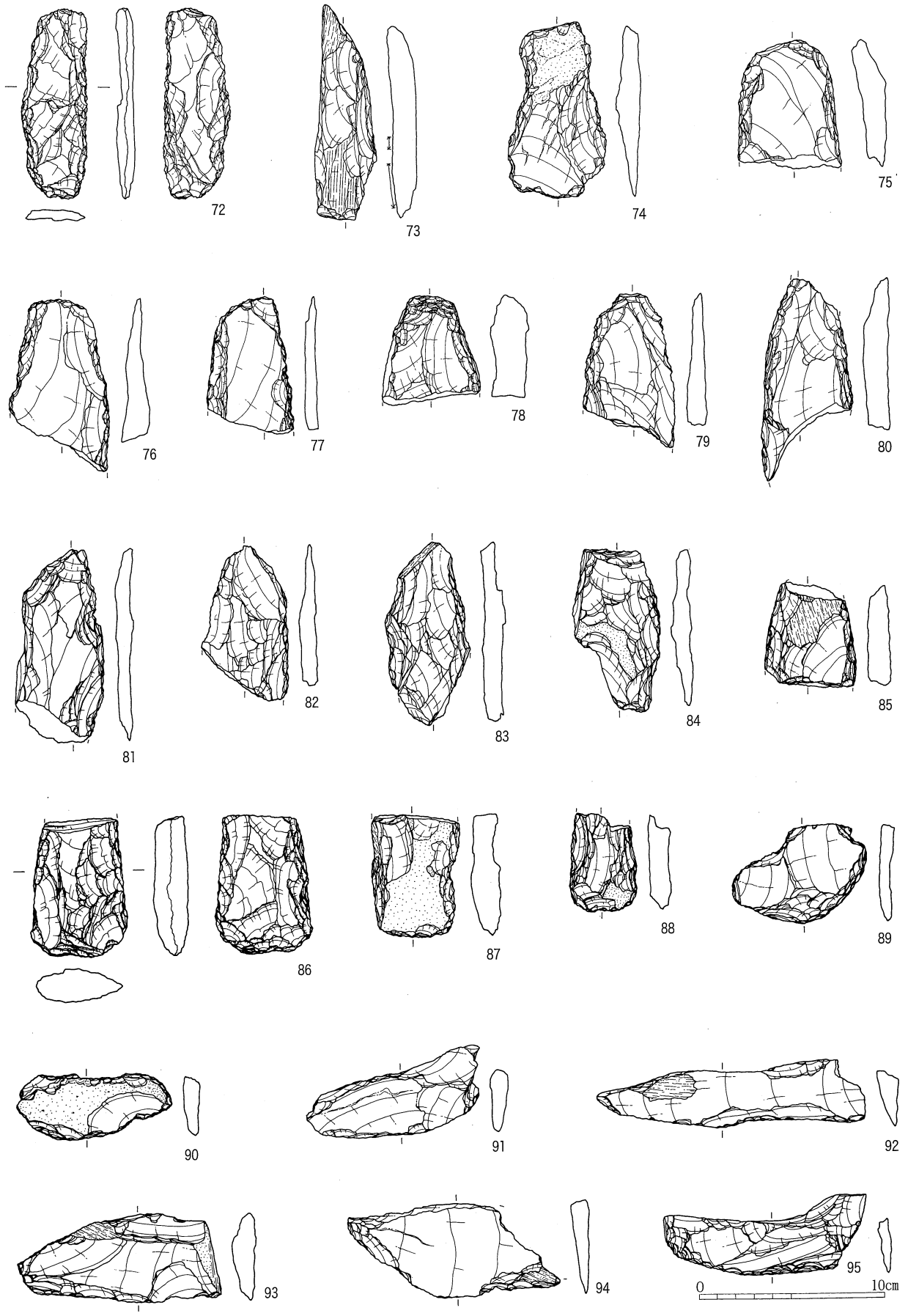
第32图 第6号竖穴住居址出土土製品(土偶)実測図(1:2)



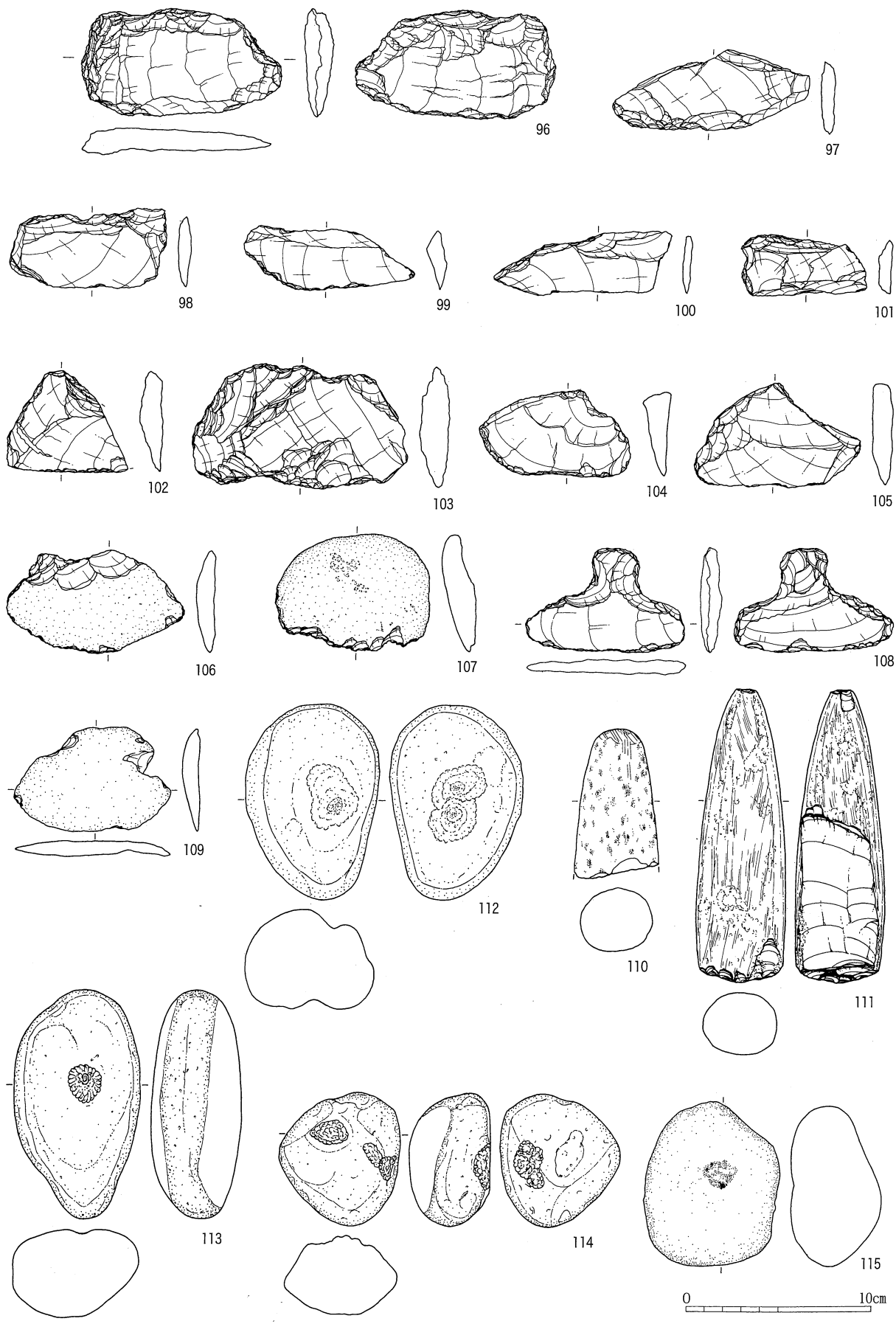
第33图 第6号竖穴住居址出土石器实测图(2:3)



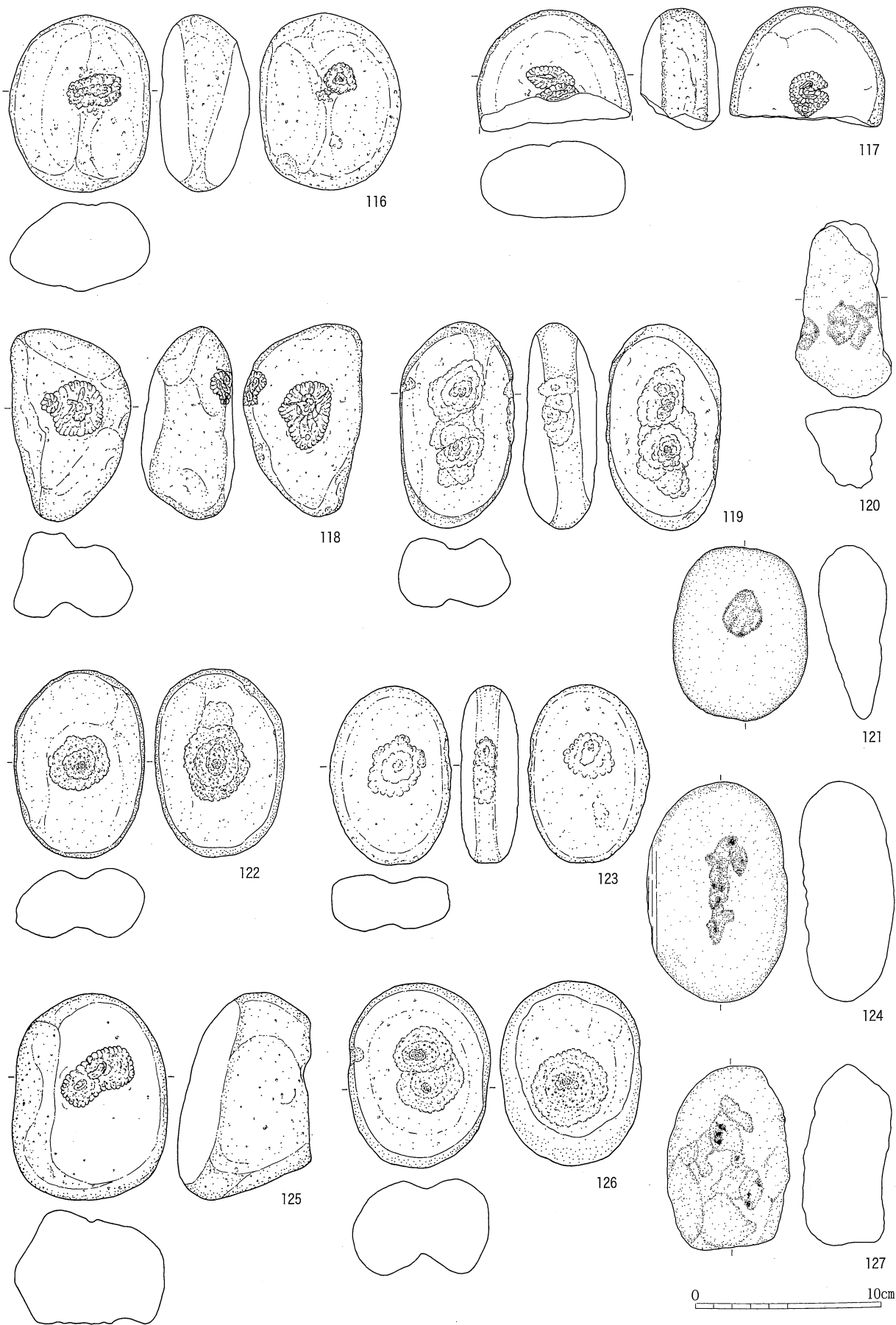
第34图 第6号竖穴住居址出土石器实测图(1:3)



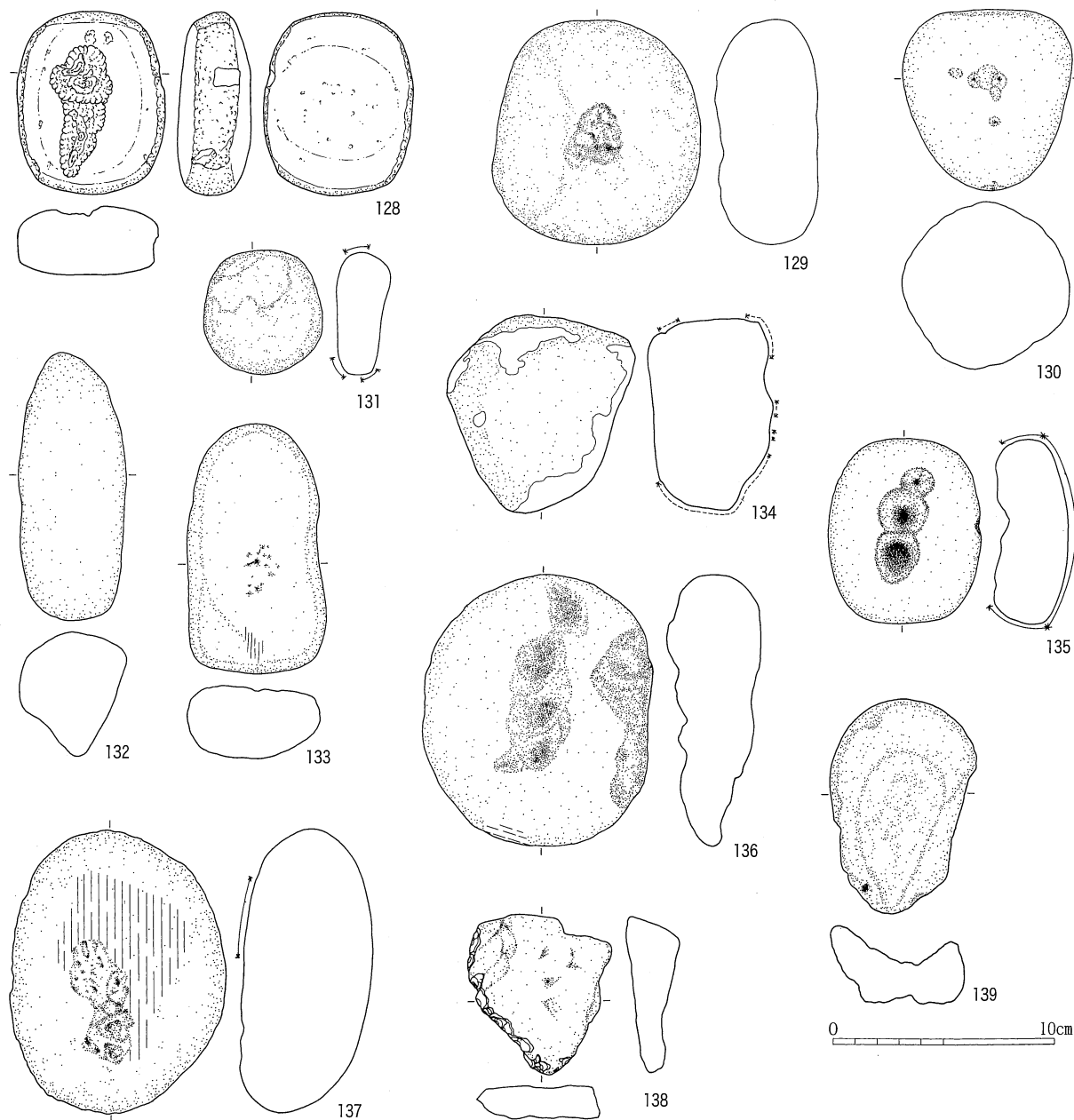
第35图 第6号竖穴住居址出土石器实测图(1:3)



第36图 第6号竖穴住居址出土石器实测图(1:3)



第37图 第6号竖穴住居址出土石器实测图(1:3)



第38図 第6号竪穴住居址出土石器実測図（1：3）

石器は、剥片類を含めると660点あり、第21～25図の85点を図示した。器種別にみると16～30は石鏃、31・34は不定形石器、32・33・36は石錐、35・83・97は石匙、37～68・70・71は打製石斧で、67は局部磨石斧かもしれない。69・72～82は横刃形石器であるがくさび状石器も含まれている。84～86は乳棒状磨製石斧、87～96は凹石・磨石類、98はくさび状石器、99は敲石、100は石皿で、皿部は浅いが破損品である。図示しなかったが台石は打痕と磨滅痕がみられるものである。原石・剥片類は566点である。

第6号竪穴住居址（第26～38図、写真16～19・105～112・194～208）

第5号竪穴住居址南のD-8・E-8グリッドで検出した。耕作土に酷似した土の広がりが見られ、攪乱穴を考える中で調査を進めると、数多い遺物が出土し、ローム層にローム粒をわずかに含む褐色土の落ち込みが認められた。

埋土は、直交する土層ベルトで観察したが、色調の変化に乏しく細分できる状態ではなく、ローム粒をわずかに含む褐色土の単層とした。分層はできなかつたが下層ほどローム粒は多く、基本的にはレンズ状堆積であり自然埋没と考えたい。

出土した遺物は多く、逆三角堆土の全域に散乱していたが、下層に集中する傾向がみられ投棄・廃棄によるものと思われ、ほぼ完形、低部を欠損するもの、胴部だけのものなどその状態はさまざまであるが個体数は60点以上を数え、土偶胸部破片、軽石製品なども出土した。

平面形は、長軸674cm、短軸470cmの楕円形を呈するが、極めて細長い竪穴である。

壁は、ロームで傾斜地に構築されているため高さに違いがみられ、東壁は52cm、西壁は12cm、南壁は19cm、北壁は31cmを計り、その立ち上がりは緩やかでありあまり良くない。

周溝は、壁の高い東から北壁の直下には溝と小ピットを組み合わせたものが、西壁の南寄りの壁直下には溝状のものが周っている。

床面は、ロームで不明瞭な所もみられたが総体的には硬くほぼ平らであるが、入口部と考えられる南壁付近はやや高くなる。

柱穴は、数が多く判然としないが、この時期にみられる主柱穴の配列を参考にすると、P11、P14、P1、P4、P6、P7の6基となろう。P12とP2は炉址をはさみ対になっているようであり、本址が細長い楕円形であるためこの2基を加えた8基が主柱穴であるかもしれない。P6とP7の間隔は他の主柱穴間よりも狭くここが入口部で、P17とP8は入口部施設に係るものと思われるが、付近に数多い柱穴がみられ、あまりにも細長い住居であるため拡張に係る柱穴の可能性を捨てることはできない。なお、P20～P23の4基には貼り床が施されていたが、重複する柱穴もあり同心円状建て直しも考慮しなければいけないようである。

炉址は、方形石囲炉と地床炉がある。石囲炉は5個の石を方形に埋めたもので、炉石の中には火熱で割れたものもある。炉底は硬くしまっているが焼土化していない。石囲炉の東には地床炉がある。1号住居址や3号住居址のように地床炉と石囲炉の重複がみられないため、新旧関係をあきらかにすることはできないか、地床炉から石囲炉への移行を考えたい。

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16
長軸	51	57	32	63	65	53	44	73	50	44	66	58	35	41	50	45
短軸	37	38	25	54	37	40	44	30	44	38	30	42	30	34	38	31
深さ	52	54	44	57	65	68	52	56	34	24	60	68	38	40	46	46

	P17	P18	P19	P20	P21	P22	P23									
長軸	50	44	43	32	43	40	28									
短軸	40	37	40	(18)	35	33	22									
深さ	69	18	42	47	42	52	43									

遺物は、多く土器・土製品・石器・石製品がある。

土器は、第27～31図の22点を図示した。1には7号住居址と23号住居址出土破片が接合している。また、本址出土破片が7号住居址第40図4に接合している。21は把手である。復原するまでに至らず図示することはできないが、土器一覧表に示したように同個体と思われる破片が多く41個体と驚異的な数を数え、個体によりその破片数は違うが総数は723点で、その他に破片1,852点、把手1点がある。なお、22は内外面に条痕が施された縄文早期の土器破片で混入したものである。

土製品は、第31・32図に示したが、23は土器破片を使用した土製円盤、24は土偶で、頭部・両手・両

足を欠損するが、現存部分から推定すると極めて大きなものである。2点の接合であるが1点は遺構外出土である。また、恥部は逆三角の陰刻で表現され朱が入れている。

石器は、剥片類を含めると1,115点あり、第33～38図の115点を図示した。器種別にみると25～44は石鏃、45～48は不定形石器、49～52の石錐、53～55・108・109は石匙、56～90は打製石斧、91～107は横刃形石器で、くさび状石器がふくまれている。110・111は乳棒状磨製石斧、112～137は凹石・磨石類、138は敲石である。図示しなかったが台石はほぼ全面に打痕がみられるもので、原石・剥片類は984点である。

石製品は、139の軽石製品であり、本村でははじめての発見であるが、隣接する茅野市の遺跡では数多くみられるものである。

第7号竪穴住居址（第39～44図、写真20・21・113～117・141・209～217）

第5号竪穴住居址北のF-8・G-8グリッドで検出した。検出作業当初から遺物が出土し、住居址の埋没は明らかな状態であった。ローム層にローム粒をわずかに含む褐色土の落ち込みを認めるが、西辺は明瞭であったが東辺はやや不明瞭である。

埋土は、直交する土層ベルトで観察したが、色調の変化に乏しく細分できる状態ではなく、ローム粒をわずかに含む褐色土の単層とした。しかし、下層ほどローム粒が多く基本的にはレンズ状堆積であり自然埋没と考えたい。

出土した遺物はそれほど多くないが、大きな破片が散在していた。床面から磨製石斧・打製石斧が出土している。

平面形は、長軸530cm、短軸450cmの楕円形である。

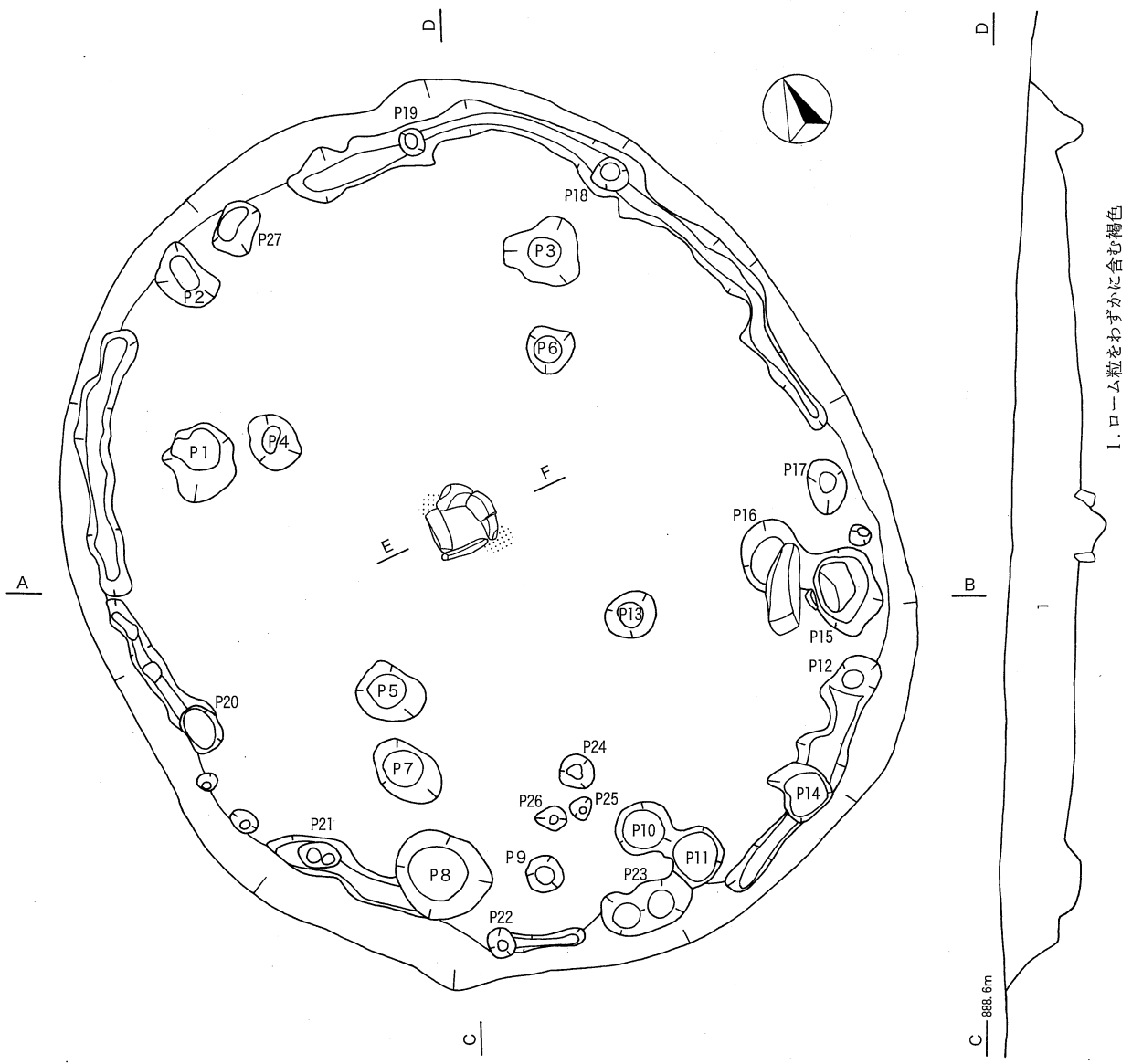
壁は、ロームで傾斜地に構築されているため高さに違いがみられ、東壁は25cm、西壁は30cm、南壁は30cm、北壁は21cm計り、その立ち上がりは普通である。

周溝は、壁直下に全周しているが、溝と小ピットを組み合わせたものである。溝と溝の間には2基を対にした小ピットが穿たれているようである。

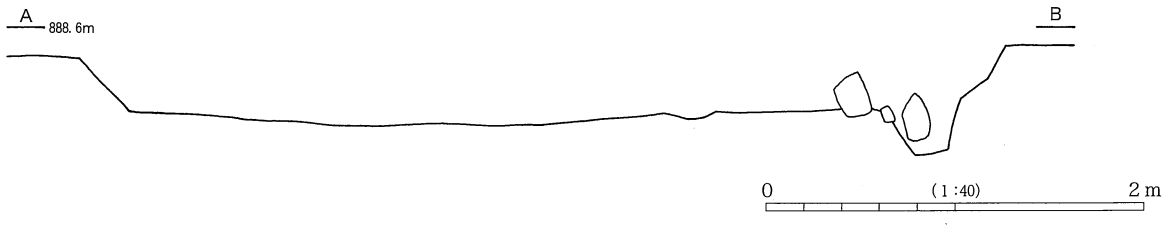
床面は、ロームで硬くほぼ平らである。

柱穴は、数多く検出されたが埋土等から時間差を示すことはできないが、全ての柱が同時に存在していたものではない。位置関係を手がかりにすると、支柱穴はP7、P1、P3、P16、P11の5基と思われるが、支柱穴P7はP5、支柱穴P1はP4、支柱穴P3はP6、支柱穴P16はP13、支柱穴P11はP10が並んでおり同心円上建て直しが考えられる状態である。壁直下のP20、P2、P18、P18、P14、P8の6基もしっかりしたものである。P15には大きな石が投棄されており、柱穴以外の用途をもつピットであった可能性は高いが、柱穴であれば廃絶時に柱は抜かれていたことになる。なお、この石は作業台のような台石と思われるが、特に擦れた痕跡は認められなかった。P9、P24、P25、P26の4基は並んでいるが、深い柱穴状のしっかりしたもので入口の施設に係るものであろう。

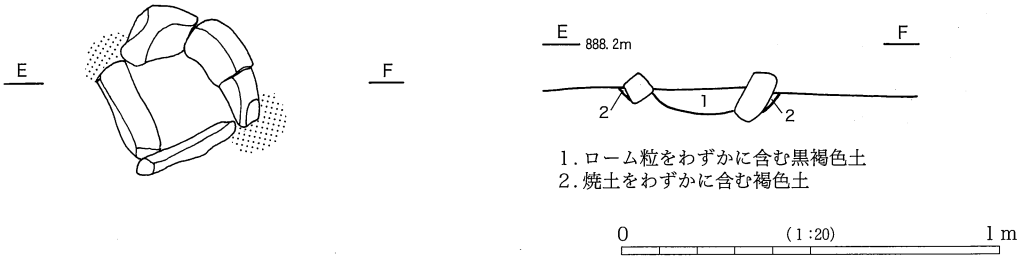
炉址は、方形石囲炉である。4個の平板状石を方形に埋めたもので、炉石の中には火熱で割れたものもあるが、わずかな焼土と炭化物がみられただけであり、底面は埋め戻されたような状況で焼土化していない。



1. ローム粒をわずかに含む褐色



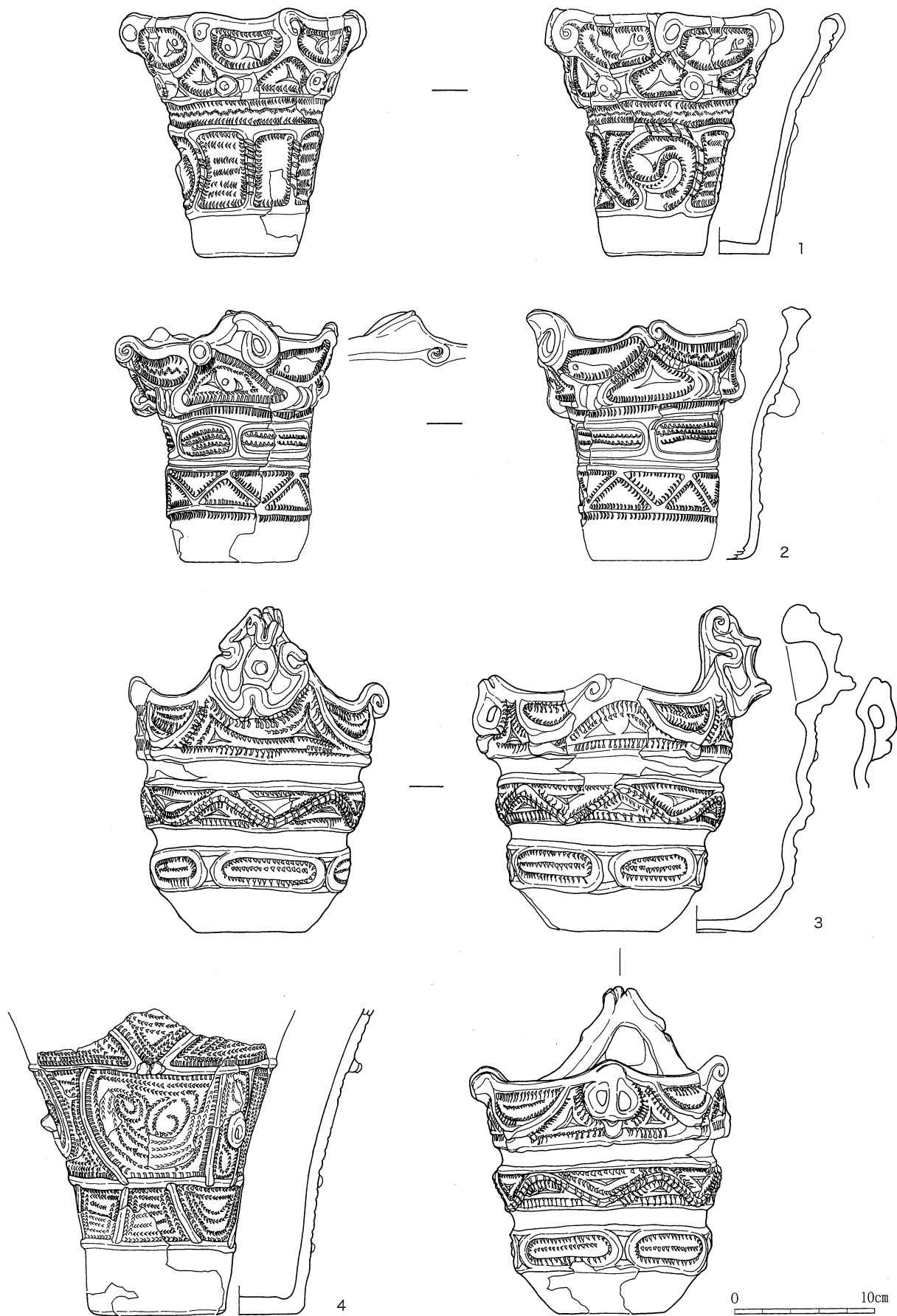
0 (1:40) 2m



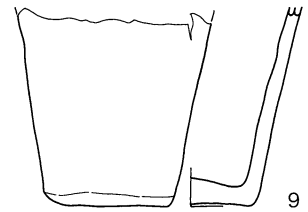
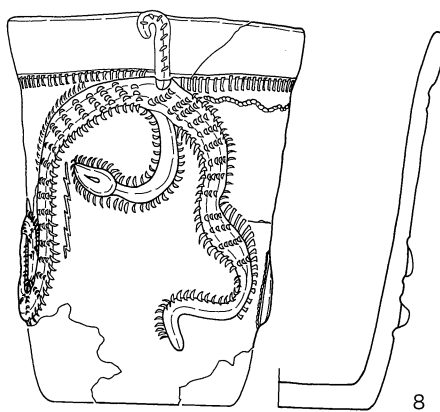
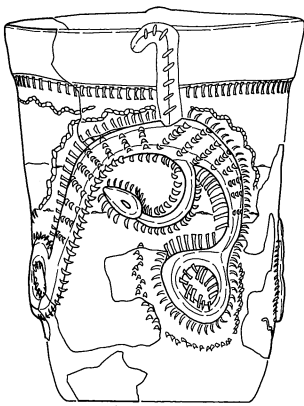
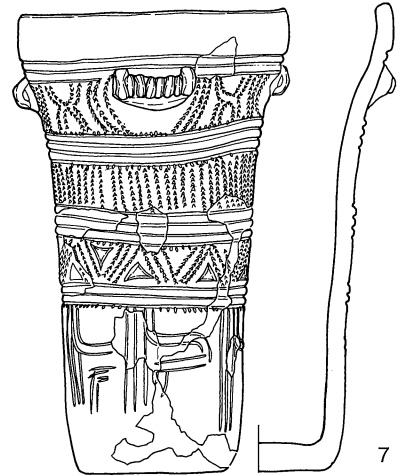
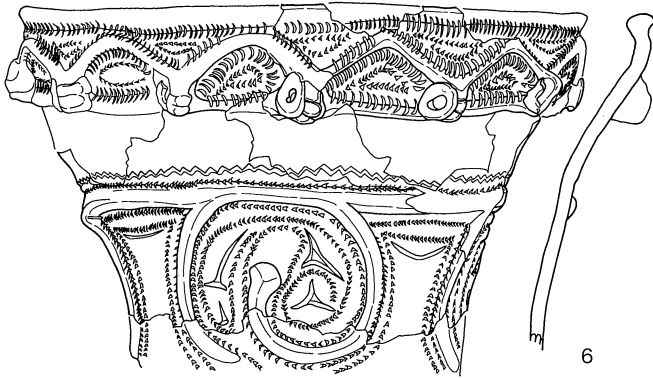
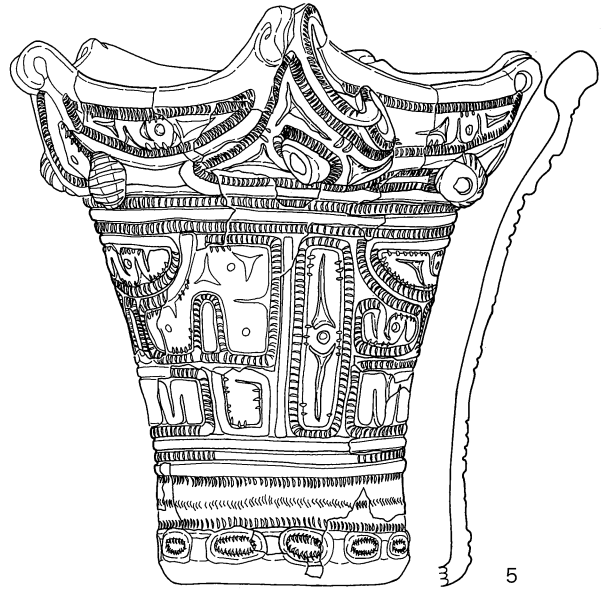
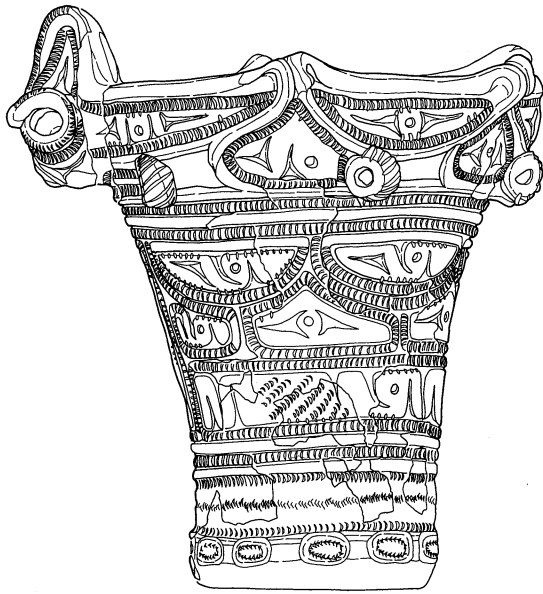
1. ローム粒をわずかに含む黒褐色土
2. 焼土をわずかに含む褐色土

0 (1:20) 1m

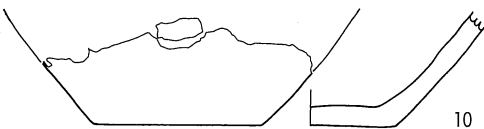
第39図 第7号竪穴住居址実測図



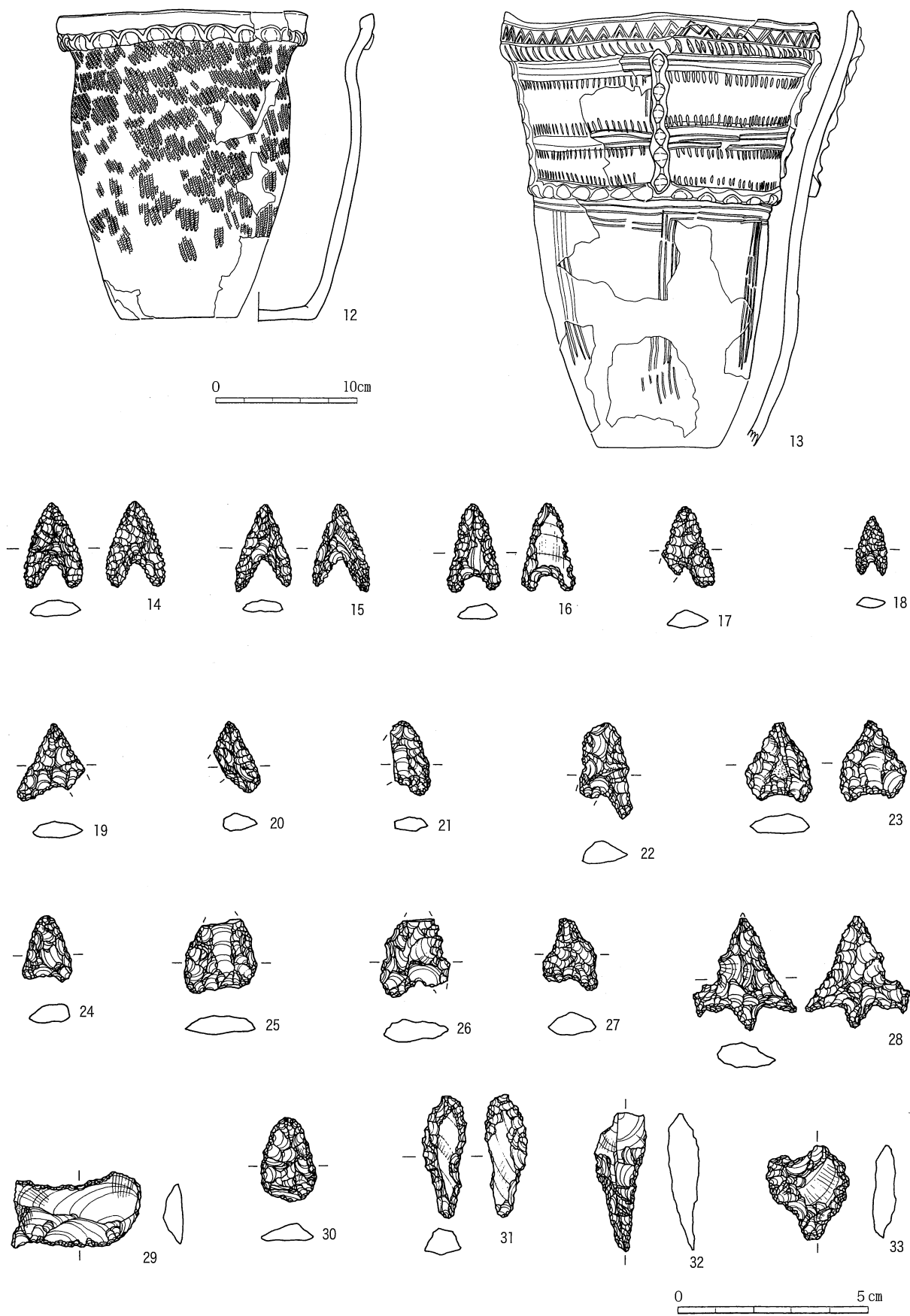
第40图 第7号竖穴住居址出土土器实测图(1:4)



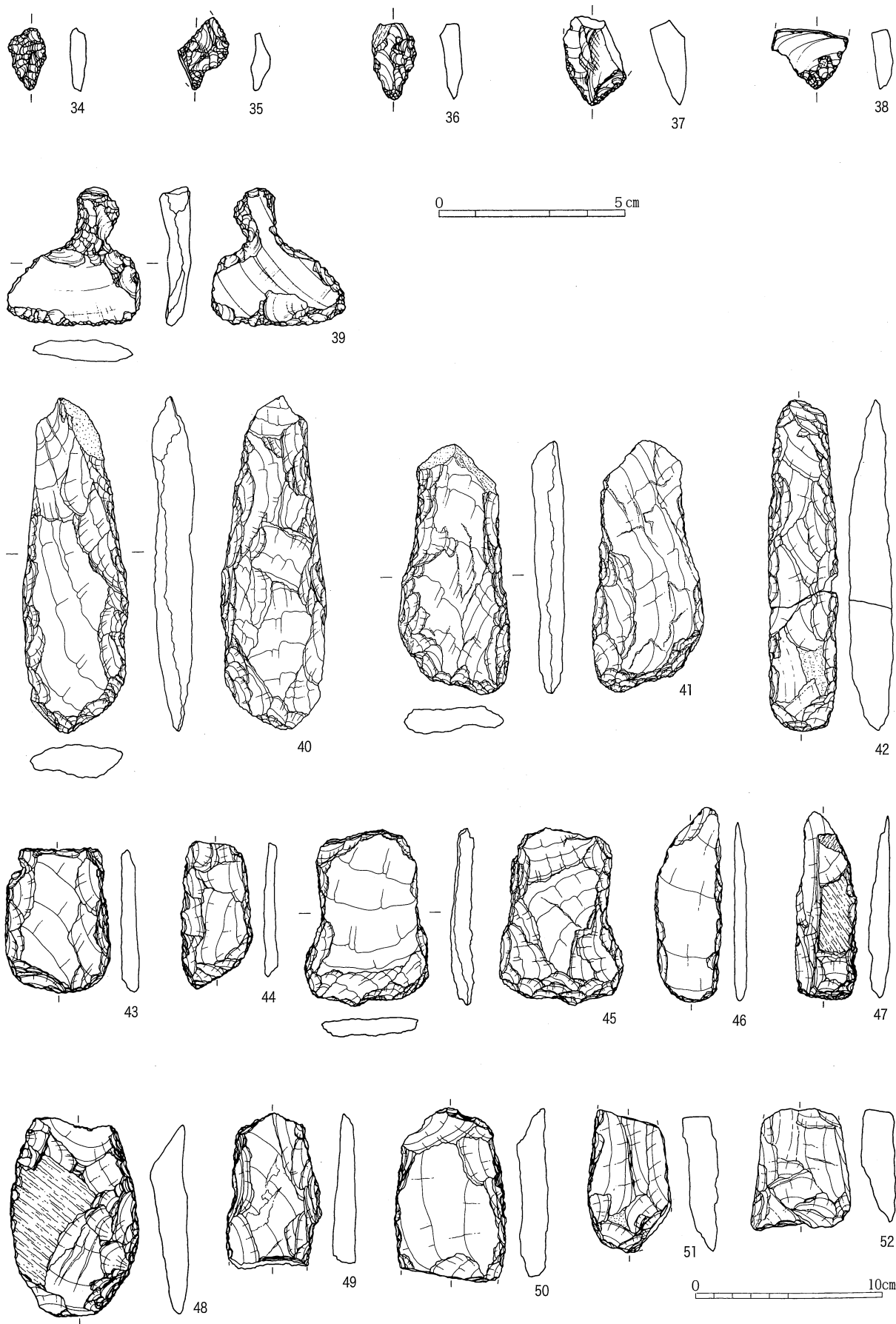
0 10cm



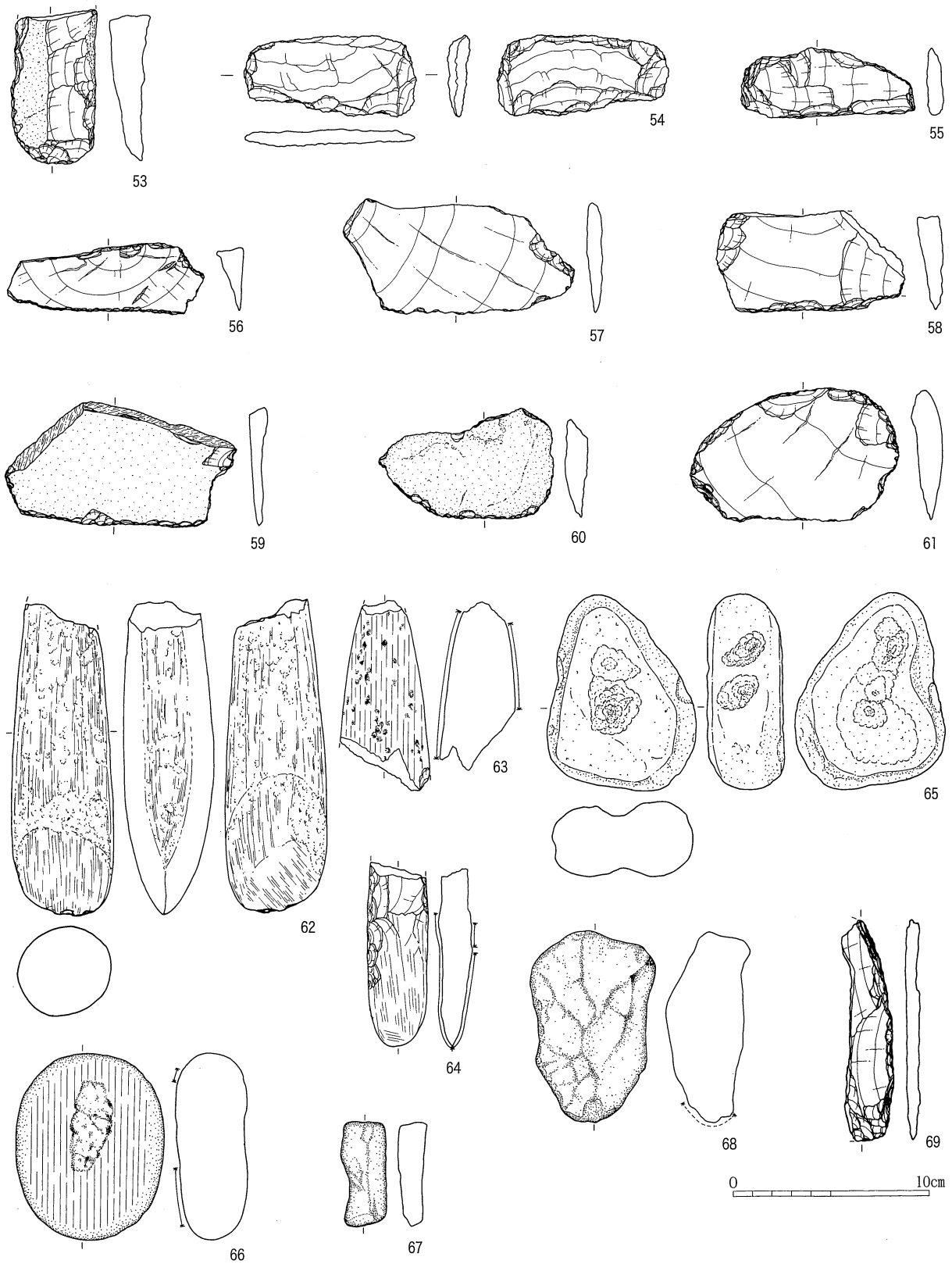
第41图 第7号竖穴住居址出土土器实测图(1:4)



第42图 第7号竖穴住居址出土土器·石器实测图 12·13 (1 : 4) 14~33 (2 : 3)



第43图 第7号竖穴住居址出土石器实测图 34~39 (2 : 3) 40~52 (1 : 3)



第44图 第7号竖穴住居址出土石器实测图(1:3)

	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16
長軸	47	40	47	35	43	28	35	58	23	33	36	30	30	33	50	43
短軸	37	25	37	30	32	26	30	50	23	32	30	23	28	28	38	35
深さ	70	28	63	61	60	67	78	53	58	65	70	14	70	27	18	71

	P17	P18	P19	P20	P21	P22	P23	P24	P25	P26	P27					
長軸	32	30	26	28	35	18	53	22	14	18	37					
短軸	22	30	22	18	23	18	28	20	12	14	20					
深さ	19	33	33	22	27	25	23	37	25	36	16					

遺物は、多く土器と石器がある。

土器は、第40～42図の13点を図示した。4に5号住居址出土破片1点と13号住居址P3出土破片1点が接合している。10・11は浅鉢である。復原するまでに至らず図示することはできないが、土器一覧表に示したように同個体と思われる破片が多く9個体を数え、個体によりその破片数は違うが総数は174点で、その他に破片830点、見方によれば動物を象った把手2点がある。

石器は、剥片類を含めると727点あり、第42～44図の56点を図示した。器種別にみると14～28・30は石鏃、29は不定形石器、31～38は石錐、39は石匙、40～53・69は打製石斧で、69は縦に割れたもので、52は打製石斧と用途は違うようであるがここでは打製石斧としておきたい。54～61は横刃形石器、62・63は乳棒状磨製石斧、64は局部磨製石斧で、基部が折れている。65・66は凹石・磨石類、67・68は敲石である。図示しなかった原石・剥片類は663点である。

第8号竪穴住居址（第45～49図、写真22～25・118～120・138・218・219）

第7号竪穴住居址西南のF-9グリッドで検出した。検出作業当初から遺物が数多く出土しマウンド状に盛り上がり、住居址の埋没は明らかであったため平面プランを明確にできないまま精査を進めた。

埋土は、直交する土層ベルトで観察し2層に大別した。1層はローム粒をわずかに含む黒褐色土、2層はローム粒を多く含む褐色土であり、ローム粒の包含量で分層したものであり、下層ほどローム粒が多いレンズ状堆積であり自然埋没と考えたい。

出土した遺物が多いが、逆三角堆土からの出土で中には検出面より高いものもある。三角堆土からの出土が少ないため、三角堆土が形成された後の埋没過程で廃棄場に使用されたことを示しているが、廃絶から廃棄までの時間の経過については一切わからない。なお、土師器と灰釉陶器の破片も出土したが混入である。

平面形は、長軸450cm、短軸415cmの楕円形である。

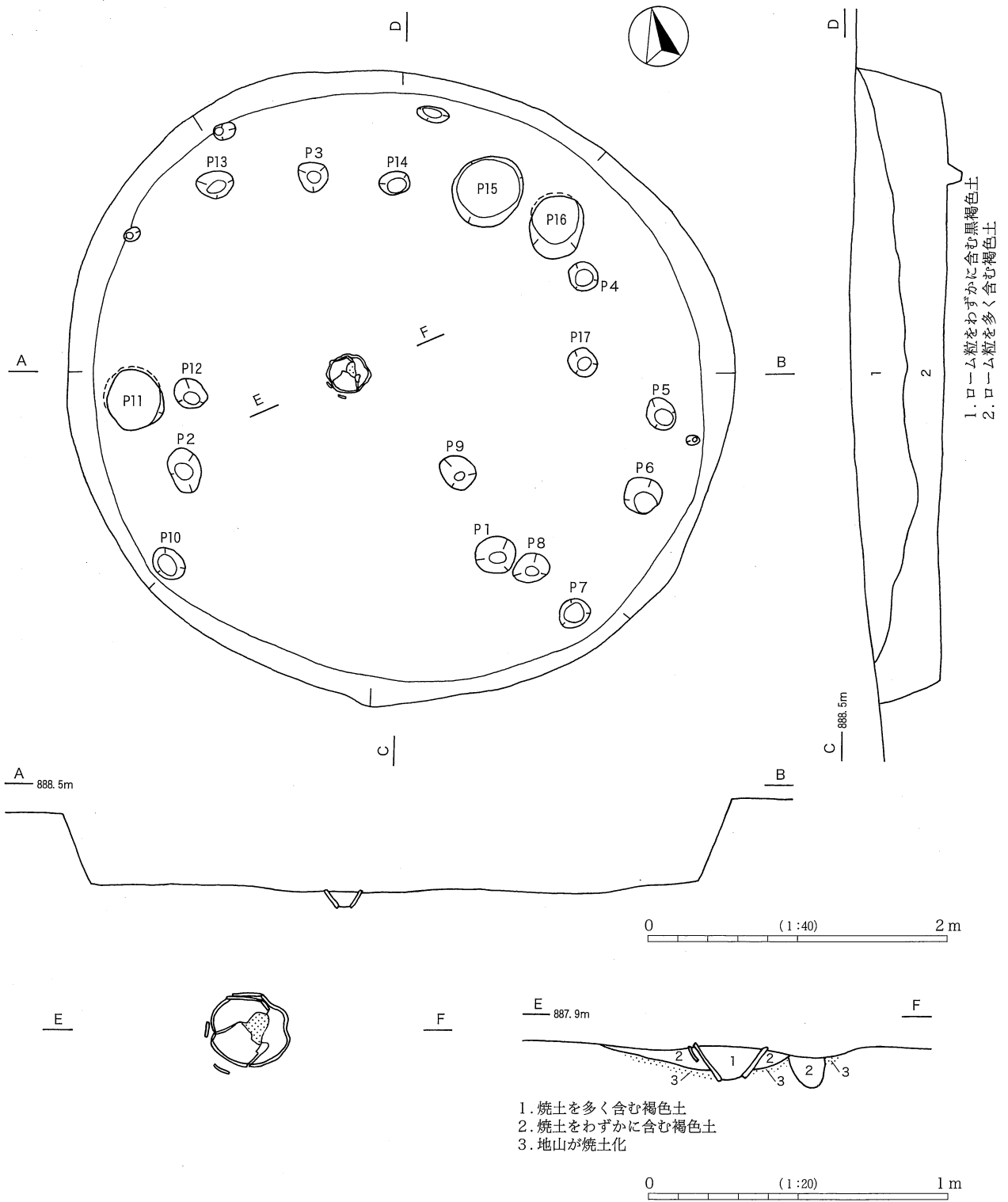
壁は、ロームで傾斜地に構築されているため高さの違いがみられ、東壁は53cm、西壁は52cm、南壁は43cm、北壁は53cmを計り、その立ち上がりは普通である。

周溝は、検出できなかったが壁直下に小ピットがあり同様の役割をはたしていたように思うが、小ピットが少なすぎるようでもある。

床面は、ロームで硬く壁際がやや高くなる以外はほぼ平らである。

柱穴は、比較的径の小さいものばかりである。位置関係を手がかりにすると支柱穴はP1～P6の6基であり、P5とP6の間隔は他の支柱穴間より狭くここが入口部であろう。P11・P15・P16の3基は柱穴の大きさではあるが、本址では貯蔵穴と考えておきたい。

炉址は、埋甕炉と古い地床炉がある。埋甕炉は下胴部破片をすり鉢状に埋めたもので、他の住居址で

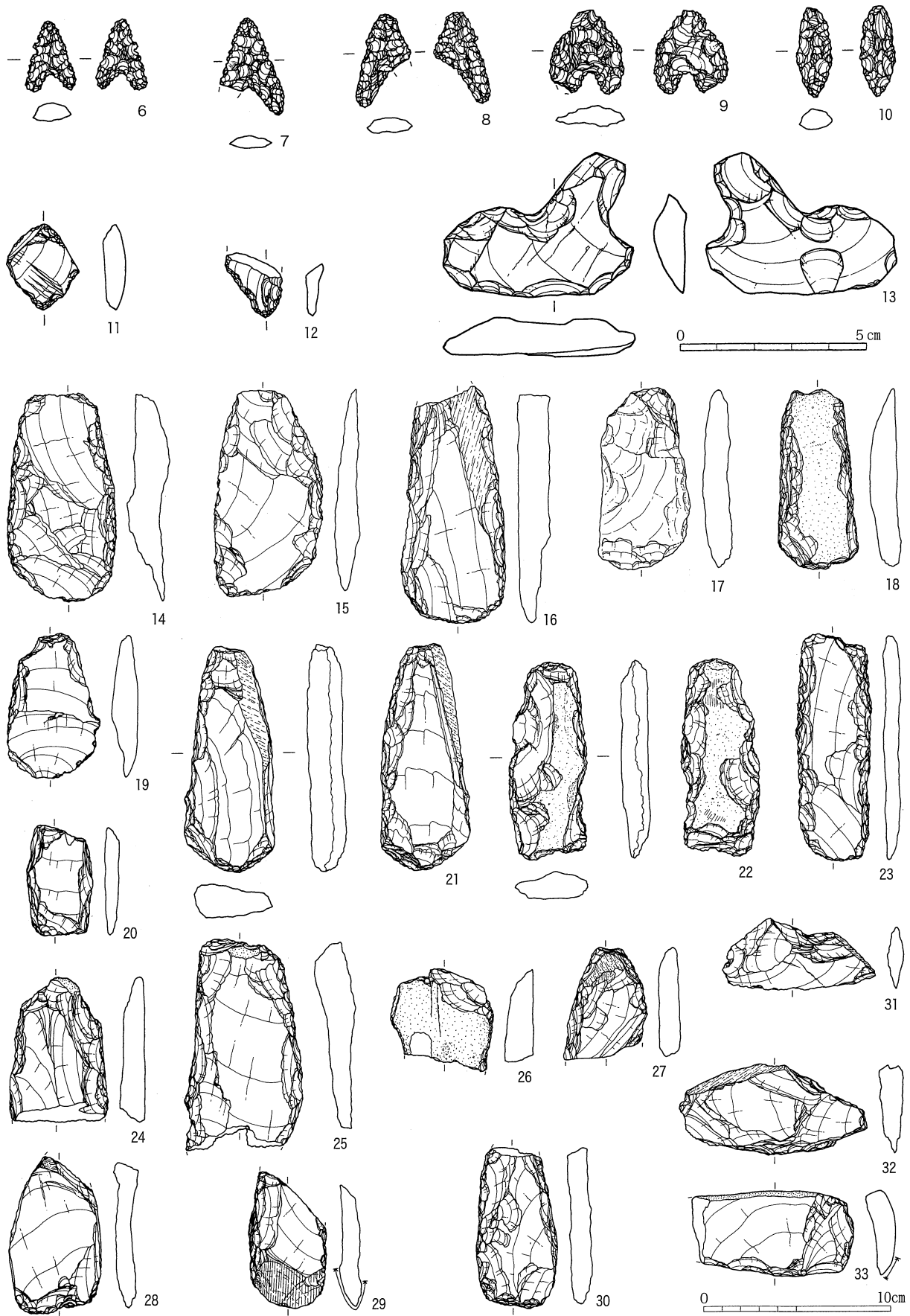


第45図 第8号竪穴住居址実測図

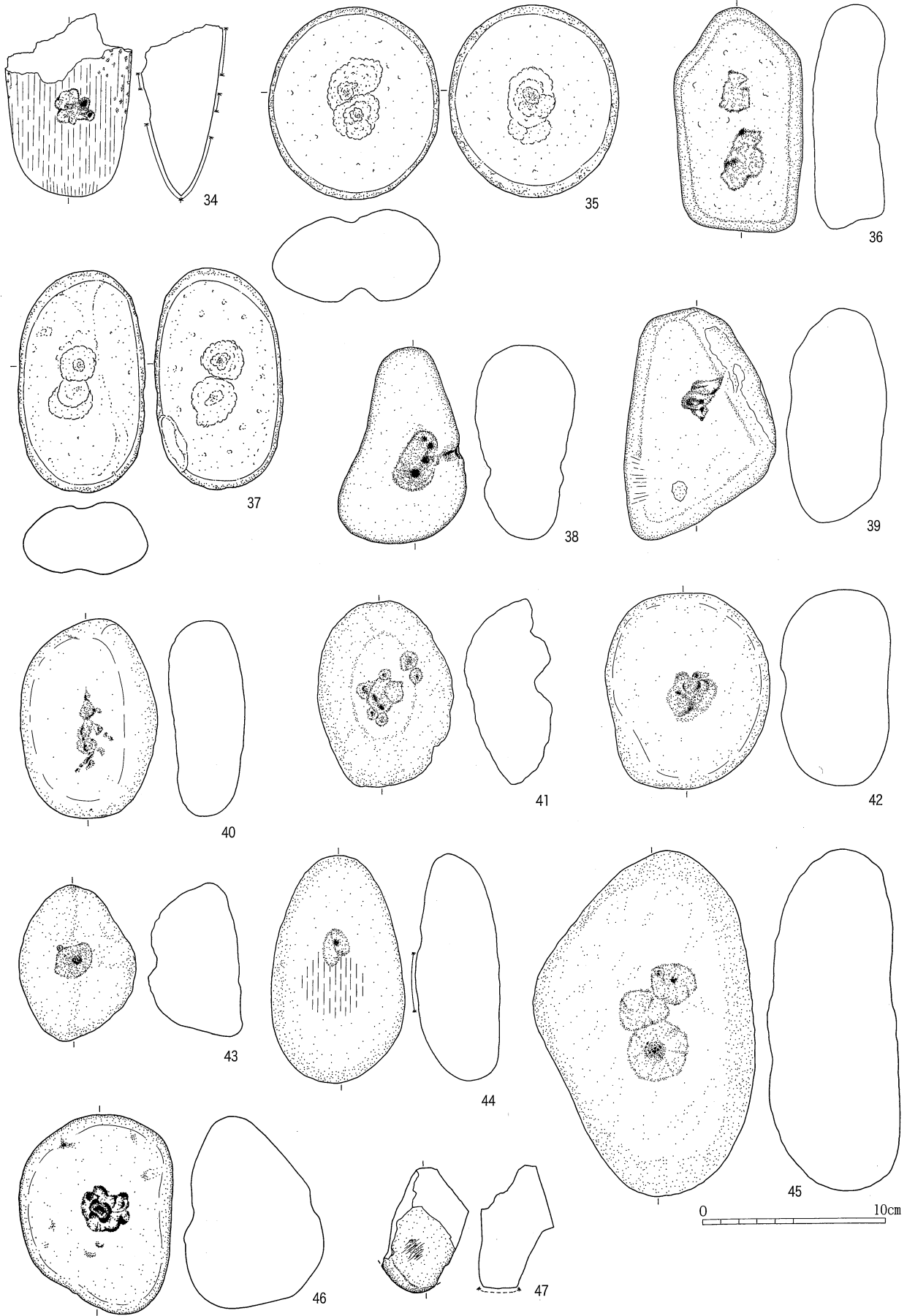
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17
長軸	28	31	21	20	22	26	22	24	24	25	40	23	25	21	49	43	20
短軸	25	20	20	18	19	24	20	20	21	18	36	18	18	15	45	35	18
深さ	28	34	25	34	20	42	20	23	21	18	35	30	50	16	27	38	36



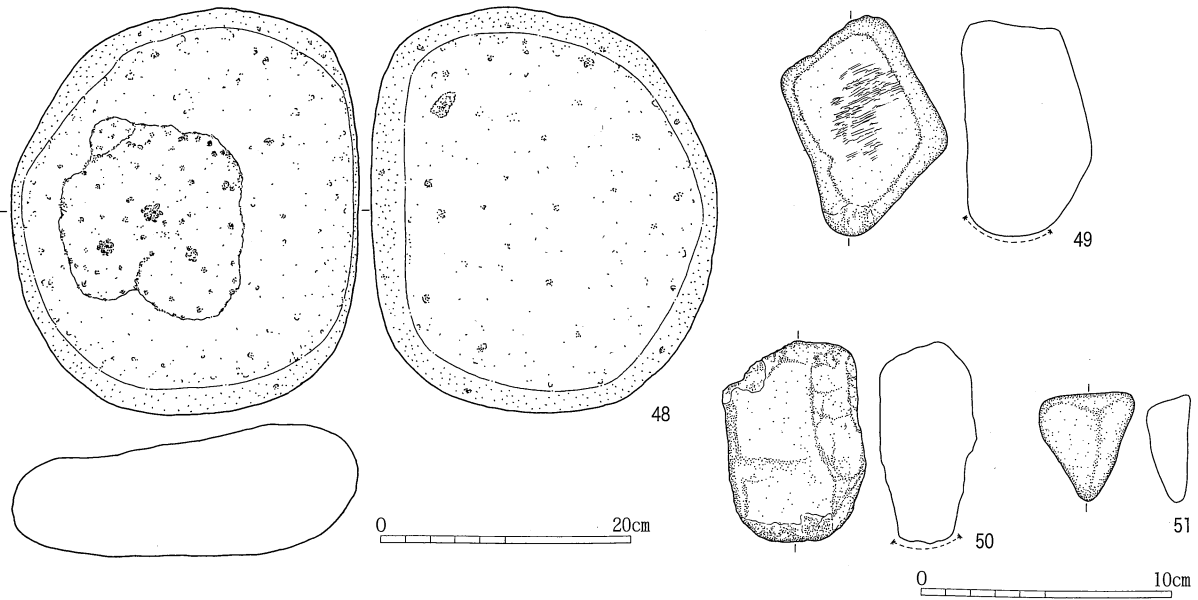
第46图 第8号竖穴住居址出土土器实测图 1~4 (1:4) 5 (1:2)



第47图 第8号竖穴住居址出土石器实测图 6~13 (2:3) 14~33 (1:3)



第48图 第8号竖穴住居址出土石器实测图(1:3)



第49図 第8号竪穴住居址出土石器実測図 48 (1:6) 49~51 (1:3)

みられた口縁部や胴部を枠状に埋設したタイプとは異なっていた。埋甕炉は焼土混じりの土で埋まり底部には焼土塊がみられた。古い地床炉は船底状に窪んでいるが、その低い所をわずかに掘りくぼめ新しい埋甕炉を構築しているため、旧いたことで船底状の火床は埋め戻されていた。したがって、本址の火処は地床炉から埋甕炉に替わったことになる。

遺物は、多く土器と石器がある。

土器は、第46図の5点を図示した。5は内向きの女神把手である。復原するまでに至らず図示することはできないが、土器一覧表に示したように同個体と思われる破片が多く17個体を数え、個体によりその破片数は違うが総数は256点で、その他に破片1,149点、把手1点がある。

なお、炉体土器は図示してない。

石器は、剥片類を含めると355点あり、第47~49図の46点を図示した。器種別にみると6~10は石鏃で、10は尖頭器状のものである。11・12は石錐、13は石匙、14~30は打製石斧で、26は石匙のつまみ部分、29は局部磨製石斧の可能性が高いものである。31~33は横刃形石器、34は乳棒状磨製石斧で、凹石として使用されている。35~46は凹石・磨石類、47・49~51は敲石、48は石皿としたが明確なものではない。図示しなかったが原石・剥片類は290点である。

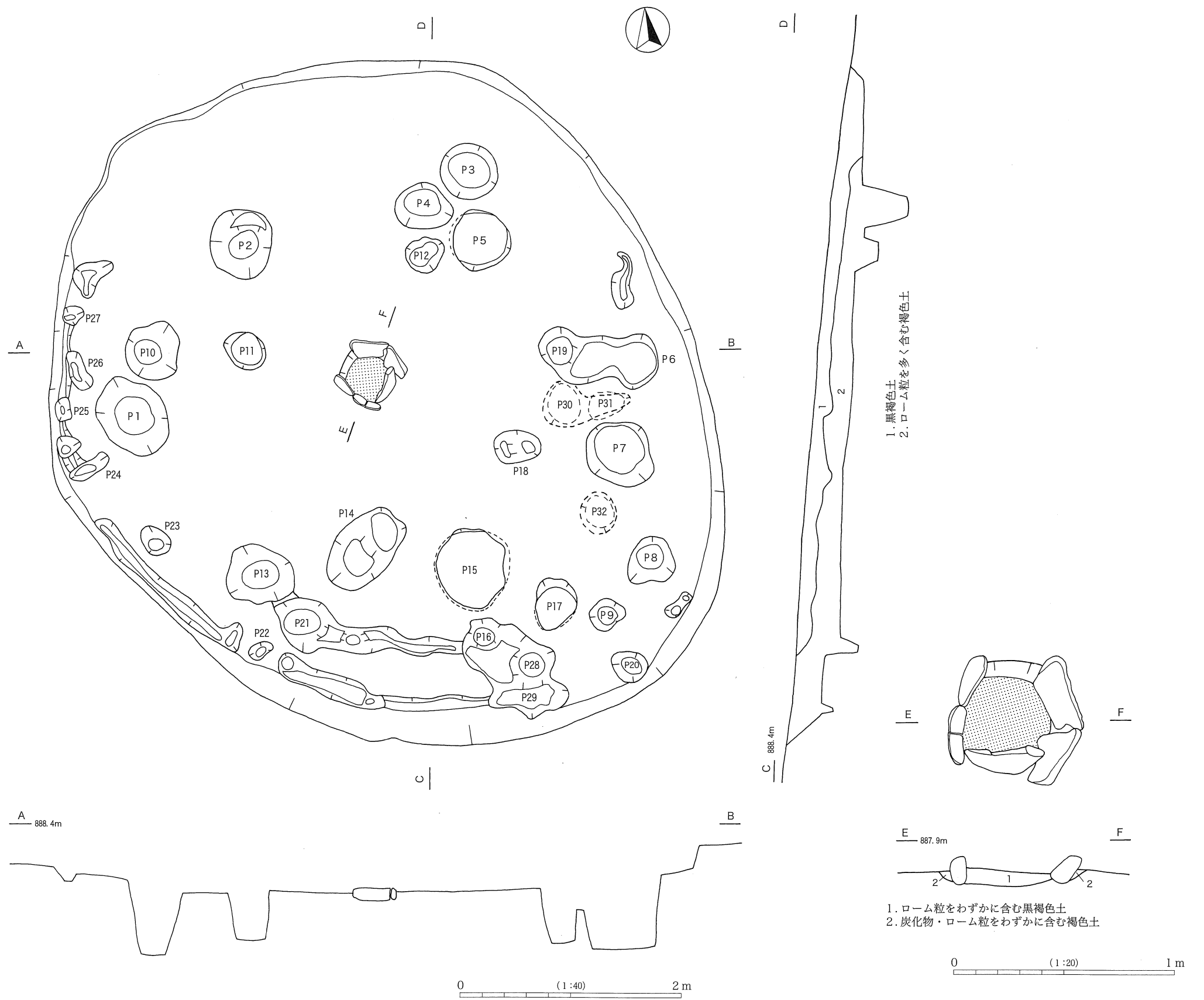
第9号竪穴住居址 (第50~53図、写真26・27・121~124・138・220・221)

第8号竪穴住居址北のG-9グリッドで検出したが、ここは緩やかな北斜面である。検出作業では遺物の出土は少なかったが、ローム層に黒褐色土の落ち込みが認められた。色調の変化は明らかで検出は比較的容易であった。

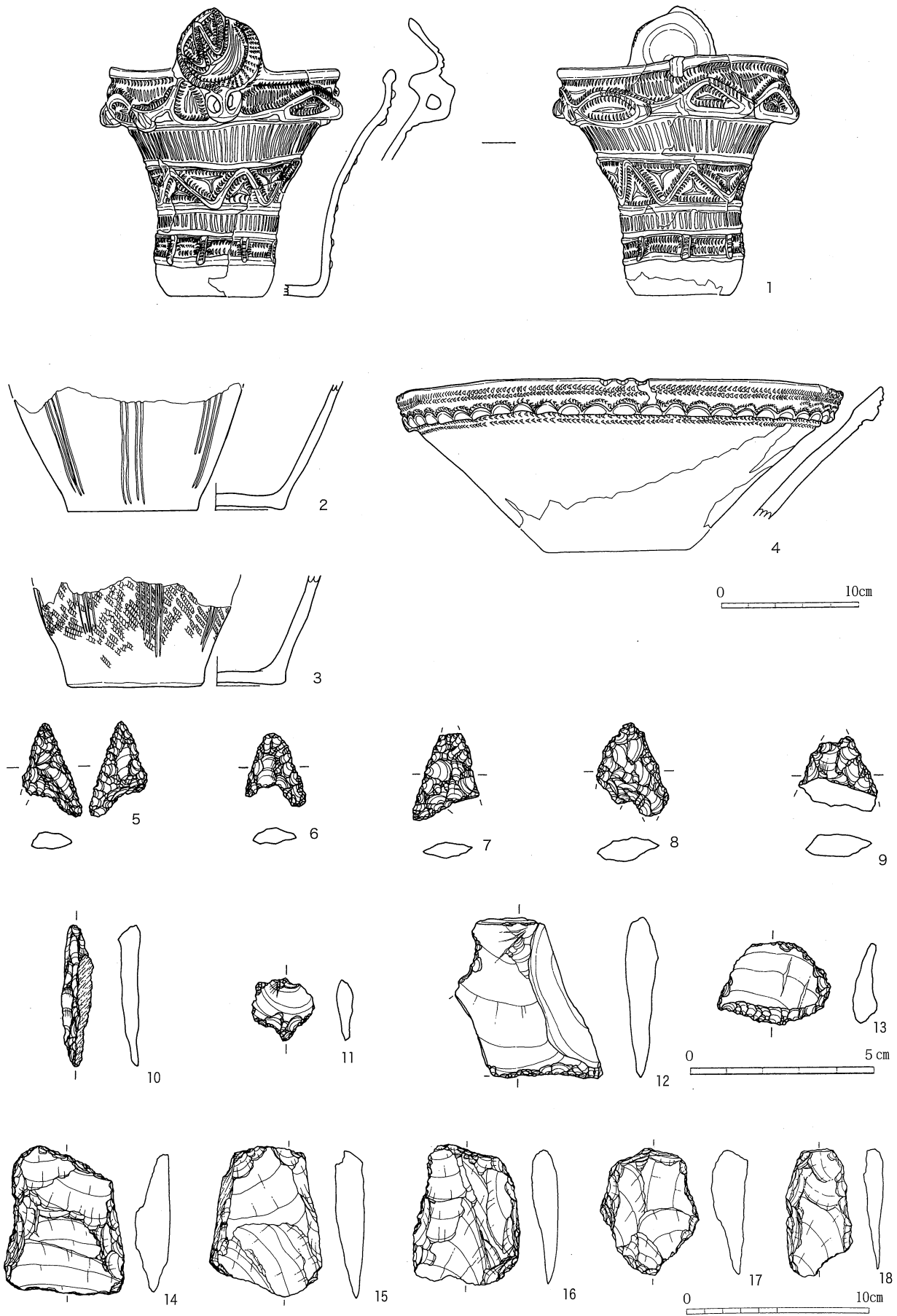
埋土は、直交する土層ベルトで観察し2層に大別した。1層は黒褐色土、2層はローム粒を多く含む褐色土で、下層ほどローム粒が多いレンズ状堆積であり自然埋没と考えたい。

出土した遺物は、本遺跡最大規模の住居址であるがそれほど多くない。なお、土師器と灰釉陶器の破片も出土したが混入である。

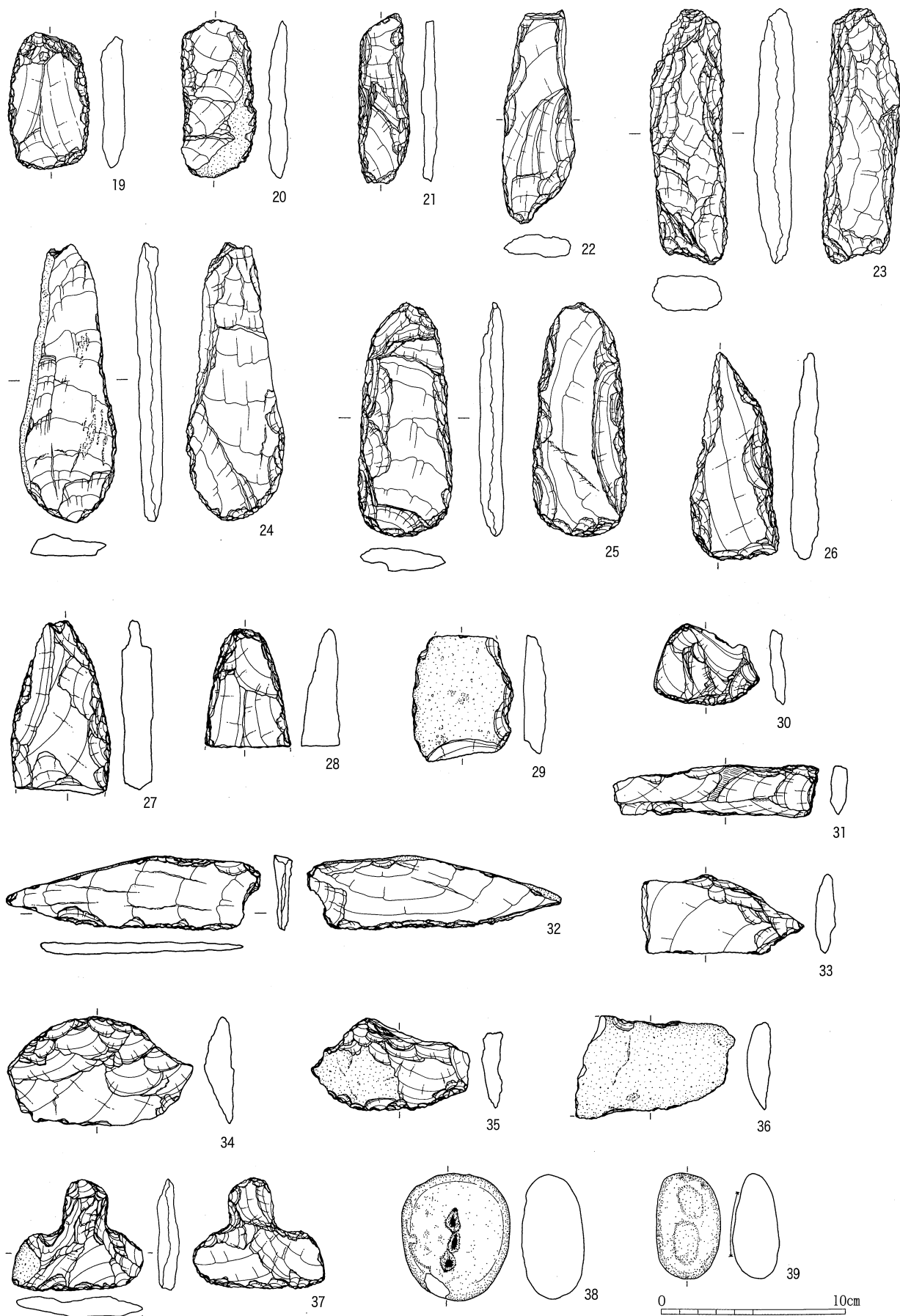
平面形は、長軸690cm、短軸560cmの楕円形である。



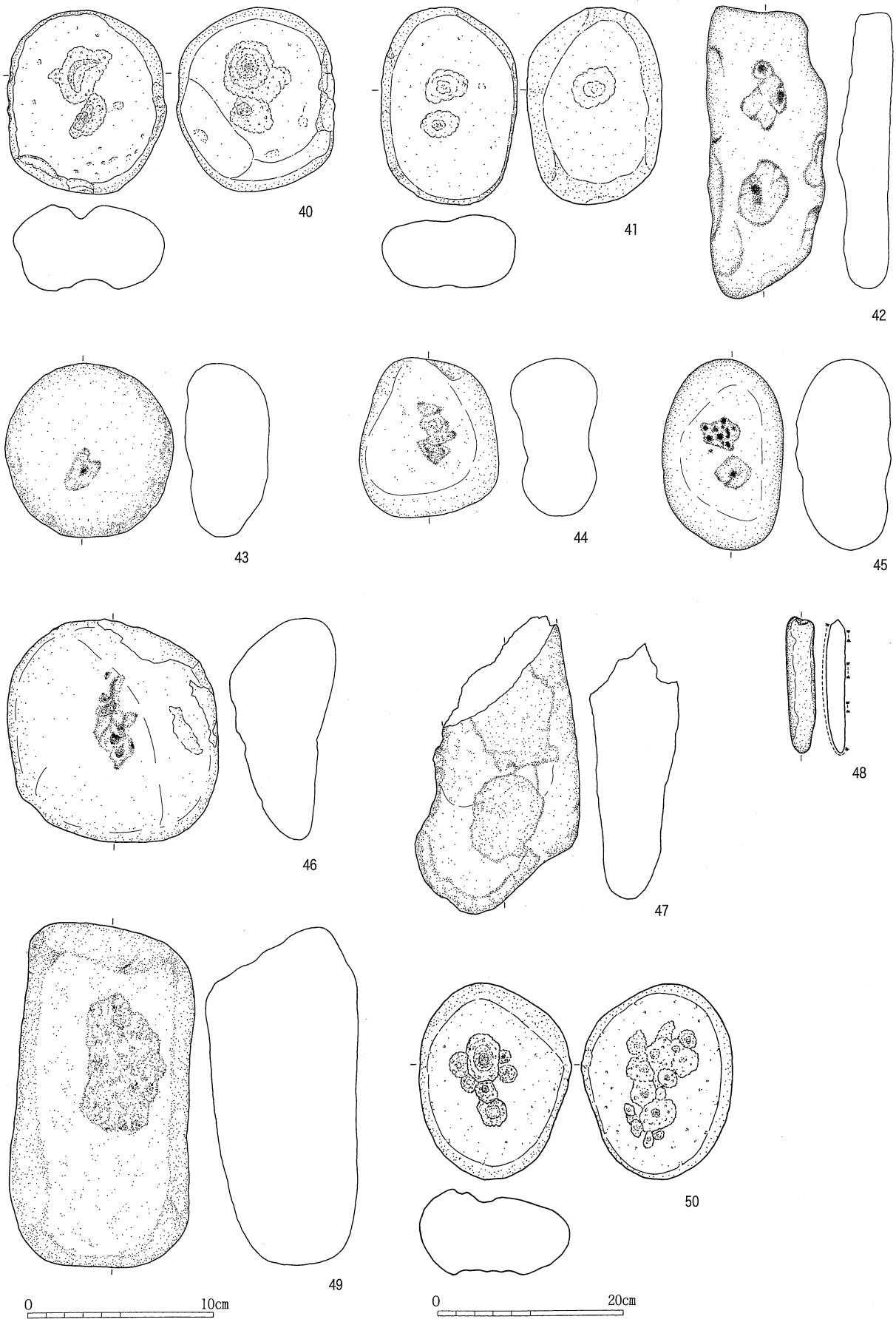
第50図 第9号竖穴住居址実測図



第51图 第9号竖穴住居址出土土器·石器实测图 1~4 (1:4) 5~13 (2:3) 14~18 (1:3)



第52图 第9号竖穴住居址出土石器实测图(1:3)



第53图 第9号竖穴住居址出土石器实测图 40~49 (1:3) 50 (1:6)

壁は、ロームで傾斜地に構築されているため高さに違いがみられ、東壁は19cm、西壁は20cm、南壁は29cm、北壁は15cmを計り、その立ち上がりは緩やかであり良くない。

周溝は、西壁直下でみられたが、溝と小ピットを組み合わせたものである。なお、P16とP20は周溝状の溝で結ばれている。

床面は、ロームで硬く壁際がやや高くなる以外はほぼ平らである。

柱穴は、数多く検出されたが埋土等から時間差を示すことができない。しかし、全てが同時に存在したとは考えられないものであり、3回から4回を数える同心円上建て直しが行われているようである。建て直しは考えるが時間差を示すことができないため、支柱穴の位置を柱A、柱B、柱Cというように仮定すると、柱A地点にP13、P14、P21の3基、柱B地点にP1、P10、P11の3基、柱C地点にP3、P4、P5、P12の4基、柱D地点にP6、P7、P18、P19の4基、柱E地点にP8、P9、P17の3基、柱F地点にP16、P28、P29の3基がみられる。柱E地点と柱F地点の間隔は他の支柱穴よりも狭くここが入口部と思われる。本址は緩やかな北斜面に構築されているため入口部の南壁が高くなり、P20は入口施設に係るものと思われる。大きな住居地であるためP2も支柱穴の可能性は高いが、他の支柱穴と違い単独でありいま一つははっきりしない。P15は一部袋状となり貯蔵穴の可能性が高い。なお、P30～P32の3基には貼り床が施されていたが、柱穴状のものばかりである。

炉址は、方形石囲炉である。5個の石をコの字形に埋めた石囲炉であるが、石のない西辺は抜かれた可能性を考えたい。炉石の中には火熱で割れたものもみられたが、わずかな焼土があるだけで底面の焼土化も弱いものである。なお、炉内から黒曜石の剥片1点が出土した。

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16
長軸	76	65	53	52	56	80	66	50	35	54	40	37	63	84	75	50
短軸	58	56	50	42	54	35	55	42	25	47	32	30	50	53	60	46
深さ	75	58	46	45	35	53	55	46	37	58	44	24	59	46	63	33

	P17	P18	P19	P20	P21	P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28	P29	P30	P31	P32
長軸	50	43	40	35	50	23	30	40	20	37	21	60	62	42	40	38
短軸	35	30	36	30	45	14	23	14	15	15	15	24	28	40	15	40
深さ	44	52	50	41	58	27	20	32	36	24	28	67	23	38	40	45

遺物は、多く土器と石器がある。

土器は、第51図の4点を図示した。4は浅鉢である。復原するまでに至らず図示することはできなかったが、同個体と思われる破片が19点あり、その他に破片は402点がある。

石器は、剥片類を含めると312点あり、第51～53図の46点を図示した。器種別にみると5～9は石鏃、10・11は石錐、12・13は不定形石器、14～29は打製石斧で、14～17の4点は打製石斧と違う用途が考えられるがここでは打製石斧としておきたい。22は横刃形石器かもしれない。30～36は横刃形石器、37は石匙、38～47・49・50は凹石・磨石類で、49は台石かもしれない。48は先端研滅石器である。図示しなかったが安山岩製の台石は3点あり、2点には擦れみられ、1点には打痕がみられる。剥片類は259点である。

第10号竪穴住居址（第54～59図、写真28～30・125～128・141・222～226）

第3号竪穴住居址南西のC-5・6グリッドで検出した。ローム粒をわずかに含む黒褐色土の落ち込みを認めたが、この辺りは黒色土の堆積が厚く、南側の半分位は黒色土中に構築されていた。先行トレンチを設定し状況把握につとめ、わずかな色調の変化を手がかりに輪郭を把握した。

埋土は、先行トレンチと直交する土層ベルトで観察したが、色調の変化に乏しく細分できる状態ではなく、ローム粒をわずかに含む黒褐色土の単層とした。しかし、下層ほどローム粒は多くレンズ状堆積であり自然埋没と考えたい。

出土した遺物は、上層にまとまっていたがそれほど多くない。なお、上記したように黒色土の堆積が厚く住居プラン検出に苦慮した所で、小竪穴状遺構の存在を捨てることができないこともあり、単に混入遺物として片付けてよいのか判断に苦しむが、墨書がみられる土師器破片第143図11と灰釉陶器の碗10が出土している。

平面形は、長軸460cm、短軸440cmの円形である。

壁は、北寄りにはローム、南寄りには黒色土となるが傾斜地に構築されているため高さに違いがみられ、東壁は47cm、西壁は39cm、南壁は38cm、北壁は42cmを計り、その立ち上がりは緩やかでありあまり良くない。

周溝は、検出できなかったが北寄りの壁直下に小ピットが周り、これらの小ピットが周溝と同様の役割をはたしていたものと思われる。なお、小ピットは3基ないしは4基がひとつのまとまりを持っているように見える。

床面は、ロームで硬くほぼ平らである。

柱穴は、P3、P4、P6、P1の4基が主柱穴である。P7とP9は対になるかもしれない。P5は浅く炭化物と焼土が詰り土器破片が出土しているが、ほかの住居址ではみられないもので性格は不明である。

炉址は、埋甕炉と古い地床炉がある。埋甕炉は深鉢の胴部を埋設したものであり、わずかな炭化物と焼土はみられたが、底面は焼土化していない。埋甕炉の東に地床炉が残存していたが、埋甕炉の埋設穴に切られており確実に時間差が認められるものであり、埋甕炉が新しく地床炉が古いことになる。したがって、本址の火処は地床炉から埋甕炉に替わったことになる。なお、炉内から黒曜石の剥片1点が出土している。

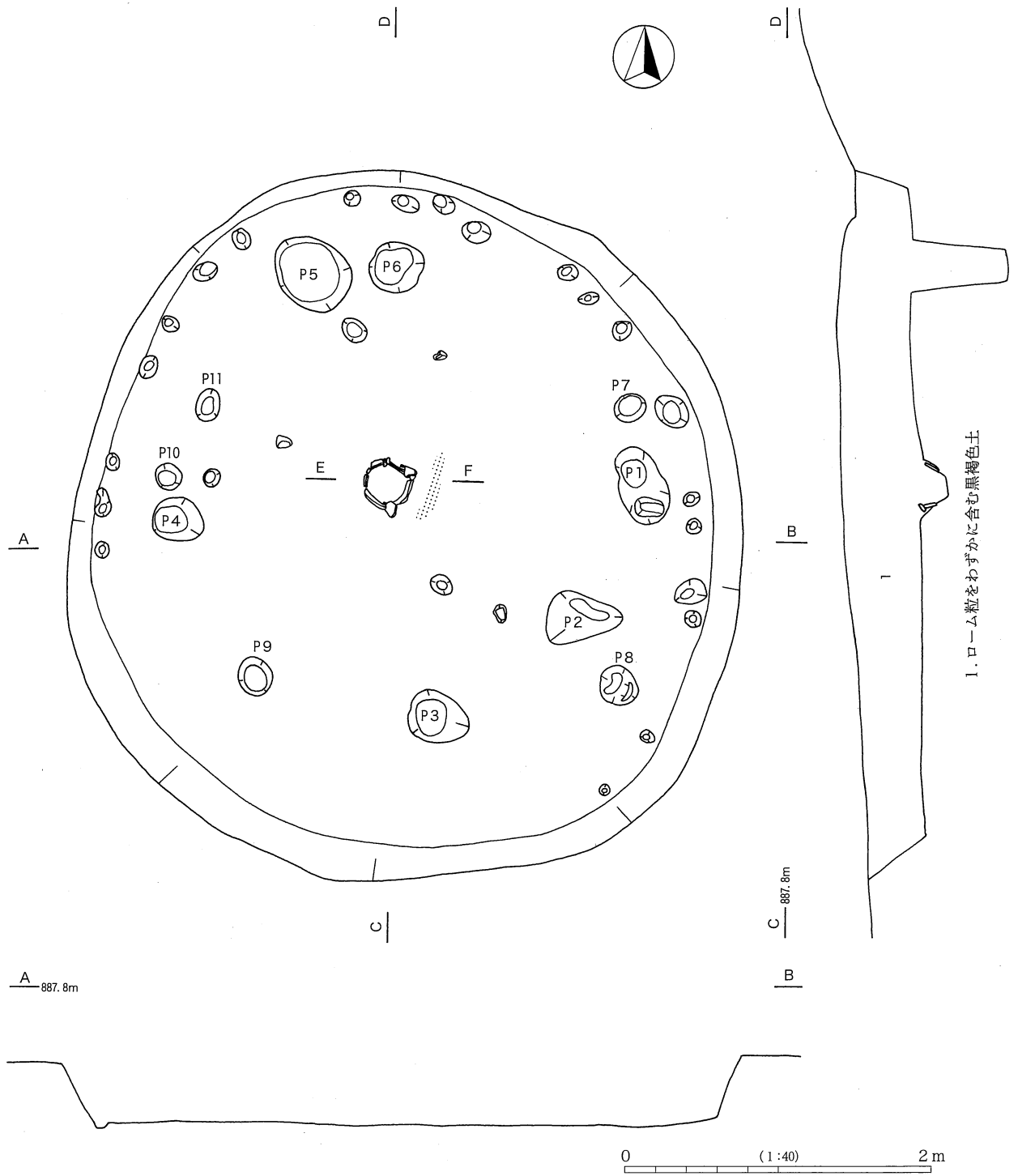
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11					
長軸	52	50	42	35	53	37	20	28	26	18	22					
短軸	28	34	33	28	43	33	18	23	22	16	15					
深さ	50	17	51	45	11	61	14	15	51	38	47					

遺物は、土器・土製品・石器がある。

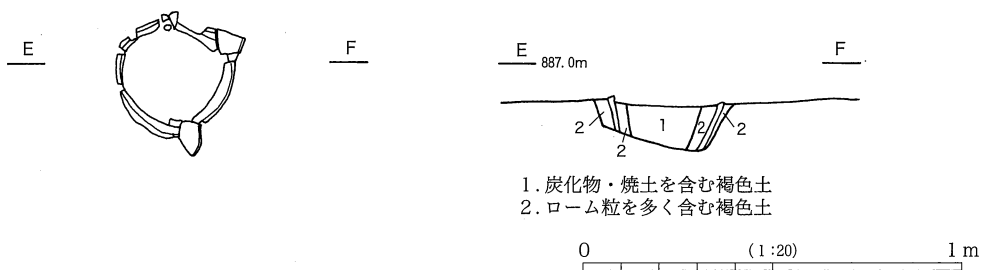
土器は、第55～57図の9点を図示した。6は浅鉢で、9は炉体土器である。復原するまでに至らず図示することはできないが、土器一覧表に示したように同個体と思われる破片が多く19個体を数え、個体によりその破片数は違うが総数は535点で、その他に破片973点がある。

土製品は、第57図10の土器破片利用の土製円盤がある。

石器は、剥片類を含めると477点あり、第57～59図の52点を図示した。器種別にみると11～16は石鏃、17・18は石錐、19・55は石匙、20は不定形石器、21～47は打製石斧、48～54は横刃形石器、56・62は乳棒状磨製石斧、57～61は凹石・磨石類、図示しなかったが剥片類は419点である。



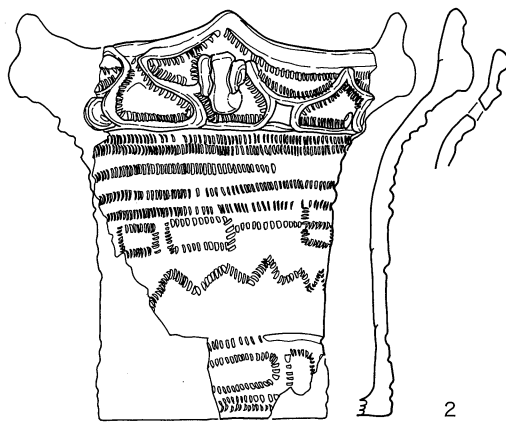
1. ローム粒をわずかに含む黒褐色土



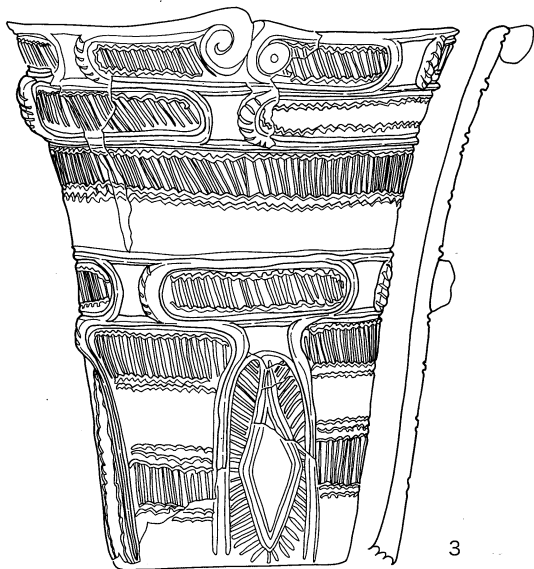
第54図 第10号竪穴住居址実測図



1



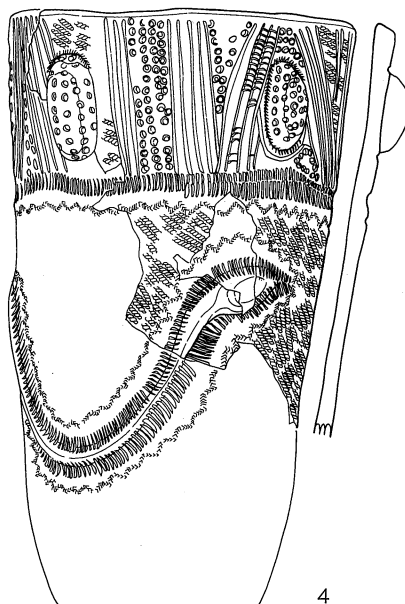
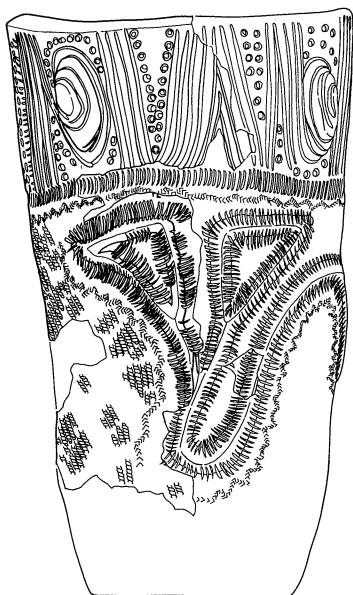
2



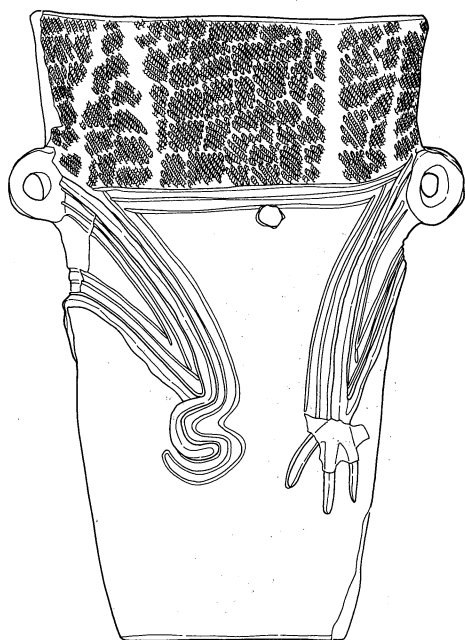
3

0 10cm

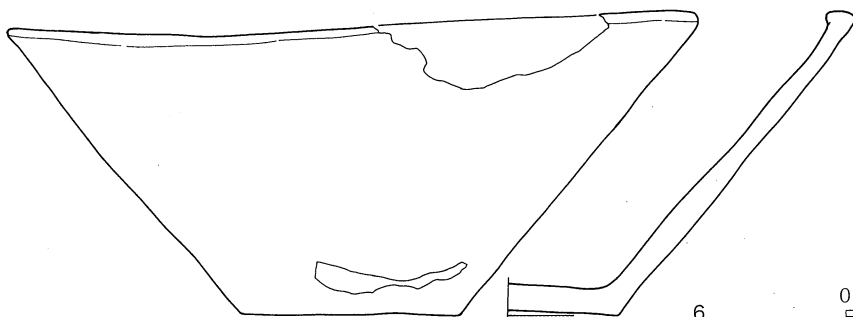
第55图 第10号竖穴住居址出土土器实测图(1:4)



4



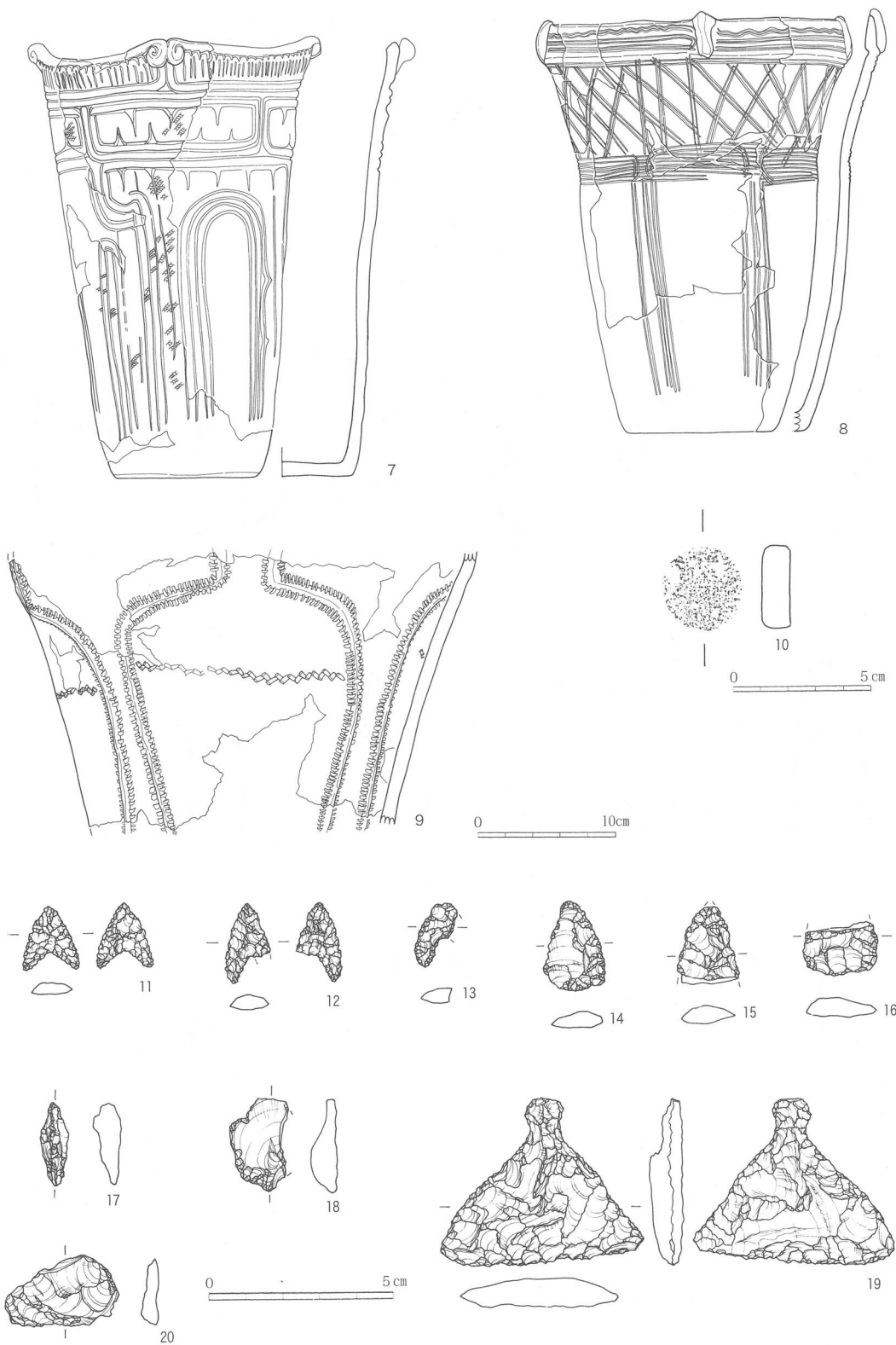
5



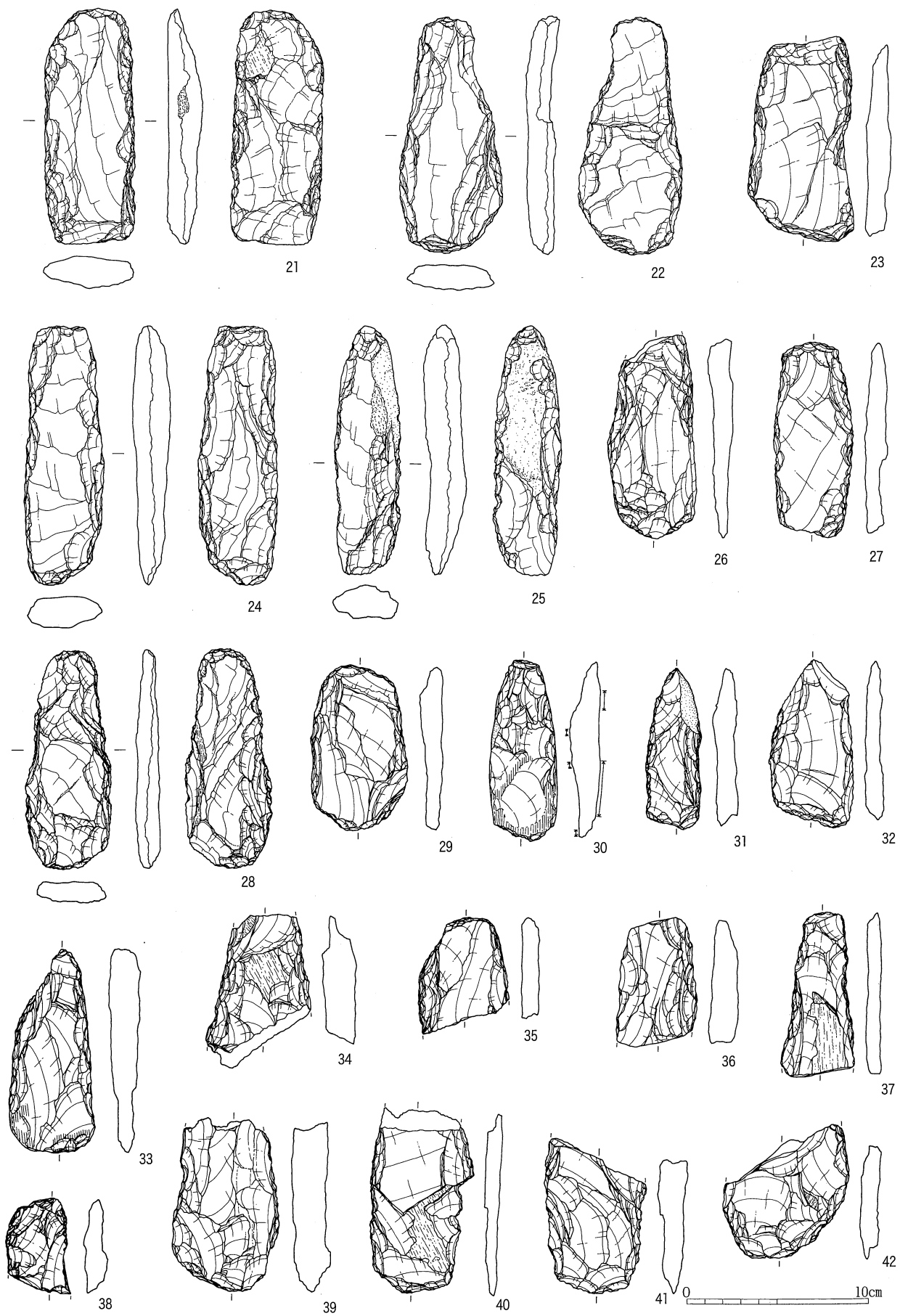
6

0 10cm

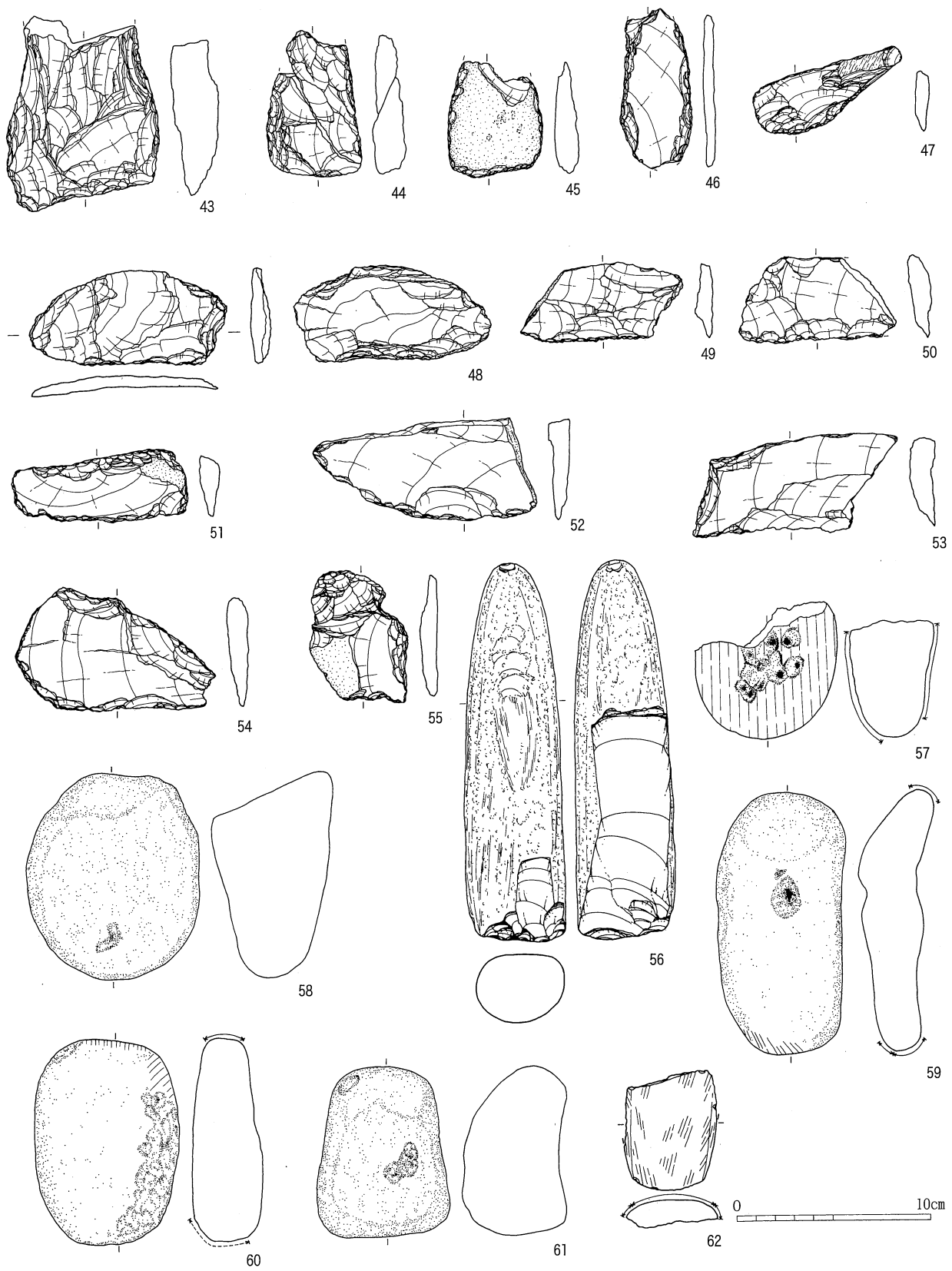
第56图 第10号竖穴住居址出土土器实测图 (1:4)



第57图 第10号竖穴住居址出土土器·土製品·石器实测图 7~9 (1:4) 10 (1:2) 11~19 (2:3)



第58图 第10号竖穴住居址出土石器实测图 (1:3)



第59图 第10号竖穴住居址出土石器实测图 (1:3)

第11号竪穴住居址（第60～61図、写真31・32・129）

第10号竪穴住居址西のC-7グリッドで検出した。ローム層にローム粒と炭化物を含む褐色土の明確な落ち込みを認めた。耕作による大きな畝が東西方向に走り、南西部では近現代のタメ址2と重複している。当初は規模が小さいこともあり小竪穴と考えるなかで精査を進めたが、炉址を検出したことにより住居址としたものである。タメ址2との重複関係は、タメ址2が確実に本址を切るものであり、タメ址2が新しく本址が古いことになる。

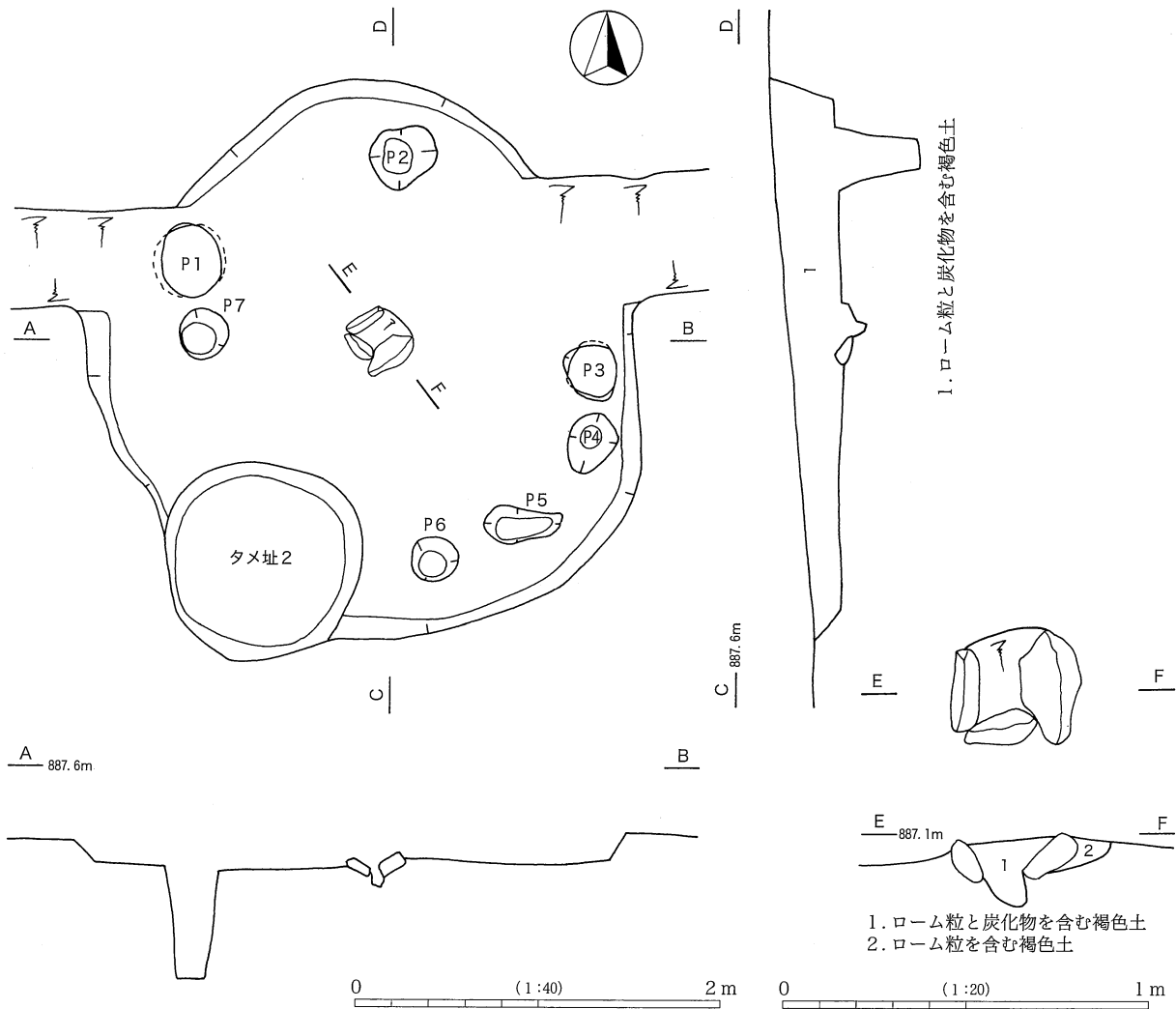
埋土は、土層ベルトを残し観察したが、色調の変化に乏しく細分できる状態ではなく、ローム粒と炭化物を含む褐色土の単層とした。しかし、下層ほどローム粒は多く基本的にはレンズ状堆積であり自然埋没と考えたい

出土した遺物は少なく、すべて床から浮いた状態である。

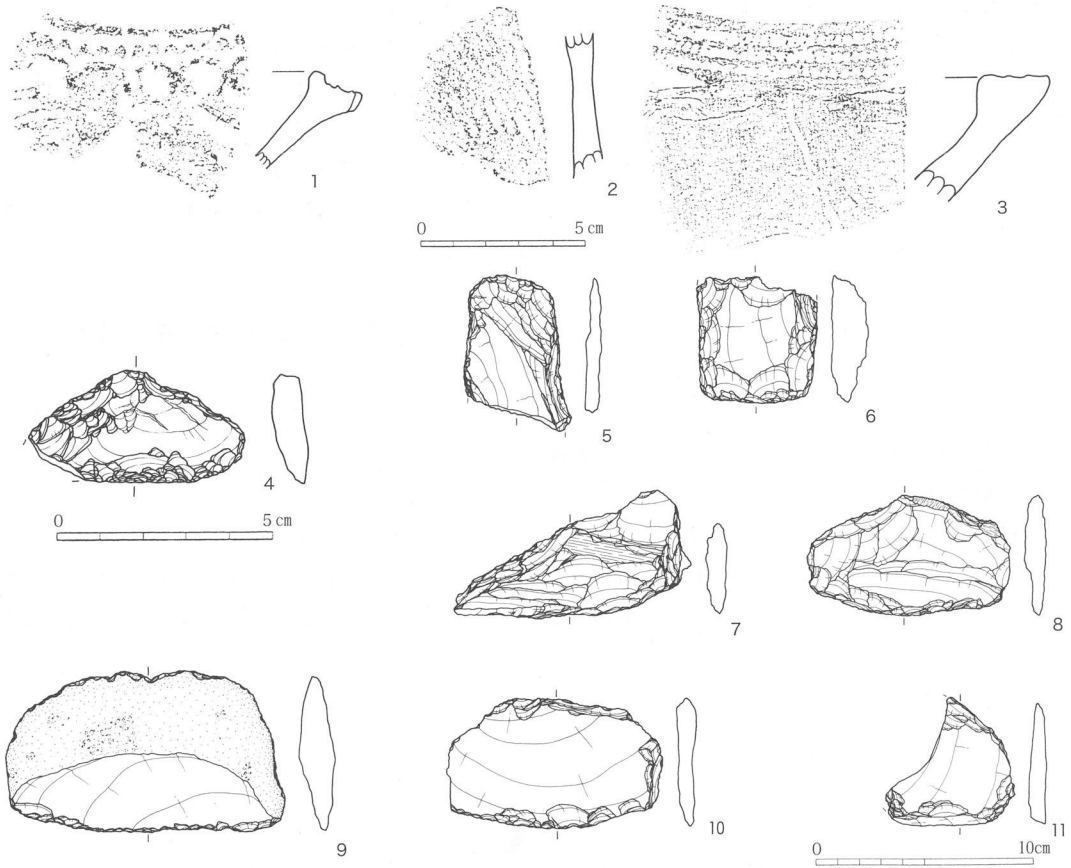
平面形は、長軸308cm、短軸300cmの円形であるが、耕作の大きな畝より南側は掘りすぎたようである。

壁は、ロームで傾斜地に構築されているうえに耕作による削平もみられ高さに違いはあるが、東壁は12cm、西壁は10cm、南壁は13cm、北壁は20cmを計り、その立ち上がりは良いが、耕作の畝とタメ址2によって破壊された個所がある。

周溝は、検出できなかった。



第60図 第11号竪穴住居址実測図



第61図 第11号竪穴住居址出土土器拓影、石器実測図 1~3 (1:2) 4 (2:3) 5~11 (1:3)

床面は、ロームで硬くほぼ平らである。

柱穴は、P 6、P 7、P 2、P 4の4基が支柱穴である。P 5は入口部に係るものであろう。P 1とP 3は一部袋状になり貯蔵穴の可能性が高いようである。なお、P 1から横刃形石器2点が出土している。

炉址は、方形石囲炉である。3個の石をコの字形に据え付けたものであるが、石のない東辺は抜かれた可能性を考えたい。炉内および周囲から炭化物や焼土を検出することはできなかったし、底面は焼土化していない。

	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7							
長軸	42	36	31	36	43	26	27							
短軸	33	31	27	25	19	24	27							
深さ	60	45	33	72	11	62	59							

遺物は、土器と石器がある。

土器は、少なく破片12点が出土しただけであり、第61図1~3の3点を図示したが、3は浅鉢である。

石器は、少なく剥片類を含めても20点で、第61図の8点を図示した。器種別にみると4は不定形石器、5・6は打製石斧、7~11は横刃形石器である。図示しなかったが剥片類が12点である。

第12号竪穴住居址（第62・63図、写真33～35・130・139・141・227～229）

第5号竪穴住居址西のE-10・F-10グリッドで検出した。ローム層にローム粒と炭化物をわずかに含む褐色土の落ち込みを確認したが、その規模は住居址と考えるには小さいこともあり、やや大きな小竪穴ないしは攪乱穴と考え精査を進めたが、炉址を検出したことにより住居址としたものである。

埋土は、直交する土層ベルトで観察したが、色調の変化に乏しく細分できる状態ではなく、ローム粒と炭化物をわずかに含む褐色土の単層である。しかし、下層ほどローム粒が多く基本的にはレンズ状堆積であり自然埋没と考えたい。

出土した遺物は少ないが、炉体土器は神顔付土器が使われていた。

平面形は、長軸290cm、短軸274cmを計り、北壁に直線部分もみられるがこの時期の基本形態である円形としておきたい。

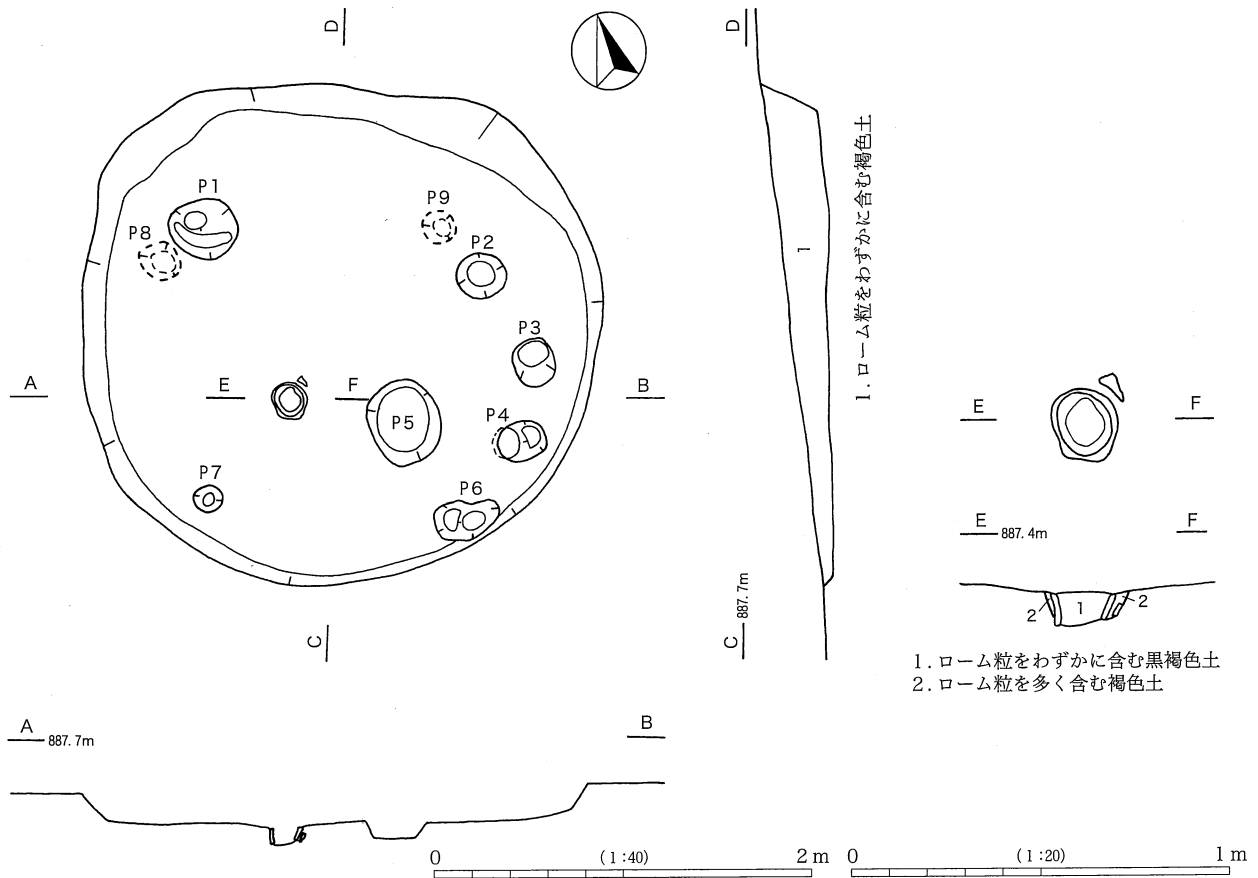
壁は、ロームで傾斜地に構築されているため高さに違いがみられ、東壁は17cm、西壁は12cm、南壁は4cm、北壁は31cmを計り、その立ち上がりは普通である。

周溝は、検出できなかった。

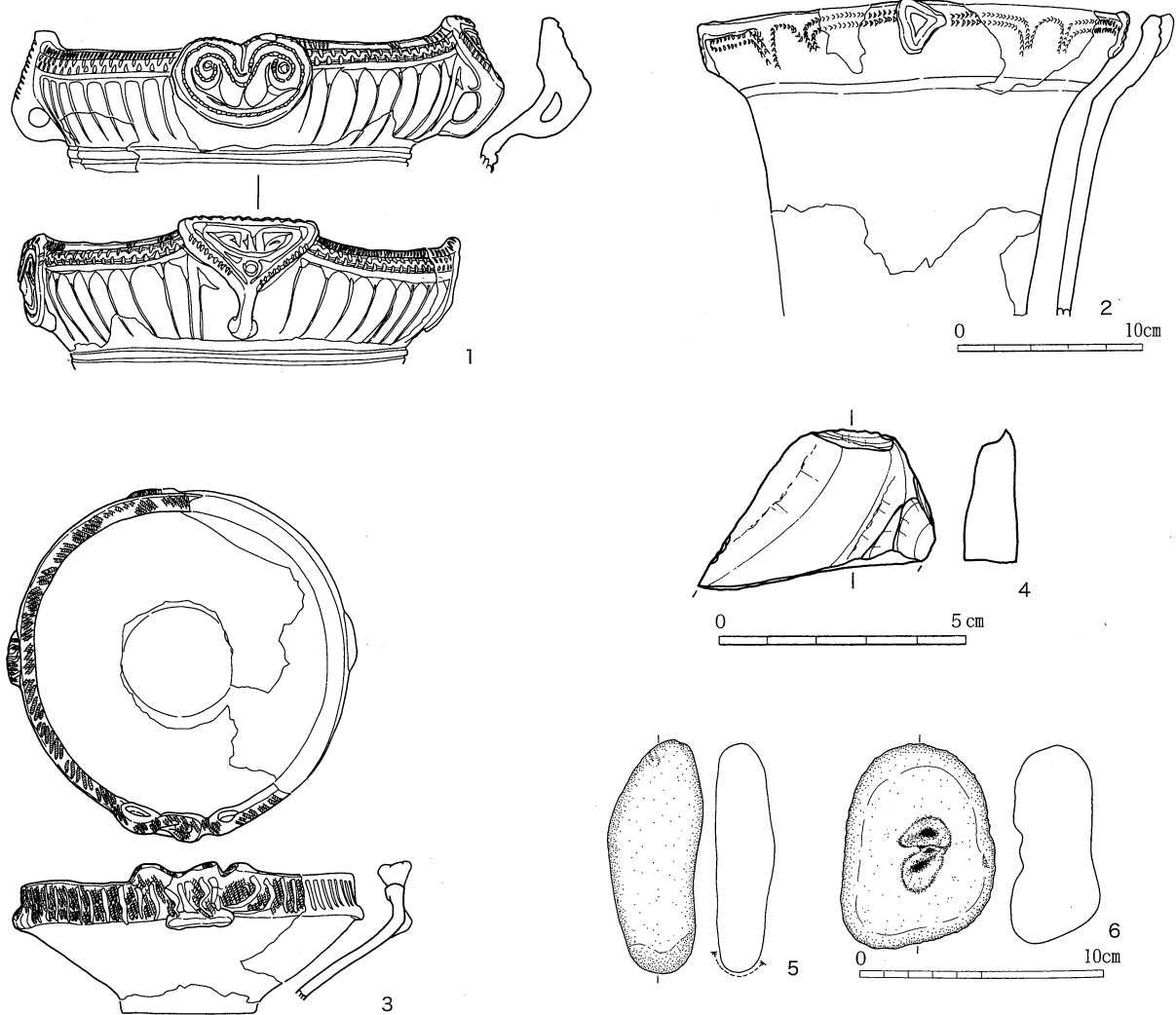
床面は、ロームで硬くほぼ平らである。

柱穴は、変則的な配列であり支柱穴を特定することはできないが、P1～P4とP6の5基はその規模から柱穴と思われる。東壁際に4基が並びあまりにも片寄っている。貼り床が施されていたものはP8・P9の2基で古い柱穴と思われる。

炉址は、埋甕炉である。2個体の口縁部を入れ子状に埋設したものであるが、外側の炉体土器は欠損



第62図 第12号竪穴住居址実測図



第63図 第12号竪穴住居址出土土器・石器実測図 1～3 (1:4) 4 (2:3) 5・6 (1:3)

部が多くみられるため補強によるものか、当初からのものであるか不明である。外側の炉体土器は第63図1の神顔付土器である。わずかに焼土がみられただけであり、底面は焼土化していない。

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9						
長軸	37	27	25	27	44	25	16	25	19						
短軸	33	23	22	20	36	19	13	19	17						
深さ	40	45	35	42	11	32	20	33	19						

遺物は、土器と石器がある。

土器は、第63図の3点を図示した。3は浅鉢で搬入されたものである。1と2は炉体土器である。図示することはできなかったが破片は81点ある。

石器は、少なく剥片類を含め7点で、第63図の3点を図示した。器種別にみると4は打製石斧、5・6は凹石・磨石類である。図示しなかったが剥片類は4点である。

第13号竪穴住居址（第64～66図、写真36～38・131～133・141・230～232）

第7号竪穴住居址東のF-7・G-7グリッドで検出したが、ここは緩やかな北斜面である。検出作業では遺物の出土が少なく時間を要したが、ローム層にローム粒と炭化物をわずかに含む褐色土の落ち込みを認めた。

埋土は、直交する土層ベルトで観察し2層に大別した。1層はローム粒と炭化物をわずかに含む褐色土、2層はローム粒と炭化物を含む褐色土であるがローム粒は1層よりも大きくなる。ローム粒の包含量で分けたレンズ状堆積であり自然埋没と考えたい

出土した遺物は少ない。P3から石皿が出土したが、皿部が極めて浅い製作途上と思われるもので、ピットの性格を示唆しているようである。炉址の南方からは作業台と思われる平板石が出土したが、本遺跡では第18号住居址に同様な資料があるだけであり、発見例は少なく注意されるものである。

平面形は、長軸480cm、短軸444cmを計り、東壁に直線部分もみられるがこの時期の基本形態である円形としておきたい。

壁は、ロームで傾斜地に構築されているため高さに違いがみられ、東壁は32cm、西壁は39cm、南壁は47cm、北壁は19cmを計り、その立ち上がりは緩やかで良くない。

周溝は、検出できなかった。

床面は、ロームで硬く壁際がやや高くなる以外はほぼ平らである。

柱穴は、P7、P5、P4、P2の4基が支柱穴である。本址は緩やかな北斜面に構築されているため入口部の南壁が高くなり、P9とP8は浅いピットであるが入口施設に係るものと思われる。P1は一部袋状となり貯蔵穴の可能性が高い。P3は石皿が出土したピットでありその位置関係から貯蔵穴と考えておきたい。P10～P15の6基は精査の最終段階で確認したものであり、古い可能性は高いが明確なことはわからない。

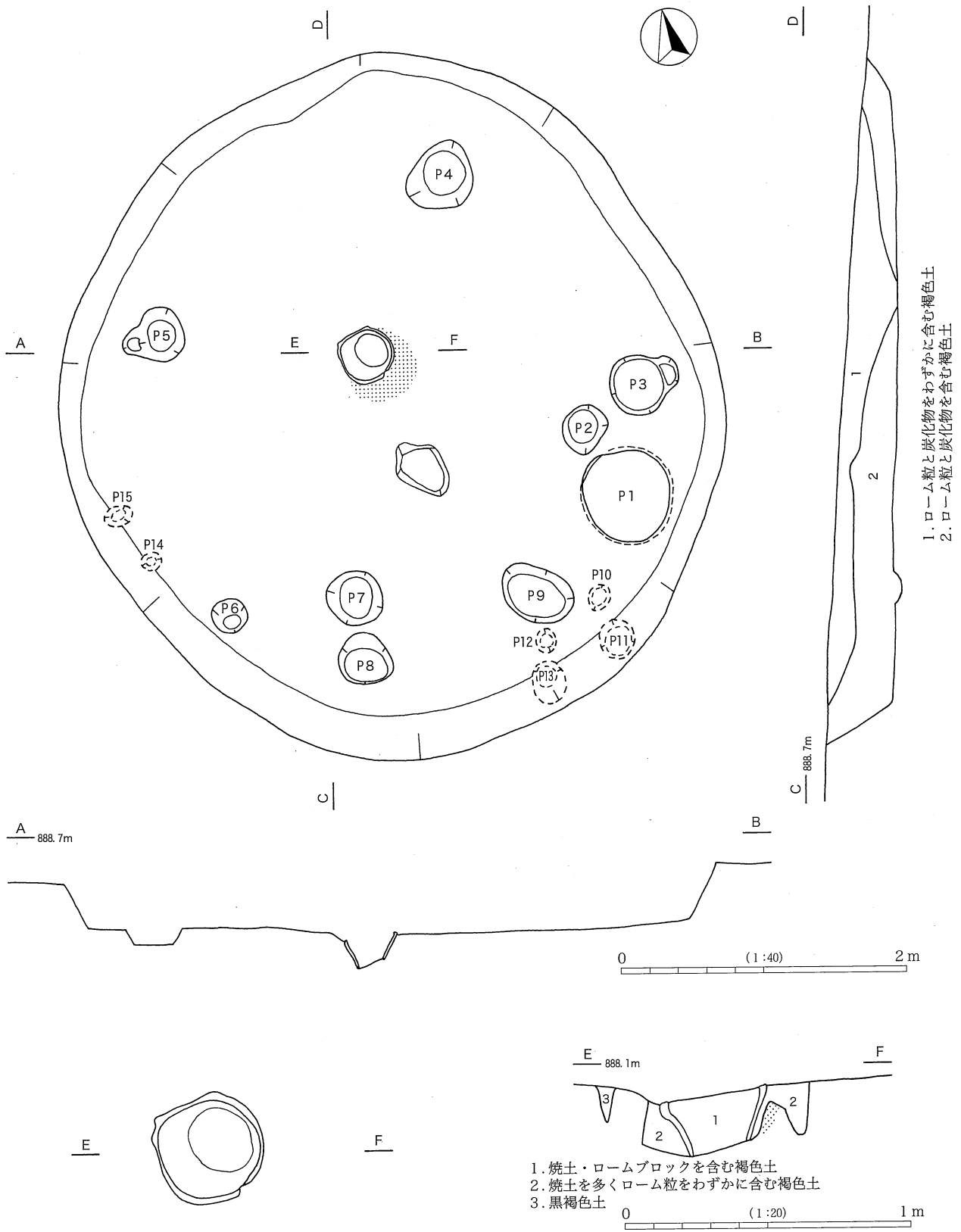
炉址は、埋甕炉と地床炉がある。埋甕炉は口縁部を埋設したものであるが、底面は焼土化していない。炉体土器は南側に大きく傾いていたが、埋設用の穴が大き過ぎ大雑把な埋設によって生じたものと考えたいが、内面の一部がかなり荒れていることが気掛かりで、傾ける必用があったのかも知れない。埋甕炉の南東に地床炉が隣接し、地床炉に付属する灰溜めと考えることもできるが、このような事例は聞いていない。地床炉は一見埋甕炉に切られているようにみえるが、埋設土器際まで焼土化しており、平面観察では新旧関係を明らかにすることはできなかったが、埋設状態を示す断面図に示したように、埋め戻した土の上面が焼土化していることが理解でき、この事実関係は地床炉が新しいことになるが、ここでは埋甕炉と地床炉は併用されていたと考えておきたい。次に、断面図に示したように炉体土器埋設のために掘り込まれたローム面の一部が焼土化しており、それは埋め戻されていたことから、埋甕炉よりも古い焼土が存在していたことが理解できものであり、本址も炉址の作り替えが行われているようである。

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	
長軸	67	35	48	50	43	26	43	39	54	19	27	18	30	16	22	
短軸	59	34	43	42	39	23	37	36	37	16	25	14	22	13	14	
深さ	68	65	57	74	68	18	60	15	18	26	36	38	54	49	21	

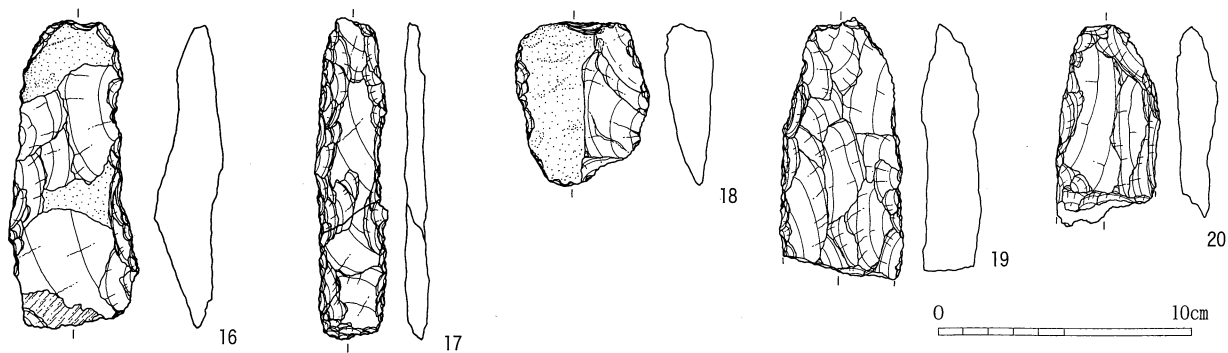
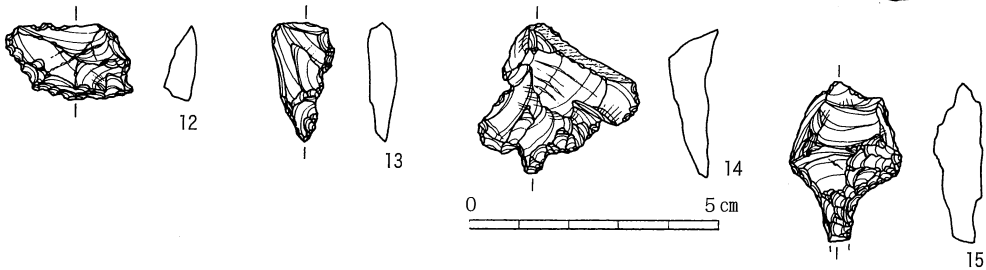
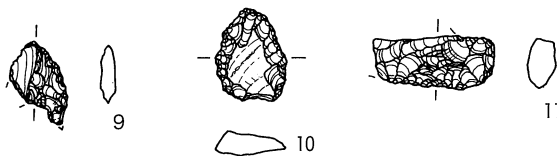
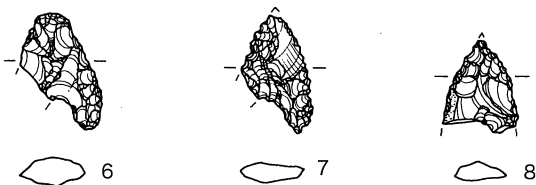
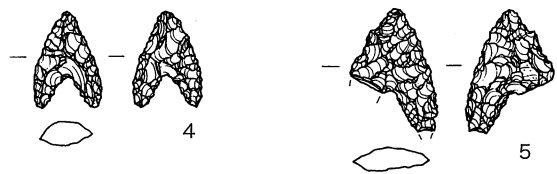
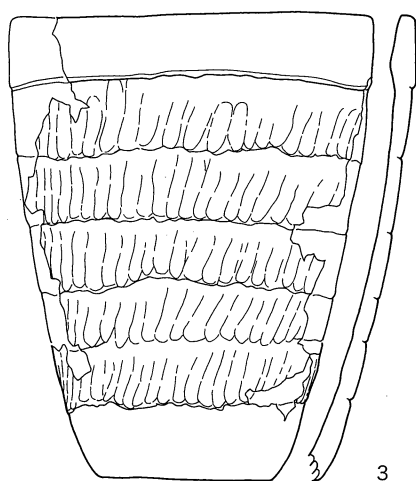
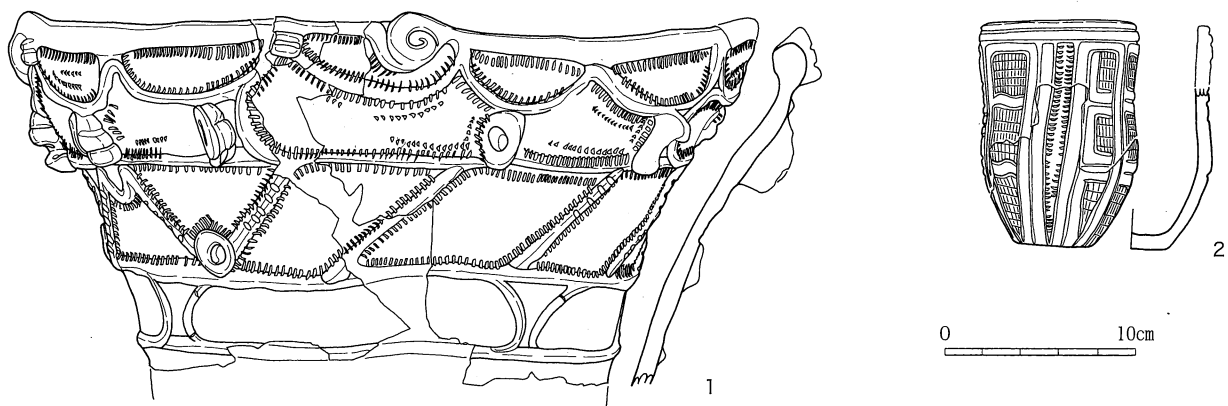
遺物は、土器と石器がある。

土器は、第65図の3点を図示した。1は炉体土器である。復原するまでに至らず図示することはできないが、同個体と思われる破片が2個体あり、個体により破片数は違うが90点で、その他にも破片181点がある。

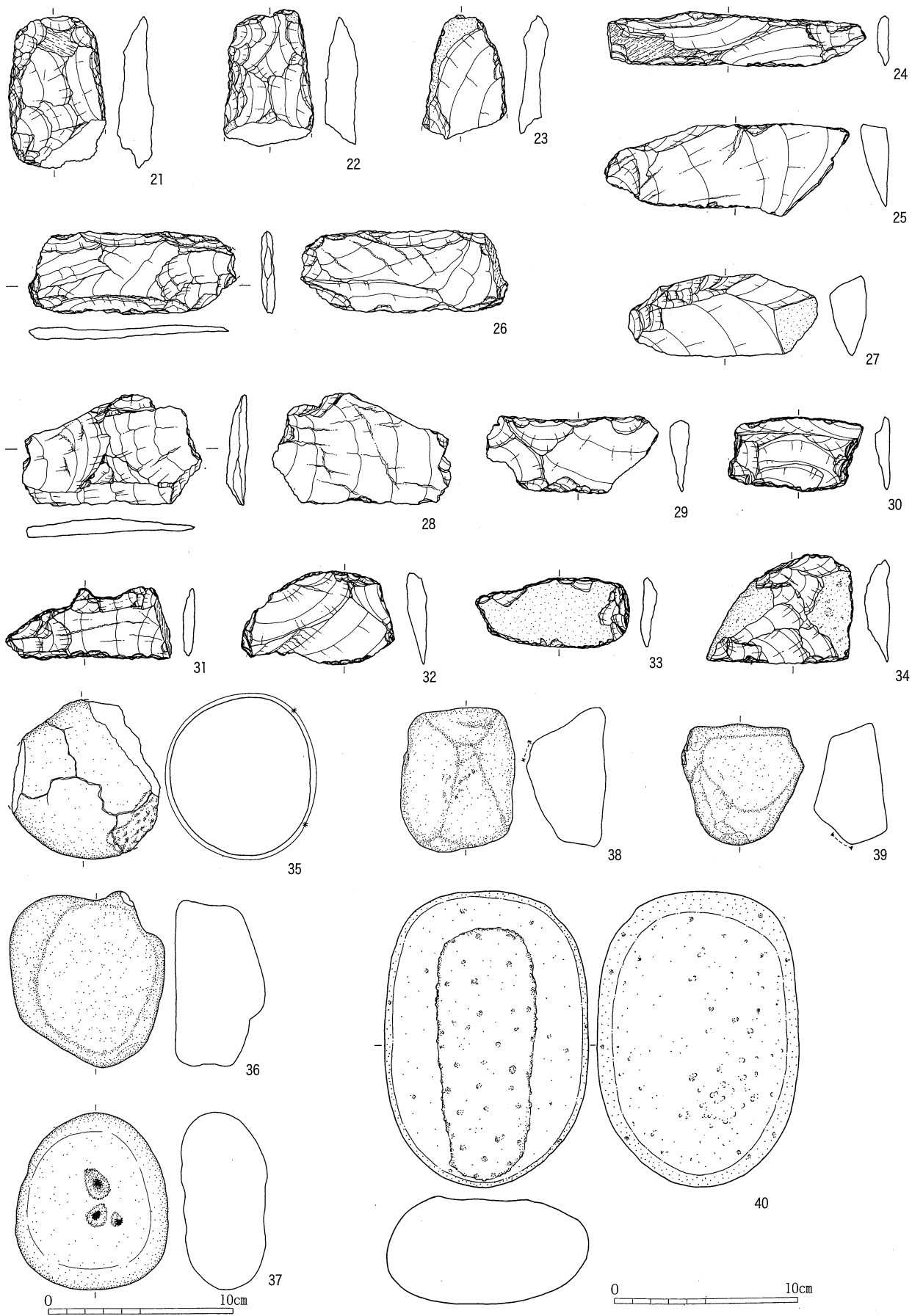
石器は、剥片類を含めると212点あり、第65・66図の37点を図示した。器種別にみると4～10は石鏃、



第64図 第13号竪穴住居址実測図



第65图 第13号竖穴住居址出土土器·石器实测图 1~3 (1:4) 4~15 (2:3) 16~20 (1:3)



第66图 第13号竖穴住居址出土石器实测图 21~39 (1 : 3) 40 (1 : 6)

11・12は不定形石器、13～15は石錐、16～23は打製石斧で、18は打製石斧と用途が違うようであるがここでは打製石斧としておきたい。24～34は横刃形石器で、31は石匙かもしれない。35～37は凹石・磨石類、38・39は敲石、40は石皿である。図示しなかったが剥片類は171点である。

第14号竪穴住居址（第67・68図、写真39・40・139・141）

第12号竪穴住居址西のF-10・11、E-10・11グリッドで検出した。ローム層にローム粒をわずかに含む褐色土の比較的明瞭な落ち込みを認めたが、規模が小さいこともあり住居址との確信がもてないまま精査を続けた。

埋土は、直交する土層ベルトで観察したが、色調の変化に乏しく細分できる状態ではなく、ローム粒をわずかに含む褐色土の単層である。しかし、下層ほどローム粒が多く基本的にはレンズ状堆積であり自然埋没と考えたい。

出土した遺物は少なく、特記することはない。

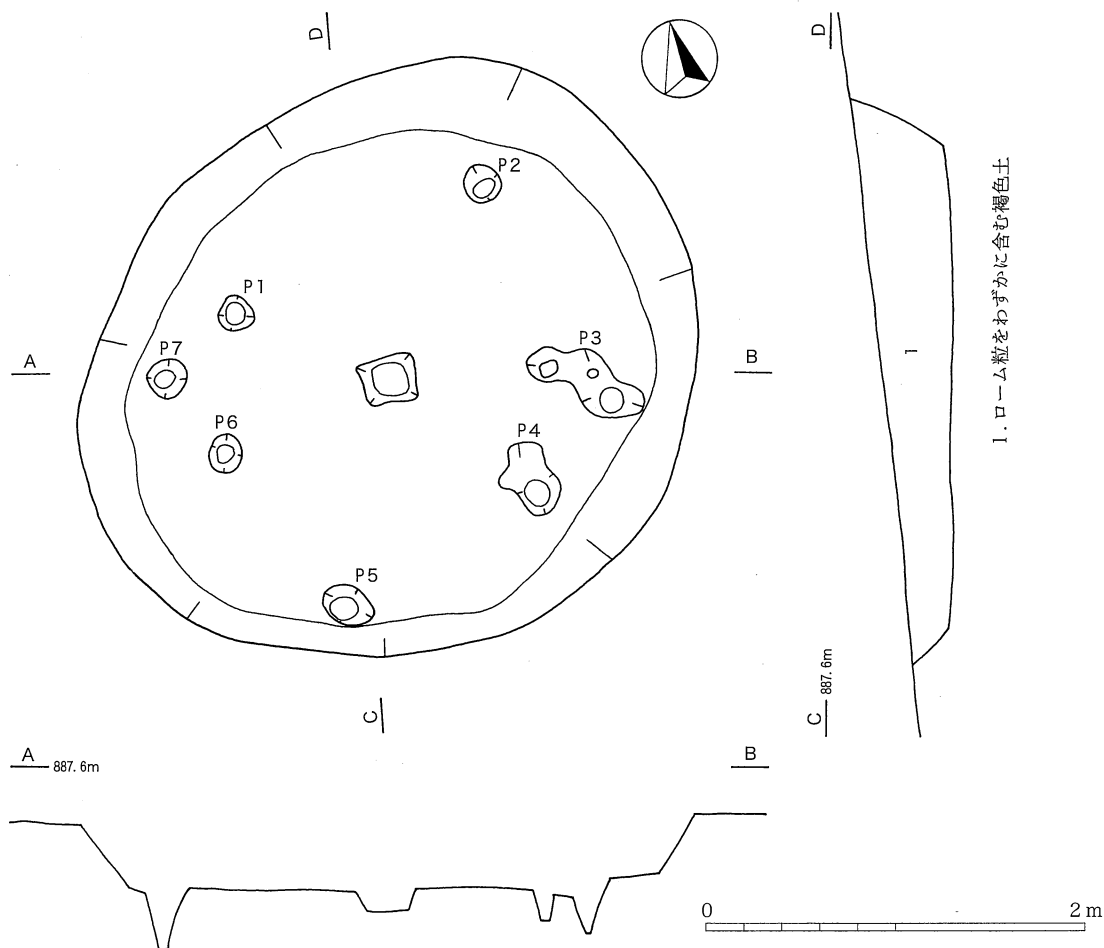
平面形は、長軸344cm、短軸300cmの楕円形である。

壁は、ロームで傾斜地に構築されているため高さに違いがみられ、東壁は41cm、西壁は35cm、南壁は19cm、北壁は52cmを計り、その立ち上がりは緩やかで良くない。

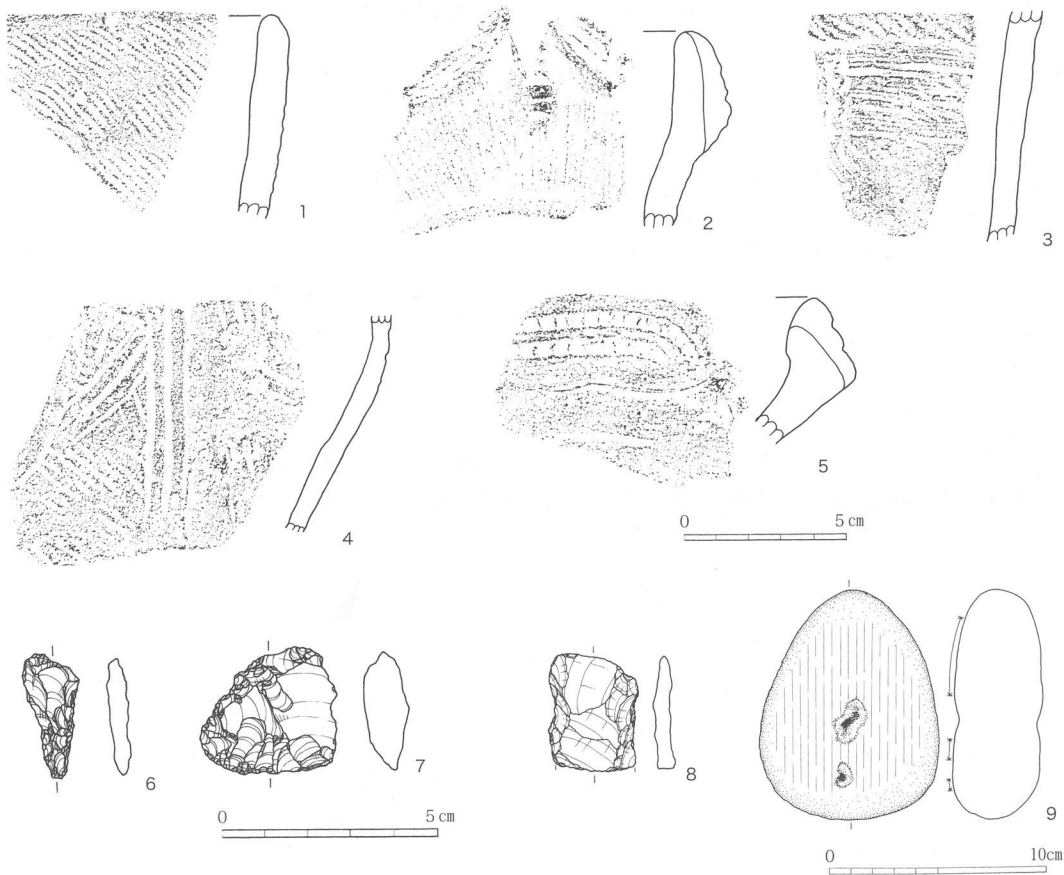
周溝は、検出できなかった。

床面は、ロームで硬く壁際がやや高くなる以外はほぼ平らである。

柱穴は、P1～P7の7基を検出したが、似通ったものであり主柱穴を特定することはできないが、



第67図 第14号竪穴住居址実測図（1：40）



第68図 第14号竪穴住居址出土土器拓影、石器実測図 1～5 (1:2) 6・7 (2:3) 8・9 (1:3)

その位置関係からP1、P2、P3、P5の4基が主柱穴であろう。

炉址は、検出できなかった。住居中央の方形ピットがその位置にあたり、焼土は確認できなかったが炉址の可能性を考えたい。該期にこのような竪穴炉の事例を聞いていないため、炉石が抜かれたものとしておきたい。

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7							
長軸	20	21	32	50	30	21	23							
短軸	17	20	20	21	22	18	22							
深さ	40	33	39	40	34	34	40							

遺物は、土器と石器がある。

土器は、少なく破片が166点出土したが第68図の5を図示した。5は浅鉢である。

石器は、剥片類を含め47点あり、第68図の4点を図示した。器種別にみると6は石錐、7は不定形石器、8は打製石斧、9は凹石・磨石類である。図示しなかったが剥片類は25点である。

第15号竪穴住居址 (第69～71図、写真41～43・139・142)

第6号竪穴住居址西のE-8・9グリッドで検出した。ロームに褐色土の落ち込みを確認したが、規

模が小さいこともあり住居址との確信がもてないまま精査を進めたが、炉址を検出しことにより住居址としたものである。

埋土は、直交する土層ベルトで観察し2層に大別した。1層は黒褐色土、2層はローム粒と炭化物をわずかに含む褐色土であるが、ローム粒の有無の違いで分けたものであり、下層ほどローム粒が多いレンズ状堆積であり自然埋没と考えたい。

出土した遺物は少なく、特記することはない。

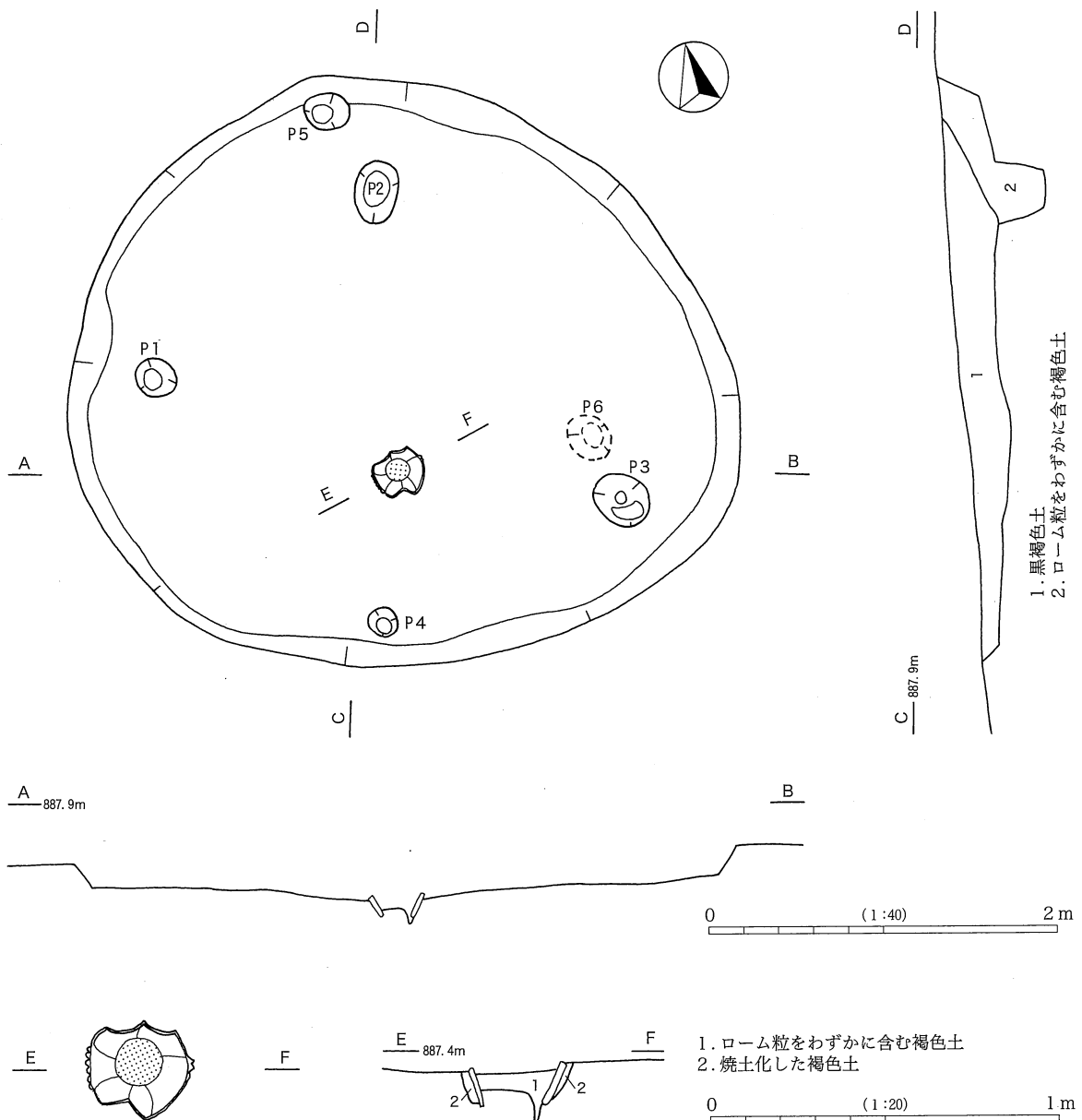
平面形は、長軸388cm、短軸336cmの楕円形である。

壁は、ロームで傾斜地に構築されているため高さに違いがみられ、東壁は23cm、西壁は12cm、南壁は6cm、北壁は30cmを計り、その立ち上がりはあまり良くない。

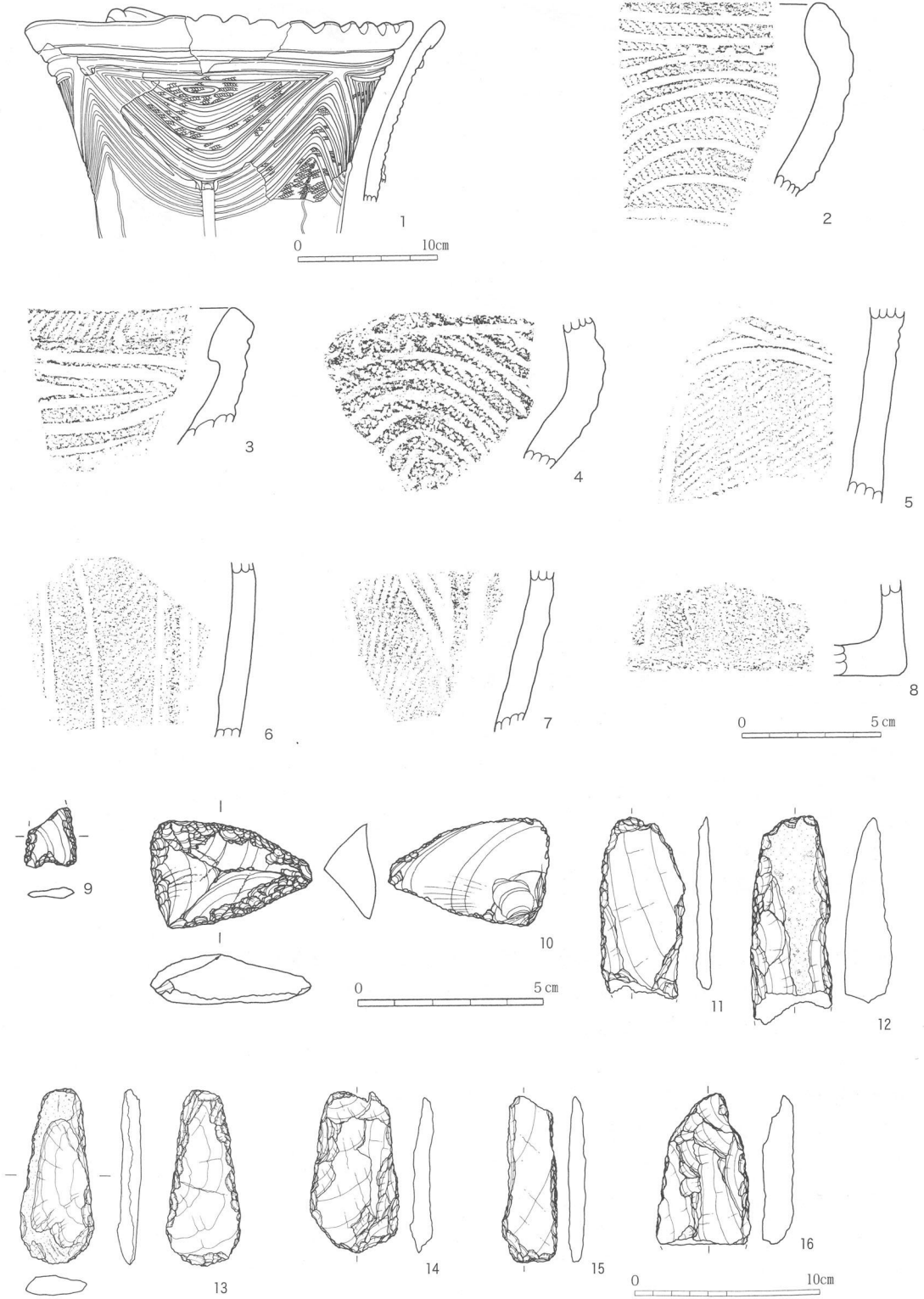
周溝は、検出できなかった。

床面は、ロームで硬く壁際がやや高くなる以外はほぼ平らである。

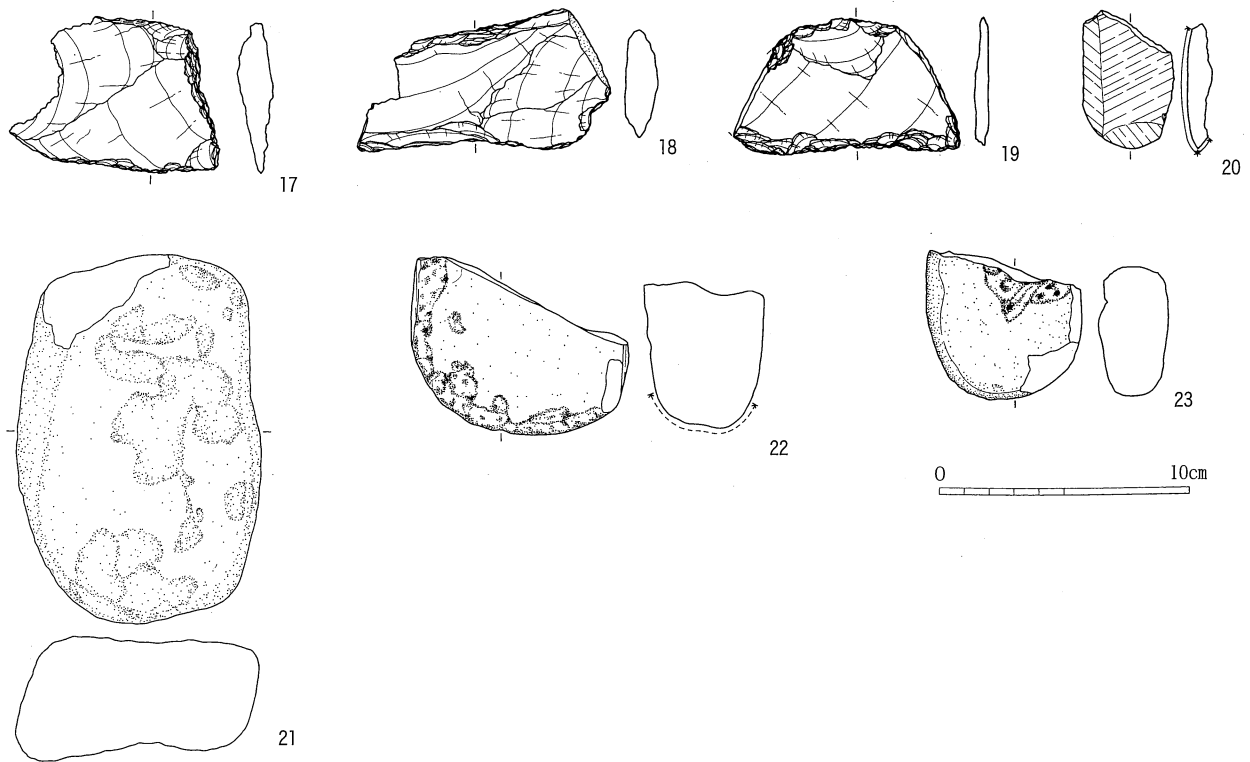
柱穴は、P1～P4の4基が支柱穴であり、P5は北壁に接している。P6には貼り床が施されているが規模からみると柱穴状であり、柱の建て替えが考えられるものである。



第69図 第15号竪穴住居址実測図



第70图 第15号竖穴住居址出土土器·石器实测图、土器拓影 1(1:4) 2~8(1:2) 9·10(2:3) 11~16(1:3)



第71図 第15号竪穴住居址出土石器実測図（1：3）

炉址は、埋甕炉である。口縁部を埋設したものであるが住居の南側に寄っている。周辺でもわずかな焼土があり、炉内には焼土の塊がみられ底面は焼土化している。

	P1	P2	P3	P4	P5	P6									
長軸	25	37	35	18	27	30									
短軸	22	25	28	17	21	23									
深さ	42	48	33	46	20	40									

遺物は、土器と石器がある。

土器は、少なく第70図の8点を図示した。1は炉体土器で、2の内面には漆と思われる付着物がみられる。その他に破片は285点がある。

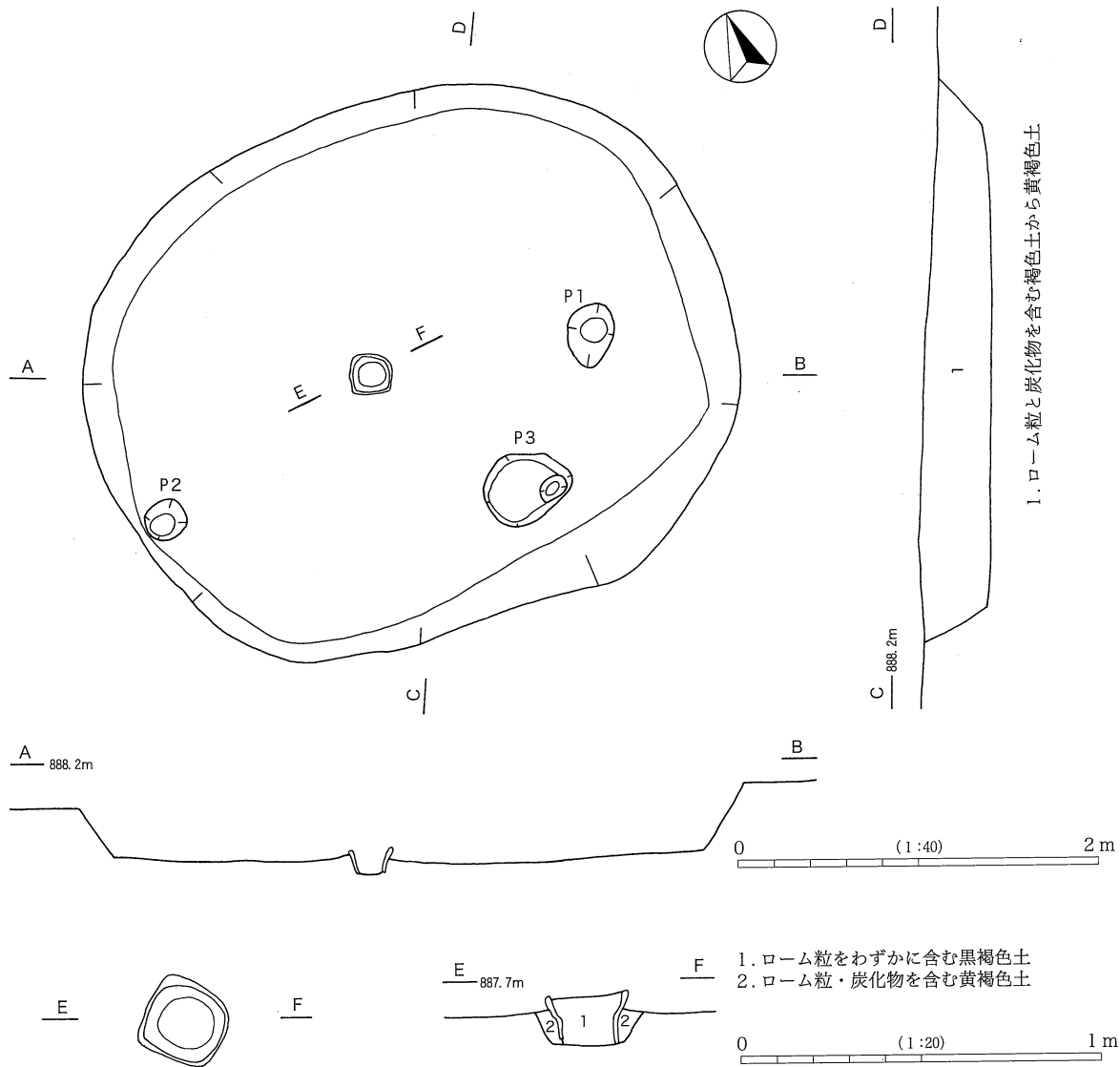
石器は、剥片類を含め41点あり、第70・71図の15点を図示した。器種別にみると9は石鏃、10は不定形石器、11～16は打製石斧、17～19は横刃形石器、20は乳棒状磨製石斧、21～23は凹石・磨石類である。図示しなかったが剥片類は25点である。

第16号竪穴住居址（第72・73図、写真44～46・134・139・142・233）

第8号竪穴住居址西方で尾根が狭くなるH-13・14グリッドで検出したが、中期の住居址のなかでは西端に位置する。ロームに褐色土の落ち込みを確認したが、規模が小さいこともあり住居址との確信がもてないまま精査を進めたが、炉址を検出しことにより住居址としたものである。

埋土は、直交する土層ベルトで観察したが、色調の変化に乏しく細分できる状態ではなく、ローム粒と炭化物を含む褐色土から黄褐色土とした。下層ほどローム粒が多く基本的にはレンズ状堆積であり自然埋没と考えたい。

出土した遺物は少なく、特記することはない。



第72図 第16号竖穴住居址実測図

平面形は、長軸356cm、短軸292cmを計り、南壁に直線部分もみられるが楕円形である。

壁は、ロームで傾斜地に構築されているため高さに違いがみられ、東壁は38cm、西壁は32cm、南壁は40cm、北壁は29cmを計り、その立ち上がりは普通である。

周溝は、検出できなかった。

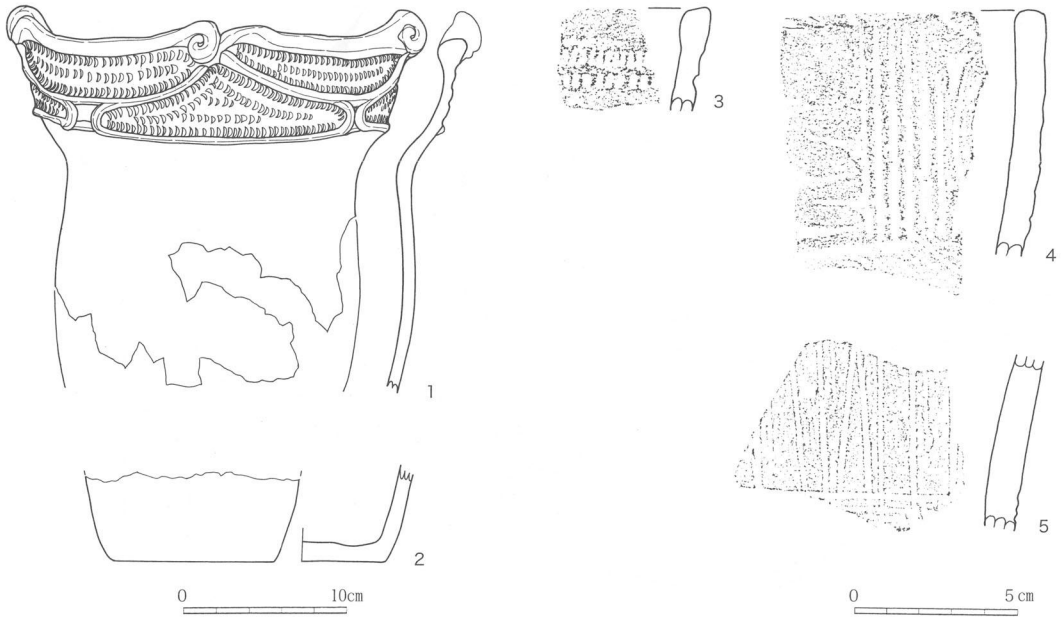
床面は、ロームで硬くほぼ平らである。

柱穴は、P1とP2の2基が主柱穴でこれ以外は検出できなかった。P3は浅く性格は不明である。

炉址は、埋甕炉である。口縁部を埋設したものであるが、やや傾き口縁は床面より高くなり使い勝手が悪かったように見受けられる。焼土粒はわずかに認められたが底面は焼土化していない。周囲もまったく焼けていない。

	P1	P2	P3											
長軸	35	24	50											
短軸	25	22	40											
深さ	50	47	14											

遺物は、土器と石器がある。



第73図 第16号竪穴住居址出土土器・石器実測図、土器拓影 1・2 (1:4) 3~5 (2:3) 6~9 (1:3)

土器は、少なく第73図の5点を図示した。1は炉体土器である。その他に破片は14点ある。
 石器は、剥片類を含め28点あり、第73図の4点を図示した。器種別にみると6は横刃形石器、7~9は凹石・磨石類である。図示しなかったが剥片類は24点である。

第17号竪穴住居址（第74・76図、写真47・139）

第14号竪穴住居西のF-11・12グリッドで検出した。ロームに黒褐色土の落ち込みを確認したが、規模が小さいこともあり住居址との確信がもてないまま精査を進めた。炉址は検出できなかったが、柱穴の発見で住居址としたものである。

埋土は、直交する土層ベルトで観察し2層に大別した。1層は黒褐色土、2層はローム粒をわずかに含む褐色土から黄褐色土としたが、下層ほどローム粒が多いレンズ状堆積であり自然埋没と考えたい。

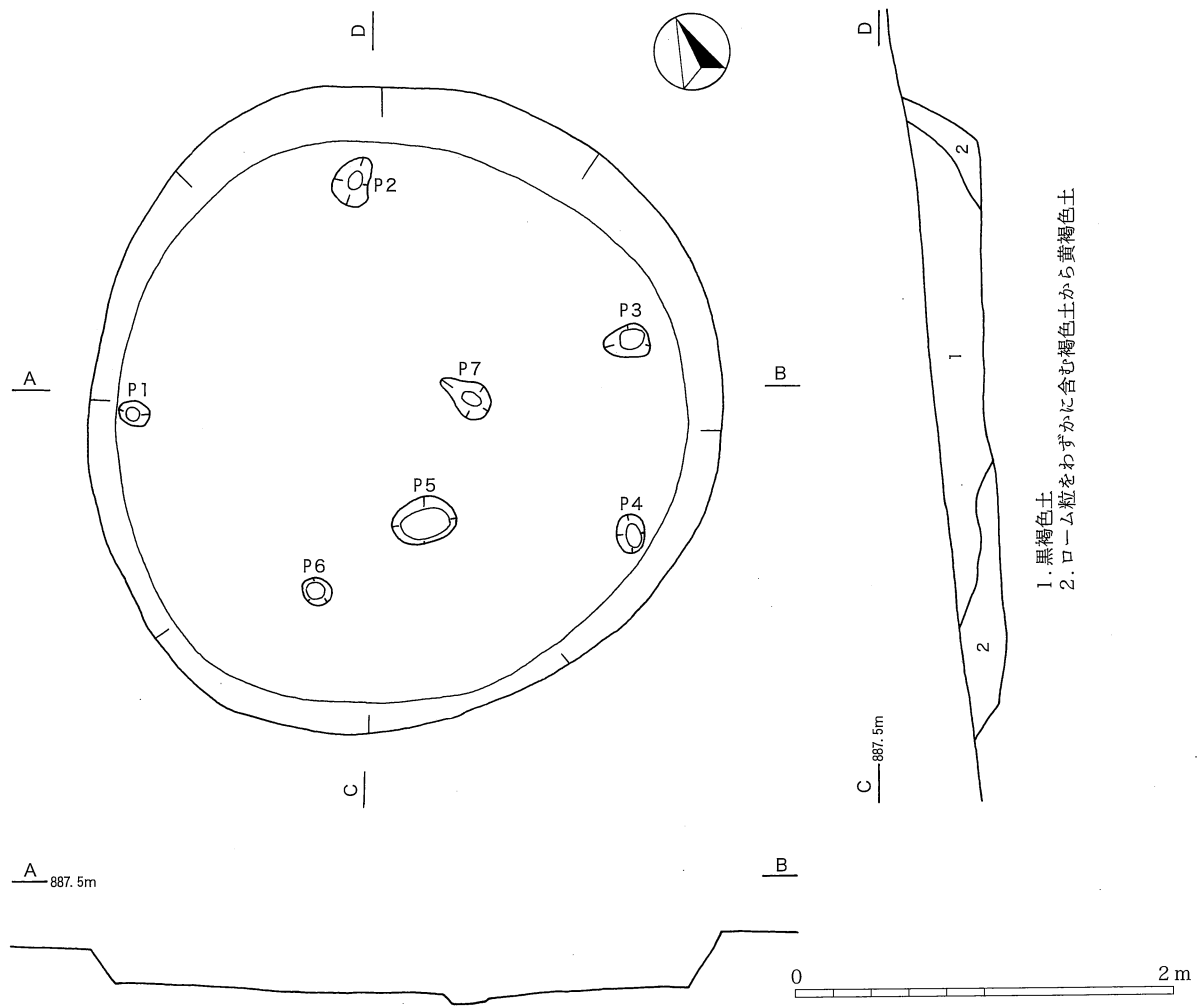
出土した遺物は少なく、特記することはない。

平面形は、長軸340cm、短軸336cmの円形である。

壁は、ロームで傾斜地に構築されているため高さの違いがみられ、東壁は28cm、西壁は24cm、南壁は26cm、北壁は38cmを計り、立ち上がりは普通である。

周溝は、検出できなかった。

床面は、ロームで硬くほぼ平らであるが、自然の傾斜方向にやや傾いている。



第74図 第17号竪穴住居址実測図（1：40）

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7										
長軸	18	27	25	20	35	16	30										
短軸	14	17	18	15	25	14	16										
深さ	12	21	35	33	12	9	14										

柱穴は、位置関係からP 1～P 4の4基が支柱穴と思われるが、深さに違いがみられ特定することができない。P 5～P 7の3基は浅いものである。

炉址は、検出できなかった。

遺物は、土器と石器がある。

土器は、少なく図76図の破片2点を図示した。その他に破片は10点あるだけである。

石器は、剥片類を含め9点で、図76図の2点を図示した。器種別にみると3は石錐、4は横刃形石器である。図示しなかった剥片は7点である。

第18号竪穴住居址（第75・76図、写真48～50）

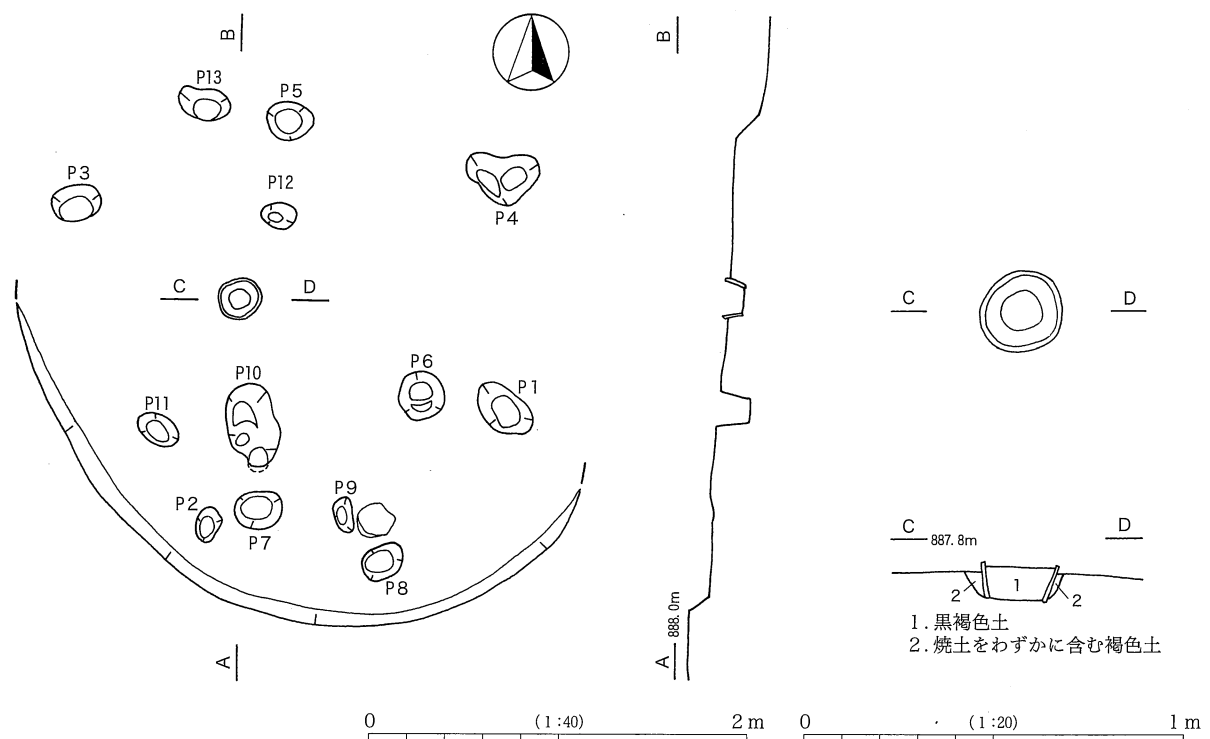
第16号竪穴住居址北東のH-18・I-18グリッドで検出したが、ここは緩やかな北斜面であり、検出作業の段階で埋甕炉が出土した。周囲の精査を進めローム層に黒褐色土の落ち込みを確認したが、南側の半分位が残っていただけである。

埋土は、自然傾斜方向で観察したが、その多くはすでに流失しており厚いところでも8cm位が残存しただけであり詳しいことはわからない。色調の変化に乏しく細分できる状態ではなく、ローム粒をわずかに含む黒褐色土の単層とした。しかし、下層ほどローム粒が多く基本的にはレンズ状堆積であり自然埋没と考えたい。

出土した遺物は少なく、炉体土器があるだけである。P 8とP 13に隣接した床面上には20×17cmの安山岩の扁平石が据え置かれたような状態で出土したが、作業台のようなものであろうか。類似する資料が第13号住居址にみられる。

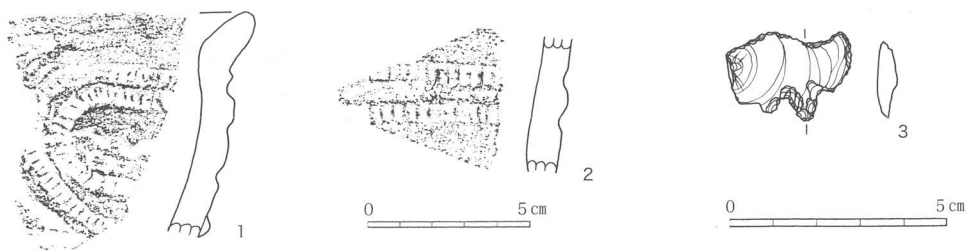
平面形は、長軸（320）cm、短軸（280）cmを計り、該期における基本形態である円形と考えたが、わずかな壁が残存しただけであり詳しいことはわからない。

壁は、ロームであるが掘り込みが浅いうえに傾斜地に構築されていたこともあり、南壁がわずかに残

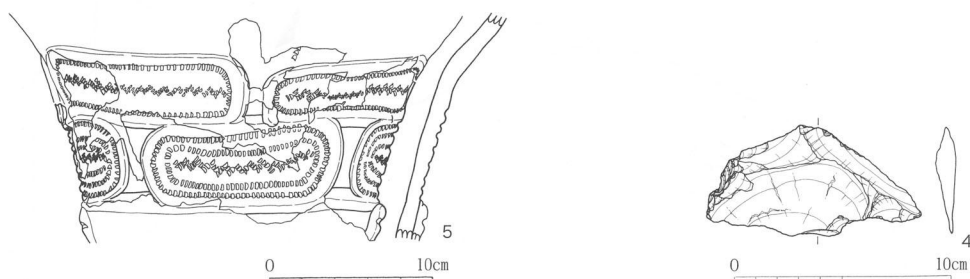


第75図 第18号竪穴住居址実測図

17号竪穴住居址



18号竪穴住居址



第76図 第17・18号竪穴住居址出土土器・石器実測図、土器拓影 1・2 (1:2) 3 (2:3) 5 (1:4) 4 (1:3)

存してただけで北壁はすでに流失している。南壁の高さは8cmを計り、東壁と西壁は北に寄るほど低くなるが、立ち上がりは緩やかで良くない。

周溝は、検出できなかった。

床面は、ロームで硬くほぼ平らであるが、自然傾斜方向にやや傾いている。

柱穴は、P1～P4の4基が主柱穴であった可能性は高いが明確なことはわからない。主柱穴P1にP6、主柱穴P2にP7が隣接し、P6とP7は柱穴状である。また、主柱穴P4は重複する柱穴であることから柱の建て替えも考えられる。なお、P5も柱穴状のものである。P8～P13は規格性がみられず中には木の根を誤認したのものがあるかもしれない。

炉址は、埋甕炉である。胴部を埋設したものであるが、周囲でわずかな焼土粒がみられただけで、炉内には炭化物や焼土はなく底面は焼土化していない。

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13			
長軸	34	17	25	39	25	26	26	23	19	44	24	20	30			
短軸	22	13	19	23	21	23	21	18	10	24	15	14	15			
深さ	63	41	55	55	41	44	45	13	15	20	28	37	31			

遺物は、少ないが土器がある。

土器は、第17図5の炉体土器があるだけである。

石器は、発見できなかった。

第19号竪穴住居址 (第77～80図、写真51・52・135・136・142・234～238)

第8号竪穴住居址南東のF-8グリッドで検出した。検出作業当初から遺物は数多く、ローム層に

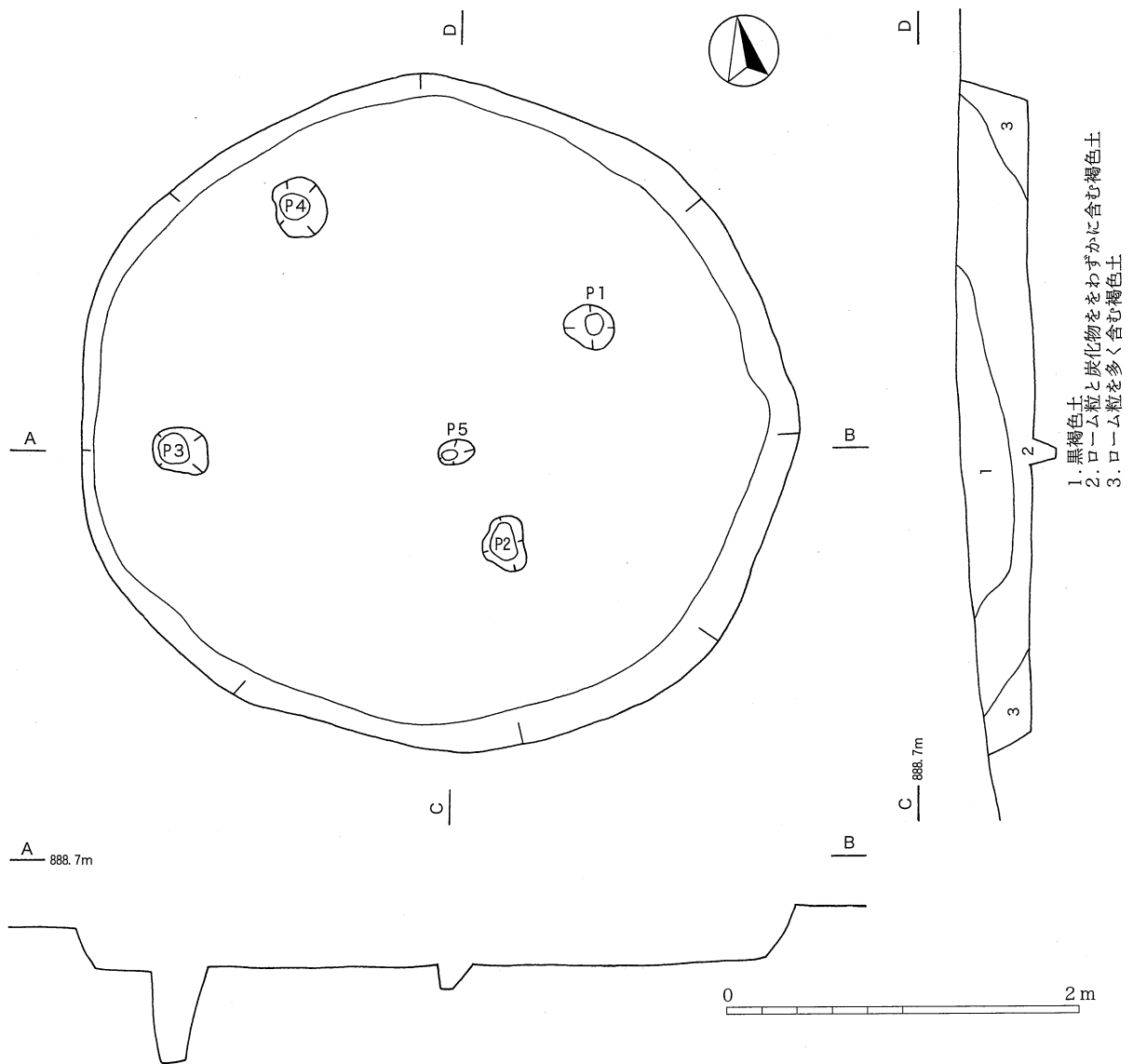
はっきりした黒褐色土の落ち込みを確認した。炉址は検出できなかったが、柱穴の発見で住居址としたものである。

埋土は、直交する土層ベルトで観察し3層に大別した。1層は黒褐色土、2層はローム粒と炭化物をわずかに含む褐色土、3層はローム粒を多く含む褐色土であり、2層と3層はローム粒の包含量で分けた状態であり、下層ほどローム粒が多くみられるレンズ状堆積であり自然埋没と考えたい。

出土した遺物は、逆三角堆土の上位から出土したが、中には検出面より高いものもみられた。

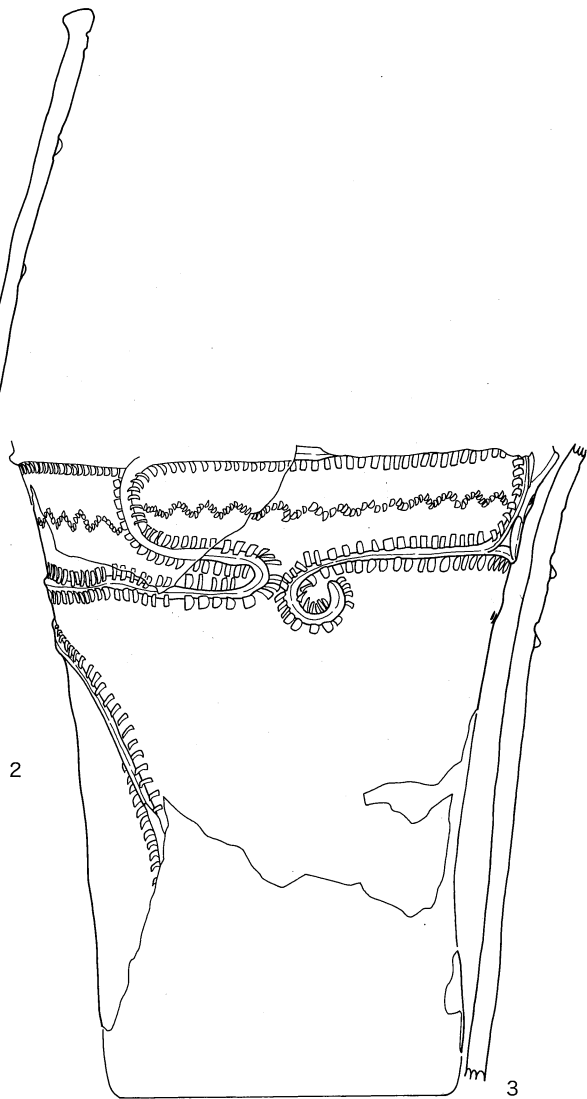
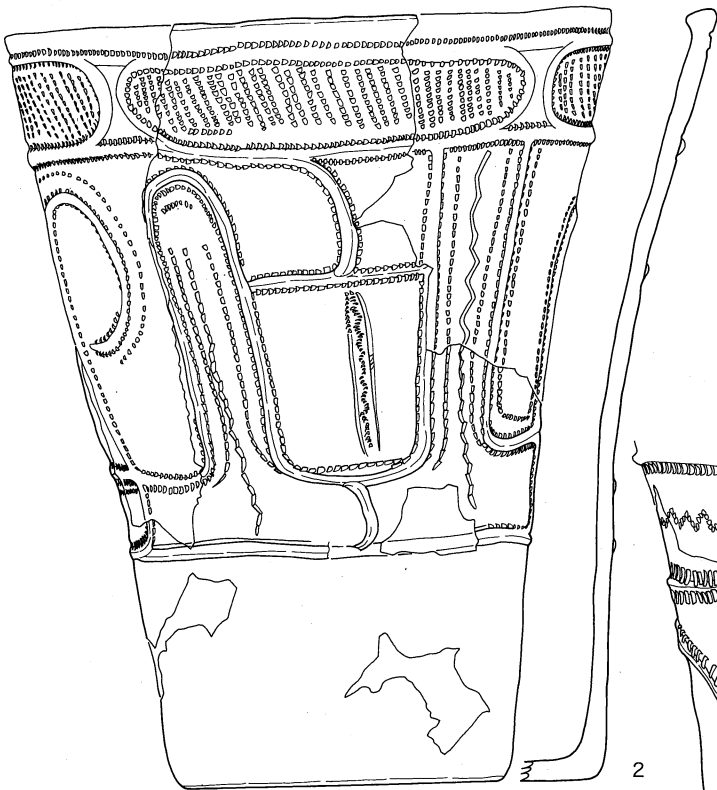
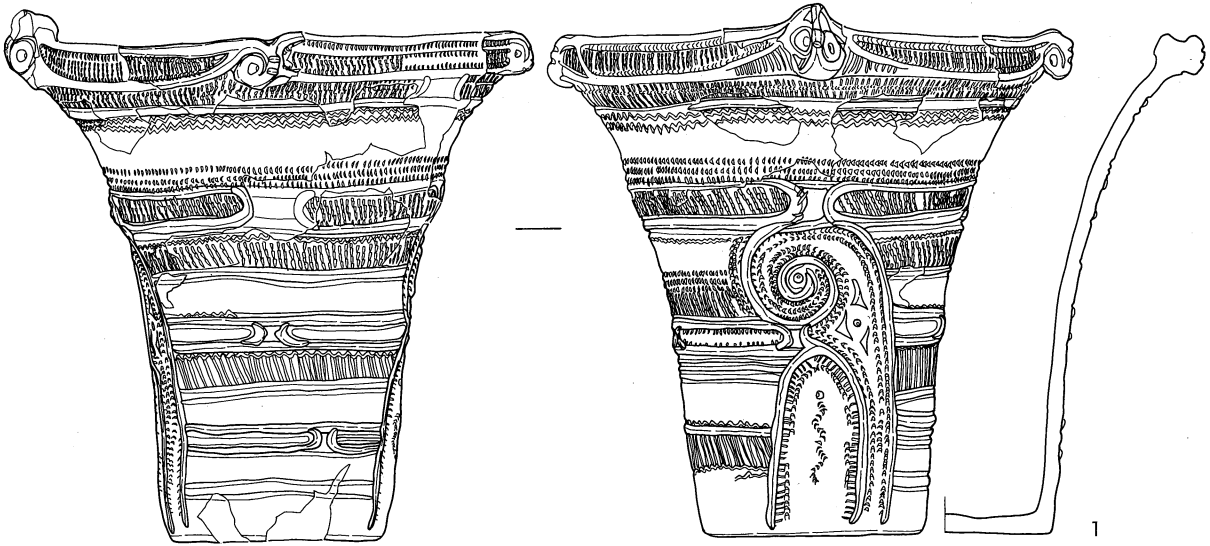
平面形は、長軸410cm、短軸380の円形である。

壁は、ロームで傾斜地に構築されているため高さに違いがみられ、東壁は30cm、西壁は16cm、南壁は20cm、北壁は27cmを計り、その立ち上がりは緩やかで良くない。



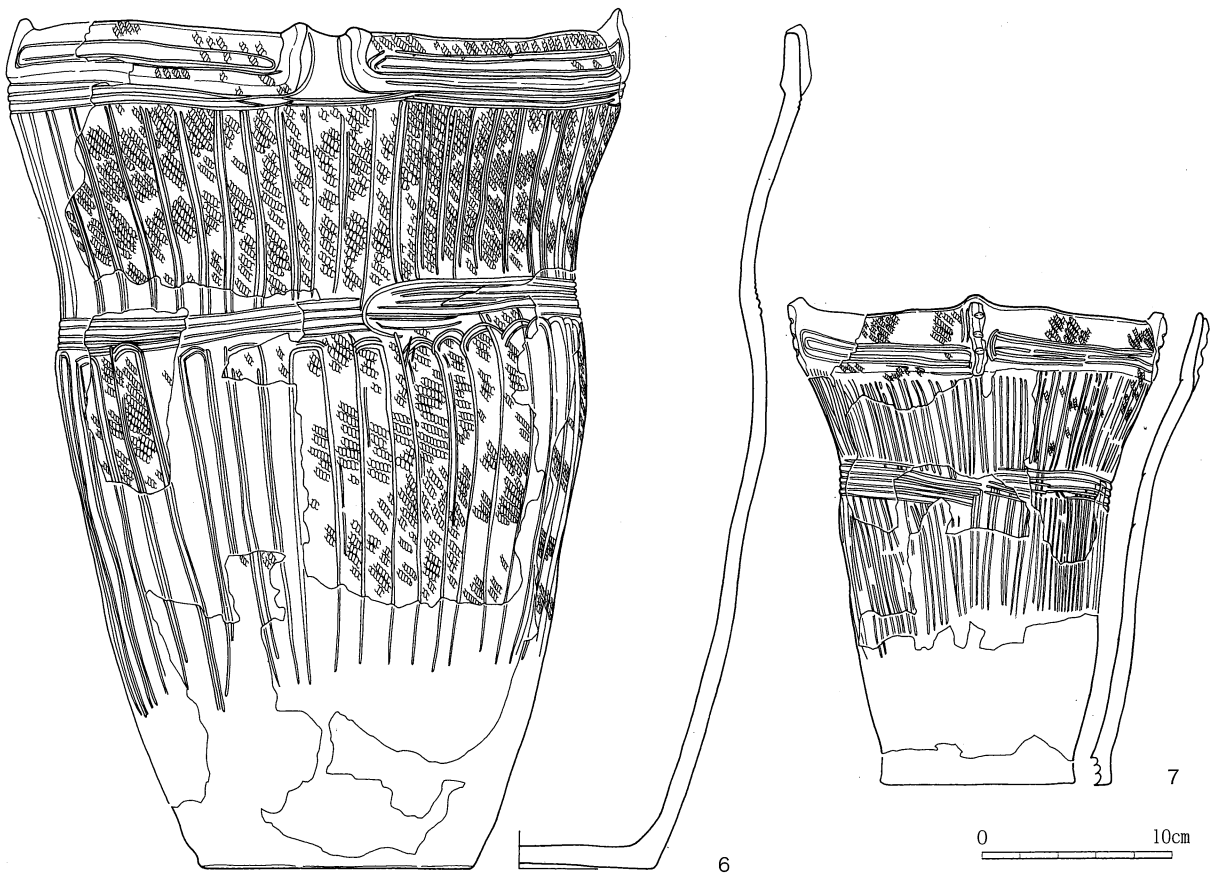
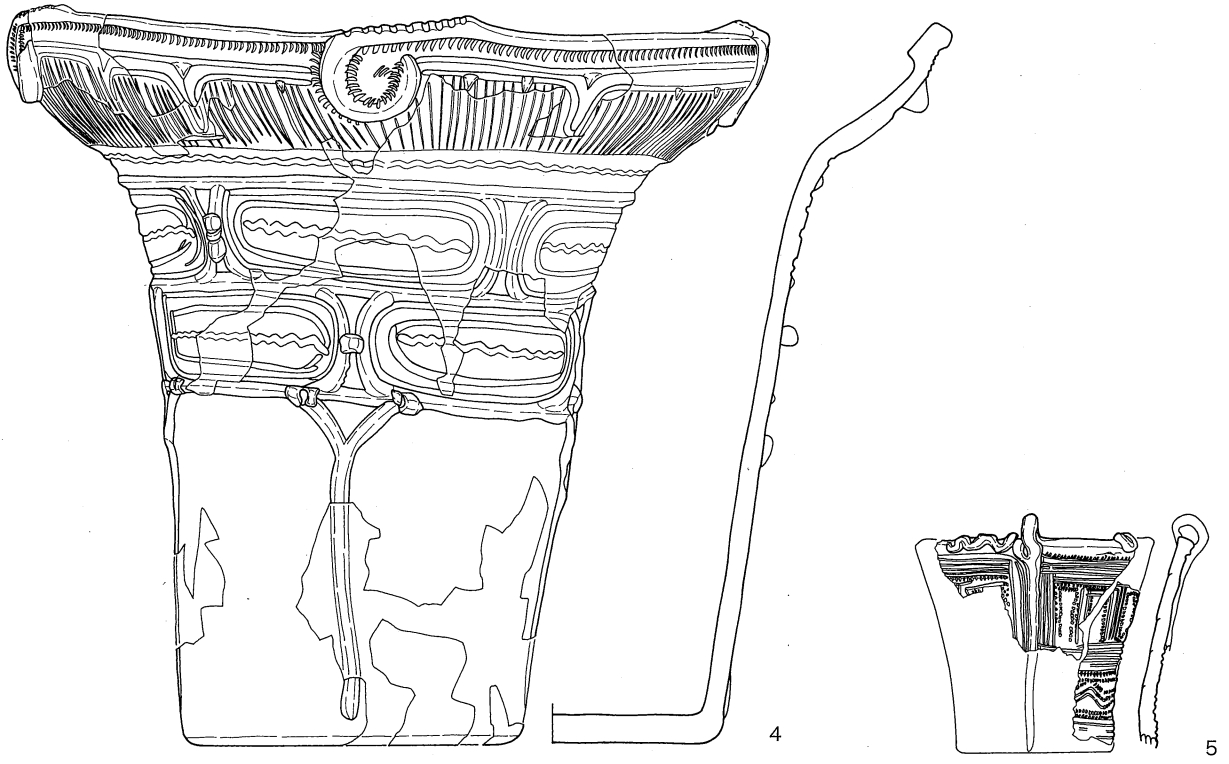
第77図 第19号竪穴住居址実測図 (1:40)

	P1	P2	P3	P4	P5									
長軸	30	32	35	36	21									
短軸	24	23	26	30	13									
深さ	63	53	55	60	15									

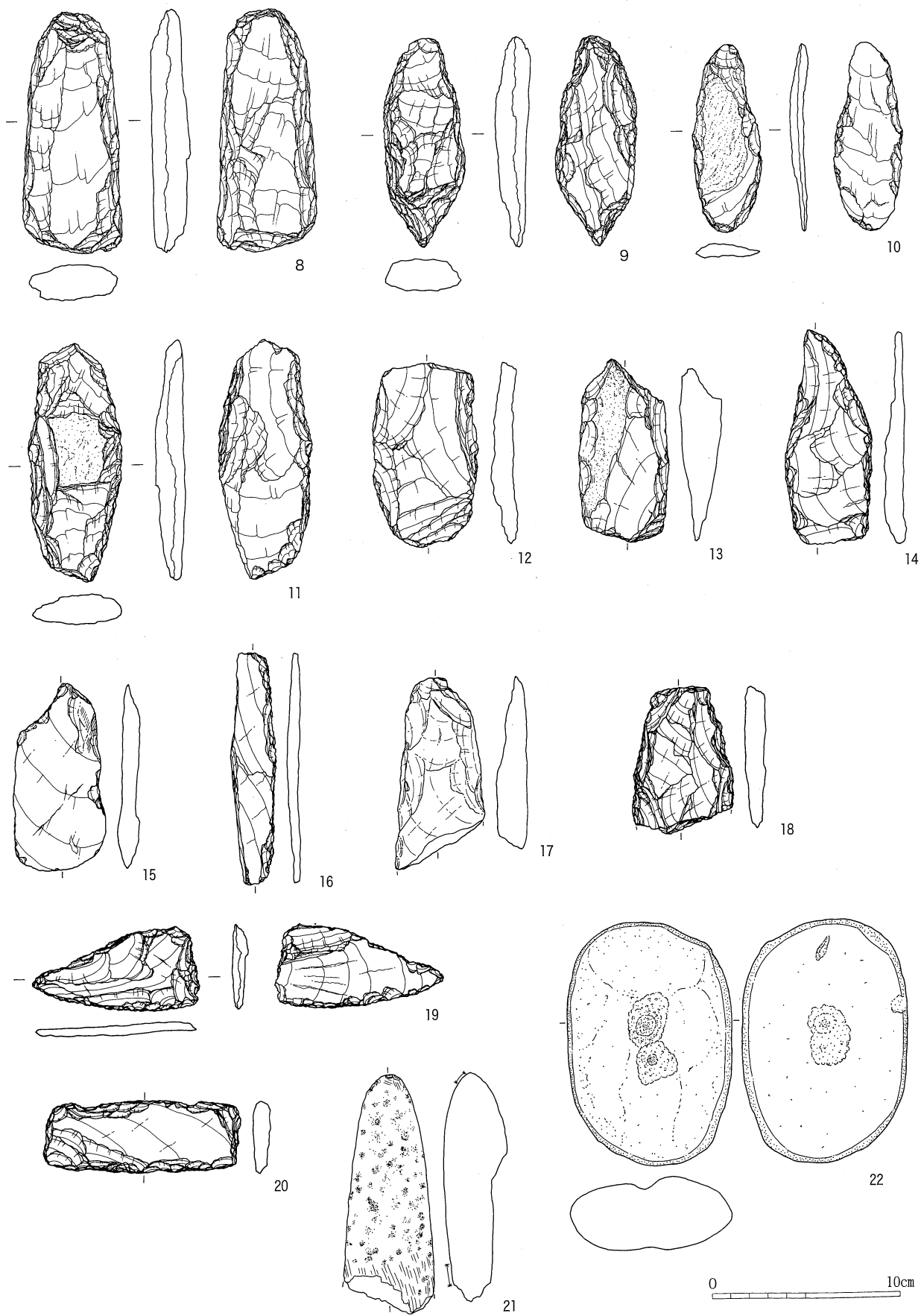


0 10cm

第78图 第19号竖穴住居址出土土器实测图(1:4)



第79图 第19号竖穴住居址出土土器实测图（1：4）



第80图 第19号竖穴住居址出土石器实测图（1：3）

周溝は、検出できなかった。

床面は、ロームであるが軟弱で壁際がやや高くなる以外はほぼ平らである。

柱穴は、P 1～P 4 の4基が支柱穴で深いしっかりしたものである。

炉址は、検出できなかった。炉と考えてもおかしくない位置に浅いP 5がある。しかし、炭化物や焼土はみられなかった。

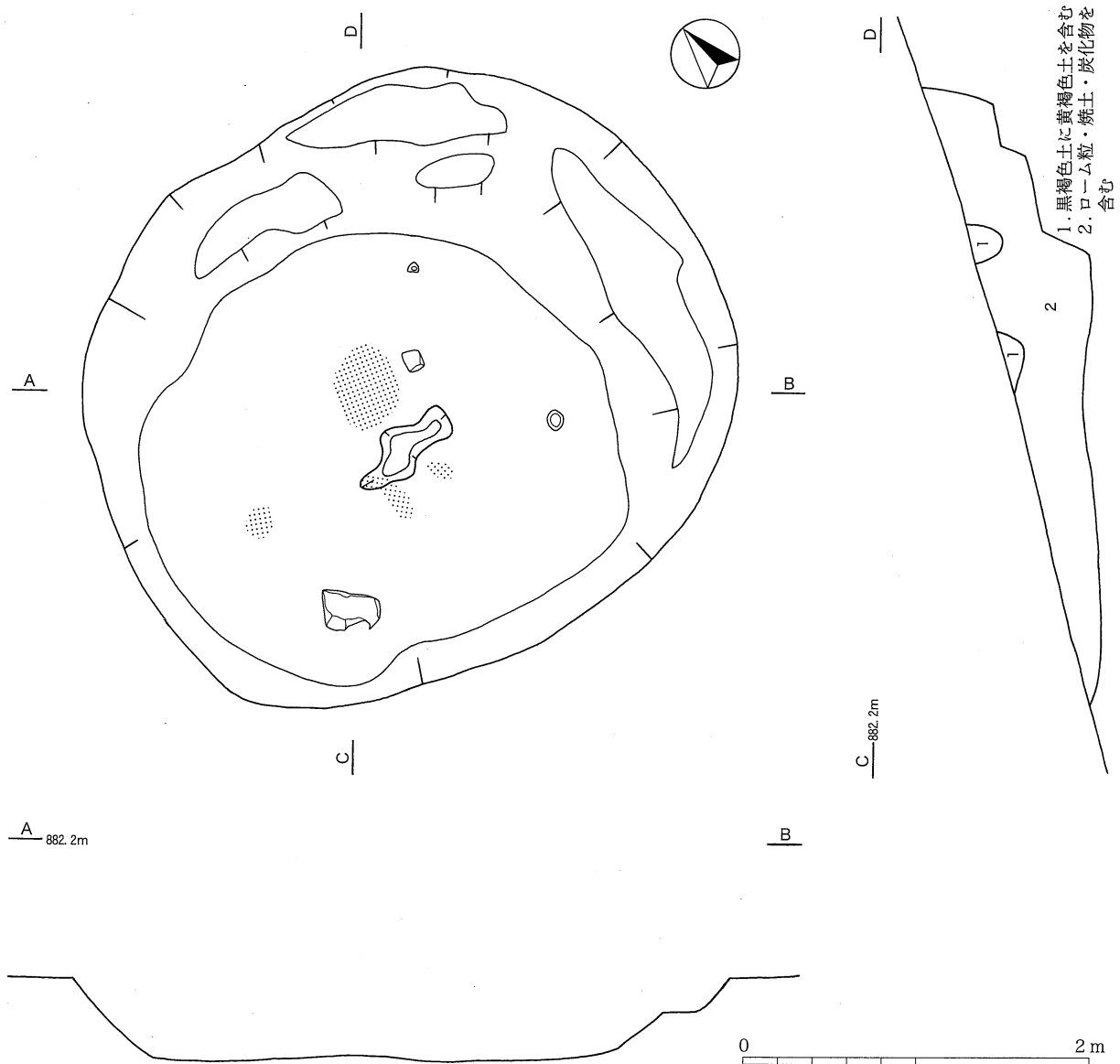
遺物は、土器と石器がある。

土器は、第78・79図の7点を図示した。7は小竪穴11と遺構間接合したものであるが、土器破片数は小竪穴11の方が多い。復原するまでに至らず図示することはできないが、同個体と思われる破片が26点あり、その他に破片888点がある。

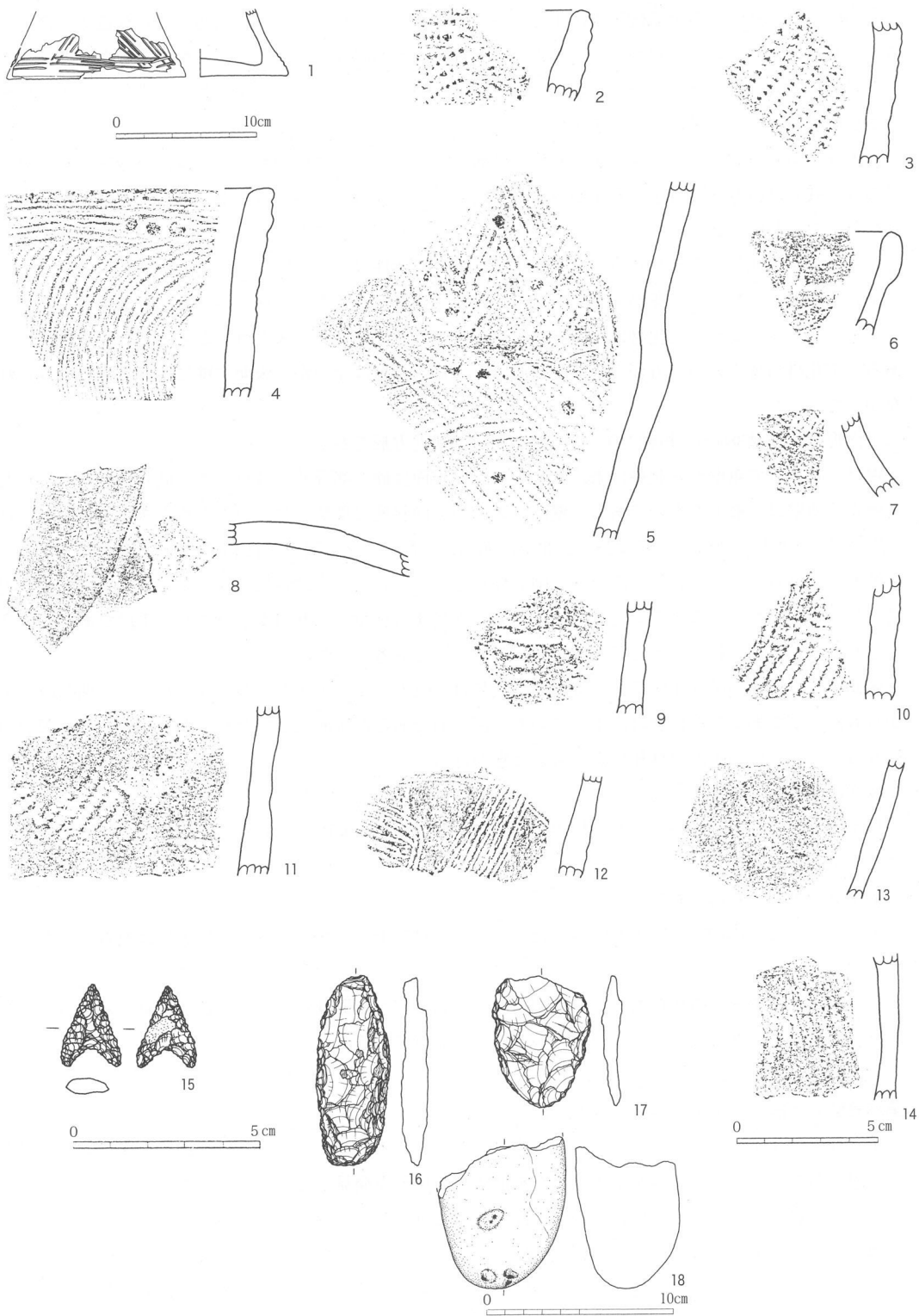
石器は、剥片類を含めると115点あり、第80図の14点を図示した。器種別にみると8～18は打製石斧、19・20は横刃形石器、22は凹石、21は乳棒状磨製石斧である。図示しなかったが剥片類は96点である。

第22号竪穴住居址（第81・82図、写真53・54・137・142）

尾根の先端に近いJ-20グリッド南斜面で検出した。最も西に位置するが縄文時代前期末葉の住居址



第81図 第22号竪穴住居址実測図（1：40）



第82图 第22号竖穴住居址出土土器·石器实测图、土器拓影 1(1:4) 2~14(1:2) 15(2:3) 16~18(1:3)

であり、本址だけが離れた地点で発見されたことは、該期における遺跡立地の違いによるものと思われる。縄文時代前期末葉の土器破片が出土し、ローム層にローム粒・焼土・炭化物を含む褐色土の落ち込みを認め住居址とした。傾斜がきつい地点であるうえに不明瞭な箇所も多く、自然傾斜の南北方向に先行トレンチを設定し状況把握につとめた。北壁は階段状に落ち込んでいるが、数多い炭化物と平坦な床面が観察できたため住居址の埋没を確信した。

埋土は、南北方向の先行トレンチで観察し2層に大別したが、耕作の畝による攪乱が分層できただけであり、残りは攪乱状で層序に安定がみられないもので分けることができなかった。1層は黒褐色土と黄褐色土の攪乱層、2層はローム粒・焼土・炭化物を含む褐色土であるが、下層ほどローム粒・焼土・炭化物は多く、北側から流れ込んだような堆積であり自然埋没と考えたい。

遺物は少なく、わずかな礫が床面上に遺棄されていただけである。南壁下の平板石は作業台であろうか。写真54でみるように炭化材は放射状に出土し垂木と思われるが、床面直上からの出土が多いようである。炭化材や焼土のあり方から火を受けたことは疑う余地はないが、床面や壁に焼けた痕跡はみられなかった。

平面形は、長軸380cm、短軸330の楕円形ないしは隅丸方形である。

壁は、ロームで東壁から北壁は階段状となり、平坦面は硬く部分的にはロームの貼り付けもみられた。南壁から西壁は一般的なものである。壁高は、きつい傾斜地に構築されていたため大きな違いがみられ東壁は87cm、西壁は29cm、南壁は18cm、北壁は96cm、一番高い北東隅では113cmを計る。階段状の壁は高い箇所にだけみられた現象で、高い壁と強い係りをもっていたことは容易に考えられることであり、周溝が検出できなかったことを考え合わせると壁を保護する施設で、壁の崩落をふせぐ手段であったように思われる。また、物置場としても活用されていたことも考えられる。

床面は、ロームの貼り床状のものであり、炭化材や焼土はこの床面上で多くみられたが、貼り床の下からもわずかであるが炭化物は出土している。部分的であるが床面は2面存在したことになり、床面の作り直さないしは祭祀的な様相によるものと思われる。

柱穴は、検出できなかった。

炉址は、地床炉で焼土が4ヶ所で検出されたが、住居中央の範囲が広いものが主炉址であったものと思われる。

遺物は、土器と石器がある。

土器は、少なく第82図の14点を図示した。8は有孔鏝付土器である。その他に破片は24点あるだけである。

石器は、剥片類を含め40点あり、第82図の4点を図示した。器種別にみると15は石鏃、16・17は打製石斧、18は磨石である。図示しなかったが剥片類は36点である。

第23号竪穴住居址（第83・84図、写真55）

第7号竪穴住居址北のG-8グリッドで検出したが、ここは緩やかな北斜面である。ローム層に攪乱とも思える褐色土の落ち込みを認め、精査を進めたが炉址を発見するまでに至らなかった。ここでは住居址として報告しておくが、柱穴の発見もなく床面にみられる施設は一切ないことになる。

埋土は、直交する土層ベルトで観察し2層に大別した。1層は耕作の畝とおもわれる黒褐色土、2層はローム粒をわずかに含む褐色土で、下層ほどローム粒が多くみられるレンズ状堆積であり自然埋没と考えたい。

出土した遺物は少なく、特記することはない。

平面形は、長軸350cm、短軸340cmの不整円形であるが、耕作の畝による攪乱もあり、やや掘りすぎたところがあり当初は整った円形であったものと思われる。

壁は、ロームで傾斜地に構築されているため高さに違いがみられ、東壁は29cm、西壁は20cm、南壁は31cm、北壁は19cmを計り、その立ち上がりは不明瞭な箇所があるうえに緩やかで良くない。

周溝は、検出できなかった。

床面は、ロームで硬くほぼ平らである。

柱穴は、検出できなかった。性格不明の小ピットが3基ある。

炉址は、検出できなかった。炉址と考えてもおかしくない位置から礫が出土したが、炭化物や焼土はみられない。

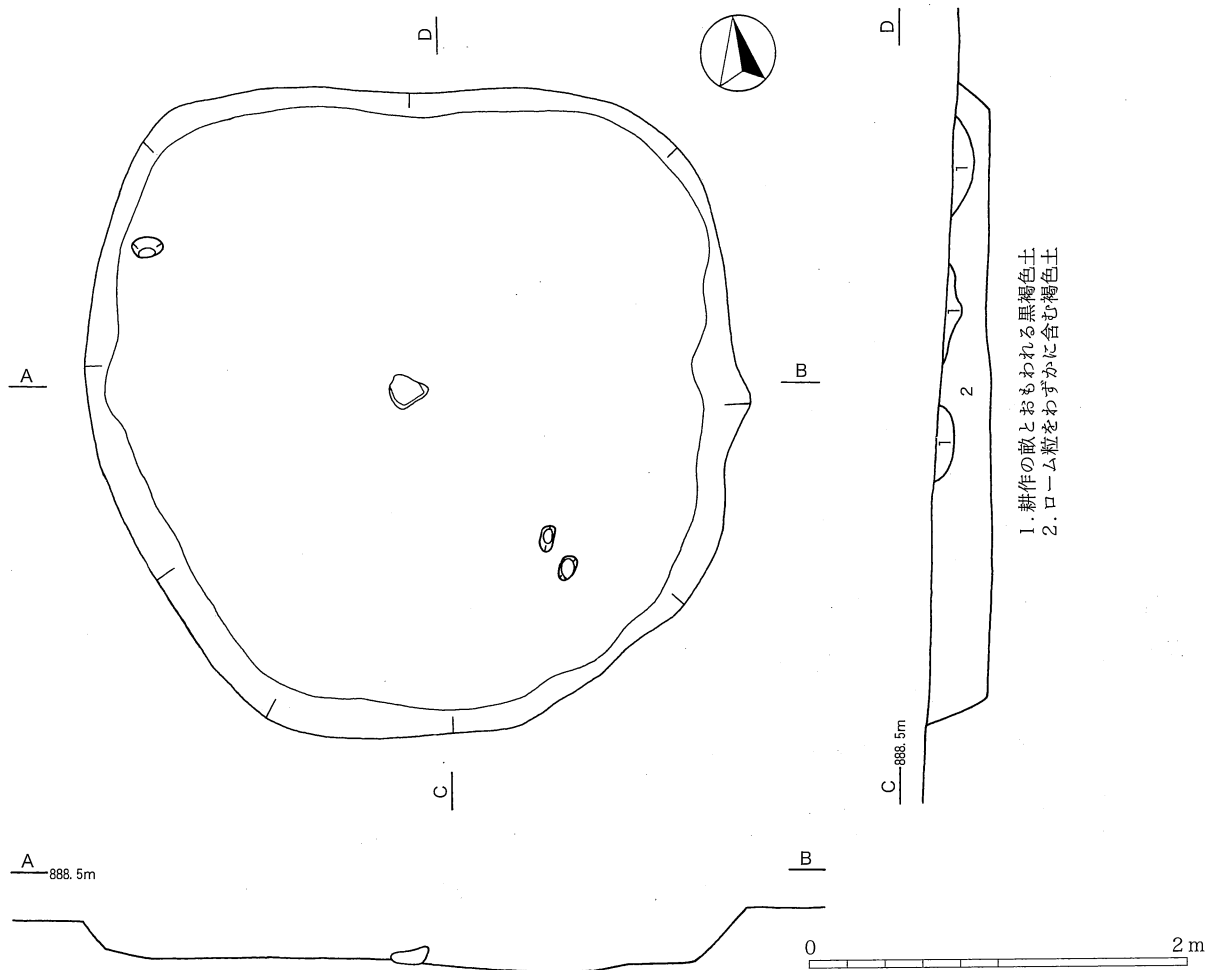
遺物は、少ないが土器・石器・石製品・炭化物がある。

土器は、少なく第84図に7点を図示した。その他に破片が76点ある。

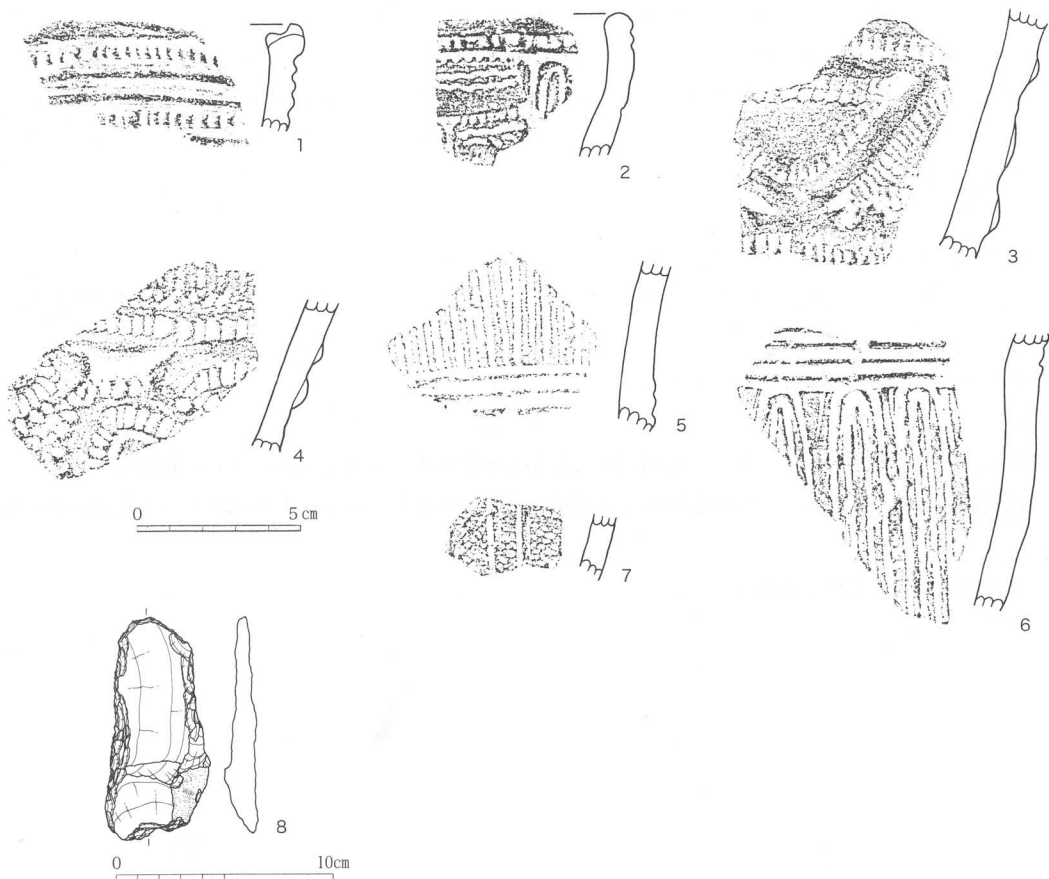
石器は、剥片類を含め33点あり、第84図8の打製石斧がある。図示しなかった剥片類は32点である。

石製品は、図示しなかったが肉眼観察では琥珀の破片であるが、小さいもので詳しいことはわからない。

炭化物は、栗の実が1点ある。



第83図 第23号竪穴住居址実測図 (1:40)



第84図 第23号竪穴住居址出土土器拓影、石器実測図 1～7 (1:2) 8 (1:3)

第24号竪穴住居址〔小竪穴29〕(第85・86図、写真56・57・140)

第23号竪穴住居址南西のG-8グリッドで検出したが、ここは緩やかな北斜面である。ローム層にローム粒をわずかに含む黒褐色土の落ち込みを認めたが、不明瞭な箇所があるうえに住居址としては規模がやや小さく、小竪穴と考えるにはやや大きい。小竪穴29と呼称し精査を行った。石囲炉の発見を重視し、整理作業の段階で第24号竪穴住居址に改めたものである。したがって小竪穴29は欠番になるが、調査記録および出土遺物への注記は小竪穴29のままである。

埋土は、直交する土層ベルトで観察し2層に大別した。1層はローム粒をわずかに含む黒褐色土、2層はローム粒をわずかに含む褐色土から黄褐色土で、下層ほどローム粒が多くみられるレンズ状堆積であり自然埋没と考えたい。

出土した遺物は少なく、特記することはないが生活痕跡は希薄である。

平面形は、長軸324cm、短軸300cmの不整円形で、西壁から北壁は整っていない。

壁は、ロームで傾斜地に構築されているため高さに違いがみられ、東壁は31cm、西壁は23cm、南壁は38cm、北壁は16cmを計り、その立ち上は崩落のためによるものか緩やかで良くない。

周溝は、検出できなかった。

床面は、ロームであるが凹凸がみられるうえに硬くない。

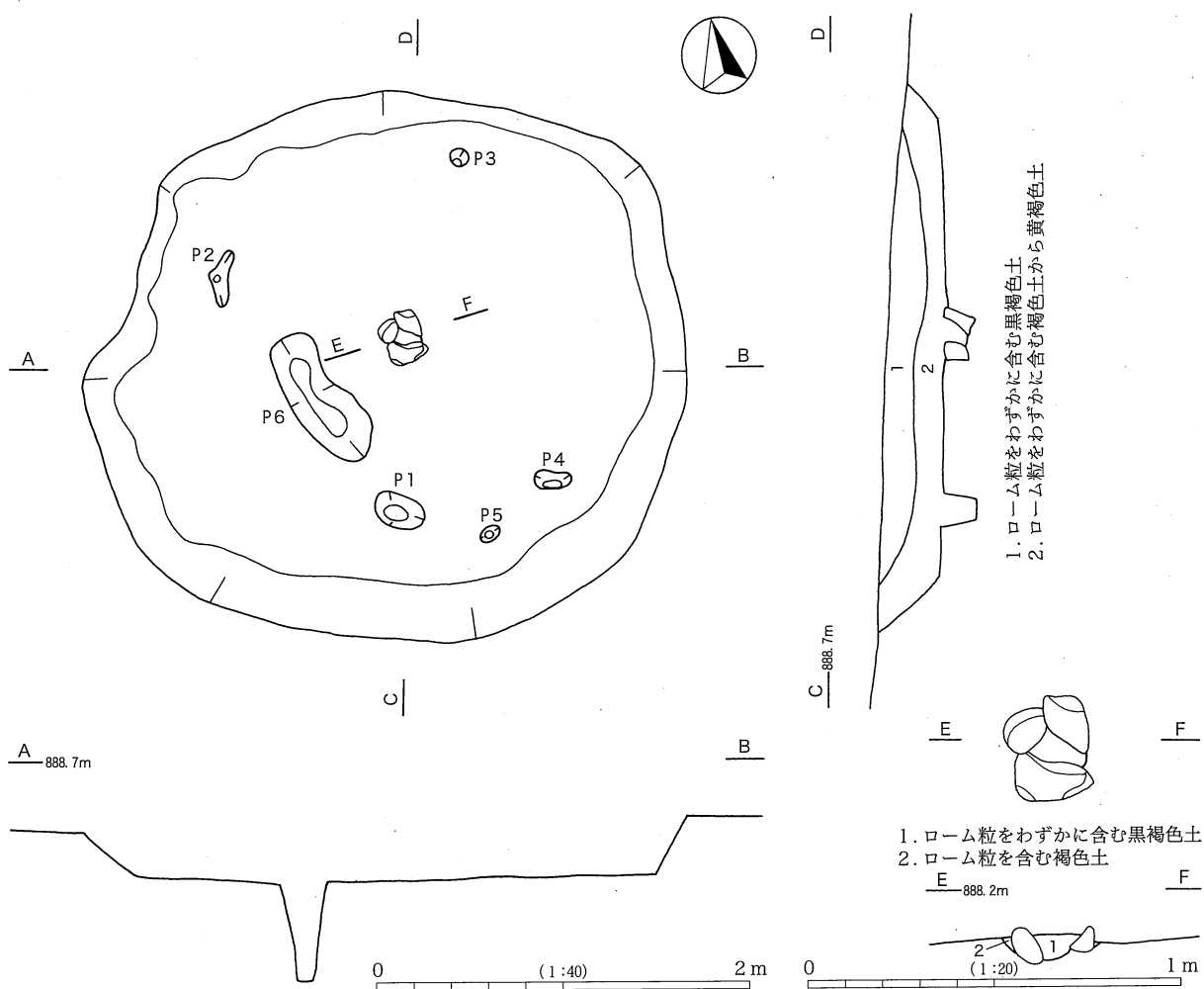
柱穴は、P1～P4の4基が主柱穴と考えられるが、規格性がみられないうえにP2～P4の3基はピットの短径からみると10cm以下の柱になり非常に細いものであるが、P1・P2・P4の長軸は20～30cmを計り割材の可能性が考えられるものである。P6は溝状で深さは51cmを計るが遺物などの出土はなく性格は不明である。

炉址は、三角形の石囲炉である。3個の石を斜めに埋めたものであるが、炉内および周囲から炭化物や焼土を検出することはできなかつたうえに底面も焼土化していない。

遺物は、土器と石器がある。

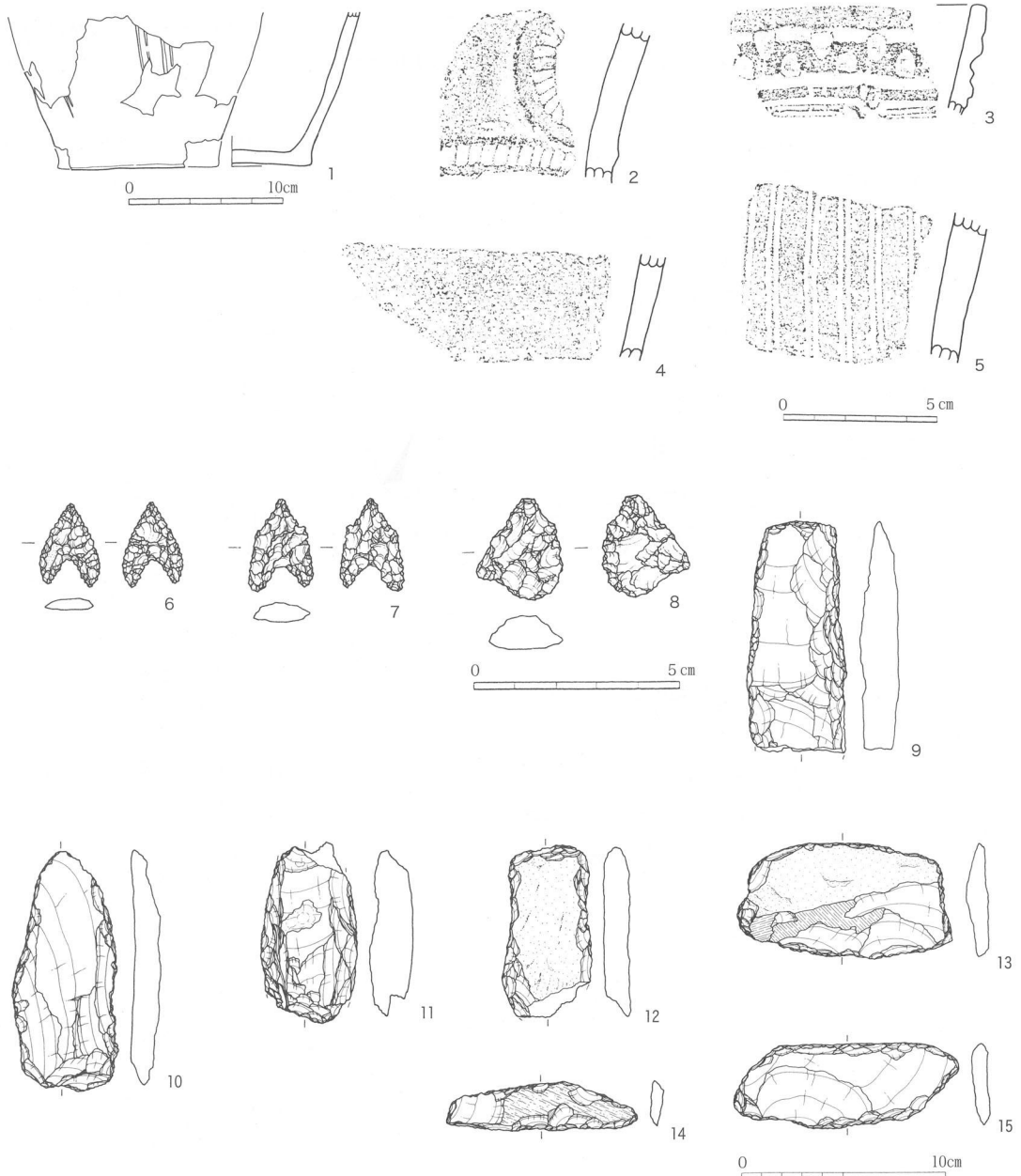
土器は、少なく第86図の破片5点を図示した。その他に破片が197点ある。

石器は、剥片類を含め66点あり、第86図の10点を図示した。器種別にみると6～8は石鏃、9～12は打製石斧、13～14は横刃形石器である。図示しなかつたが剥片類は51点である。



第85図 第24号竪穴住居址実測図

	P1	P2	P3	P4	P5	P6								
長軸	28	30	11	20	11	78								
短軸	18	10	10	9	8	29								
深さ	18	49	28	20	17	51								



第86図 第24号竪穴住居址出土土器・石器実測図、土器拓影 1 (1:4) 2~5 (1:2) 6~8 (2:3) 9~15 (1:3)

第25号竪穴住居址〔小竪穴73〕(第87・89図、写真58・140)

第10号竪穴住居址西のC-6グリッドで検出した。ローム層にローム粒をわずかに含む褐色土の落ち込みを認めたが、輪郭に不明瞭な箇所があるうえに、南側の半分以上は耕作による削平ですでに破壊されていた。落ち込みは住居址としては規模がやや小さく、小竪穴73と呼称し精査を行った。破壊された炉底と支柱穴4基の発見を重視し、整理作業の段階で第25号竪穴住居址に改めたものである。したがっ

て小竪穴73は欠番になるが、調査記録および出土遺物への注記は小竪穴73のままである。

埋土は、残存範囲が少ないこともあり土層観察ベルトは設定していないが、精査時における観察ではローム粒をわずかに含む褐色土の単層で、下層ほどローム粒が多くみられるレンズ状堆積であり自然埋没と考えたい。

出土した遺物は少なく、特記することはない。

平面形は、長軸（280）cm、短軸320cmの楕円形と思われるが、耕作で削平された範囲が広く詳しいことはわからない。

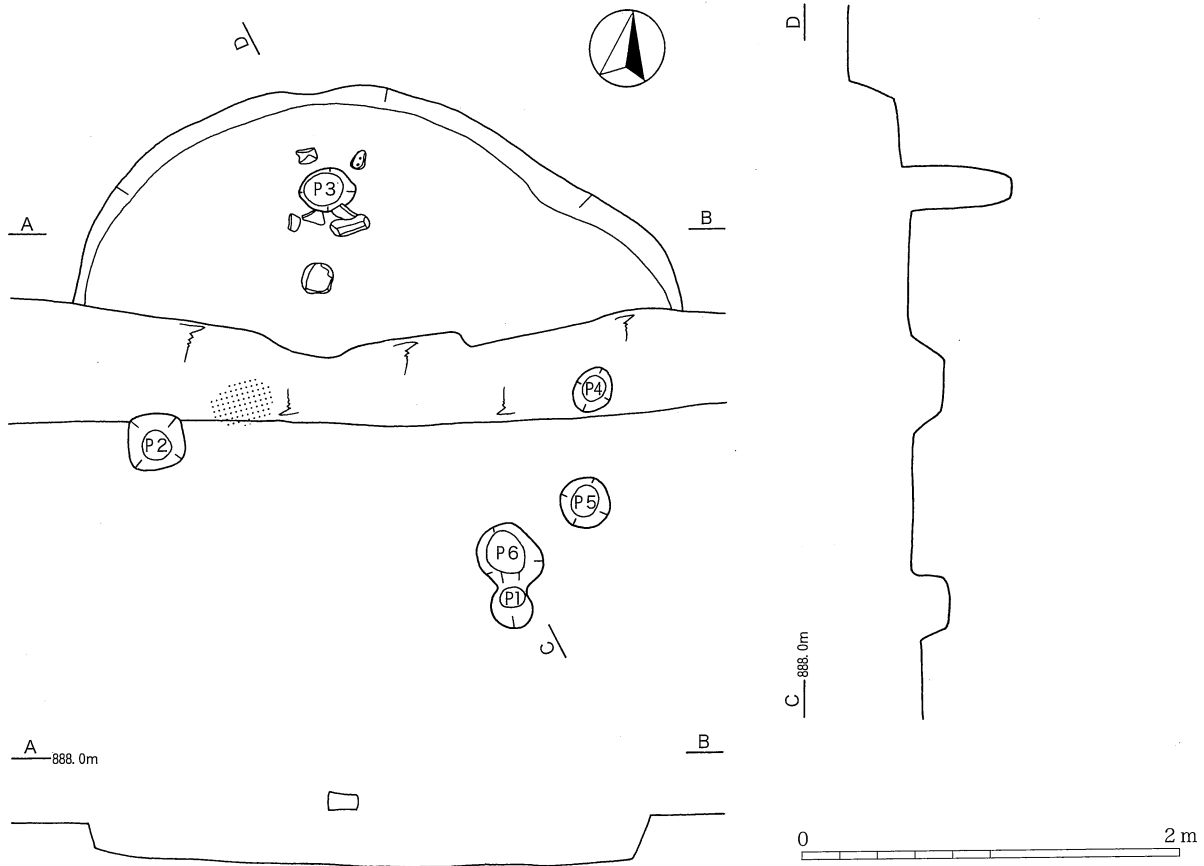
壁は、ロームであるが残存範囲が少なく高さは北壁で25cmを計るが、立ち上は緩やかで良くない。

周溝は、検出できなかった。

床面は、ロームで北側は硬くほぼ平らで壁際がわずかに高くなるようである。南側は耕作で削平されていたが部分的に硬い床面がみられ、削平はわずかなようである。

柱穴は、P 1～P 4 の4基が支柱穴である。P 5とP 6は浅く入口施設に係るものであろう。

炉址は、すでに耕作による溝で破壊されており、炉底の焼土がP 2 近くで検出されたが詳しいことはわからない。



第87図 第25号竪穴住居址実測図（1：40）

	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6								
長軸	22	35	30	24	27	38								
短軸	21	30	24	19	26	30								
深さ	51	51	51	44	18	13								

遺物は、土器と石器がある。

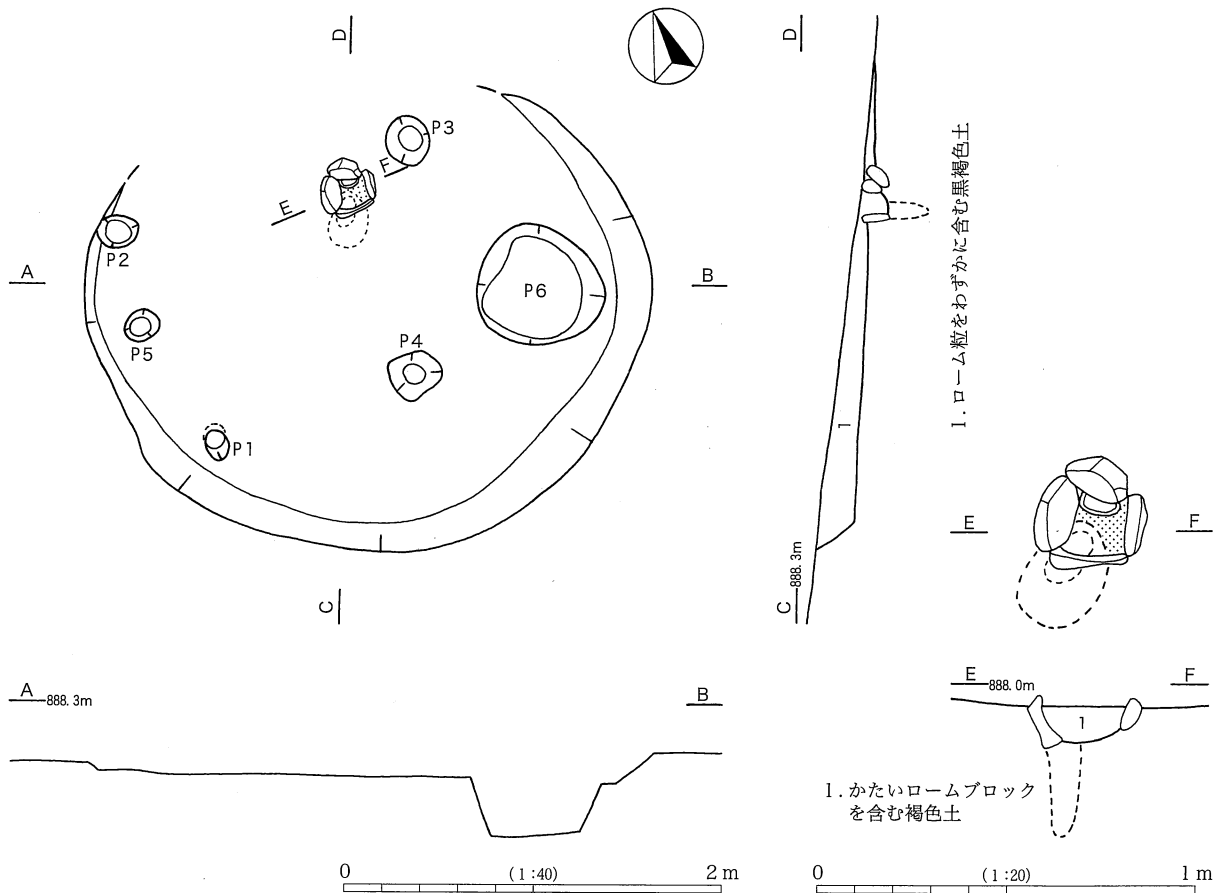
土器は、少なく第89図の3点を図示した。1は補修孔が穿たれている。復原するまでに至らず図示することはできないが、同個体と思われる破片が8点あり、その他に破片34点がある。

石器は、剥片類を含め22点あり、第89図の5点を図示した。4・5は打製石斧、6～8は横刃形石器である。図示しなかったが剥片類は16点である。

第26号竪穴住居址〔小竪穴82〕（第88・89図、写真59・60）

第9号竪穴住居址西のG-10グリッドで検出したが、ここは緩やかな北斜面である。ローム層にローム粒をわずかに含む黒褐色土の落ち込みを認めた。住居址としては規模がやや小さく小竪穴82と呼称し精査を行った。石囲炉の発見を重視し、整理作業の段階で第24号竪穴住居址に改めたものである。したがって小竪穴82は欠番となるが、調査記録および出土遺物への注記は小竪穴82のままである。

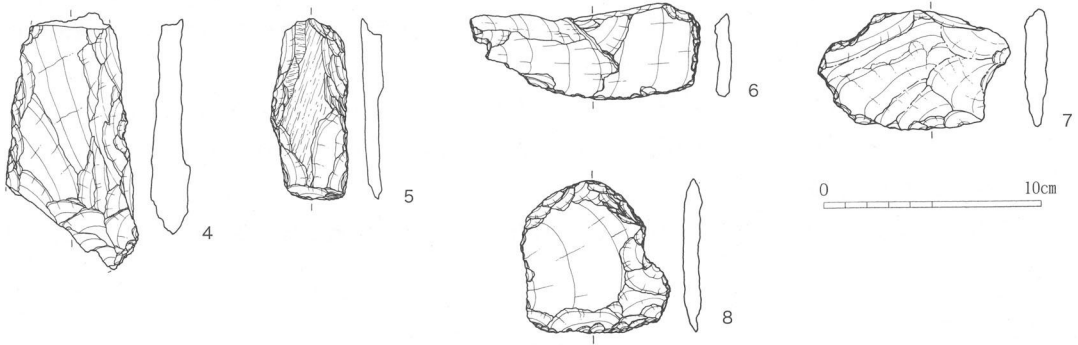
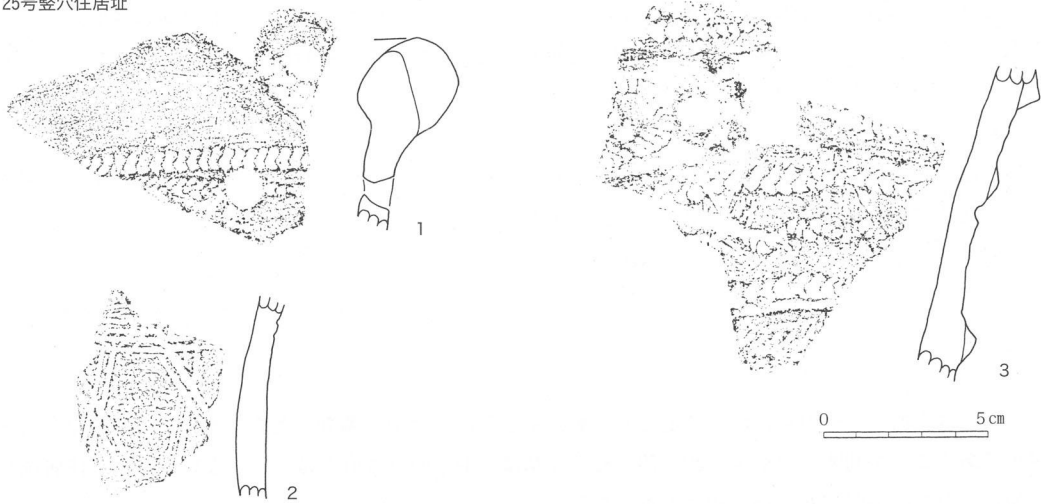
埋土は、自然傾斜の南北方向の土層ベルトで観察した。色調の変化に乏しく細分できる状態ではなく、ローム粒をわずかに含む黒褐色土の単層である。しかし、下層ほどローム粒が多くみられるレンズ状堆積であり自然埋没と考えたい。



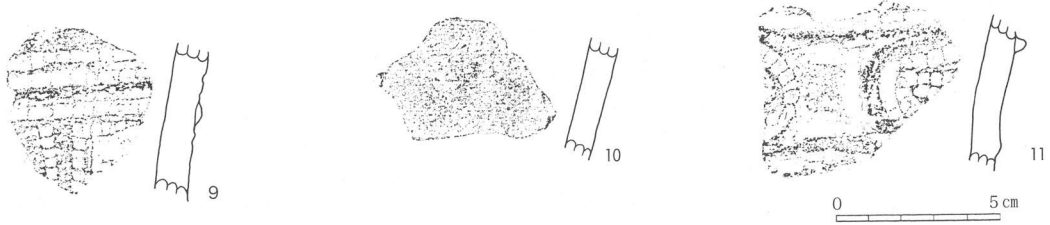
第88図 第26号竪穴住居址実測図

	P1	P2	P3	P4	P5	P6								
長軸	18	24	29	32	20	68								
短軸	13	17	23	26	18	63								
深さ	35	27	16	43	28	33								

25号竪穴住居址



26号竪穴住居址



第89図 第25・26号竪穴住居址出土土器拓影、石器実測図 1～3・9～11 (1:2) 4～8 (1:3)

平面形は、長軸300cm、短軸(260)cmの楕円形である。

壁は、ロームで傾斜地に構築されていたため高さに違いがみられ、東壁は15cm、西壁は8cm、南壁は21cmを計り、北壁はすでに流失してない。壁の立ち上がりは良くないうえに耕作の畝で破壊された所がある。

周溝は、検出できなかった。

床面は、ロームで硬くほぼ平らである。

柱穴は、P1～P4の4基が主柱穴と考えられるが竪穴の西側によっている。P5は柱穴状であり、

P 6はその規模から貯蔵穴と思われる。

炉址は、方形石囲炉である。4個の平板状石を埋めたものであるが、南側の炉石下層には古いピットがあり、内部に土器破片が残り古い埋甕炉の可能性が高く、埋甕炉から石囲炉に作り替えられているようである。

遺物は、土器と石器がある。

土器は、少なく第89図の3点を図示した。復原するまでに至らず図示することはできないが、同個体と思われる破片が3点あり、その他に破片23点がある。

石器は、少なく図示しなかったが、黒曜石の剥片が7点あるだけである。

(2)小竪穴

小竪穴は平面形とその規模から認定し発見順に番号を付けたが、調査を進める過程で小規模な竪穴住居址であることが判明した小竪穴29・73・82の3基は、番号の付け直しはしていないが「1 住居址」で報告したため小竪穴29・73・82は欠番となる。

検出面のソフトローム直上で土器・石器および礫の発見はあるが、掘り込みが確認できなかったものについて、単独土器とか集石などの遺構名にするのではなく、黒色土中に構築された小竪穴状遺構の存在を考慮し1001からの番号を付けた。

小竪穴の中には土器や石器の発見が皆無で、帰属時期のわからないものも多い。また、小竪穴132・133のように近世の墓壙と考えたい形態のものもみられたが、前記したように時期決定ができる遺物の発見がないものは本項で記載した。

出土した土器破片の中には、小竪穴間における接合もみられたが、破片数の多い小竪穴に便宜的に帰属させてある。

なお、根などによる攪乱と判明した穴は欠番とした。

F-4 地区

小竪穴143 (第92・105図)

F-4 グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。他の小竪穴から4 mほど離れており、北端では本址だけが離れている。平面形は長軸122cm、短軸92cmの楕円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは21cmである。

深いものではないが、中位から人為的に埋められたと思われる大きな土器破片が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、第105図1の中期深鉢1点で下胴部を欠損する。破片は15点あり2～4の3点を図示した。石器は、黒曜石の剥片2点である。

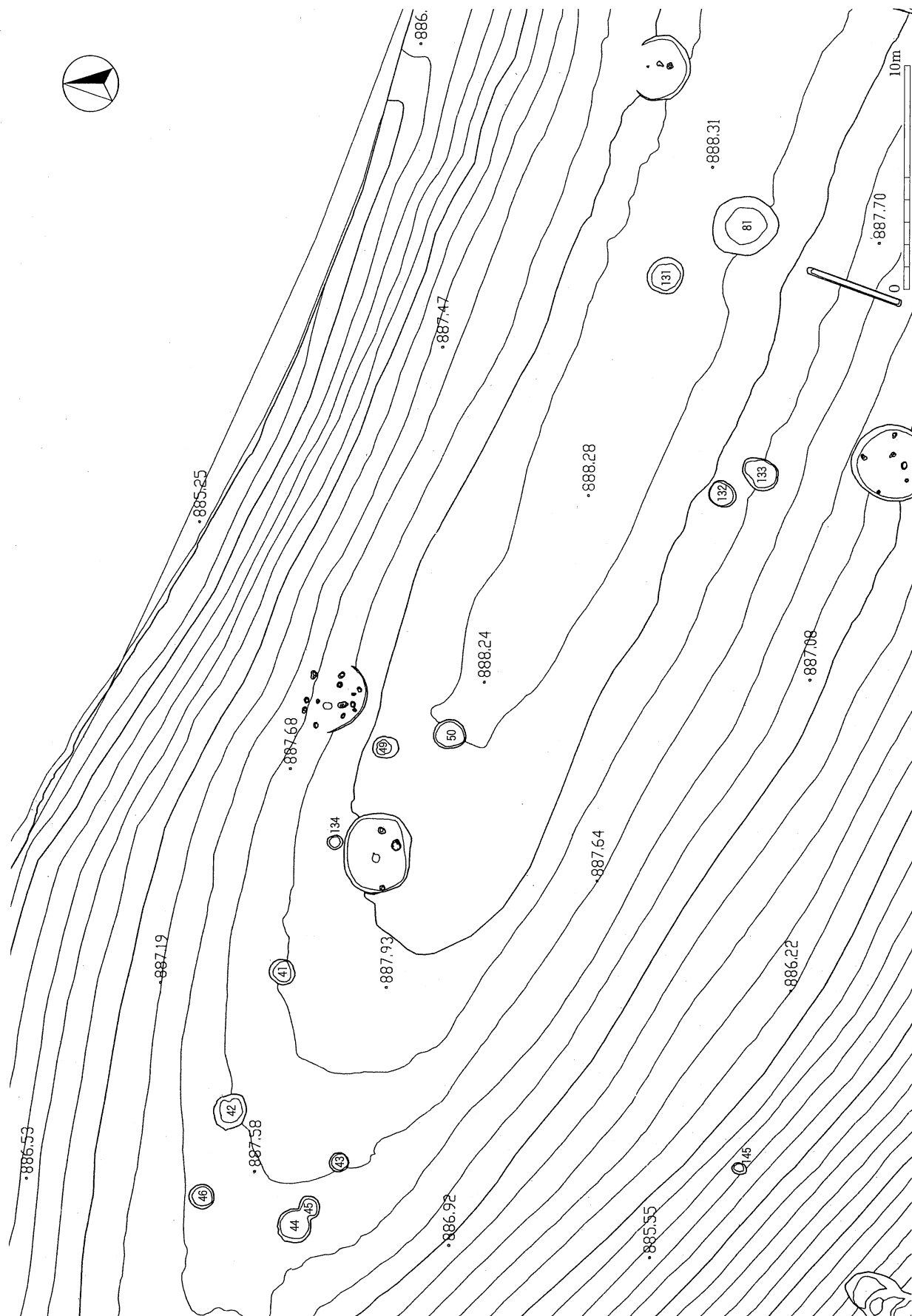
D-5 地区

小竪穴64 (第92・105図)

D-5 グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸76cm、短軸60cmの円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは30cmである。

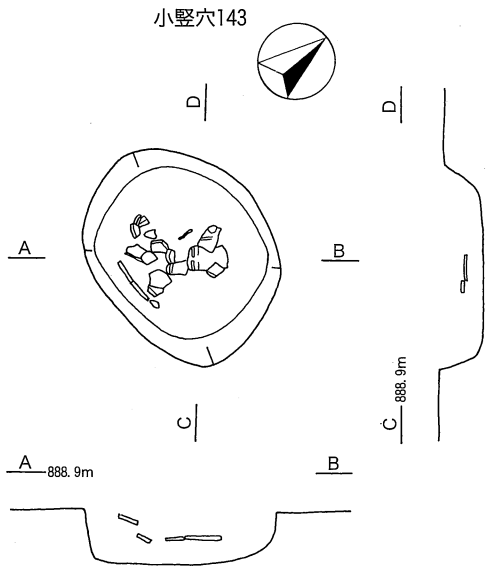
埋土はまばら状で、中位から土器破片が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片5点で第105図5～7の3点を図示した。石器は、8の

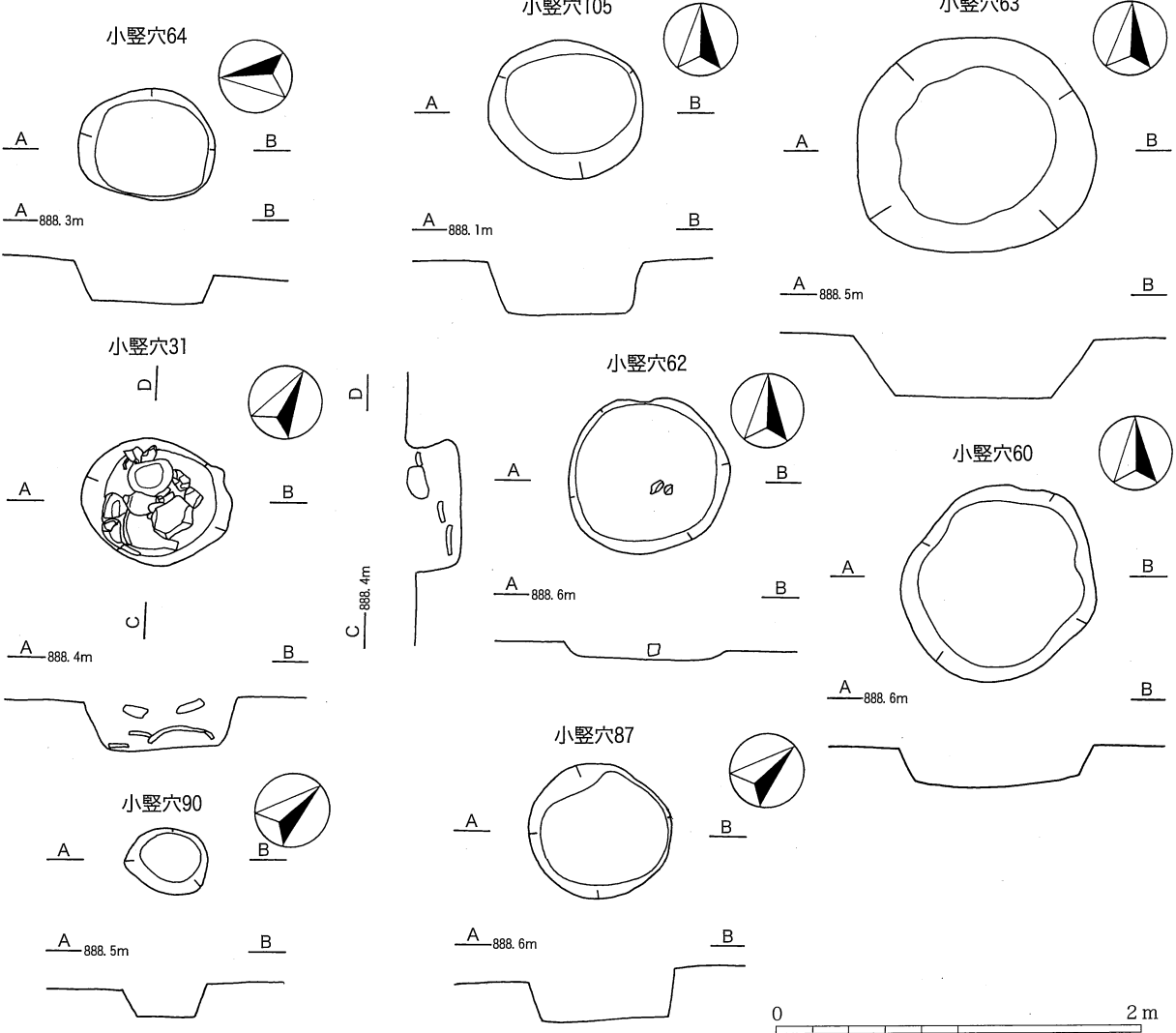


第91图 小竖穴配置图 (1 : 250)

F-4地区



D-5地区



第92图 小竖穴实测图 (1:40)

打製石斧1点である。

小竪穴105（第92図）

D-5グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸84cm、短軸80cmの円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは28cmである。埋土はローム粒とロームブロックをわずかに含む黒褐色土である。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴63（第92・105図）

D-5グリッドで検出した。平面形は長軸132cm、短軸120cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは35cmである。

埋土はロームの細粒がわずかにみられる均質な褐色土で、礫や土器破片などが出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片4点で第105図9を図示した。石器は、黒曜石の剥片2点である。

小竪穴31（第92・106図、写真66～68）

D-5グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸82cm、短軸70cmの円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは27cmである。

半割したところ焼土が認められ大きな土器破片が出土した。特殊な小竪穴と考え慎重に精査を進めた。最上位ではわずかな焼土が認められ、その下の埋土上位に平板石を並べ、またその下には大きな土器破片が小竪穴の底部を覆うような状態で置かれていることが観察できた。

特殊性が際立っていたが墓と仮定した場合、遺物等の出土状態から、まず遺体あるいは遺骨を安置し、大きな土器破片で覆った後にわずかに埋め戻し、さらに平板石を並べたものと考えられる。最上位の焼土については墓上で火をたいたものと思われるが、埋葬時点であるなか不明である。

遺物は土器と石器がある。土器は、第106図9の小竪穴の底面を覆っていた中期深鉢1点で、小竪穴12から出土した破片1点が接合した。小竪穴間は18.2mを計る。出土状態は副葬品とは異なるようである。小竪穴間接合がみられ注目されるが、性格など詳しいことは不明である。ほかに破片22点である。石器は、10の石鏃1点、11・12の打製石斧は2点である。13の凹石1点、黒曜石の剥片2点がある。

小竪穴62（第92・106図）

D-5グリッドで検出した。平面形は長軸90cm、短軸84cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは15cmと浅い。

埋土はローム粒をわずかに含む褐色土で、礫・土器破片などが出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片2点で第106図14・15である。石器は、16の打製石斧1点、黒曜石の剥片1点である。

小竪穴60 (第92・106図)

D-5グリッドで検出した。平面形は長軸110cm、短軸110cmの円形としたが整ったものではない。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面は丸みを持ち深さは18cmと浅いものである。

埋土はローム粒をわずかに含む褐色土で、土器破片と黒曜石の剥片などが出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の土器破片6点で第106図17・18の2点を図示した。石器は、黒曜石の剥片3点である。なお、土師器の破片1点が出土したが混入遺物であろう。

小竪穴90 (第92図)

D-5グリッドで検出した。平面形は長軸46cm、短軸36cmの円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らでやや傾くが深さは19cmである。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴87 (第92・106図)

D-5グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸78cm、短軸74cmの円形である。壁の立ち上がりは良く、底面はほぼ平らで深さは29cmである。

埋土はロームブロックと炭化物を含むまばら状で、検出面で小礫と土器破片が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は中期の土器破片1点で第106図19である。

小竪穴88 (第93・106・107図)

D-5グリッドで検出した。平面形は長軸128cm、短軸90cmの楕円形としたが整ったものではない。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はやや傾くがほぼ平らで深さは29cmである。

埋土はローム粒多く含む黄褐色から褐色土で、検出面で土器破片・打製石斧などが出土し墓墳の可能性が高いものである。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片13点で第106図20・21の2点を図示した。石器は、22の石錐1点、第107図23の打製石斧1点、剥片2点、黒曜石の剥片4点である。

小竪穴70 (第93・107図)

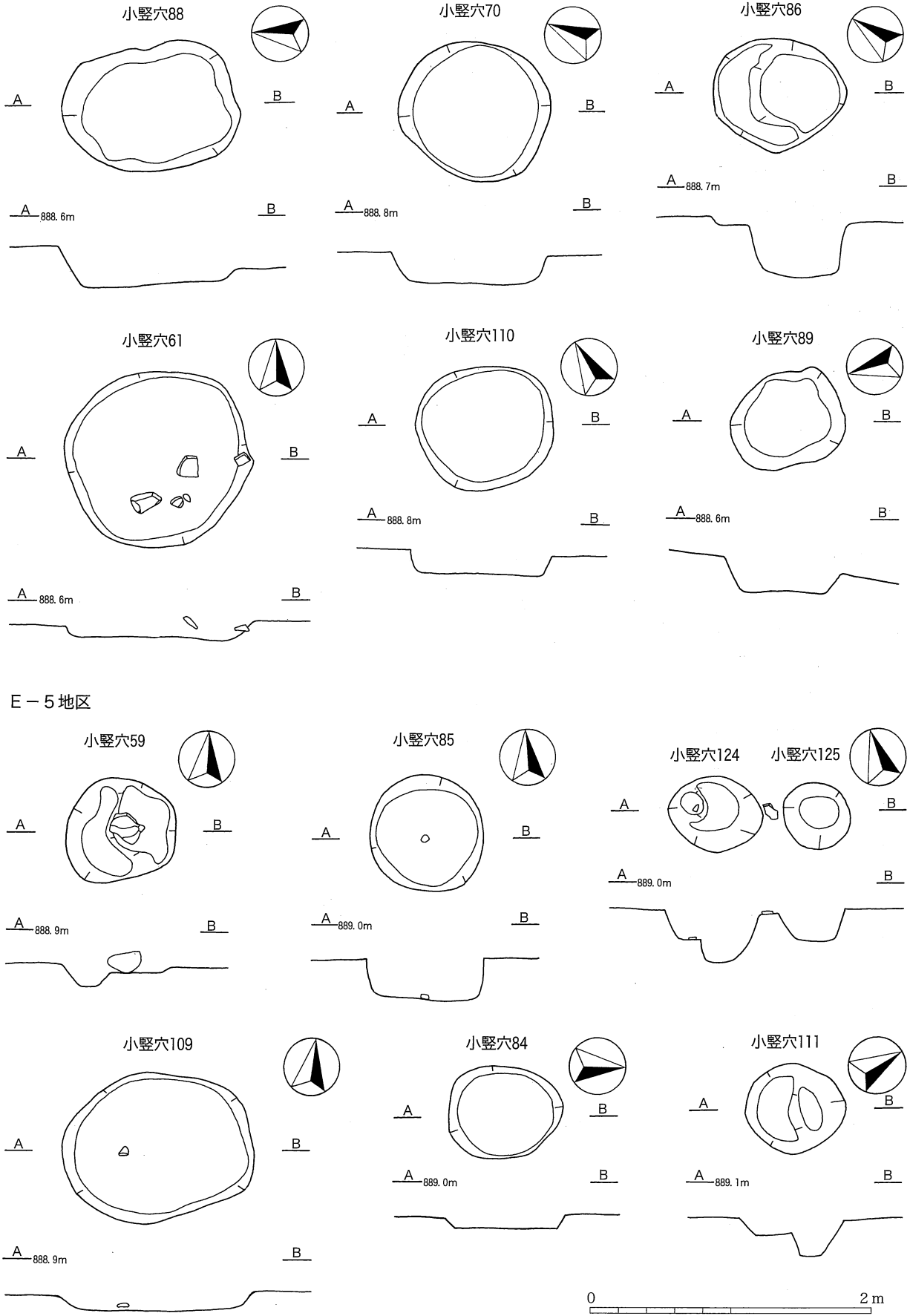
D-5グリッドで検出した。平面形は長軸110cm、短軸104cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは22cmである。

埋土はローム細粒をわずかに含む褐色土で、土器破片と打製石斧が出土したが、本址性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片3点で第107図24・25の2点を図示した。石器は、図示しなかった打製石斧の残欠1点である。

小竪穴86 (第93・107図)

D-5グリッドで検出した。平面形は長軸96cm、短軸76cmの楕円形である。北側が2段に落ち込み重複ともみえるが1基の小竪穴である。壁の立ち上がりはよいが、底面は丸みをもちやや傾き深さは深い



第93图 小竖穴实测图 (1:40)

所で44cm、浅い所で6cmである。

埋土はロームブロックを含む褐色土で、数多い土器破片が出土し墓墳の可能性が高いものである。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の土器破片が55点と多く第107図26・27の2点を図示した。石器は、黒曜石の剥片3点である。

小竪穴61（第93・107図）

D-5グリッドで検出した。平面形は長軸134cm、短軸126cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは14cmと浅いものである。

埋土はローム細粒を含む褐色土で、検出面で土器破片と大礫が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片が40点と多いが第107図28～31の4点を図示した。31は浅鉢である。石器は、打製石斧が2点で32の完形品1点と図示しなかった残欠1点である。33・34のくさび状石器2点、剥片3点、黒曜石の剥片3点である。

小竪穴110（第93図）

D-5グリッドで検出した。平面形は長軸100cm、短軸88cmの円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは14cmである。

埋土はローム粒を含む褐色土である。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴89（第93・107図）

D-5グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸80cm、短軸66cmの楕円形であるが整ったものではない。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは北壁で24cm、南壁で14cmである。

埋土はローム細粒を含む褐色土であり、検出面で土器破片が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器がある。中期の土器破片が2点で第107図35を図示した。

E-5地区

小竪穴59（第93図）

E-5グリッドで検出した。平面形は長軸80cm、短軸74cmの円形である。西側は2段に落ち込み重複ともみえるが1基の小竪穴である。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは深い所で16cm、浅い所は6cmである。

埋土はローム粒とロームブロックを含む黄褐色土から褐色土で、検出面から大礫が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は石器がある。剥片1点、黒曜石の剥片2点である。

小竪穴85（第93・107図）

E-5グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸84cm、短軸82cmの円形である。壁の立ち上がりはほぼ垂直で極めて良く、底面はほぼ平らでやや傾くが深さは32cmである。

埋土は黒色土と褐色土のまばら状で、検出面から打製石斧が底面から小礫が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は石器がある。第105図39の打製石斧1点で基部を欠損する破損品。黒曜石の剥片1点である。

小竪穴124・125（第93図）

小竪穴124は、E-5グリッドで検出した。平面形は長軸68cm、短軸54cmの楕円形である。東側は2段に落ち込み重複ともみえるが1基の小竪穴である。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは深い所で36cm、浅い所は20cmである。

埋土はローム粒をわずかに含む褐色土である。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片が1点である。石器は、黒曜石の剥片2点である。

小竪穴125は、E-5グリッドで検出した。平面形は長軸48cm、短軸48cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底はほぼ平らで深さは22cmである。

埋土はローム粒をわずかに含む褐色土である。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴109（第93図）

E-5グリッドで検出した。平面形は長軸136cm、短軸106cmの楕円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは15cmと浅いものである。

埋土はローム粒をわずかに含む褐色土で、小礫が出土したが本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴84（第93図）

E-5グリッドで検出した。平面形は長軸82cm、短軸66cmの楕円形である。壁の立ち上がりは普通であるが、底面は根によるのか凸凹し深さは10cmと浅いものである。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴111（第93図）

E-5グリッドで検出した。平面形は長軸72cm、短軸66cmの円形である。北側が2段に落ち込むが壁の立ち上がりは緩やかでよく、底面はほぼ平らで深さは深い所で26cm、浅い所は13cmである。

埋土はローム粒を含む褐色土である。

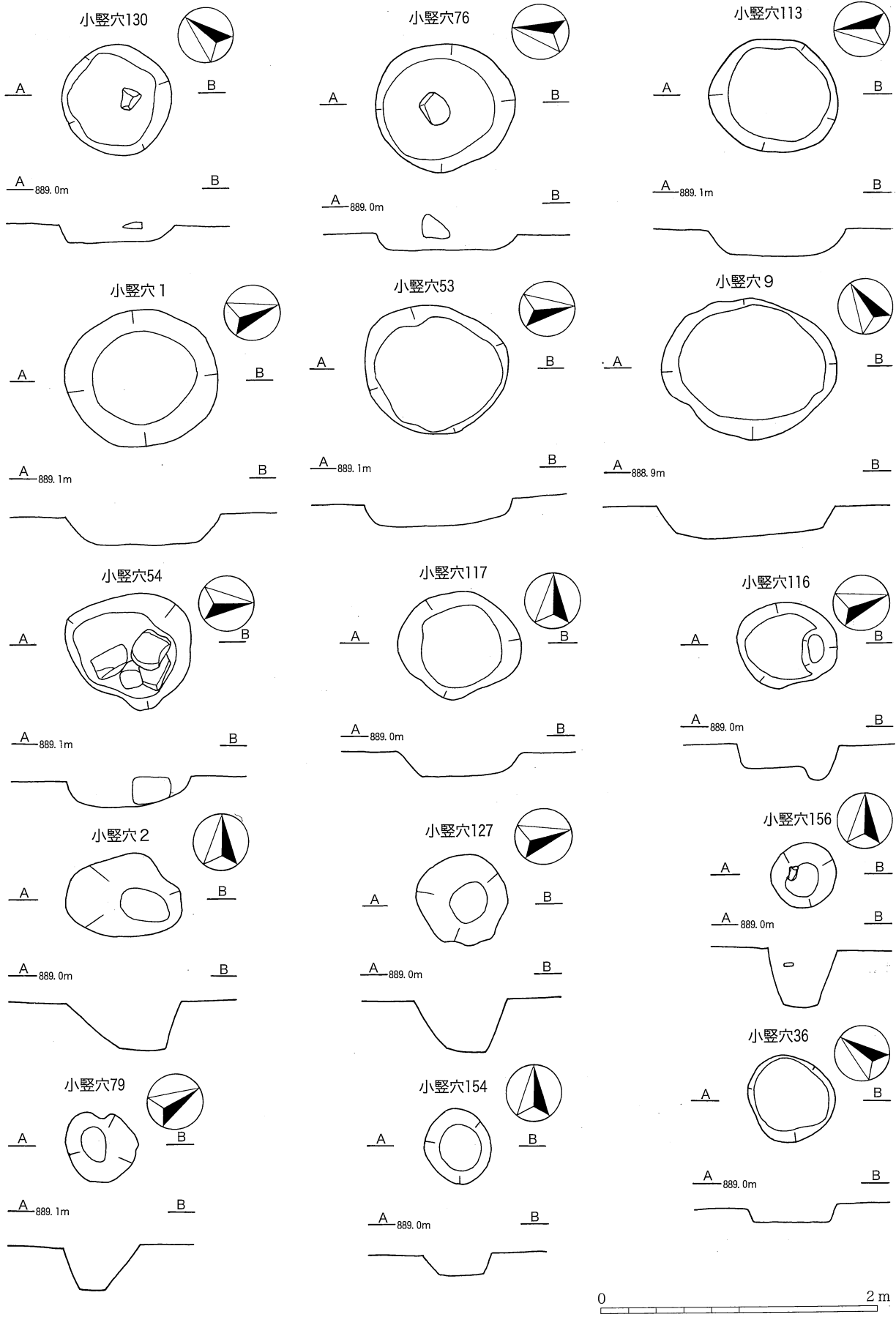
遺物の発見は皆無である。

小竪穴130（第94図）

E-5グリッドで検出した。平面形は長軸82cm、短軸82cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは12cmと浅いものである。

検出面の中央で大礫が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物の発見は皆無である。



第94图 小竖穴实测图 (1:40)

小竪穴76 (第94・107図)

E-5グリッドで検出した。平面形は長軸100cm、短軸94cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは18cmと浅いものである。

埋土は黒色土と褐色土のまばら状で、検出面の中央で大礫が出土したが本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片3点で第107図36・37の2点を図示した。石器は、38の打製石斧1点で刃部を欠損する破損品。黒曜石の剥片2点である。

小竪穴113 (第94図)

E-5グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸92cm、短軸82cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは20cmである。

埋土はローム粒をわずかに含む黒褐色土で、底面から小礫が出土したが本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は石器がある。第107図40のくさび状石器1点である。

小竪穴1 (第94・107図、写真61)

E-5グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸110cm、短軸100cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは20cmである。

土器破片・黒曜石剥片が出土したが本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の土器破片が7点で第107図41～43の3点を図示した。石器は、図示しなかったが打製石斧の残欠1点、剥片1点、黒曜石の剥片1点である。

小竪穴53 (第94・108図)

E-5グリッドで検出した。平面形は長軸104cm、短軸94cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくなく、底面はやや丸みをもち深さは16cmと浅いものである。

埋土はローム細粒と黒色土粒を含みまばら状で、検出面から小礫が集中して出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片が55点と多いが第108図44～46の3点を図示した。石器は、47の敲石1点である。

小竪穴9 (第94・108図、写真239)

E-5グリッドで検出した。平面形は長軸128cm、短軸102cmの楕円形であるが整ったものではない。壁の立ち上がりは緩やかでよくなく、底面はやや丸みをもち深さは27cmである。

埋土はローム粒をわずかに含む褐色土で、大きな土器破片が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、第108図48の中期深鉢、破片19点で49～51の3点を図示した。石器は、剥片1点、黒曜石の剥片1点である。

小竪穴54 (第94・108図)

E-5グリッドで検出した。平面形は長軸90cm、短軸76cmの不整形円形である。壁の立ち上がりは緩や

かによくなく、底面はやや丸みもち深さは16cmである。

埋土はローム粒を含む褐色土で、検出面とその下層に大礫が集中し、なかには底面に置かれたものもあるが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器がある。中期の破片18点で第108図52～54の4点を図示した。

小竪穴117（第94図）

E-5グリッドで検出した。平面形は長軸88cm、短軸76cmの円形であるが整っていない。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは18cmと浅いものである。

埋土はローム粒をわずかに含む褐色土である。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴116（第94図）

E-5グリッドで検出した。平面形は長軸74cm、短軸60cmの円形である。北側は2段に落ち込み壁の立ち上がりは普通であるが、底面はほぼ平らで深さは深い所で26cm、浅い所は15cmである。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴2（第94図）

E-5グリッドで検出した。平面形は長軸84cm、短軸58cmの楕円形であるが整っていない。壁の立ち上がりは緩やかですり鉢状になるが、底面はほぼ平らで深さは34cmである。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片17点で第108図55～57の3点を図示した。石器は、58の打製石斧1点、剥片5点、黒曜石の剥片3点である。

小竪穴127（第94図）

E-5グリッドで検出した。平面形は長軸66cm、短軸64cmの円形であるが整っていない。壁の立ち上がりは緩やかですり鉢状になるが、底面はほぼ平らで深さは37cmである。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴156（第94・108図）

E-5グリッドで検出した。平面形は長軸48cm、短軸46cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくなく、底面はほぼ平らで深さは40cmを計る柱穴状のものである。

検出面で礫が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は石器がある。第108図59の打製石斧1点である。

小竪穴79（第94図）

E-5グリッドで検出した。平面形は長軸52cm、短軸48cmの不整形円形である。壁の立ち上がりは緩やかですり鉢状になるが、底面は丸みもち深さは32cmである。

埋土はローム粒多く含む褐色土である。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴154 (第94図)

E-5グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸54cm、短軸48cmの円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面は丸みをもちわずかに傾き深さは15cmと浅いものである。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴36 (第94・109図)

E-5グリッドで検出した。平面形は長軸64cm、短軸64cmの円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは13cmと浅いものである。

埋土はローム細粒を含む褐色土である。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片41点と多く第109図62～64の3点を図示したが、63は浅鉢である。石器は、第108図60の横刃形石器1点、61の敲石1点である。

小竪穴37・38 (第95・109・110図、写真69～71・151～153)

小竪穴37は、E-5グリッドで検出した。平面形は長軸110cm、短軸92cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はわずかに丸みをもち凹凸もみられるが深さは21cmである。

埋土はローム細粒をわずかに含む均質な褐色土である。検出面とそれより上位から大礫が数多く出土したが、礫は線刻が施された石皿を覆うような状態であり、また、深鉢の底部が逆位で置かれていた。石皿は完形品で底面からやや浮き傾きかげんであるが正位の状態である。

遺物は土器と石器がある。土器は、第109図65の中期深鉢1点があり、隣接する小竪穴83出土破片1点が接合したが、小竪穴間は1mである。ほかに破片は91点と多いが66～68の3点を図示した。石器は、打製石斧が2点で69は刃部を欠損する破損品、図示しなかった残欠1点、70の横刃形石器1点、72の線刻石皿1点は完形の優品。71の凹石1点は表面がつるつるしている。剥片4点、黒曜石の剥片7点である。

小竪穴38は、E-5グリッドで検出した。平面形は長軸100cm、短軸84cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは20cmである。

埋土はローム細粒をわずかに含む均質な褐色土で、検出面で礫が出土したが性格が把握できるものではない。

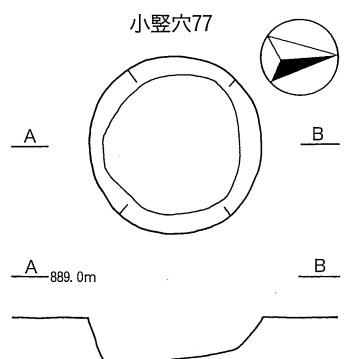
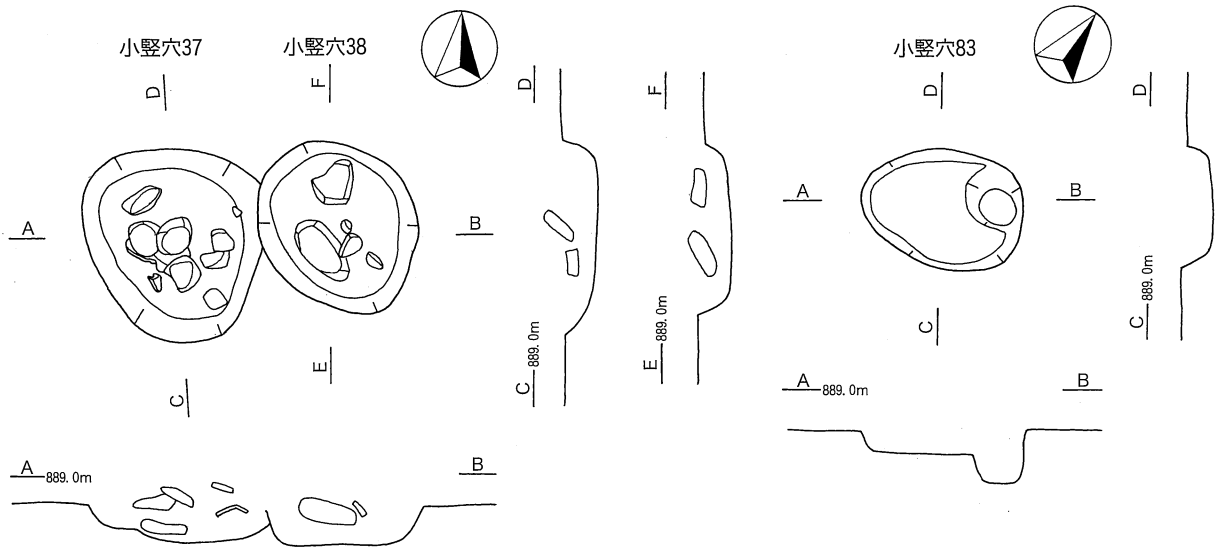
遺物は土器と石器がある。土器は第110図73の中期深鉢1点、ほかに破片が57点と多いが74～76の3点を図示した。石器は、77・78の敲石2点である。

小竪穴83 (第95・110図)

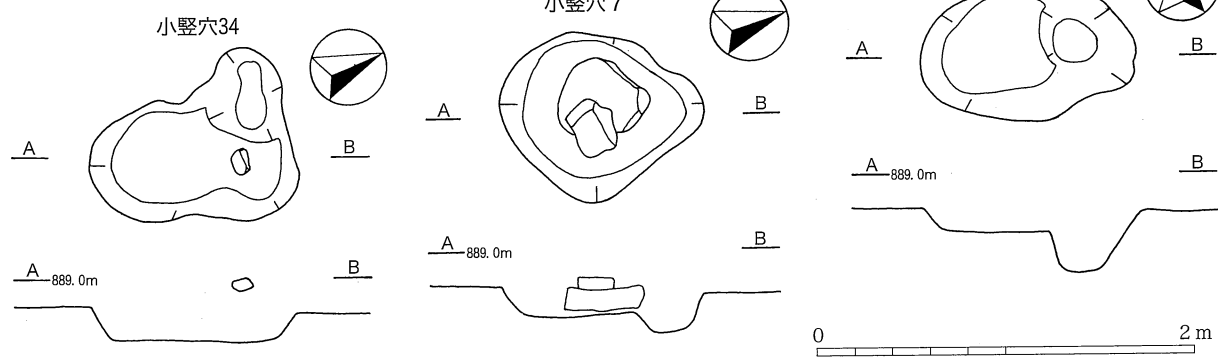
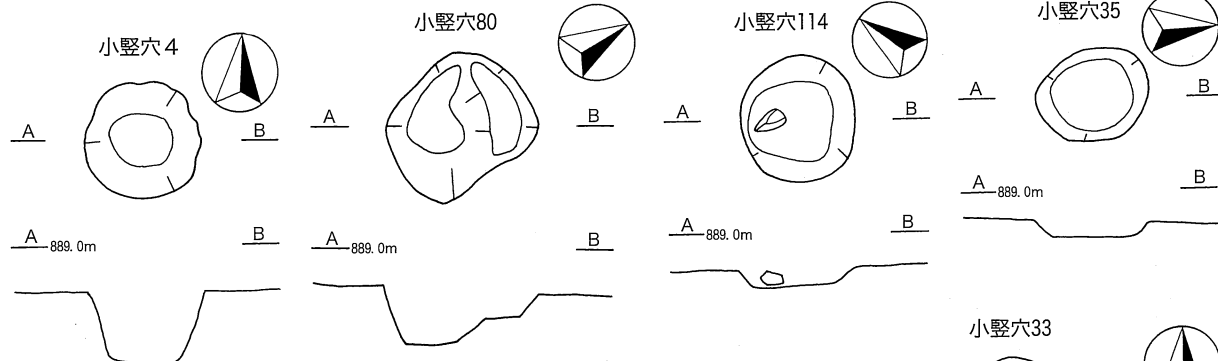
E-5グリッドで検出した。平面形は長軸86cm、短軸64cmの楕円形である。北隅が2段に落ち込むが立ち上がりは普通であるが、底面はほぼ平らで深さは深い所で28cm、浅い所は13cmである。

土器が出土し墓壇の可能性が高いものである。

遺物は土器と石器がある。土器は、第110図79の中期深鉢1点があり、隣接する小竪穴37から出土した破片1点が接合した。小竪穴間は1mを計る。ほかに破片が2点ある。石器は、80の凹石・叩き石1点で火熱を受けている。



F-5地区



第95图 小竪穴实测图 (1:40)

小竪穴77 (第95・110図)

E-5グリッドで検出した。平面形は長軸94cm、短軸92cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは22cmである。

埋土はローム粒と炭化物粒をわずかに含むまばら状で、土器破片と小礫が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片が45点と多く第110図81・82の2点を図示した。石器は、黒曜石の剥片3点である。

F-5地区

小竪穴4 (第95図)

F-5グリッドで検出した。平面形は長軸64cm、短軸62cmの円形であるが整っていない。壁の立ち上がりは普通であるが、底面はほぼ平らで深さは38cmを計り、やや浅いが柱穴状のものである。

埋土はローム粒をわずかに含む褐色土である。

遺物は黒曜石の剥片1点である。

小竪穴80 (第95・110図)

F-5グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸82cm、短軸62cmの楕円形としたが隅丸方形のようでもある。南隅が2段に落ち込むが立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは深い所で32cm、浅い所は13cmである。

埋土は黒色土と褐色土のまばら状で、底面近くに土器破片が重ねた状態で埋納してあり墓壇の可能性が高いものである。

遺物は土器がある。中期の破片8点で第110図83～85の3点を図示した。

小竪穴114 (第95・111図)

E-5・F-5グリッドで検出した。平面形は長軸68cm、短軸60cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは10cmと浅いものである。

埋土はローム粒を多く含む黄褐色土で、礫が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器がある。中期の破片2点で第111図86・87である。

小竪穴35 (第95・111図)

F-5・F-6グリッドで検出した。平面形は長軸60cm、短軸48cmの円形であるが整っていない。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは10cmと浅いものである。

埋土はローム粒を多く含む黄褐色土である。

遺物は土器がある。中期の破片2点で第111図95を図示した。

小竪穴34 (第95・111図)

E-5・F-5グリッドで検出した。平面形は長軸112cm、短軸60cmの不整形である。西側は2段に落ち込み重複にもみえるがここでは1基の小竪穴と考えておきたい。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは19cmである。

埋土はローム粒を多く含む黄褐色土で、礫が出土したが本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片6点で第111図88～90の3点を図示したが、89の内面には朱がみられる。石器は、91・92の打製石斧2点で両者とも刃部を欠損する破損品、剥片1点、黒曜石剥片4点である。

小竪穴7（第95図、写真62）

F-5グリッドで検出した。平面形は長軸108cm、短軸88cmの円形であるが整っていない。北側が2段に落ち込み重複にもみえるがここでは1基の小竪穴と考えておきたい。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは深い所で25cm、浅い所は16cmである。

埋土はローム粒をわずかに含む褐色土で、平板状の大礫が重ねられた状態で埋められていたが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は石器がある。図示しなかったが石錐1点、黒曜石の剥片3点である。

小竪穴33（第95・111図）

F-5グリッドで検出した。平面形は長軸114cm、短軸76cmの楕円形であるが整っていない。東側が2段に落ち込み重複にもみえるがここでは1基の小竪穴と考えておきたい。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは深い所で34cm、浅い所は10cmである。

埋土はローム細粒を含む褐色土である。

遺物は中期の土器破片1点で第111図96である。

小竪穴115（第96図）

F-5グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸92cm、短軸88cmの円形であるが整っていない。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは18cmである

検出面で礫が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴5（第96図）

F-5グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸86cm、短軸82cmの円形であるが整っていない。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは16cmである。

埋土はローム粒をわずかに含む褐色土で、底面から平板状の礫が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

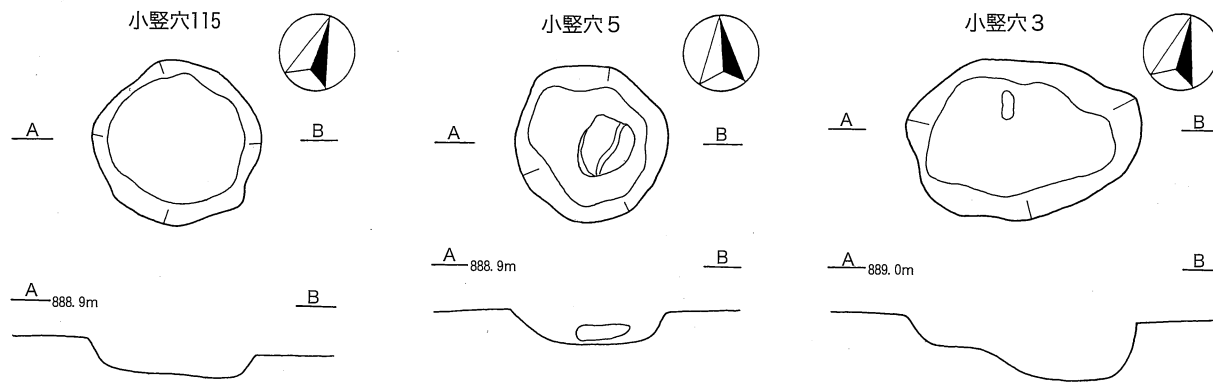
遺物の発見は皆無である。

小竪穴3（第96図）

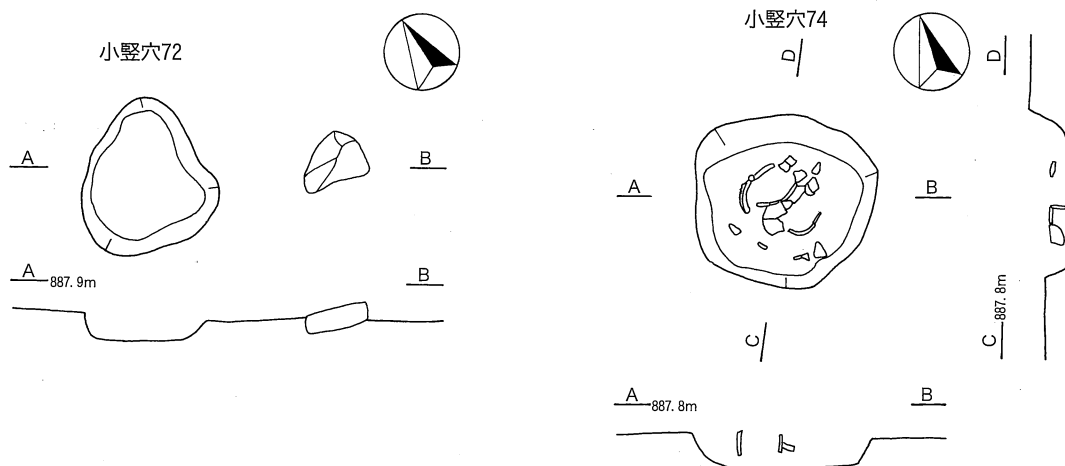
F-5グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸124cm、短軸86cmの楕円形であるが整っていない。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面は東側が深くなり深さは深いところで34cmである。

埋土はローム粒をわずかに含む褐色土で、出土した遺物は多かったが本址の性格が把握できるようなものではない。

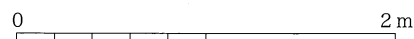
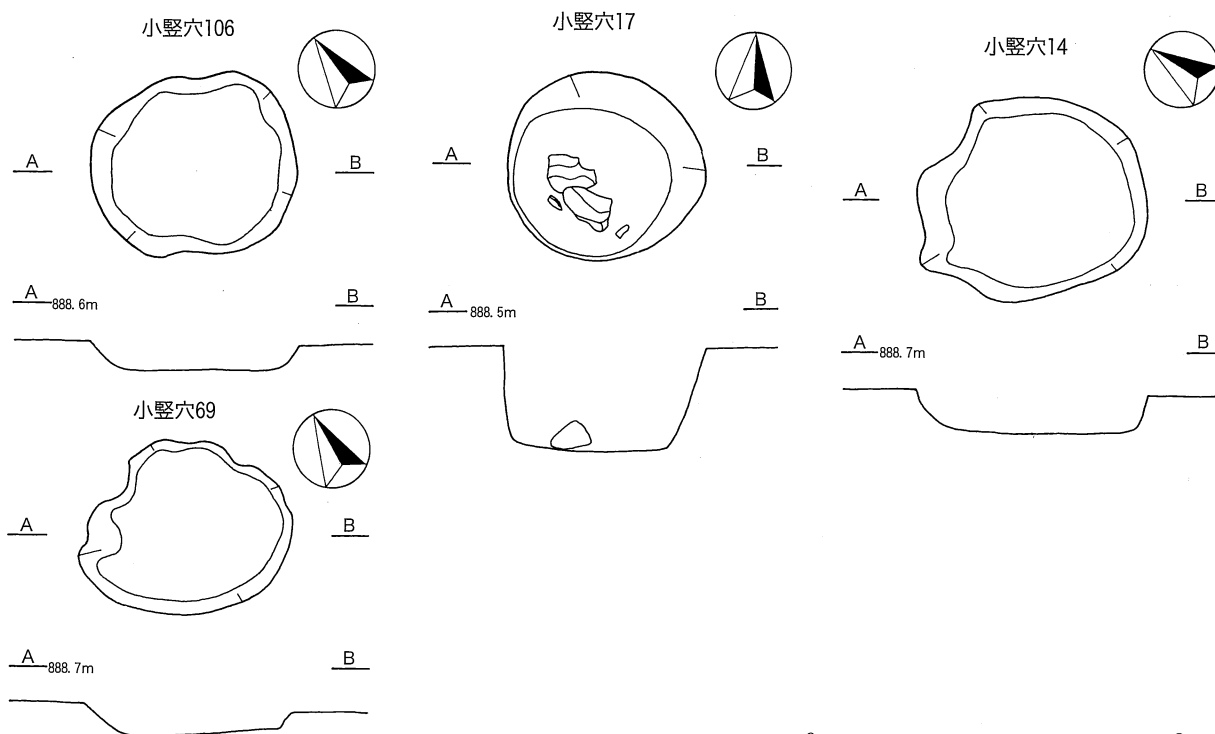
遺物は石器がある。第111図94の横刃形石器1点はくさび状石器かもしれない。93の磨石1点、剥片1点、黒曜石の剥片2点である。



C-6地区



D-6地区



第96图 小豎穴実測図 (1:40)

C-6 地区

小竪穴72 (第96・111図、写真149)

C-6 グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸84cm、短軸70cmの不整形としたが三角形であるかもしれない。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは21cmである。

埋土はローム粒を含む褐色土で、出土した遺物は多かったが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、第111図97の中期深鉢1点、破片21点で98～100の3点を図示した。石器は、剥片2点、黒曜石の剥片4点がある。

小竪穴74 (第96・112図)

C-6 グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸96cm、短軸90cmの円形であるが整っていない。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは21cmである。

埋土はローム粒ごくわずかに含む均質な褐色土で、深鉢が埋設されたような状態で出土し墓壇の可能性が高いものである。

遺物は土器と石器がある。土器は、第112図101の中期深鉢1点、破片は61点と多いが102～104の4点を図示した。石器は、打製石斧3点で第112図105・106と図示しなかった残欠1点、剥片1点がある。

D-6 地区

小竪穴106 (第96・112図)

D-6 グリッドで検出した。平面形は長軸110cm、短軸92cmの楕円形であるが整っていない。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは20cmである。

埋土はローム粒のほとんどない均質な黒褐色土で、大きな土器破片が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片が54点と多いが第112図107～109の3点を図示した。土器破片のなかには付近から出土した土器破片と接合したものもある。石器は、剥片1点がある。

小竪穴17 (第96・112図)

D-6 グリッドで検出した。平面形は長軸106cm、短軸100cmの円形である。壁の立ち上がりはよく、底面はほぼ平らで深さは56cmと深いものである。埋土はローム粒をわずかに含む黒褐色土であり、底面には礫があり中層から上層で土器破片・打製石斧が出土したが本址の性格が把握できるものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片が4点で第112図110～112の3点を図示した。石器は、113の打製石斧1点、剥片3点、黒曜石の剥片1点がある。

小竪穴14 (第96・112図)

D-6 グリッドで検出した。平面形は長軸122cm、短軸106cmの円形である整っていない。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは24cmである。

埋土はロームブロックを含む黒褐色土で、深鉢2点は原形を保っていなかったが上層から出土した。出土状態は注目されるが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、第112図114・115の中期深鉢2点がある。115に小竪穴94から出土

した破片1点が接合したが、小竪穴間は13.8mを計る。石器は、黒曜石の剥片1点がある。

小竪穴69 (第96・113図)

D-6グリッドで検出した。平面形は長軸116cm、短軸90cmの不整系である。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らでやや傾くが深さは17cmである。

埋土はローム細粒をわずかに含む褐色土である。

遺物は土器がある。中期の破片が3点で第113図116・117の2点を図示した。

小竪穴20A・20B (第97・113図)

小竪穴20Aは、D-6・D-7グリッドで検出した。平面形は長軸144cm、短軸88cmの楕円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは44cmと深いものである。

埋土はローム粒やや多く含む褐色土で、埋土中から大礫が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片が52点と多く第113図118～120の3点を図示した。石器は、剥片1点がある。

小竪穴20Bは、D-6グリッドで検出した。平面形は長軸126cm、短軸118cmの円形である。壁の立ち上がりは普通で、底はほぼ平らで深さは25cmである。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片が8点で第113図121～123の3点を図示した。石器は、124の打製石斧1点で刃部を欠損する破損品、剥片1点、黒曜石の剥片4点がある。

小竪穴19 (第97・113図)

D-6地区で検出した。平面形は長軸144cm、短軸74cmの楕円形であるが整っていない。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは24cmである。

埋土はローム粒を多く含む褐色土で、検出面で平板状の大礫が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片が2点で第113図125の1点を図示した。石器は、剥片1点がある。

小竪穴18 (第97・113図)

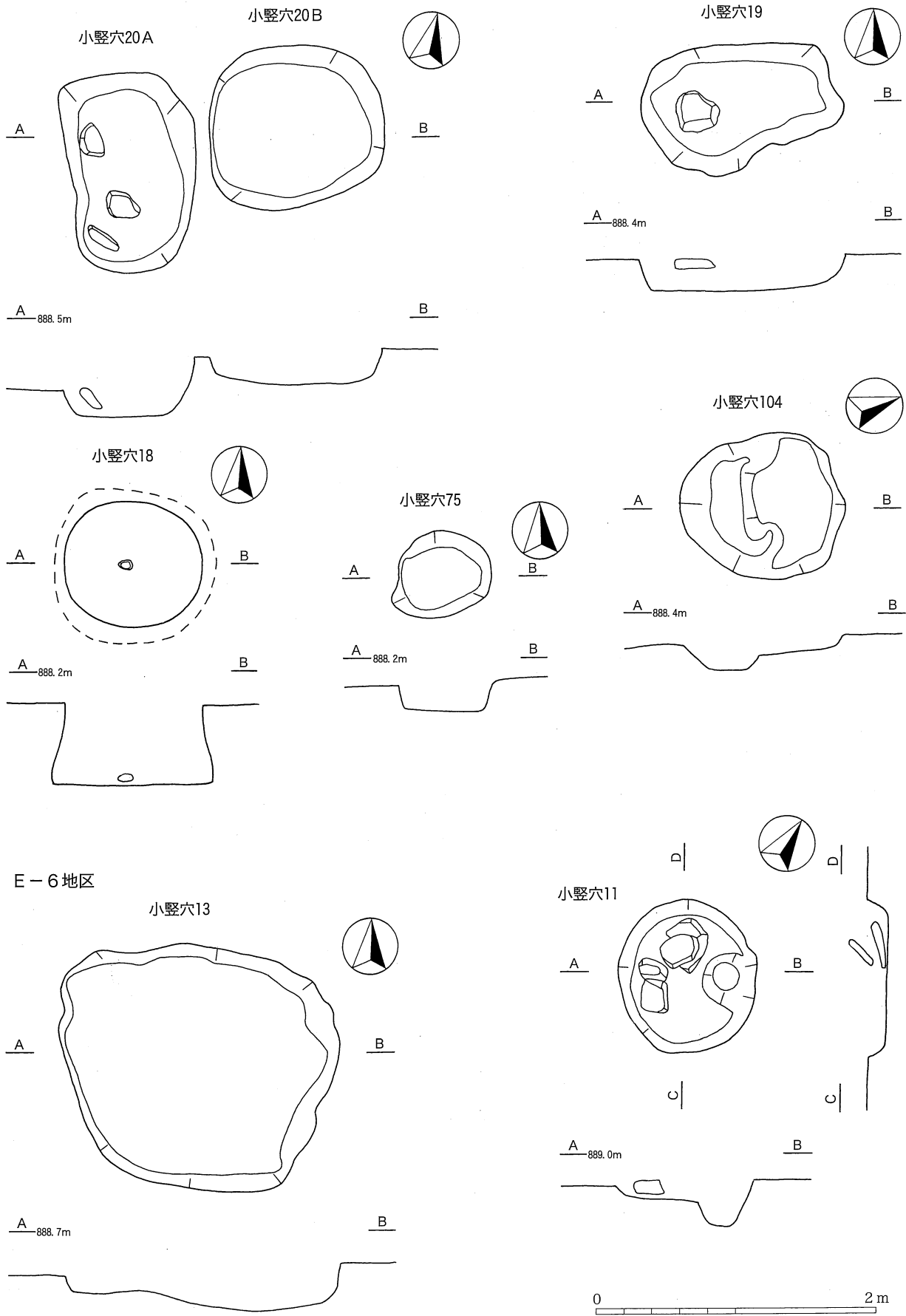
D-6グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸98cm、短軸92cmの円形である。壁の袋状であり底面はほぼ平らで深さは62cmと深いものである。

埋土はローム粒をわずかに含む黒褐色土であり、底面には凹石・磨石が置かれていた。袋状の小竪穴であり貯蔵穴であろう。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片が2点で第113図126・127である。石器は、128の凹石・磨石1点、剥片6点、黒曜石の剥片15点がある。

小竪穴75 (第97・113図)

D-6グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸66cm、短軸62cmの不整円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは22cmである。



第97图 小竖穴实测图 (1:40)

埋土はローム粒・ロームブロックと黒色土をわずかに含むまばら状のものである。

遺物は石器がある。第113図129の乳棒状磨製石斧1点で基部を欠損する破損品である。

小竪穴104（第97・113図）

D-6グリッドで検出した。平面形は長軸119cm、短軸106cmの円形であるが整っていない。南側が2段に落ち込むが壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは深い所で26cm、浅い所は16cmである。

埋土はローム粒のほとんどない黒褐色土であるが均質ではない。検出面で礫が、その下から土器破片が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は中期の土器破片が1点で第113図130である。

E-6地区

小竪穴13（第97・113・114図）

D-6・D-7・E-6・E-7グリッドで検出した。平面形は長軸196cm、短軸178cmの円形であるが整っていない。壁の立ち上がりは普通で、底面は丸みをもちながら傾斜し深い所で36cmを計る。

埋土はローム粒をわずかに含む黒褐色土で、数多い土器破片が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の土器破片が39点と多く第113図131～133の3点を図示した。石器は、打製石斧1点は残欠品で図示していない。第114図134の磨石・叩き石1点は火熱を受けたものである。剥片1点、黒曜石の剥片2点がある。

小竪穴11（第97図）

E-6グリッドで検出した。平面形は長軸110cm、短軸98cmの円形である。東側が2段に落ち込むが壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは深い所で32cm、浅い所は15cmである。

埋土はローム粒をわずかに含む褐色土で、大きな礫が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の土器破片が1点出土し、第19号住居址の第79図7に接合したが、遺構間は21.6mを計る。石器は、剥片1点、黒曜石の剥片1点である。

小竪穴99（第98・114図）

E-6グリッドで検出した。平面形は長軸94cm、短軸94cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは21cmである。

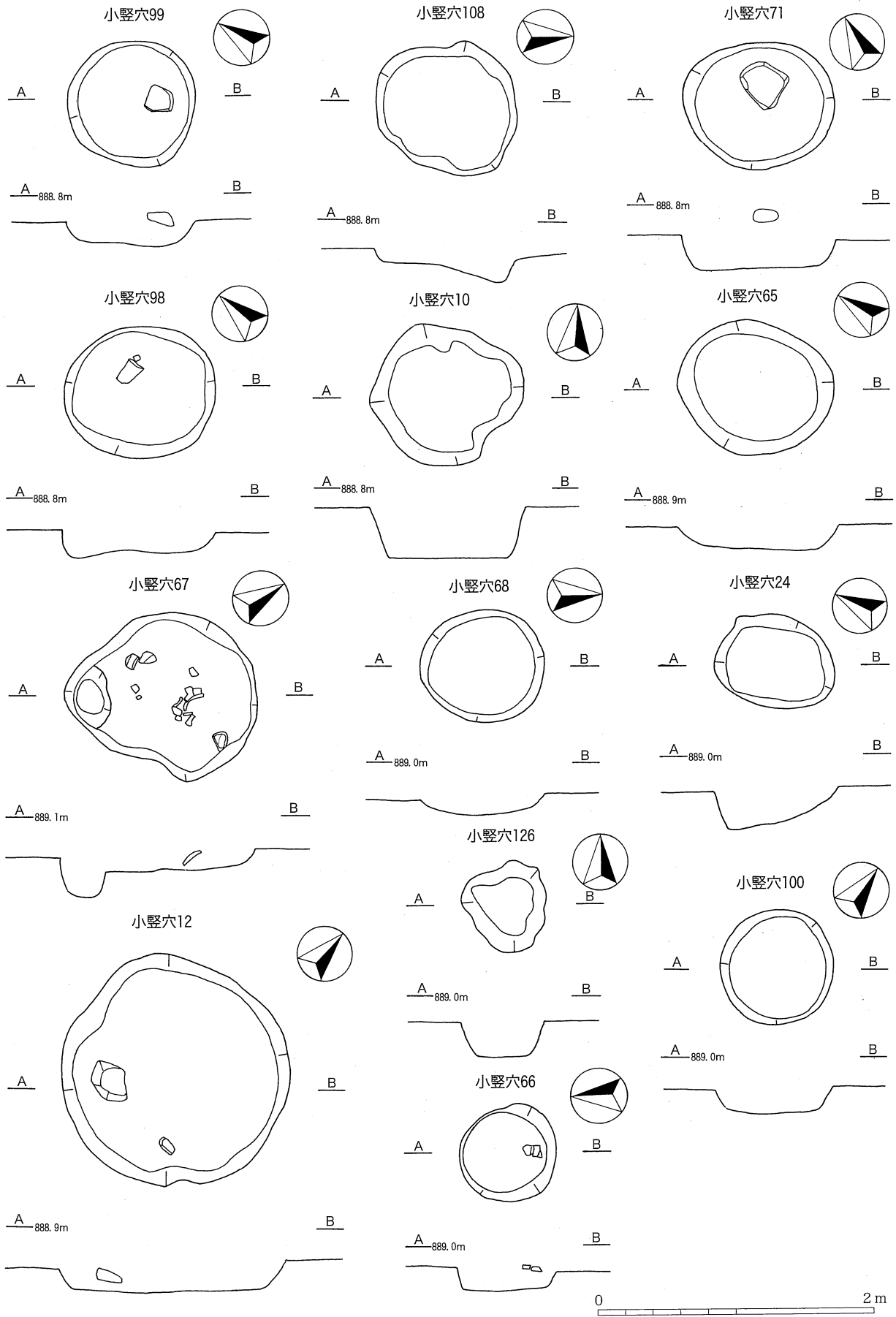
埋土はややまばら状のもので、検出面で大礫と土器破片が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は中期の土器破片が1点で第114図135である。

小竪穴108（第98図）

D-6・E-6グリッドで検出した。平面形は長軸102cm、短軸92cmの円形であるが整っていない。壁の立ち上がりは緩やかでよくなく、底面は丸みをもちながら傾斜し深い所で24cmを計る。

遺物の発見は皆無である。



第98图 小竖穴实测图 (1:40)

小豎穴71 (第98図)

E-6グリッドで検出した。平面形は長軸108cm、短軸92cmの楕円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは26cmである。

埋土は黒色土と褐色土のまばら状であり、検出面より上層で大礫が出土し墓壇の可能性が高いものである。

遺物の発見は皆無である。

小豎穴98 (第98・114図、写真74・242)

E-6グリッドで検出した。平面形は長軸110cm、短軸96cmの楕円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面は中央がわずかに高く凸凹で傾いているが深い所で30cmを計る。

埋土はローム粒を含む褐色土で、検出面で大きな土器破片が出土し、北壁下には深鉢が横位で置かれていた。墓の可能性が高く土器は副葬品であろう。

遺物は第114図138の中期深鉢1点である。

小豎穴10 (第98図)

E-6グリッドで検出した。平面形は長軸112cm、短軸98cmの円形としたが整っていない。壁の立ち上がりは緩やかなすり鉢状で深さは38cmを計るが、不明瞭の落ち込みを掘ったものであり、木の根による攪乱の可能性が高いものである。

遺物の発見は皆無である。

小豎穴65 (第98・114図)

E-6・E-7グリッドで検出した。平面形は長軸114cm、短軸98cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らでやや傾くが深さは17cmと浅い。

埋土はローム細粒がほとんどない褐色土である。

遺物は土器がある。中期の破片が3点で第114図136・137の2点を図示した。

小豎穴67 (第98・114図)

E-6グリッドで検出した。平面形は長軸140cm、短軸108cmの不整形である。南側が2段に落ち込むが壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは深い所で30cm、浅い所は17cmである。

埋土はローム粒・ロームブロックを含む黄褐色から褐色土で、検出面からその上層で数多い土器破片が出土した。本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、第114図139の中期深鉢1点、破片は71点と多く140・141の2点を図示した。石器は、142の敲石1点、黒曜石の剥片4点がある。

小豎穴68 (第98・114図)

E-6グリッドで検出した。平面形は長軸90cm、短軸80cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくなく、底は船底状に丸いが深さは15cmと浅いものである。

遺物は土器と石器がある。土器は、第114図143の中期深鉢1点、破片15点で144～146の3点を図示した。石器は、147の石鏃1点、黒曜石の剥片3点がある。

小竪穴24 (第98・115図)

E-6グリッドで検出した。平面形は長軸90cm、短軸66cmの楕円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくなく、底面は傾くが深い所で27cmを計る。

遺物は中期の土器破片が1点で第115図148である。

小竪穴12 (第98・115図)

E-6グリッドで検出した。平面形は長軸166cm、短軸160cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくないが、底面はほぼ平らで深さは20cmである。

埋土はロームブロック・ロームローム粒をわずかに含む褐色土で、検出面で凹石が、埋土中から大礫と土器破片が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片が3点あり第115図149・150の2点を図示した。残る1点は小竪穴31の第106図9に接合したが、小竪穴間は18.2mを計る。石器は、第115図151・152の凹石・磨石2点がある。

小竪穴126 (第98図)

E-6グリッドで検出した。平面形は長軸62cm、短軸60cmの円形である整っていない。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは26cmを計る。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴66 (第98・115図)

E-6グリッドで検出した。平面形は長軸70cm、短軸70cmの円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らでやや傾くが深さは12cmと浅いものである。

埋土はローム粒をわずかに含む均質な黒褐色土で、検出面で土器破片が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片が28点で第115図153・154の2点を図示した。石器は、155の打製石斧1点で刃部を欠損する破損品、剥片1点、黒曜石の剥片1点がある。

小竪穴100 (第98図)

E-6グリッドで検出した。平面形は長軸84cm、短軸84cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかでよくなく、底面は凸凹しておりよくないが深さは35cmである。

埋土はローム粒と黒色土粒を含むまばら状である。

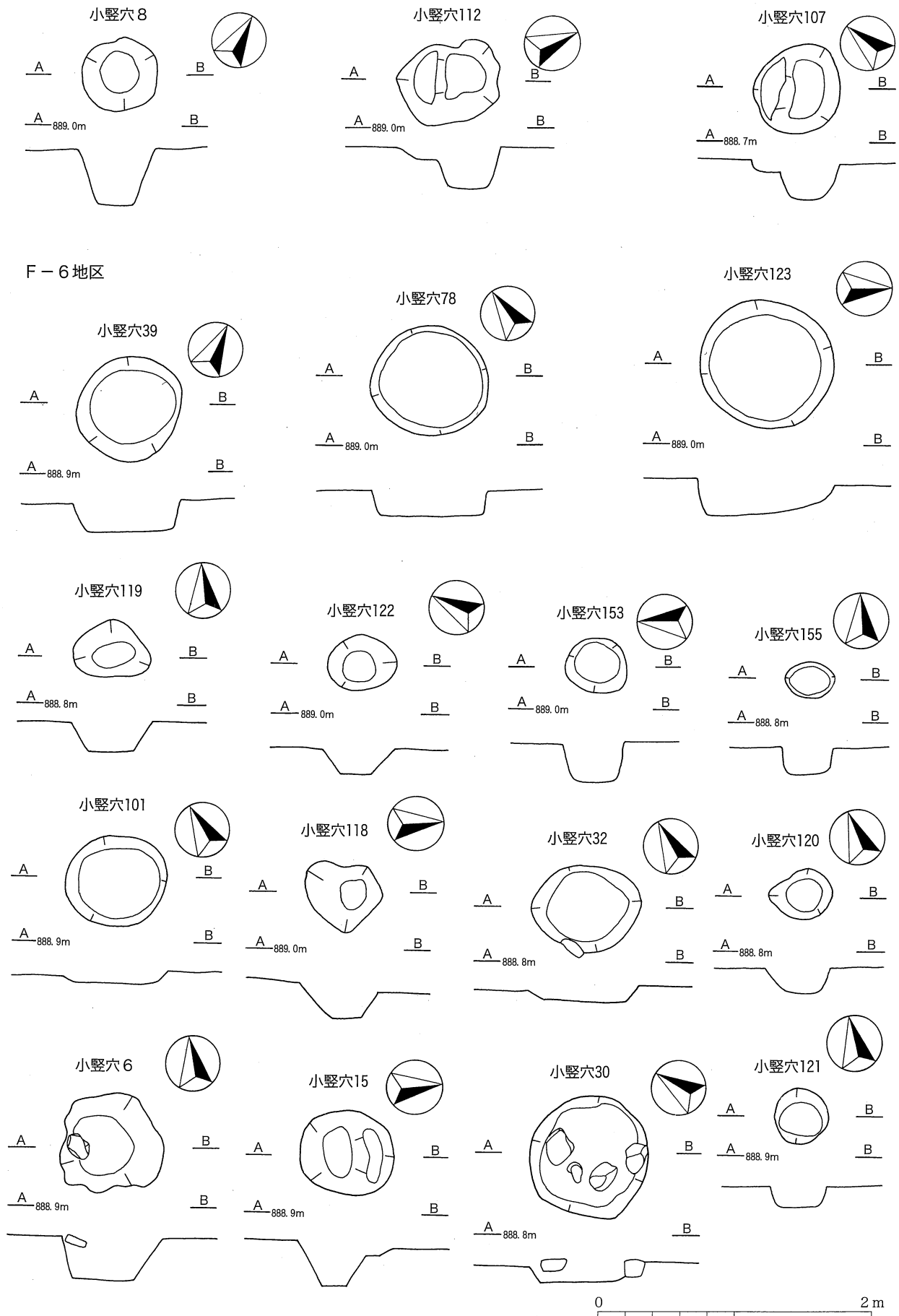
遺物の発見は皆無である。

小竪穴8 (第99図)

E-6グリッドで検出した。平面形は長軸54cm、短軸52cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかですり鉢状であるが、底面はほぼ平らで深さは42cmと深いものである。

埋土はローム粒をわずかに含む褐色土である。

遺物の発見は皆無である。



第99图 小竖穴实测图 (1:40)

小竪穴112 (第99・115図)

E-6グリッドで検出した。平面形は長軸64cm、短軸52cmの不整形である。北側が2段に落ち込むが壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らで深さは深い所で34cm、浅い所は11cmである。

埋土はローム粒を多く含む褐色土である。

遺物は中期の土器破片が1点で第115図156である。

小竪穴107 (第99図)

D-6・E-6グリッドで検出した。平面形は長軸64cm、短軸64cmの円形である。南側が2段に落ち込むが壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは深い所で28cm、浅い所は10cmである。

埋土はローム粒をわずかに含む黒褐色土である。

遺物の発見は皆無である。

F-6地区

小竪穴39 (第99図)

F-6グリッドで検出した。平面形は長軸78cm、短軸76cmの円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは23cmである。

埋土はローム粒を多く含む黄褐色土である。

遺物は図示しなかったが中期の土器破片が1点である。

小竪穴78 (第99・115図)

F-6グリッドで検出した。平面形は長軸86cm、短軸82cmの円形である。壁の立ち上がりはよく、底面はほぼ平らで深さは19cmと浅いものである。

埋土はローム粒含む褐色土であり、検出面で礫が出土したが本址の性格が把握できるものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の土器破片が11点で第115図157～159の3点を図示した。石器は、160の打製石斧1点で基部を欠損する破損品、161の凹石1点がある。

小竪穴123 (第99・115図)

F-6グリッドで検出した。平面形は長軸98cm、短軸94cmの円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで傾くが深さは深い所で28cmである。

埋土はローム粒をわずかに含む褐色土で、検出面で土器破片が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の土器破片が4点で第115図163を図示した。石器は、剥片1点である。

小竪穴119 (第99・115図)

F-6グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸56cm、短軸42cmの楕円形としたが三角形に近いものである。壁の立ち上がり緩やかで、底は船底状にまるく深さは22cmである。

埋土はローム粒をごくわずかに含む均質な褐色土である。

遺物は中期の土器破片が1点で第115図164である。

小豎穴122 (第99図)

F-6グリッドで検出した。平面形は長軸50cm、短軸42cmの楕円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らで深さは21cmである。

埋土はローム粒をわずかに含む褐色土である。

遺物の発見は皆無である。

小豎穴153 (第99図)

F-6グリッドで検出した。平面形は長軸46cm、短軸40cmの円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは28cmの柱穴状のものである。

遺物の発見は皆無である。

小豎穴155 (第99図)

F-6グリッドで検出した。平面形は長軸36cm、短軸26cmの楕円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは20cmの柱穴状のものである。

遺物の発見は皆無である。

小豎穴101 (第99図)

F-6グリッドで検出した。平面形は長軸100cm、短軸88cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らで深さは14cmと浅いものである。

埋土はローム粒を含む褐色土である。

遺物の発見は皆無である。

小豎穴118 (第99図)

F-6グリッドで検出した。平面形は長軸56cm、短軸48cmの不整形としたが三角形に近いものである。壁の立ち上がりは緩やかで、底は船底状にまるく深さは26cmである。

埋土はまばら状である。

遺物の発見は皆無である。

小豎穴32 (第99図)

F-6グリッドで検出した。平面形は長軸80cm、短軸62cmの楕円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らで深さは11cmと浅いものである。

埋土はローム細粒を含む褐色土で、壁際から礫が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は石器がある。剥片1点である。

小豎穴120 (第99・115図)

F-6グリッドで検出したが小豎穴群の端部に位置する。平面形は長軸43cm、短軸36cmの楕円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らで深さは20cmである。

埋土はややまばら状で、検出面から土器破片が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は中期の土器破片が1点で第115図165である。

小竪穴6（第99・115図）

F-6グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸74cm、短軸66cmの楕円形であるが崩落によるものか整っていない。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは32cmである。

埋土はローム粒をわずかに含む黒褐色土で、検出面で礫が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は石器がある。第115図162の横刃形石器1点、剥片2点、黒曜石の剥片1点である。

小竪穴15（第99図）

F-6グリッドで検出した。平面形は長軸68cm、短軸62cmの楕円形である。南側が2段に落ち込むが壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼまるくなるが深さは深い所で22cm、浅い所は6cmである。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴30（第99・115図）

F-6グリッドで検出した。平面形は長軸88cm、短軸86cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らで深さは12cmと浅いものである。

埋土はローム粒を含む黄褐色土で、検出面から大礫が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器がある。中期の破片が6点で第115図166・167の2点を図示した。

小竪穴121（第99図）

F-6グリッドで検出した。平面形は長軸42cm、短軸38cmの円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは15cmである。

埋土はややまばら状である。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴157（第100図）

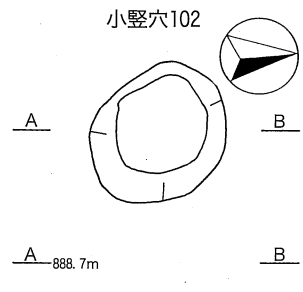
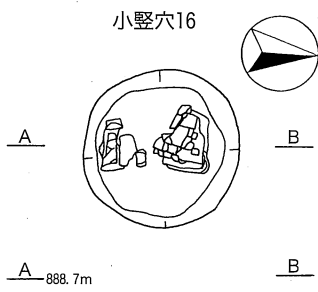
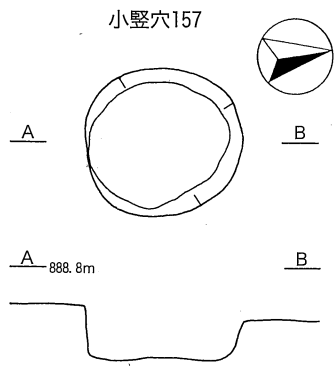
F-6グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸84cm、短軸80cmの円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは28cmである。

遺物の発見は皆無である。

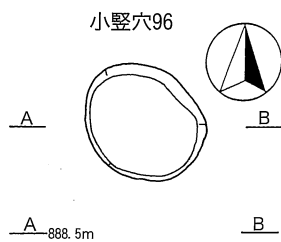
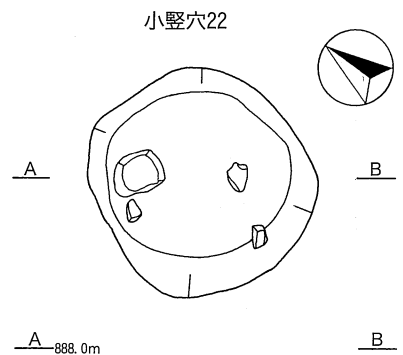
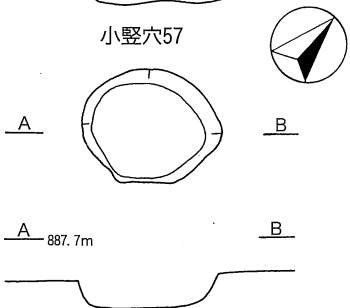
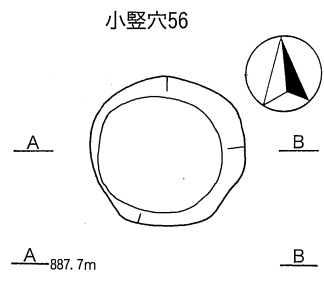
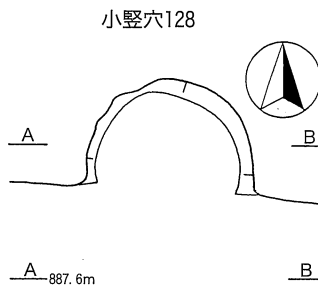
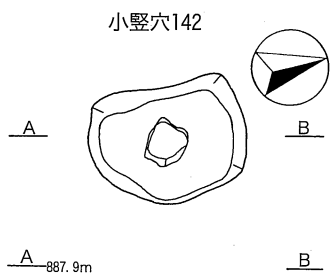
小竪穴16（第100・116図、写真63・148・240・241）

F-6グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸86cm、短軸84cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らで深さは29cmである。

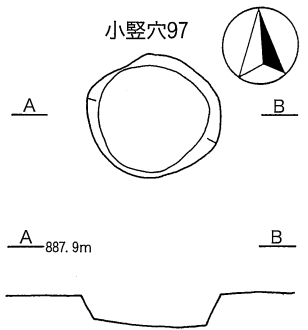
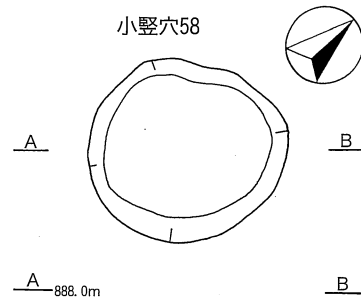
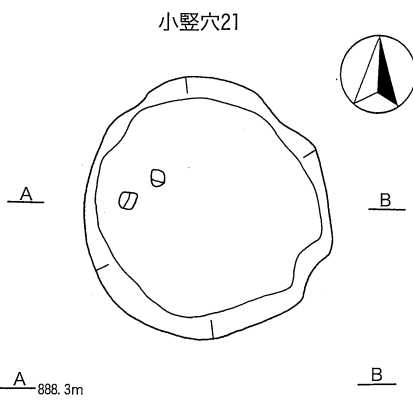
埋土中にタイプの異なる2個体の土器が横位で埋納されていた。双方ともほぼ完形品で、小竪穴の底部から浮いていたが、小竪穴がやや埋没したのち置かれたものか、腐食性の何らかの物の上に置かれていたことが考えられる。本址を墓と仮定すれば遺体の上に置かれた可能性が高く、土器は副葬品ということになる。またタイプの異なる土器がセットになっていることも気になる。さらに土器よりも上位では拳大の自然礫がみられたが、性格は不明である。



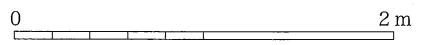
C-7地区



D-7地区



1. ローム粒をわずかに含む黒褐色土
2. ロームブロックを多く含む褐色土



第100図 小竪穴実測図 (1:40)

遺物は土器と石器がある。土器は、第116図168・169の埋納されていた中期深鉢2点と破片5点で170～172の3点を図示した。石器は、173の石鏃1点、黒曜石の剥片1点である。

小竪穴102（第100図）

F-6グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸74cm、短軸72cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らで深さは20cmである。

埋土はローム粒と黒色土をわずかに含むまばら状の褐色土である。

遺物は石器があり、剥片1点である。

C-7地区

小竪穴142（第100・116図）

C-7グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸84cm、短軸64cmの楕円形としたが隅丸方形ともいえそうである。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは15cmである。

検出面から平板状の大礫が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片が2点で第116図174・175である。石器は、剥片1点である。

小竪穴128（第100・116図）

C-7グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸88cm、短軸（62）cmの円形としたが南側は耕作ですでに削平されている。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは21cmである。

埋土はローム粒とロームブロックをわずかに含む褐色土で、上層から土器破片が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器があり、中期の破片が2点で第116図176・177である。

小竪穴56（第100図）

C-7グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸82cm、短軸80cmの円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは26cmである。

埋土はローム粒を多く含む黄褐色から褐色土である。

遺物は石器があり、黒曜石の剥片1点である。

小竪穴57（第100・116図）

C-7グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸74cm、短軸62cmの楕円形であるが整っていない。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らで深さは17cmと浅いものである。

埋土はローム粒をわずかに含む黄褐色土である。

遺物は土器があり、中期の破片が9点で第116図178・179の2点を図示した。

D-7地区

小竪穴21（第100・117図）

D-7グリッドで検出した。平面形は長軸138cm、短軸128cmの円形であるが整っていない。壁の立ち

上がりはよく、底面はほぼ平らで深さは36cmである。

埋土は2層に大別したが、上層はローム粒をわずかに含む黒褐色土で、下層はロームブロックを多く含む褐色土のレンズ状の堆積で自然埋没である。埋土中から礫が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片が1点で第117図180である。石器は、181の凹石1点で火熱を受けている。剥片1点、黒曜石の剥片1点である。

小竪穴96（第100図）

D-7グリッドで検出した。平面形は長軸64cm、短軸58cmの楕円形である。壁の立ち上がりはよく、底面はほぼ平らで深さは24cmである。

埋土はローム粒を多く含み、黒色土もわずかに混じるものである。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴22（第100図）

D-7グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸122cm、短軸122cmの円形としたが隅丸方形ともいえそうである。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは38cmである。

埋土はローム粒をわずかに含む黒褐色土で、埋土上位から中位から大きな礫が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は石器があり、黒曜石の剥片1点である。

小竪穴58（第100・117図）

D-7グリッドで検出した。平面形は長軸106cm、短軸98cmの円形としたが楕円形ともいえそうである。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らで深さは23cmである。

埋土はローム粒をわずかに含む褐色土で、打製石斧などが出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片が2点で第117図184の1点を図示した。石器は、剥片1点、黒曜石の剥片1点である。

小竪穴97（第100図）

D-7グリッドで検出した。平面形は長軸70cm、短軸66cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は丸みをもち深さは16cmと浅いものである。

埋土は褐色土である。

遺物の発見は皆無である。

E-7地区

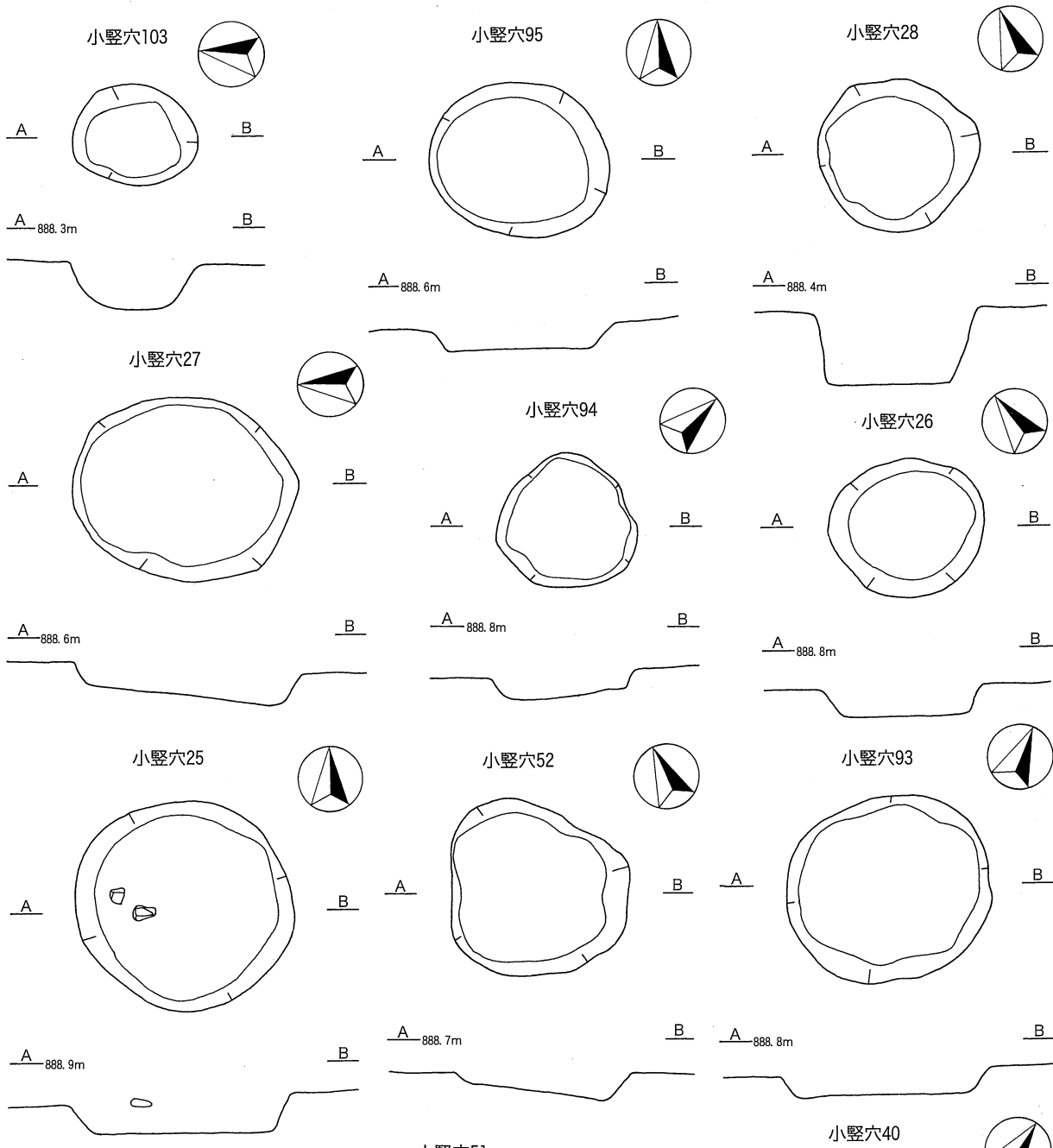
小竪穴103（第101図）

E-7グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸78cm、短軸62cmの楕円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は丸みをもち深さは30cmである。

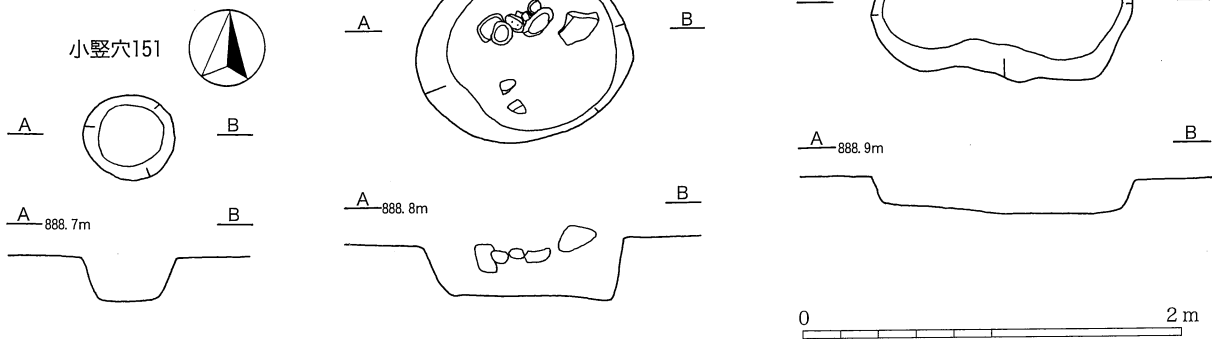
埋土はまばら状のもので攪乱穴かもしれない。

遺物は石器があり、黒曜石の剥片2点である。

E-7地区



F-7地区



第101图 小竖穴实测图 (1:40)

小竪穴95 (第101図)

E-7グリッドで検出した。平面形は長軸110cm、短軸96cmの楕円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らで深さは16cmと浅いものである。

埋土はローム粒を多く含む黄褐色土である。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴28 (第101・117図、写真65)

E-7グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸98cm、短軸94cmの円形であるが整っていない。壁の立ち上がりはよく、底面はほぼ平らで深さは50cmと深いものである。

埋土はローム粒を含む褐色土で、ローム粒は下層に多くみられるレンズ状堆積の自然埋没である、

遺物は石器がある。第117図182の不定形石器1点、183の横刃形石器1点、剥片1点、黒曜石の剥片4点である。

小竪穴27 (第101図)

E-7グリッドで検出した。平面形は長軸138cm、短軸112cmの楕円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで傾くが深さは28cmである。

埋土はロームブロックと黒色土を含むまばらな褐色土である、

遺物の発見は皆無である。

小竪穴94 (第101図)

E-7グリッドで検出した。平面形は長軸86cm、短軸84cmの円形であるが整っていない。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らで傾くが深さは12cmと浅いものである。

埋土はローム粒とロームブロックを含む黄褐色土である、

遺物は土器がある。中期の破片1点で小竪穴14の第112図115に接合しているが、小竪穴間は13.8mを計る。

小竪穴26 (第101・117図、写真64)

E-7グリッドで検出した。平面形は長軸96cm、短軸84cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らで深さは17cmと浅いものである。

埋土はローム粒をわずかに含む黒褐色土で、北壁下に深鉢が横位で置かれていた。墓の可能性が高く土器は副葬品であろう。

遺物は土器と石器がある。土器は、第117図185の中期深鉢1点と破片が2点ある。石器は、剥片2点、黒曜石の剥片1点である。

小竪穴25 (第101・117図)

E-7グリッドで検出した。平面形は長軸134cm、短軸130cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らで深さは26cmである。

埋土はローム粒をわずかに含む黒褐色土で、上位から土器破片・石器・礫が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片が5点で第117図186・187の2点を図示した。石器は、

打製石斧 3 点で 188 は完形品、189・190 は刃部を欠損する破損品。191 の横刃形石器 1 点、黒曜石の剥片 7 点である。

小竪穴 52 (第 101・117 図)

E-7 グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸 110cm、短軸 106cm の円形としたが整っていない。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らでやや傾くが深さは 19cm である。

埋土はローム粒と炭化物粒をわずかに含む褐色土である。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片が 8 点で第 117 図 192 を図示した。石器は、黒曜石の剥片 4 点である。なお、土師器の破片 2 点が出土したが混入であろう。

小竪穴 93 (第 101・117 図)

E-7 グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸 126cm、短軸 116cm の円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らで深さは 18cm と浅いものである。

埋土ローム粒を含む褐色土である。

遺物は石器がある。第 117 図 193 の凹石 1 点である。

F-7 地区

小竪穴 151 (第 101・117 図)

F-7 グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸 48cm、短軸 44cm の円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは 24cm である。

遺物は土器があり、中期の破片が 3 点で第 117 図 194 を図示した。

小竪穴 51 (第 101・117・118 図)

F-7 グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸 114cm、短軸 94cm の楕円形である。壁の立ち上がりはよく、底面はほぼ平らで深さは 30cm である。

埋土はローム粒と黒色土粒をわずかに含む褐色土で、検出面とその下位には石器と礫が集中していたが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片が 2 点で第 117 図 195・196 である。石器は、第 118 図 197 の打製石斧 1 点は刃部を欠損する破損品。198～204 の凹石・磨石類は 7 点、黒曜石の剥片 4 点である。

小竪穴 40 (第 101・118 図)

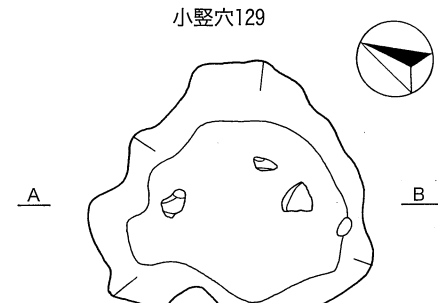
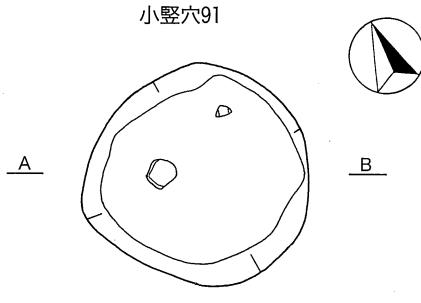
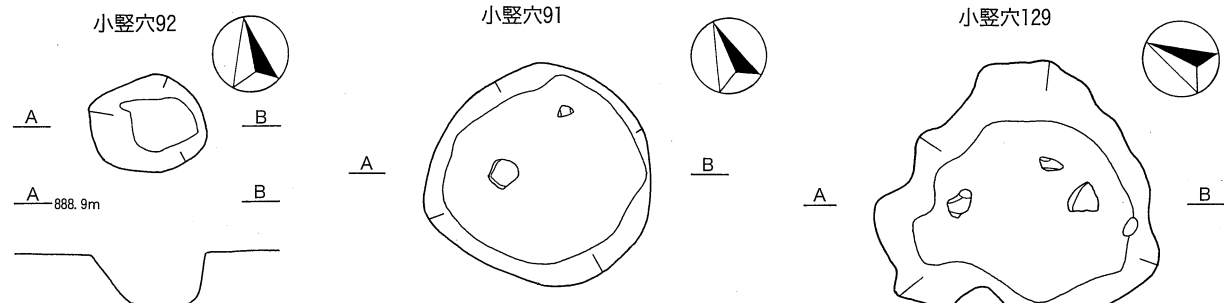
F-7 グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸 136cm、短軸 62cm の不整形としたが、円形の小竪穴が重複したものと思われるが、現段階では明らかにすることはできない。壁の立ち上がりはよく、底面はほぼ平らでやや傾くが深さは 11cm と浅いものである。

埋土はローム細粒をわずかに含む褐色土である。

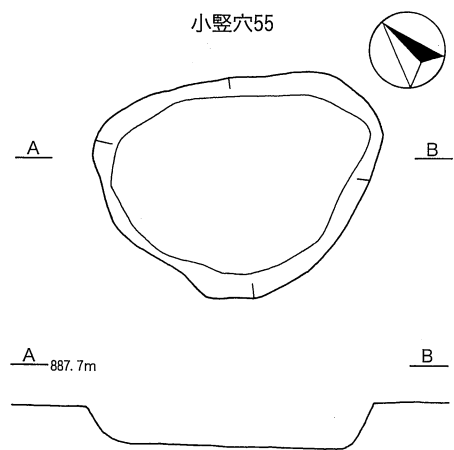
遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片が 1 点で第 118 図 205 である。石器は、206 の石鏃 1 点である。

小竪穴 92 (第 102 図)

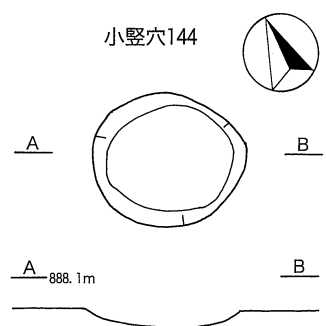
F-7 グリッドで検出した。平面形は長軸 60cm、短軸 50cm の円形である。壁の立ち上がりは緩やかで



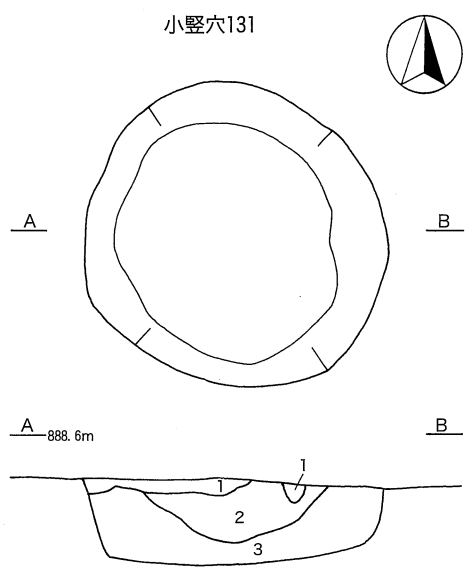
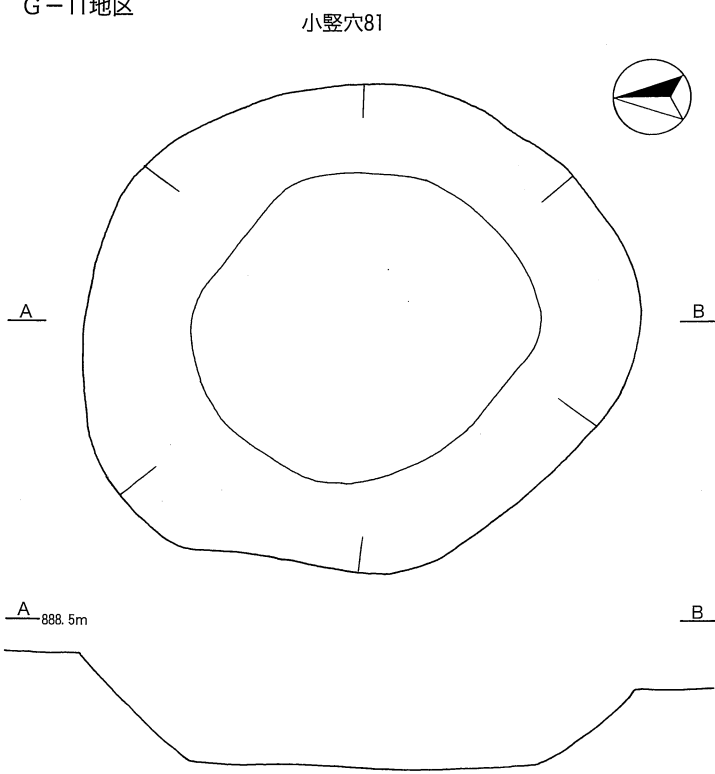
D-8地区



F-9地区



G-11地区



- 1. 耕作土
- 2. ローム粒をわずかに含む褐色土
- 3. ロームブロックをわずかに含む黄褐色土



第102図 小竪穴実測図 (1:40)

すり鉢状である。底面はほぼ平らで深さは28cmである。

埋土はローム粒を多く、黒色土粒をわずかに含む褐色土である。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴91 (第102・118図)

F-7グリッドで検出した。平面形は長軸118cm、短軸118cmの円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは20cmである。

埋土はローム粒を多く含む黄褐色土で、検出面から礫が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片が7点で第118図207～209の3点を図示した。石器は、黒曜石の剥片1点である。

小竪穴129 (第102・118図)

F-7グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸146cm、短軸120cmの不整形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らでやや傾くが深さは34cmである。

埋土はローム粒とロームブロックを多く含む黄褐色から褐色土で、底面から大きな土器破片が出土し墓壙の可能性が考えられるものである。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の破片が9点で第118図210・211の2点を図示した。石器は、図示しなかった打製石斧1点で、風化が著しく詳しいことはわからないが基部を欠損する破損品である。

D-8地区

小竪穴55 (第102・119図)

C-7・C-8・D-7・D-8グリッドで検出したが小竪穴群の端部に位置する。平面形は長軸140cm、短軸120cmの楕円形としたが整っていない。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らで深さは22cmである。

埋土は黒色土と褐色土のまばら状で、検出面とそれより上位で土器破片が出土したが、本址の性格が把握できるようなものではない。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の土器破片が3点で第119図212～214である。石器は、黒曜石の剥片1点である。

F-9地区

小竪穴144 (第102図)

F-9グリッドで検出したが小竪穴群を外れたものである。平面形は長軸82cm、短軸70cmの楕円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底はまるく深さは6cmと浅いものである。

遺物の発見は皆無である。

G-11地区

小竪穴81 (第102・119図、写真73)

F-11・G-10・G-11グリッドで検出したが小竪穴群を外れたものである。平面形は長軸300cm、短軸260cmの楕円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、平面規模に対し底面は小さくやや方形に近くな

るが、底面はほぼ平らで深さは60cmである。

遺跡中央の小形住居が散在する地域に位置し、本址も小形住居址と考え精査を進めた。先行トレンチによる観察では住居址とは異なるなだらかな立ち上がりが認められ、炉址や柱穴が検出できなかったため小竪穴としたが、規模が大きく他の小竪穴と性格は違うようであるが、遺物の出土状態から性格が把握できるような状況ではなく、多くの問題を残している。

遺物は土器と石器がある。土器は、中期の土器破片が17点で第119図215～217の3点を図示した。石器は、218の凹石・磨石1点、剥片1点、黒曜石の剥片1点である。

小竪穴131 (第102・119図)

G-11グリッドで検出したが小竪穴群を外れたものである。平面形は長軸160cm、短軸160cmの円形である。壁の立ち上がりはよく、底面はほぼ平らで深さは46cmと深いものである。

埋土は3層に大別したがレンズ状の堆積で自然埋没である。

遺物は中期の土器破片が1点で第119図219である。

G-12地区

小竪穴132 (第103図)

G-12グリッドで検出したが小竪穴群を外れたものである。平面形は長軸122cm、短軸118cmの楕円形である。壁の立ち上がりは緩やかなすり鉢状で深さは58cmと深いものである。

埋土はローム粒をわずかに含む黒褐色土で、検出面と底面から数多い礫が出土したが、近世の墓壙であろうか。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴133 (第103図)

G-12グリッドで検出したが小竪穴群を外れたものである。平面形は長軸172cm、短軸134cmの楕円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は傾くがほぼ平らで深さは71cmと深いものである。

埋土はローム粒をわずかに含む褐色土で、上位から中位で数多い礫が出土したが、近世の墓壙であろうか。

遺物の発見は皆無である。

I-15地区

小竪穴42 (第103図)

I-14・I-15グリッドで検出したが西端方に位置し小竪穴群を外れたものである。平面形は長軸160cm、短軸150cmの円形である整っていない。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らで傾くが深さは40cmと深いものである。

埋土はローム粒が多く黒色土粒が混じるまばら状である。

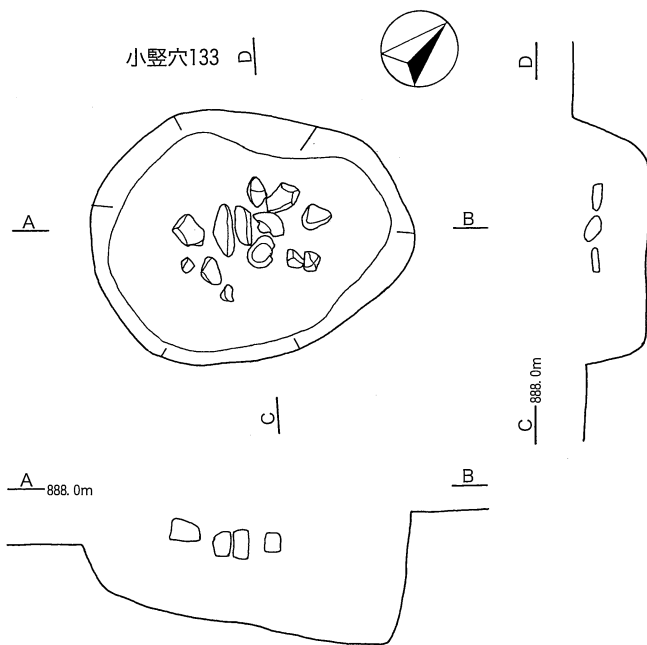
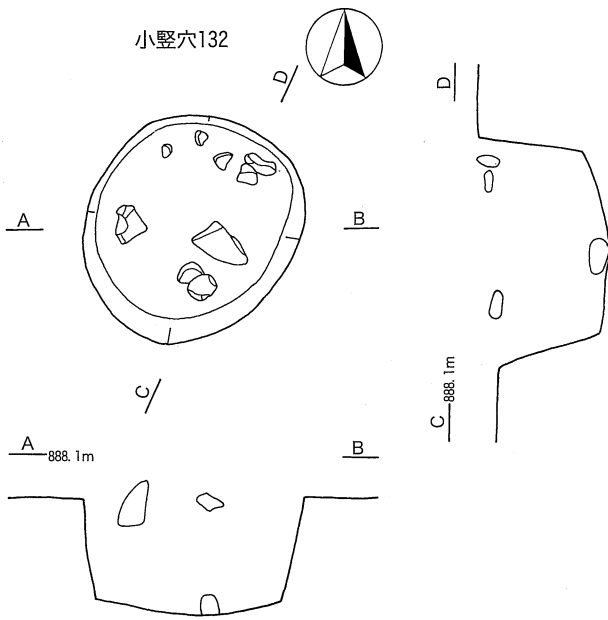
遺物の発見は皆無である。

小竪穴46 (第103図)

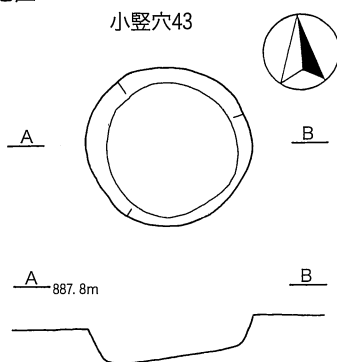
I-15グリッドで検出したが西端方に位置し小竪穴群を外れたものである。平面形は長軸100cm、短軸98cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らで深さは18cmと浅いものである。

埋土はローム粒をわずかに含む褐色土である。

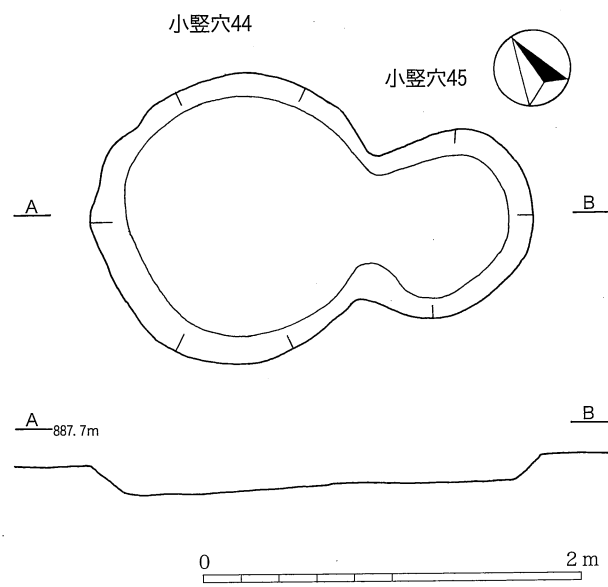
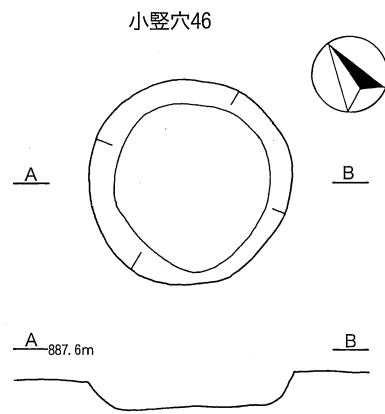
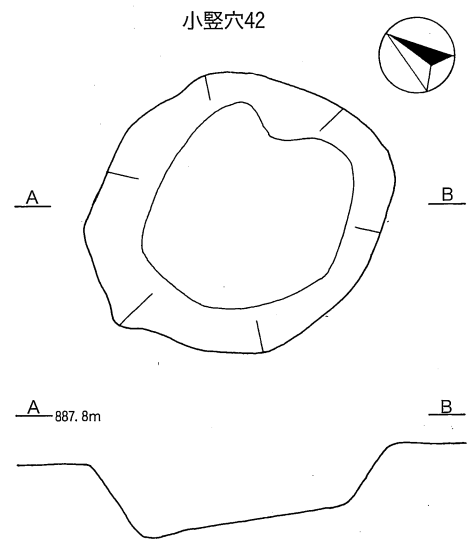
G-12地区



H-15地区



I-15地区



第103图 小竖穴実測図 (1:40)

遺物の発見は皆無である。

小竪穴44・45（第103図、写真72）

小竪穴44は、I-15グリッドで検出したが西端方に位置し小竪穴群を外れたものである。平面形は長軸150cm、短軸150cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は凸凹もみられるがほぼ平らで深さは16cmと浅いものである。小竪穴45との重複関係は、本址が新しく、小竪穴45が古い。

埋土はローム粒・ブロックをわずかに含む黒褐色土である。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴45は、I-15・I-16グリッドで検出したが西端方に位置し小竪穴群を外れたものである。平面形は長軸100cm、短軸94cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底はほぼ平らで深さは14cmと浅いものである。小竪穴44との重複関係は、本址が旧く、小竪穴44が新しい。

埋土はローム粒・ブロックをわずかに含む黒褐色土である。

遺物の発見は皆無である。

H-15地区

小竪穴43（第103・119図）

H-15グリッドで検出したが西端方に位置し小竪穴群を外れたものである。平面形は長軸88cm、短軸84cmの円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで傾くが深さは25cmである。

埋土はローム粒がほとんど含まない均質な褐色土である。

遺物は中期の土器破片が1点で第119図220である。

H-13地区

小竪穴134（第104図）

H-13グリッドで検出したが西端方に位置し小竪穴群を外れたものである。平面形は長軸70cm、短軸66cmの円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らで深さは15cmと浅いものである。

第9号住居址に伴う付属施設かもしれない。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴49（第104図）

H-13グリッドで検出したが西端方に位置し小竪穴群を外れたものである。平面形は長軸114cm、短軸94cmの楕円形である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平らで深さは19cmと浅いものである。

埋土はローム粒がほとんど含まない均質な黒褐色土である。

遺物の発見は皆無である。

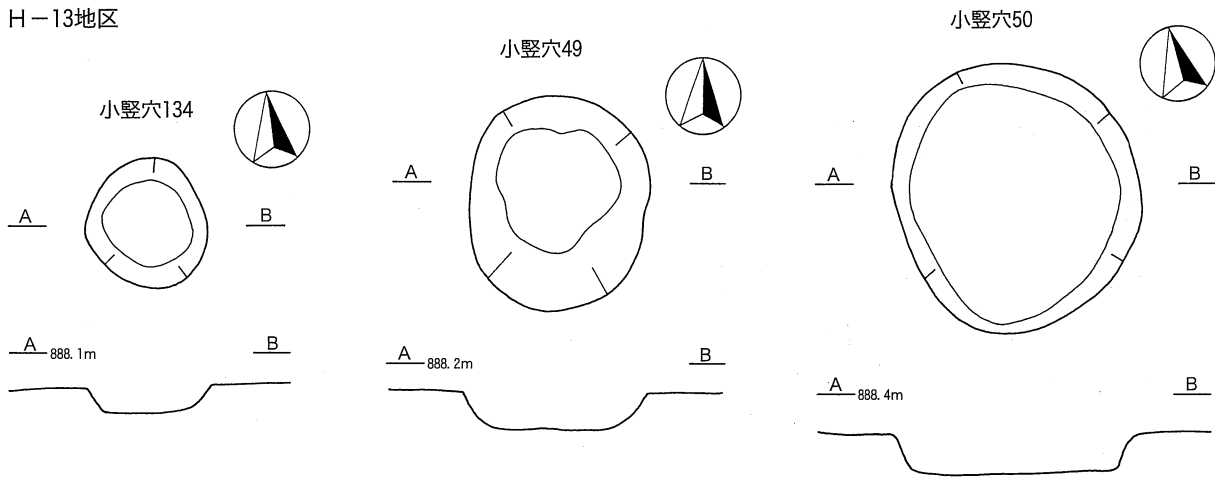
小竪穴50（第104図）

H-13グリッドで検出したが西端方に位置し小竪穴群を外れたものである。平面形は長軸146cm、短軸130cmの円形である。壁の立ち上がりは普通で、底面はほぼ平らで深さは26cmである。

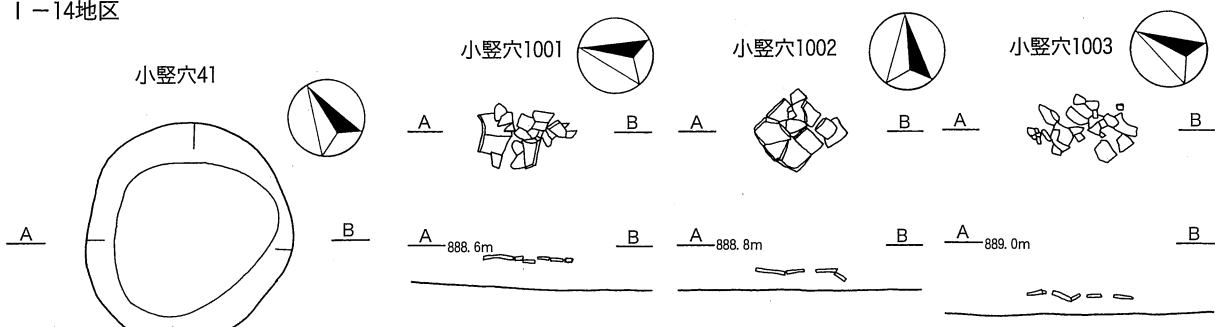
埋土はローム粒をわずかに含む黄褐色から褐色土である。

遺物の発見は皆無である。

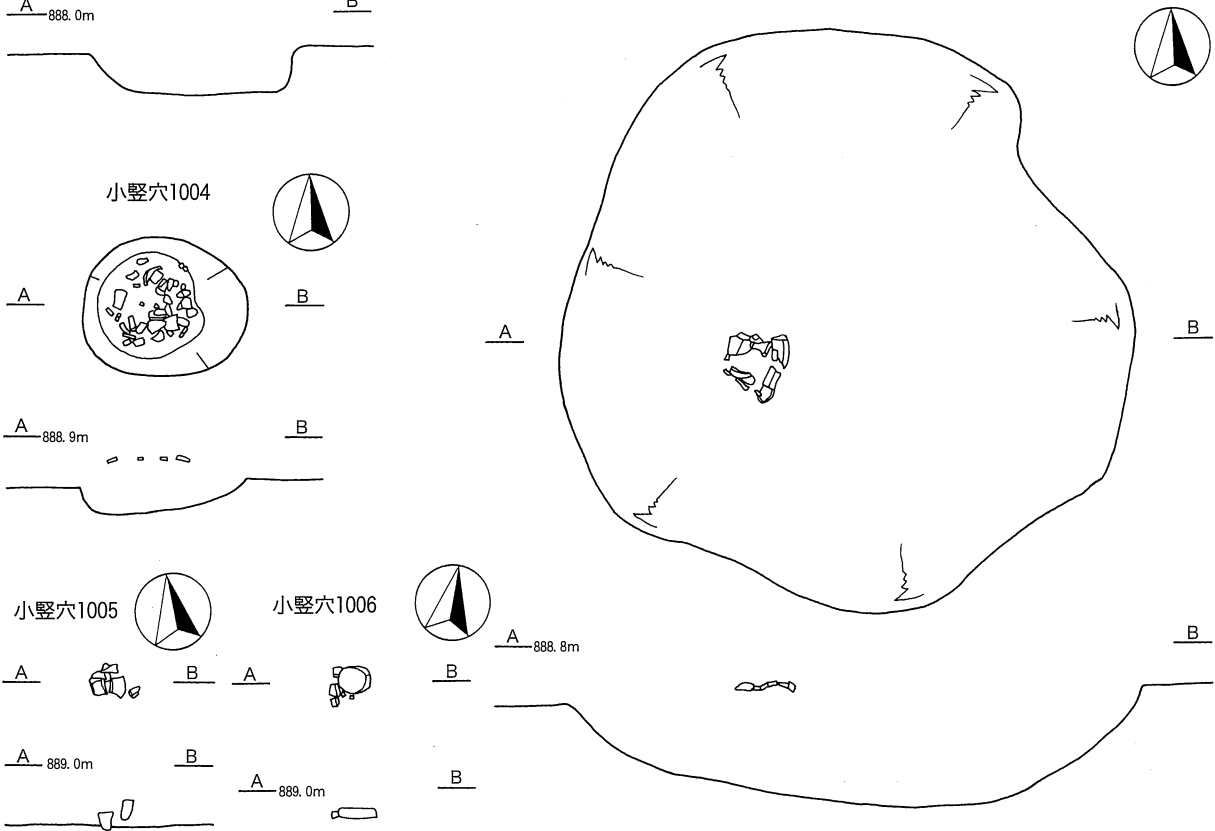
H-13地区



I-14地区



ロームマウンド



第104図 小竪穴実測図 (1:40)